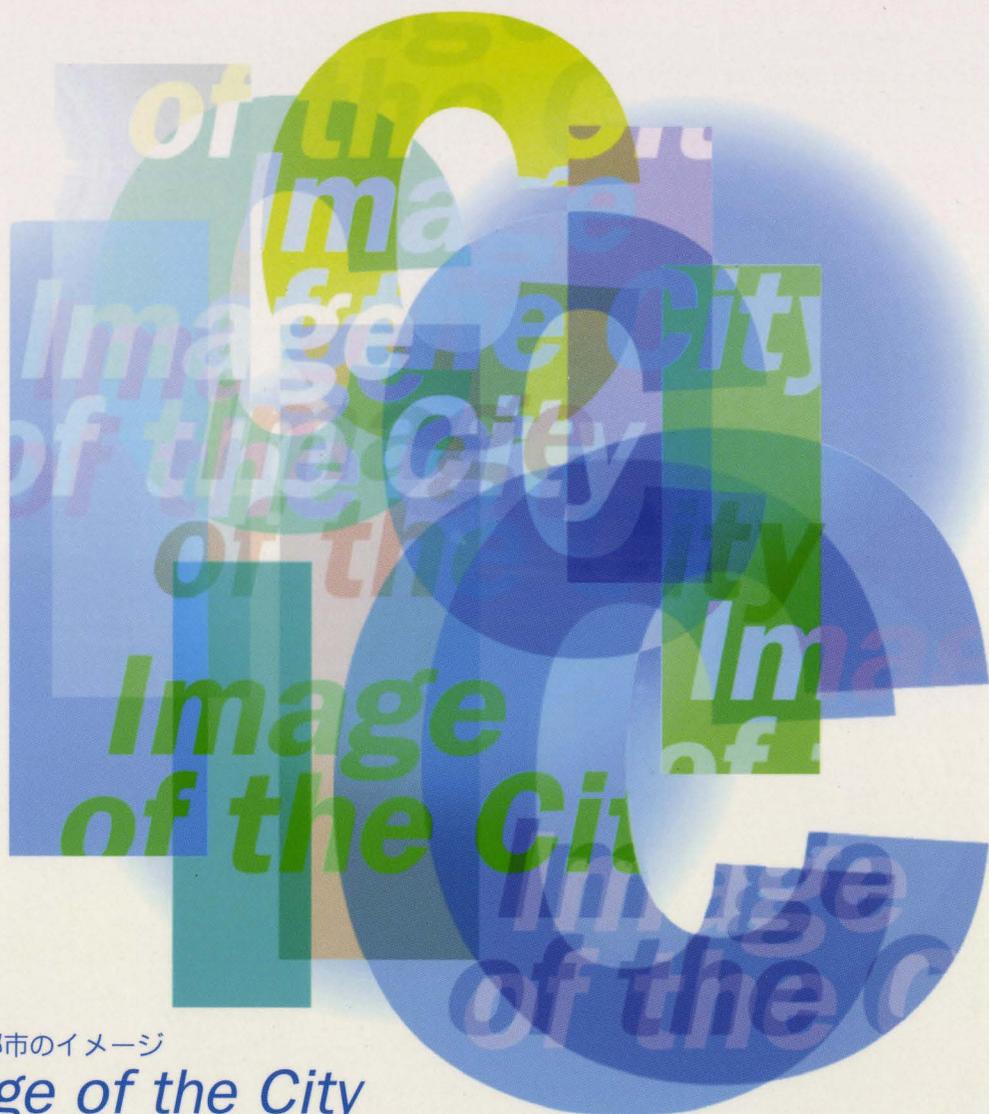


# アーバン・アドヴァンス

**Urban Advance**

NO.6 1995.12



[特集]都市のイメージ

*Image of the City*

# アーバン・アドヴァンス

Urban Advance

NO.6 1995.12

## 目次

## CONTENTS

**[特集]** 都市のイメージ  
 Special Issues *Image of the City*

10	都市のイメージ Image of the City	名古屋工業大学教授	松本 直司 Naoji Matsumoto
16	新しい都市のイメージ —産業から環境の視点へ— New Image of City - Environmental Perspective from Industrial Development -	愛知県立芸術大学教授	林 英光 Hideaki Hayashi
24	植民地都市のイメージ —神戸・上海・シンガポール— The Image of Colonial Cities - Kobe・Shanghai・Singapore -	静岡県立大学教授	田中 恭子 Kyoko Tanaka
32	「観光策」の拡充と都市イメージ向上 Formation of "Sightseeing Policy" and Image-up of City	京都精華大学助教授	橋爪 紳也 Shinya Hashizume
46	QOLから見た政令指定都市の社会指標比較分析 —名古屋市の相対的位置をめぐって— Comparative Analysis of Social Indicators in the Designated Cities Relating to the Quality of Life - An Examination of Relative Status of Nagoya City -	金城学院大学助教授	西下 彰俊 Akitoshi Nishishita
56	名古屋の都市イメージ形成史 The Evolution of City Image in Nagoya	(株)都市研究所スペースア	井沢 知旦 Tomokazu Izawa
66	イメージづくりへの挑戦 Challenge for a Making City-Image	北九州市観光協会	久保田 裕明 Hiroaki Kubota
75	21世紀の世界都市を目指して—大阪21世紀計画— For the Creation of Osaka as a world City in the 21st Century - Osaka 21st Century Plan -	(財)大阪21世紀協会 企画調整課長	間谷 裕史 Hiroshi Madani
80	函館・街並み色彩まちづくり Hakodate・Making a Colourful Townscape	函館からトラスト事務局	柳田 良造 Ryozo Yanagida
87	飛騨高山の歴史・文化・観光・まちづくり History, Culture, Sightseeing and Urban Development in Hida -Takayama	(社)飛騨高山観光協会会長	蓑谷 穆 Takashi Minotani
96	地方都市浜松市の戦略 Urban Strategies of Hamamatsu City as a Local City	浜松市企画課	鈴木 将史 Masashi Suzuki
104	町づくりの系譜 —足助町— Historical Evolution of Urban Development - Asuke Town -	足助町観光協会	縄手 雅守 Masamori Nawate

**エッセイ** *Essays*

113	矢作川の魅力 The Attractiveness of River Yahagi	豊橋技術科学大学助教授	平松 登志樹 Toshiki Hiramatsu
120	海外便り —シドニー— Overseas Correspondence - Sydney -	(財)自治体国際化協会 シドニー事務所次長	松岡 俊夫 Toshio Matsuoka

**名古屋都市センター講演会記録**  
*Summary of Symposia*

128	医療現場から見た阪神大震災 —大震災時の都市の危機管理について— The Great Hanshin Earthquakes from the Viewpoint of Medical Relief Activities - Urban Crisis Management in the Case of Great Earthquake Disaster -	防衛庁陸上幕僚監部	千先 康二 Koji Sensaki
133	名古屋の都市計画の成り立ち —名古屋のまちの骨格形成に尽力した3人の技術者— The Evolution of City Planning in Nagoya - Three Planners who Contributed the Formulation of Basic Urban Infrastructure in Nagoya -	長岡造形大学助教授	越沢 明 Akira Koshizawa

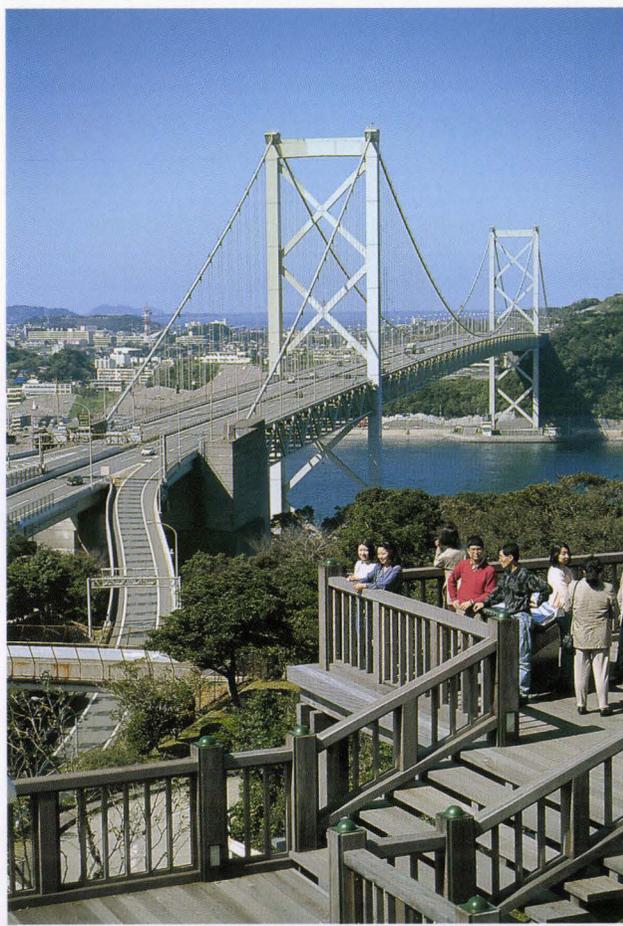
北九州市  
イメージづくりへの挑戦



1



2



3



4



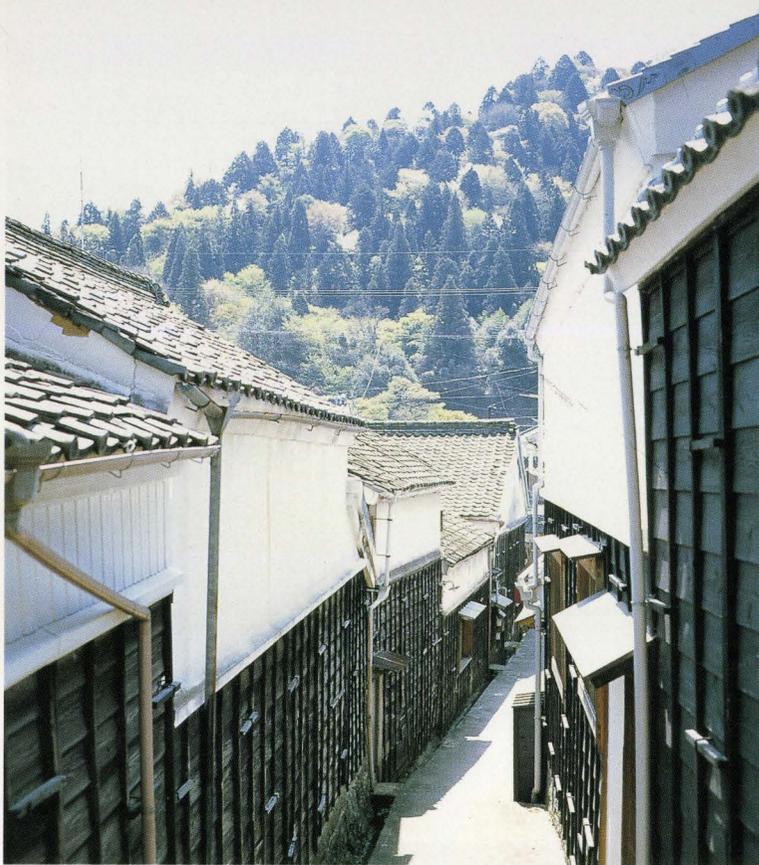
5

- 1 スペースワールド
- 2 小倉城
- 3 関門橋
- 4 はね橋「ブルーウィング」と旧門司税関
- 5 門司港駅
- 6 国際友好記念図書館



6

足助町  
町づくりの系譜



1



2



3

- 1 マンリン小路
- 2 百年草
- 3 Zizi工房のハムづくり
- 4 香嵐溪のライトアップ
- 5 昔のくらしを伝える三州足助屋敷

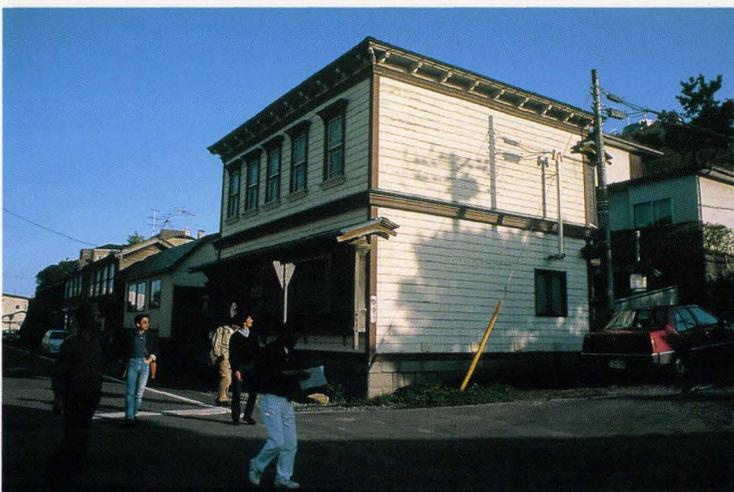




1

# 函館市

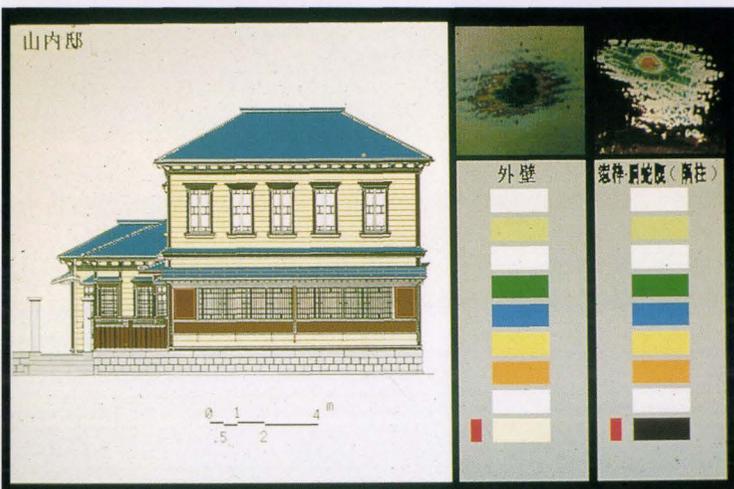
## 色彩によるまちづくり



4

2

3



- 1 公会堂
- 2 山内邸 (大正11年)
- 3 山内邸色彩シミュレーション
- 4 21層の時層色環 (本文参照)

高山市  
歴史・文化・観光によるまちづくり



1



2

- 1 高山陣屋
- 2 古い町並
- 3 春の高山祭屋台と赤い中橋



3

# 浜松市 地方都市の挑戦



1



2

- 1 アクトシティ 全景
- 2 楽器博物館
- 3 ショパンフェスティバル
- 4 プロムナードコンサート



3



4

# [特集]

都市のイメージ

# 都市のイメージ

名古屋工業大学教授 松本直司

## 1. リンチの都市のイメージ

我々建築や都市を研究する者にとって、「都市のイメージ」といいますと、ケビン・リンチによって1960年に出版された『THE IMAGE OF THE CITY』\*1が思い浮かびます。これは、アメリカ人が都市に対してどんなイメージを抱いているかを、3つの都市、すなわちボストン、ジャージー・シティ、ロス・アンゼルスを対象に調査したものです。

「都市はわかりやすくなければならない。わかりやすさが都市環境には重要である。」という論理により組み立てられています。わかりやすさは、英語のレジビリティ legibility の邦訳なのですが、人々が都市のそれぞれの部分を認識して、それらを筋の通ったパターンとして構成しやすいこと、ということの意味します。

この都市のレジビリティの為には、都市の様々な場所や部分がイメージしやすく、それらが全体として位置づけられる必要があります。これが、イメージアビリティ imageability ということになります。イメージアビリティを高める都市要素のタイプをリンチは分類してパス path、ノード node、ディストリクト district、ランドマーク landmark、エッジ edge の5つのエレメント five types of elements に集約しています。パスは人が通る道のこと、ノードは交差点や駅前広場など人がそこにに入れる結節点、ディストリクトは公園や地区などの広がりを持った部分、ランドマークは大きな建物やモニュメン

トなど、エッジは鉄道線路や海岸線、崖などがそれによって行けなくなったりイメージが分断される所を意味しています。これらのイメージエレメントが重要で、それらの関係が都市空間の中で秩序よく分かりやすいことが、すなわちエレメントの関係性であるストラクチャー structure がしっかりしている都市はレジビリティが高い都市と言うことになります。換言しますと、都市がわかりやすいためには、都市の様々な物的要素がイメージしやすく、その要素の相互関連性をはっきりしている、ということになります。

## 2. ミーニングへの取り組み

リンチの研究に対してこれまでに様々な批判や改良がされましたが、35年を経過した現在でもイメージ研究の原点としての役割を果たしています。

批判の一つに、環境のイメージの3成分としてアイデンティティ identity、ストラクチャー、ミーニング meaning を抽出しておきながら、都市のイメージの分析が前の二つに集中してなされたことです。アイデンティティは、対象となるものを他のものから見分ける



松本直司(まつもと なおじ)

1950年 埼玉県生まれ  
1974年 東京工業大学工学部建築学科卒業  
1979年 東京工業大学大学院博士課程修了  
1989年 日本建築学会奨励賞  
1993年 名古屋工業大学教授  
1994年 日本建築学会東海支部設計計画委員長

こと、そのものを独立したものとして認めること、と言った意味です。一方、ミーニングは都市に関する個人的な意味であり、たいへん複雑なものとなります。リンチは分析の初期の段階では切り離して良いだろうとの判断からあまり深入りをしなかったわけです。イメージや認知を視覚と同一視している。あまりにも視覚的側面に偏っているとされるのもミーニングをさけたことが一因といえます。

リンチの研究をさらに進めたドナルド・アプルヤード<sup>\*2</sup>は、イメージアビリティが高い都市の要素とはどういうものなのかといったことを研究しています。ミーニングに関する研究と言うこととなります。この研究では仮説として建物や場所の (1)形の特殊性 (2)街の中での目につきやすさ (3)個人的な利用や活動などとの関連 (4)文化的意味 の4つをあげて分析しております。具体的にはイメージアビリティの強さと建物や場所の形状(大きさ、輪郭、質……)、目につきやすさ(視点位置、近さ……)、等々との関係を求めています。イメージエレメントの特性とイメージアビリティの関係を求めたものでたいへん興味深いものではありますが、物理的形態のとらえ方があまりにもおおざっぱであるために物足りなさを禁じ得ません。

もっと直接的にミーニングに挑戦したのはジェームズ D.ハリソンとウィリアム A.ハワード<sup>\*3</sup>で、市民が認知した要素について何故そこを思い起こしたのか理由を問うことによりミーニングの内容を次の4種類に分類しています。すなわちロケーション location、アピアランス appearance、ミーニング meaning、アソシエーション association です。ロケーションは文字通り位置的条件でして、他の地区との位置関係、目立つ位置に存在する、周囲が見渡せる、日常の生活ルート沿いである、サインで示されている等の内容です。アピアランスは視覚的に目立つことで、古さ、大きさ、色彩、形やデザイン、材料の特異性

です。ミーニングは、経済的、政治的、社会的、宗教的、民族的、歴史的、機能的などの意味と言うこととなります。アソシエーションは個人的な関係や知識、雰囲気など言うことです。この研究により、イメージアビリティの意味がはっきりと認識されるようになりました。しかし、あくまで定性的であって、位置や考え方個人的な関係などの関連性の程度とイメージアビリティの強度との関係は把握されておらず、具体的な計画論への応用はこの段階では十分とは言えません。

### 3. アンビギュイティの登場

レジビリティのためには物の持つイメージのしやすさ、すなわちイメージアビリティが重要であるという論理に対して、一見分かりずらさの指標とも言えるアンビギュイティ ambiguity すなわち多義性が都市の魅力には重要である、と言う主張もなされるようになります。あまりに秩序だつてわかりやすい都市は単純でつまらない。多くの人の集まる都市の部分は適度にごみごみしてわかりずらく迷子になりやすいところでもある。これこそが人間に魅力を与えるところではないか。

ラポポートとカンター<sup>\*4</sup>によると、単純や明快さと複雑さの中間の適度な状況が人々に好まれる。この好まれる適度な状況を導くのがアンビギュイティの概念である。一方、志水英樹<sup>\*5</sup>は、コンプレキシティ complexity が物的環境の客観的存在としての複合性で、アンビギュイティは物的環境が心的面において多様な役割を演ずるといった複合性であるとしている。いずれにしても両者ともレジビリティからさらに心的面での複合性であるアンビギュイティが都市の魅力において欠くことのできないことを指摘しています。

リンチの研究に一貫していることとしてわかりやすいことが都市の美しさにつながるという論理です。この事をあまりにも自明なこ

ととして扱っているために都市のエレメントに対する評価がなされていないという批判を受けるわけです。レジビリティのためには都市の要素にイメージアビリティがなければいけない。しかし、ここで多くの人達が疑問を覚えることになる。確かに迷子になるのは困ることであるが、わかりやすいことと都市の魅力とは必ずしも結びつかないということです。都市で思い浮かぶ物の中には確かに良い印象の物もありますが、ひどくいやな印象の物もそれに負けないくらい多いものです。失敗をしたり怪我でもしよう物なら一生その場所を忘れることはないでしょう。この事はイメージアビリティの高い物がよいものであるという事と矛盾しており、なおかつ良い物は逆に気付かれない物の中にあるのではないかという考えを育むことにもなるのです。

ランチはイメージアビリティということで、ゲシュタルト心理学で言うところの『図』の部分に注目したわけですが、『図』をもり立てるのが『地』の部分なわけです。都市の要素はその殆どが『地』であり『図』になる部分はほんの一握りです。通い慣れた道で、ある日一軒の家が取り壊されたとします。するとその場所が急に目立って人目を引くようになります。殆どの場合、ぶざまな様相を呈するわけです。そこで、今までの様相を懐かしんで、今までここには何が建っていたのだろうかと思いをはせるのです。ところが、以前に買い物でもしたことがあったり、よく通い慣れた友人の家とかであれば別ですが、簡単には思い出すことができません。立派に『地』の役割を果たしていたのですから。

この『地』のあり方に関して研究した者は未だに無いと言って過言ではないと思います。『図』にならないわけですから把握することが難しいことが原因していることはもちろんですが、『図』と比較して『地』の方が遙かに複雑で種類が多いことも研究しづらい面であると言えます。

#### 4. 名古屋のイメージ

名古屋のイメージは決して良いものではありません。大体名古屋に住んでいる人ですら良いイメージを持っていないことが多いのですからやむを得ないかもしれません。私個人にしてみましても、7年前に長野からこちらに転勤する時にさんざん長野の人に脅かされました。「あんな暑いところに行くのか」「名古屋はセンスがないよ」「エビフライきりないよ」、と言ったところででしょうか。「美人がいない」など謂れのないと思われることまでできます。

確かに夏の暑さは抜群で、この点は素直に認めるところです。センスがないというのは何でしょうか。学生の割合の多い東京では街を歩く人の色が灰色や紺の印象が強いのですが、名古屋では結構色々な色の服装が多いようです。化粧が濃いのではないかと思われるふしもあります。金色や銀色の靴を普通の女性がはいているのも初めはぎょっとしたものです。だからといってセンスがないと言うことは当たらないのではと思うのです。逆に、東京の人の色彩の乏しきは寂しいものです。

名古屋の都市の色イメージは白であると言うことをよく聞きますが、東京は灰色のようです。このところ都市の中で建築にくすんだ色を使わずに純色をアクセント色にしたり、濁っていない清色を面として用いる傾向ができており、いずれは多彩なイメージになるのではないかと期待をしています。名古屋も決して例外ではありません。

よく建物の色彩の相談にのることがありますが、大体、白、灰色、クリーム色、黄土色、茶色といった色が外壁では多く用いられますが、アクセントにはっきりとした綺麗な色を使うように話をします。特に港に近いところでは、かなり大きな面を大胆な色使いにして丁度いいくらいです。そのくらいの周りのスケールですし、船やコンテナなどの色彩にまけ

ないことも必要です。どこかのスーパーマーケットではほぼ純色の赤、みどり、黄色を一面に塗ったものが現れましたが、これについてはさすがにやりすぎの感を覚えます。目立ればいいといったものでもありません。

こと住宅に関しては、名古屋ほど恵まれたところは日本にはないのではないかと。さすがに中心地区に一戸建てというわけには一般の市民はいきませんが、マンションだったら何とかかなりそうですし、市の周辺や郊外の通勤圏であったら一戸建てでも夢ではないわけです。住宅価格が下がってきた今日では年収の3～4倍で住宅がもてるようになっており、この事がなんと言っても魅力です。

道路が基盤の目で幅が広いことも魅力の一つでしょう。都心のデパートに休日自家用車で買い物ができるなんて事は夢のようなことです。しかし道路が広いと言うことが歩くレベルでの街路をないがしろにしたことは確かです。

街の中で鳥がいて良いですし、魚釣りをしても良い。トンボ取りをしても良いのです。確かに公園があってその中の池では魚釣りができてその周りで昆虫が捕れますが、そういった設定されたような場所ではなくもっと身近にそんなところがあって良いのではないかと。人工的すぎると言えばそういうことかもしれません。所詮人間のできることなどたかがしれていまして、そんな浅薄さがイメージの芳しからぬ所とつながっているのではないのでしょうか。

## 5. 名古屋の心象風景

名古屋でイメージ調査を6年前<sup>\*6</sup>と3年前<sup>\*7</sup>にやりました。その時の結果がありますので紹介したいと思います。専門が建築や都市の研究ですので、イメージと言っても特に視覚的な面に限りたいと思ひまして、単にイメージではなく「名古屋の心象風景」と言う

ことで調査研究を行いました。この心象風景という言葉を使ったことで色々と各方面からおしかりを頂きましたので心象風景という言葉から定義していかなくてはなりません。

「心象風景はイメージと同じではないか。どう違うのだ。」と言う質問です。一般に心象風景と言いますと小説などで表現される情景描写がその作者の心象風景と言うこととなりますが、我々は単に様々なイメージの中で心の中で風景として思い浮かべられる視覚的なイメージを心象風景としております。ケビン・リンチの場合にはスケッチマップを被験者に描いていただいてその中にあらわれたものが都市のイメージとして扱われましたが、ここでは、心に浮かんだ風景を言葉として言うていただく方法を採用したわけですから。前述したようにケビン・リンチの研究も視覚的過ぎるという批判を受けていますが、心象風景とすることによってもっと視覚的なイメージに限定してみたのです。

もう一つは「原風景と心象風景はどう違うのだ」という質問です。原風景という言葉が世の中に広く用いられるようになったのは奥野健男の「文学における原風景」<sup>\*8</sup>の貢献が大だと言えます。原がハラッパの原であることから、小さい頃のハラッパで遊んだ光景と捉える人もいますが、これはほんの一部でありまして、原風景は、「小さいときに経験した風景が心に残りその個人の風景や考え方の規範となっている風景。」と考えられます。ですから心の中に焼き付いておりまして、鳥の雛が初めて見る動くものを母親と思いこむプリンティング現象に近い概念です。従ひまして、原風景は幼児体験の風景に近いものでして、大人になってからの原風景と言ひますと、その地に長く住んでいて形成されるものと言うこととなります。一方心象風景はそんなに個人のなかに深く根ざして無くても良いので、気楽に思い浮かべた風景が全て心象風景になるのでありまして、原風景と異なり生まれ故

郷でなくても、引っ越してすぐの都市でも心象風景は思い浮かぶものなのです。

調査方法は、名古屋市内で通りがかりの方や休憩している方にインタビューして、名古屋市全域で思い浮かぶ風景をあげていただきました。その結果は誠に単純でして、栄、名古屋城、東山公園、鶴舞公園、白川公園と言ったところがあげられました。他に名古屋港周辺、山手四谷周辺、名古屋駅周辺等でした。調査をしなくても分かってしまう範囲の答えのようです。名古屋の中心市街地では、久屋大通公園、白川公園、名古屋駅周辺、名古屋城といったところに集中しております。さらにこの風景の中にあらわれている物的な要素は何かを聞きますと、緑や噴水、人の姿といったことになります。全体的に緑が多く公園のように面的に広がっている所が好ましい風景として、都市機能が集中した中心商業地などは好みは別として、単に思い浮かぶ風景となりやすいことが判明しております。

これだけ大きな都市ですが思い浮かべられる所は限られて、かつその風景の内容もあたりまえなものになっています。名古屋市が栄を唯一の中心とした一局構造であることがきわめて単純なイメージにつながるものと考えられます。私が名古屋に来て痛切に感じたことに、水場が少ない、川がないということでしたが、心象風景においても噴水の他には殆どあげられていない現状です。強烈なイメージの建築物も名古屋城とテレビ塔を除くとないということもわかります。人口200万を超える都市である名古屋はイメージの多様性に欠ける面があるのではないかと思うところです。

市全域という都市スケールでイメージを問うと、身近な空間は、例え思い浮かんでも答えてもらえないといったことがあります。そこで都市の範囲を限定して自分の住んでいる周辺で思い浮かぶ風景をあげていただきました。この調査は熱田区の住民を対象にしたのですが、当然の事ながら熱田神宮が回答者の

60%の人にあげられました。その次は20~30%の人にあげられた神宮東公園、名鉄神宮駅前、10~20%の人にあげられた堀川、七里の渡し白鳥公園と続きます。居住地周辺と言うことですが自分の住まいから800m位までの範囲の所を心象風景として思い浮かべていることが分かりました。このことは、私が20年ほど前に東京の日黒区でかかわった同様の調査結果とほぼ一致する結果となっております。<sup>9</sup>また、利用目的や機能が明確な公共の施設は心象風景になっていないことが分かりました。この事は住民の方によく知られた施設であっても心象風景にならないものがあるという事でした。機能は満足しても魅力に欠けるといった事のあらわれであるといえます。

## 6. イメージ研究のこれから

今年の夏の日本建築学会大会（北海道）で、「空間認知の研究は新しい計画学を構築できるか」というパネルディスカッションが開催されました。1月に起きた阪神大震災の影響で、地震に関するテーマが中心になっていた中での開催です。関心がどれだけ持たれるか懸念されましたが、この東海地区の支部からの発案が学会本部の空間研究関連の委員会に認められ、共同開催のはこびになりました。専門が都市や建築の空間研究であり空間知覚や認知を研究していたこと、東海支部の設計計画委員会の委員長をやっている、同時に本部の空間研究小委員会の委員と言うこともあって、パネルディスカッションの資料集の作成を行いました。<sup>10</sup>当日会場は、立ち見や入れない人がでる程のたいへんな盛況となり、このテーマの関心の高さを思い知らされました。

このテーマの理念のひとつとして、「これまで建物の使い方、使われ方を中心に展開してきた建築計画学が、すでに限界にきておりこれからは空間の質を向上させるための研究が

大きな比重を占めるようになる。」ということがあげられます。しかし、空間の質の向上は人間の感性に関連する事柄であるために、様々な障害を内にはらんでいます。その代表的なものが「人間の感性や情緒の問題は研究にならない」というものです。人間の心は、変わりやすく不安定なものであることは確かです。もっともな意見ですが、一方では評判の良い建物や楽しい街路空間は実際に存在するのも事実です。なぜそうなるのか正当な理由が存在するはずはあります。

この偏見に対する問題は、方法論が未熟なことであり、それに反して人々の要求が膨大なことです。研究を行えば全てが判明するなどと誰も思っていない。言えることと言えないこと、判ることと判らないこと、色々あるのであって、そこが研究の面白さで目的なのです。

空間認知の研究というとき、当然イメージ研究が入ることになります。他に空間知覚 space perception、探索経路 wayfinding などの研究がこれにあたります。

パネルディスカッション資料集には、建築や都市計画分野の認知研究者と建築家（設計者）に対して空間認知に対する意見を伺ったものが含まれております。その中で設計者の意見として、「記憶に残る建物とはどういうものか、そんな研究を是非やって下さい」というのがありました。また、「自分の設計した建物を是非評価して下さい」というものもありました。人間の心の問題と物的なものとの関係性に対する要求は、単にそれを使う側だけでなく設計者側においても益々高くなっているのです。イメージ研究は、その対象領域を建築から都市に至るまでと大きな広がりを見せ、その内容も記憶・認知の範疇から、知覚・行動の範疇へと拡大してきております。新しい計画学が、すでに大きな潮流となっているのです。

#### (参考文献)

- \* 1 Kevin Lynch : The Image of the City, The M.I.T. Press, 1960
- \* 2 D.Appleyard : Why buildings are known, Environment and Behavior, 1969  
(D.カンター、乾正雄編：環境心理とは何か、彰国社、1972)
- \* 3 James D.Harrison, William A. Howard : The role of Meaning in the Urban Image, Environment and Behaviour, 1972.
- \* 4 Amos Rapoport, Robert E.Kantor : Complexity and Ambiguity in Environmental Design, A.I.P.Journal, Jul.1967.
- \* 5 志水英樹：街のイメージ構造、技報堂、1979.
- \* 6 松本直司他：名古屋市の心象風景の場所性について、日本建築学会大会学術講演梗概集、1991. 9.  
松本直司他：名古屋市中心市街地の心象風景の情緒的意味と方向性について、日本建築学会大会学術講演梗概集、1991. 9.
- \* 7 加藤信子、松本直司他：居住地周辺地区における心象風景に関する研究、日本建築学会大会学術講演梗概集、1993. 9.
- \* 8 奥野健男：文学における原風景、集英社、1972. 4.
- \* 9 谷口汎邦、松本直司他：既成市街地における住民の住居周辺環境イメージに関する研究、日本建築学会大会学術講演梗概集、1977. 10.
- \* 10 日本建築学会・建築計画委員会：空間認知の研究は新しい計画学を構築できるか、日本建築学会大会パネルディスカッション資料集、1995. 8.

# 新しい都市のイメージ

## —産業から環境の視点へ—

愛知県立芸術大学教授 林 英光

### 「瀕死の『美しい私の日本』」

今、都市のイメージの考え方を大きく変える時にさしかかっている。

明治維新いらい、日本の指導者達は、脱亜入欧のかけ声と共に、欧米化に邁進してきた。その結果、文化的な植民地化を招いてきた。若い下級武士が中心であったせいか、伝統的な寺院や城郭を数多く破壊し、日本語さえ英語にしようとしたといわれる。この過程で、長い時間をかけてつくり上げて来た、都市のシンボルとしての中心となる、ランドマークや骨格が希薄になったといってよい。更に太平洋戦争以降、高度経済成長、種々の都市や農業関係の計画が歴史的町並みや、美しい田園風景、自然海岸、河川を失ってきた。明治百年の成果が世界で最も混乱した、無個性な、この都市空間を形成してきたとあってよいと思う。確かに大都市の中心部は整備されてきてはいるが、いかにも無個性で魅力に欠けている。更にその周辺には電柱が乱立し、粗末な建築群と田園がいり交じり、下水のほとんどが垂れ流しである。水辺は荒れ果て、「美しい私の日本」は死語となりつつあるのが現状である。

さて、このような状況では、どのように都市のイメージを考えたらいいのだろうか。或は創り出さなければならないのだろうか。根本に戻り、今から新たな視点でイメージづくりに取り掛かるべきときに来たのであろう。

この百年間我々は何をしてきたのだろうか。何かを曖昧にし、何かの間違ってここまで来

てしまったのだと思うのは私一人ではないと思う。

日本人が最も都市のイメージを明確に持っている京都の街を見てみると、誰でも寺社や庭園に代表されるイメージを持つ。が、実際に新幹線で近づくと、車窓に映るのは混沌とした御世辞にも美しいとはいえないむごたらしい風景である。この街は、ほとんど戦災にあわずに、江戸以降現在に至っている都市なのである。京都ばかりではなく、我国のほとんどの都市にいえることであるが、我々の、最も大切にしなければならないものを忘れてきたからに他ならない。人生を送るにふさわしい都市のイメージとは何か。

風土、伝統、心。この基本に立ち戻り今一度再スタートしない限り、また同じ過ちを繰り返す事になるだけである。

日本人の曖昧さは今後は通用しない時代になると思う。私の仕事を通じての体験からでも、日本の国はアジアの一地域にある変哲もない国になりつつある事は明白な事実である。タイやマレーシアへ何度か行き、今三つ目の工場のデザインを進めているが、そこで見る



林 英光(はやし ひであき)

昭和16年11月8日生まれ  
昭和40年3月 東京芸術大学美術学部工芸科工業デザイン専攻卒業  
昭和42年4月 愛知県立芸術大学美術学部助手  
平成5年4月 愛知県立芸術大学美術学部デザイン工芸科教授環境デザイン教室担当

世界デザイン博覧会、豊田市久澄橋等多数の環境デザインに携わる



江南市の旧家の外構



五十鈴川の橋のたもと

日本人に合う格調ある都市のイメージは、洗練された、伝統的なデザインの延長上で考えるべきである。  
これはどの国でも行っている都市づくりの基本である。

ものは、40年前の日本のように自然と協調していた暮らしから、欧米の物質文明的暮らしに急速に変貌しつつある。しかしながら、そこには根本的に異なるものを感じる。それは自国の伝統を根底に据えて近代化しようとする視座が有り、我々と同じ道を歩んではない事である。将来の日本の姿を想像するに、かつて大英帝国が産業革命による公害や自然破壊の後、100%に近い下水道の整備や、それらに支えられた美しい田園や都市をつくりあげたそのありようは、とても望むべくもない。同じ事を望むのではなく我々日本人に合った、風土に合った都市空間は何なのか、どんなものなのか、大もとに立ち戻り出直す時に来ている。

ここに、一つ簡単な難問がある。私達日本人には、生きる目的についての共通項としての目的意識がないのである。その模索が先ず第一に必要である。これが都市づくり、国づくりの元にあつてこそ、将来像が結べる。少し離れてはいるが例として二つあげて見ると、オーストラリアの人々は働く目的の一つに、水辺の栈橋付きの住宅に住みたいと思っている人が多いという。砂漠とコアラとカンガルーの国、実は美しい水辺の都市に囲まれた国なのである。人々は美しい風景の中に穏やかに暮らし、たくましくスポーツに興じている。マレーシアのクアラルンプール。三つの宗教が、民族が住み分け、共存し、豊かな大きな緑と超高層ビルと古い建物や、住居が共存し、ハイウエーがカーブを描いてその中を通り抜ける街。欧米の暮らしをうまく風土にマッチさせたアジアの都市のあり方の一つの良い例として参考にするところが実に多い。細部にわたっても、例えば法面の処理の一貫した手

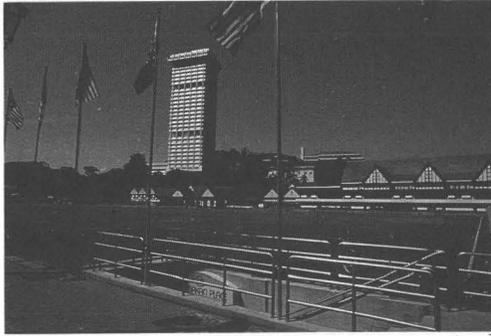


シドニー港の風景



シドニーの水辺と住宅

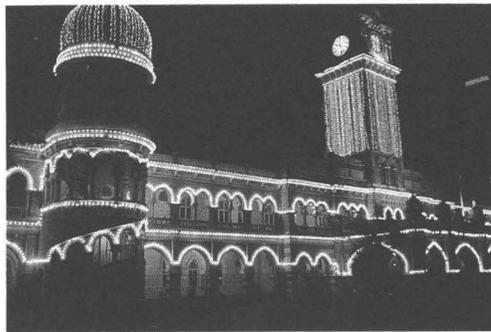
オーストラリアは水辺の都市の国である。  
美しい都市のパブリックな空間と住環境の風景は、文化の基盤である。



クリケット場と地下駐車場(クアラルンプール)



高裁前広場(クアラルンプール)



高裁の夜景(クアラルンプール)

クアラルンプールの高等裁判所と上流階級のクラブ、クリケット場、地下は大駐車場で、夜はライトアップされ変身し、若者を中心に市民の集まるロック会場となる。都市のシンボリック空間の効率的な使われ方の良い例である。

法、ガードレールの端部の終り方、川と建物  
の関係等、細部がシンプルで大きな都市のイ  
メージをつくりあげている。物質文明をうまく  
手なずけ美しい都市をつくりあげている例  
はアジア、太平洋圏にはかなりの数にのぼる。  
我々が欧米の都市に憧れ、むやみに参考にする  
間違った時代は終り、脱欧米、入亜の思想  
に立ち戻れば、縄文以来から続く環太平洋の  
アジアの暮らしや知恵から学び、日本人の暮

らしや都市の新しい方向を見つけ出さねば、  
我々日本人は単なるアジアの北の、貧しいイ  
メージの活気のない都市に住む人々となる日  
は近い。

## 「科学から美学へ、経済から文化へ」

20世紀は科学、技術、万能の時代、そして  
産業と経済中心の時代であった。その中で培  
われて来た私達の住む環境も、当然そのよう  
な範疇での考え方や環境づくり、ものづくり  
であった。

では来るべき21世紀はどうか？

フランスの哲学者、心理学者であるフェリ  
ックス・ガタリは、「科学から美学へ」産業技  
術、経済中心の生き方から、心や芸術への転  
換をする事なしでは地球は救われれないと言  
った。私はこの言葉を信じ、その方向での環  
境デザインの有り方を探り始めている。要約す  
れば、「自然との共生」「維持継続」「循環」の  
デザインが具体的方法であろう。そして、そ  
れによって生ずる結果は美学によって裏づけ  
られている事になる。或は21世紀の主流とな  
る芸術のテーマが、このような事であり、そ  
れが60億を越える人々を支える共通の理念と  
ならなければならないと思っている。

例えば20世紀までの国際性とは、或は大き  
な潮流は産業経済の発展、シェアー、数量を  
競い合う社会であった。大量、拡大、発展、  
そのための媒体のデザインであった。

何百万台と言う同じ車が世界中を走り廻り、  
同じ飲料水が南極からアフリカの砂漠の中ま  
で征覇して行く、大きい、多い事が良いと言  
う物質文明の価値観である。

小さな八百屋や雑貨屋は大手チェーン店に  
駆逐され続けるような具合である。それ等は  
一率な量産、産業の環境や生活を創出し、地  
域の暮らしや歴史、伝統や美学を破壊し続け  
て来た。今、巨大な東西の陣営の枠組が崩れ、  
民族や地域の大切さが火を吹き始めている。

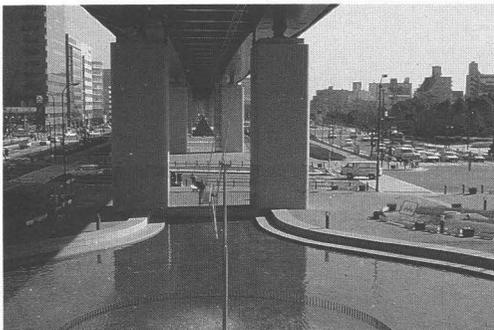
近代文明のやってきた事は、自然と人、人と人、人と歴史、人と地域の絆を断ち切る事であった。私達の目指す環境づくりはそれらの関係を修復し、逆行する事であろうかと思う。民族、故郷、血縁、伝統文化、風習、原風景。人の心の寄り処は意外にも単純で素朴なところに帰着し、そしてその上で異なった者同志が交流、共生して行けるところにあるのではなかろうか？

こんな視点から産業や都市や暮らしのデザインを考えて行く事がこれからの我々環境デザイナーの役割であると思う。

私達の暮らしは、地球上のある一点、たった一ヶ所しかない場所、その気候、風土、歴史が全ての出発点である。そこから生まれ、成長することが大多数の人々の基本である。特に都市環境も、植物のように地域に芽吹き、根つき成長して行くものである。

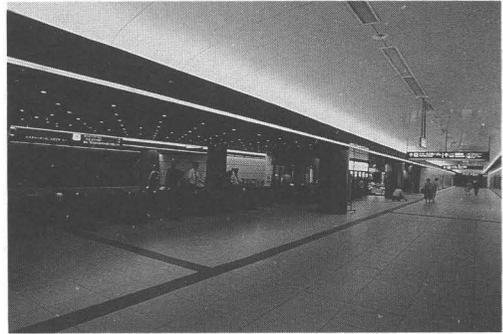
21世紀日本では次のような都市が活躍する時代と言われている。北の札幌、仙台、南の福岡、そして今迄の東京圏、大阪圏である。そこには名古屋の名前は浮かんで来ない。しかし地道ではあるが、名古屋圏は着実に脚元を固め大きく浮上して来ていると思いたい。その事は江戸時代からの産業技術に培われた産業都市としての底力がすでにあり、愛知県は日本一の実績をもっている。

しかし、対外的イメージの悪さはどこに原



若宮大通

名古屋市が世界に誇れるシビックデザインは、若宮大通である。空間のスケールと、機能性がうまく調和し、都市的なびのびとした良い空間を創っている。



千歳空港駅

札幌、千歳間を結ぶ千歳空港のJRの車両と駅は、一流アーティストによる未来を見つめた都市的な力づよいデザインである。

I.F.I国際会議のため、地下鉄に色を塗り、デザインだとお茶を濁す名古屋とは根本的に異なる。

因があるのだろう。それは都市の文化的イメージとしての魅力に欠けているからである。

札幌は千歳空港からして、なかなか美しく爽やかであり、空港のJR駅はデンマークのアーティスト ペア・アーノルディによる駅舎の環境やサイン、色彩、車両のデザインが見事である。

街中は誰でも御存知の通りの街である。大通公園は冬の雪祭にはアジア各国からの客で賑わい、別の意味でアジアの玄関をみざす南の福岡と対峙している。

魅力的な街はその街にある地理的条件、気候、風土を十分に生かしている。つまり、この場所は地球上広しと言えど世界に一ヶ所しかないのである。気温の変化、植性、地形、山や河、海の持っている自然条件は都市の最大の魅力であるからだ。それに加え、その条件によくマッチした伝統や、諸々のデザインが、更に都市のイメージを際立たせアイデンティティを創り上げる。

さて、例に上げた名古屋はどうであろうか。空港を降りると安普請の建物がまず目に入る。そして市内へ向かう空港周辺は世界に類を見ない位、雑然とした貧しい空間が続いている。特に名古屋市の東部からのアクセスは悲惨である。狭く混んだ道路、私設駐車場の乱雑さ、これが日本三代都市圏の空の玄関かと疑いたくなる。国外や、他の都市から名古屋に着く



徳川園

名古屋の文化的シンボルの一級品である徳川園の風景は、広域的視点がないがしろにしたマンションの計画とそのデザインで破壊された。この意識の低さが名古屋や岐阜の改めるべき共通の問題点である。

と、即、先程までの良い気分は吹き飛び、現実の世界に引き戻される。

では海の玄関はどうであろう。ガーデン埠頭からは、正面に赤白の煙突群があるし、目のやり場に困るくらい美しい風景は見当たらない。最も美しい建物であるサイロは、近く変形されその姿の良さは見る事が不可能になる。水族館や遊園地ができ、それらしい商店街も出来て来たが、いつ迄経っても港の持つムードは漂って来ないばかりか、僅かに残った良さも消されて行く。そこには空間デザインのコンセプト、芸術性が皆無であり、便宜的な対応や経済性が目立ち、センスのある思い切った大人のイメージが創出されていない。都市のイメージとして風景のインフラをつくるという意識が不足していると思う。

名古屋駅周辺も同様であり、心に響く何ものも、面的に大切に保護されデザインされていない。大切なものを忘れた計画ばかりが実施され、人々が誇りに思える環境や、和やかに集える場を作ろうとしないのがこの都市の特徴である。市民の心の寄り処になる場づくり、景観づくりにあまりにも無関心で今まで来ている。いや、市も県も周辺の市町村も、景観に対し各々委員会をつくり対応していると言うであろう。私に言わせれば、それ等は産業的な従来の視点での対応で、根本からの

取り組みではないと言いたい。

市内にも幾つかの良い物、素敵な場所がある。それ等も徐々に姿を消す過程にあり、益々平均化されて味気ないものになって行きつつある。これは将来とも、この地域が全国的に見ても魅力のない所と映り、機能的、経済的以外何もない所と言うイメージを持ち続ける事になりかねない。

何かが間違っているのである。万博も、新国際空港も何かしら説得力に欠けているのもこれらのことと無関係ではない。多くの人々は別に万博を開くことに反対ではない。むしろ心の中では落ち込みつつある日本の活性化の為、中部の為、名古屋の為、賛成の気持ちが大いにある。

しかし、何故あの場所か、何故時代錯誤と思われるテーマなのかに対して疑問をぬぐえないのである。この多くの人々の気持ちに答えようとし、努力に欠ける対応に失望しているに過ぎない。中止となった東京フロンティアのわだちを踏む必要はない。これは他の注目される都市にはないことで、大きな目標に向かって築き上げて行こうとする全体の盛り上がりにつながらない原因である。つまり心のコミュニケーションの問題である。

「もうこれ以上自然を破壊してはならない」。こんなことは子供でもわかる時代のコンセンサスであり、トレンドである。それに逆らうにはそれなりの説得力のある材料と思想が必要になる。万博も空港も東海三県の気持ちがまとまる、丁度良い場所がある筈だ。

多くの問題を含んでいて、消去法的に削り落して行くのではなく、大きな心を大切に、困難を科学技術、経済で解決して行くのが未来的プロジェクトのあるべき本筋であろう。

変てつもない瀬戸の山奥で万博をする意味は今や説得力を持たない。都市のスプロール化は日本の国土を醜いものにしてている。集中し、整備された魅力的な都市に住み、一步外に出ると美しい田園や自然に接することの出

来る諸外国の風景はほとんどの国民の心に焼き付いている憧れのイメージであろう。

人が住みたい場所は、古き良きものがあり、新産業の働く場所があり、伸び伸びと自然と接する場所の三つがあるところだという。フランスのラングドックシオンはそのコンセプトで建設されている。古いローマ時代の都市と、ハイテク産業の都市と、ヨットのたくさん集まったリゾート都市のバランス良い配置である。だからこそ、そこに優秀な技術者や芸術家も住みたくるのである。住む人々が誇れる地域づくりが先に思想としてあり、そこに万博や空港がついて来るのである。

万博は減んで行く自然や、困難な21世紀の諸問題が緊急のテーマであり、今迄の産業中心の博覧会はとっくに不要になっていることは、国民誰もが知っている。この人類共通の問題への挑戦であるならば、そしてそのテーマにふさわしい解答としての場所やプロジェクトであるならば大多数の人々の賛同を得て成立することだろう。

せつかく知多半島を削って埋め立てし、空港をつくるならば、それに値する地球的危機に対する提案がなくてはならず、それが無いところで、ものごとが進むことに人々が納得のゆかない結果を生んでいる。埋め立てに匹敵する面積を海に戻すのが常識であり、削られる山に相当する自然を回復するのがこれからの開発の常識であり、未来への哲学である。



常滑港

新国際空港の予定されている常滑上空から見ると、知多半島はすでに都市のスプロール化が進み、人々が考えているよりかなり緑も少ない。

これは発想を変えれば、別の形でどのようにも対応できる方法は見つかる。例えば世界に類を見ない風土、伝統を生かし、地場産業を駆使してエコロジカルな空港づくりをテーマとしたら常滑沖でも世界に注目されるプロジェクトになる。そして柔軟に考えればそんなに難しくなく、むしろ歓迎すべき結論を導き出し、夢をもって取り組む大テーマになる。今の日本人には経済的危機感以外に興味がない筈はなく、夢のある目標を失っていることの方に問題があるとすれば、万博も空港も素晴らしい要素を持っているのである。

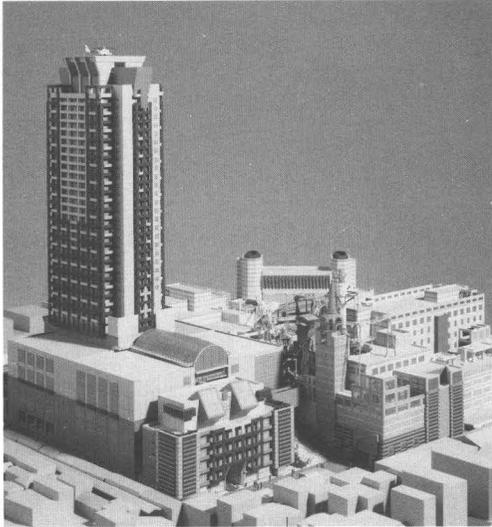
### 「アジアに学べ、都市のイメージ」

これからの都市像は、1つの都市について考えるのではなくて、諸都市の複合的な地域全体として把える時に来ている。

日本の都市は西欧の都市とは異なり、美しい市内を流れる川も、広場も、旧市街も、建物も今は失われて無いが、もっと異なったアジアの風土として広域の中で見れば、それ等に匹敵する魅力を見いだすことが出来る。

そのような見方から万博の後世への意味や位置付け、地域への還元を考えれば、夢は広がるばかりか、他国や国内の他地域への説得も容易であろう。心のコミュニケーションを無視した計画は、最も時代遅れであり、人々の心を動かさない。

我が国には東南アジア諸国の様な指導者は今はいない。それら指導者を支える世論も、エリート集団も無い。しかし人々の心は、個人個人がそんなイメージを持ち、行政の動きを待っているのだらうと思う。21世紀は地域の時代、民族の時代と言われる。この地域は地上にここにしかないその特徴を生かし、魅力的な物、環境にして育てて行くことが、これからの国際化だと思ふ。そして互いの地域がユニークさを讃え交流し、各々の文化を高めることが、国際的に通用する事になる。



大阪交通局

地元の人材を中心に、複合的な新しい都市の拠点のあり方を追求した大阪市交通局のフェスティバルゲートプロジェクト当初案。

今迄の科学技術、数、量、シェアを競う事が国際化であったのと異なり、地上の風土、自然、伝統、芸術、美学が21世紀のテーマとなる。更にこれ等を進めるのに大切な事は、地域の人材を用いる事である。他から呼んできたコンサルタントや知識人、有名人より何より、その地域を愛する情熱がある事である。この情熱抜きのプロジェクトや委員会がほとんどであるため、魅力的な都市やプロジェクトが生まれないのである。これも名古屋、中部地区の悪い特徴である。

## 「強烈な地域に対する情熱が都市をつくる」

中部圏が最も参考にすべき都市を一つ上げるとすると、それは大阪であろう。大阪のウォーターフロントの新しい方向性は、天保山の環太平洋火山帯をコンセプトにした海遊館、そしてアジア太平洋トレードセンターを見れば大阪の考えている都市のイメージも明確である。未来を見つめたロケーションと、そのデザインは若々しく、人々を集めるに足る説得力のある計画である。人々が何を求めているかに対して答えを出している。内陸部にも

いくつかの新しい拠点が生まれているが、私の携わっているフェスティバル・ゲートプロジェクトもその一つで、市交通局が進めているユニークなもので、商業空間と遊戯空間と交通の拠点が実に面白く組み合わせられた積極的なプロジェクトである。すでに通天閣の南側に立ち上がって来ている。バブルの崩壊や地理的な大きなハンデを最初から背負いながら、何とかこの新しい試みを実現しようとする交通局側の姿勢と、推進室の強力で巾広いスタッフの組み方、豊かな発想に引きづられ、私もすでに四年間その環境づくりにつき合ってきている。

名古屋市、愛知県、中部地建等との申し訳程度度の委員会や、役所とコンサルタントの間に立って、アドバイスや多少のデザインを手伝う方式ではろくなものは出来ない。このあたりを真剣に早急に改めないと、中部地方は本当の田舎で終るだろう。数年前のデザイン博で情熱をぶつけ合い、地元でデザインをやるんだ、と行って戦ってきて成功させた実績を、何故持続させ活かせないのか不思議である。

都市のデザインの様な地域性の強いものは、戦うべき対象を明確に持たなければ良いものは出来ない。有能な数少ない行政担当者の強い意志と理解と、個性のぶつかりあう土木、建築、環境デザイン等の情熱あふれるコアスタッフを据える事なしに、万博も、新空港も



'89デ博白鳥会場

都市空間デザインの実験でもあった世界デザイン博の意気込みを持続継続させることは大きな力となろう。

説得力のない単なる機能性と、経済性と、拙速の残骸の域を出ないだろう。

すでに20年の水を開けられているとは言え、身近な最高の刺激的な相手は大阪である。名古屋圏は今のままのやり方では残念ながら浮上するチャンスは全くない。そして最も大切なこの地域に住む人々のプライドと、人材を育て上げて行く事も出来ないと思う。その土地の魅力とは他人任せで出来るものではない。総合的な大きな視野と細部にわたる洞察力と大地を愛する情熱が、都市のイメージづくりに携わる人の条件である。

世界が急速に変化しているとき、それに対応し地域を活性化して行くための情報や知識は世界中から集められる。それだけでは不十分で、人生をかけて、命をかけて、その仕事に取り組む情熱のある人材を集めて取り組む以外に、未来の「都市のイメージ」を築き上げることはできない。

# 植民地都市のイメージ

—神戸・上海・シンガポール—

静岡県立大学教授 田中恭子

## 1. 都市のイメージ

都市にはそれぞれイメージがある。むろん、人によって抱くイメージは違うだろう。たとえば、シンガポールのある友人は、ロンドンが大好きなのだが、なぜかときどき、「なんと言っても、大英帝国の首都ですもの。栄光の都よ。歴史的に有名な場所や建物が多いし、すばらしい博物館や美術館や図書館や劇場がたくさんあるし、レベルの高い音楽や演劇の公演も多くて、夢とロマンがあるわ」という。彼女はイギリス植民地時代のシンガポールに育ち、ロンドン大学の大学院に留学した経験がある。彼女にとってのロンドンは、世界の歴史・文化の中心といったイメージのようだ。

しかし、別のシンガポール人は、「ロンドン」は暗くて、色彩がなくて、グレーのイメージ」という。たしかにロンドンは1年を通じて晴れた日が少ない。それに、緯度が高い（サハラとほぼ同じ）から、冬は夜がやたらに長いし、夏も昼は長いが日差しが弱く、すべてのものを色あざやかに照らすというわけにはいかない。これもロンドンのひとつの側面であり、歴史・文化の中心というの、また別の側面である。ロンドンのイメージとしてどちらを取るかは、個人的な経験や好み、そして、得た情報の種類によるだろう。

しかし、都市のイメージは個人的なものとは限らない。阪神大震災の直後、大阪在住の中国系の友人に電話したところ、「神戸に住みたいと思って、家をさがし始めたところだったのに、震災で当分だめになってしまった」

と、がっかりしたようにいう。親からももらった立派な家に住んでいるのに、なんで住みなれた土地をはなれて神戸に住みたいのか。たしかに、中国系の彼には、神戸はなにかと便利なところかもしれない。神戸には中国系の住民が多い。彼の友人も何人か住んでいるし、中国系の店も多いからだ。しかし、いま住んでいるところも、そう不便というわけではない。多忙な彼が、物件さがしや引っ越しのでまひまをかけてまで、神戸に移住する価値がどこにあるのか。

「神戸に住みたい」というひとは、この友人だけではないし、彼が「神戸に住みたい」のは便利さのためだけではない。「神戸って洗練されてて、カッコいいし、神戸に住むって満足感がある」というのが、最大の理由なのだ。神戸のどこが洗練されているのか、なぜ満足感があるのか、などときいてはいけない。彼はたぶん明解な答えをもっていないからだ。

「洗練された」というイメージだけが走っているといってもいい。つまり、神戸という町には「洗練されてて、カッコいい」という魅力的なイメージがあるため、「洗練された」町に住んでいるという「満足感」を求めて、神



田中恭子(たなか きょうこ)

1939年 岡山県倉敷市生まれ  
1961年 国際基督教大学教養学部卒  
1972年 オーストラリア国立大学大学院博士課程修了  
1973～82年 シンガポール国立大学助教授  
1982～91年 中部大学助教授・教授  
1991～現在 静岡県立大学大学院国際関係学研究科教授

戸に移住したい人が少なくないのである。

## 2. 神戸の「洗練」

都市のイメージは、そこに住みたいという欲求を生み、それを実行に移させるほど、強い力をもっている。先のシンガポール女性は、できることならロンドンに住みたいと思っているし、大阪の友人も、いずれ神戸に移住するだろう。あるアメリカ人の友人も、「事情が許せば、ボストンかサンフランシスコの近辺に住みたいね。文化水準が高くて、展覧会や音楽会などの楽しみが多いし、大学関係のひとも多いからね」と、インテリの彼にとって重要な、文化都市のイメージを口にする。いまのところ、彼は望みを果たせないでいるが、いつか移住するかもしれない。

イメージは、実態と符合する場合もあれば、ややずれている場合もある。たとえ実態とは少しちがっていても、イメージにはそれじたいの力がある。これは、政治家がいちばんよく知っているだろう。日本にかぎらず、政治家は選挙民やマスコミむけのイメージづくりに腐心する。イメージしだいで、選挙での当落も、権力のトップまでのぼるか否かも、決まることが多いからだ。政治家と同様に、都市のイメージづくりも重要である。魅力的だというイメージが定着すれば、移住してくる住民もふえるだろうし、観光や買物にくる訪問客もふえ、その都市の活性化につながるからである。

神戸は、そうした魅力的なイメージづくりに成功した町だと見なされてきた。しかし、都市のイメージは、巧妙なイメージづくりのテクニックさえあれば、どうにでもなるというものではない。実態からややずれている場合もあるとはいえ、実態と無関係というわけにはいかない。ケースによって、イメージが実態を反映する程度が100%か70%かといった差はあるにしても、基本的には、都市のイ

メージは実態の反映である。神戸についていえば、「洗練されている」というイメージは、市役所が創作したものではなく、ずっと以前から、実態に即して形成されていたイメージを、市役所がうまく増幅したにすぎない。

だとすれば、神戸の「洗練された」実態とイメージは、元来、なにに由来するのだろうか。この問いへの答えをさがすひとつの方法として、神戸と似たイメージをもつほかの都市を考えてみよう。神戸と似たイメージの都市といえば、誰もがまず横浜を思い浮かべるだろう。その次に考えるのは、長崎だろうか。長崎は、神戸、横浜にくらべて、都市規模がかなり小さいけれど、そのイメージには、神戸、横浜に共通するものがある。

では、神戸、横浜、長崎に共通する「カッコよさ」とは何か、その内容を検討してみよう。まず第1に、港がある。それもただの港ではない。外洋船が出入りする国際港であり、しかも、長い歴史をもつ国際港である。第2に、住民のなかに外国人や外国人を祖先にもつ人の比率が高い。三都市ともチャイナタウンがあるし、すでに日本に帰化しているひとびとも、まだ外国系の文化や雰囲気を残している。第3に、外国人や外国系日本人が海外からもちこんだものが、町をいろいろとっている。チャイナタウン、中国系の道教・仏教の寺院、西洋系のキリスト教教会、外国風の住宅、外人墓地といった建造物もあり、外国系の店、とくに輸入品を売る店、外国料理のレストランなど。

これをまとめれば、神戸、横浜、長崎に共通する「洗練」とは、「外国のにおい」ということになるだろう。ことばをかえれば、「国際性」、「エキゾチックな雰囲気」ということもできる。もちろん、外国のにおいや国際性などは、ほかの都市にもあるもので、神戸、横浜、長崎の独占ではない。にもかかわらず、なぜこれら3都市がほかとちがった「カッコいい」イメージになっているのか。その理由

はふたつある。ひとつは、これら3都市の「エキゾチックな雰囲気」は、比較的小さな場所に集中していて、密度がたかいこと。もうひとつは、ほかの都市とくらべて「国際性」の歴史が長いことである。

### 3. 開港場 (Treaty Port)

上のふたつの事実、「外国のにおい」がせまい地区に集中していることと、「国際性」の歴史の長さは、神戸、横浜、長崎が、幕末に日本が開国したとき、開港場となったことからきている。200年にわたった鎖国のあと、1850年代に欧米諸国と結んだ不平等条約によって、外国人に開いた港、彼らの来航とビジネスと居住を許した港、英語でいえば treaty port である。したがって、これらの都市の「国際性」には、少なくとも130年の歴史がある。もちろん、長崎は、鎖国時代にも、外国に対して開かれていた。

開港された都市には、外国人居留地が設定された。居留地は、港の周辺のせまい地区に限定され、当初、外国人はここ以外に住むことは禁止されていた。居留地は、外国人が住むだけでなく、商館も倉庫も、生活のための商店も食堂も、ここに建てたので、そこだけが日本のなかのミニ外国のようになったのである。不平等条約は、1899年に改正され、外国人居留地は廃止された（外国人はどこに住んでもよいことになった）が、旧居留地のミニ外国的なたたずまいや雰囲気は長くのこった。神戸・横浜・長崎でも、いまなお「外国のにおい」の集中している地区は、むかしの外国人居留地とその付近である。

いうまでもなく、19世紀に欧米諸国と不平等条約を結んだのは、日本だけではない。アジアのほとんどの国が、どこかの段階で結んでいるが、とくに長く不平等条約のもとで苦しんだのは、中国である。日本より10年以上はやく、1840年代から上海、広東、アモイな

ど5つの treaty port が開かれ、1850年代には天津など11港が加えられた。中国でも外国人居留地（租界と呼ばれた）が設定され、租界の行政権は外国人がにぎった。不平等条約が改正され、租界が廃止されたのは、100年後の1940年代である。



上海

1982年の夏、北京から上海への列車で、ひとつのコンパートメントを独占していたら、途中から人民解放軍の軍人さんが入ってきた。50歳代後半の彼は、戦前、旧満州のハルビンで生まれ育ったという。話ずきらしい彼は、国中旅行したがハルビンほどすばらしいところはないと、ひとしきりお国じまんをしたあと、私にどこへ行くのかときいた。上海だというと、そうかといっただけでだまってしまった。「上海へ行ったことがありますか」ときくと、はっきりふきげんな顔になって「ない」という答え。国中旅行したのに「なぜ行かないんですか」ときいたら、「帝国主義がつくった町だ、中国の恥だ、見たくもない」と吐きすてるようにいったので、びっくりした。

彼の世代の中国人なら、それも軍人なら、こんな考えのひとつが少なくないから、驚くこともないのだが、彼はハルビン（19世紀にロシア人がつくった町）をほめたたえていたので、帝国主義がつくった町だから「見たくもない」という考えのひとつとは思わなかったのである。彼の矛盾は、たぶん、ハルビンは生まれ故郷だから別格なのか、上海は中国最

大の都市でめだつから、とくにゆるせないのか、どちらかで説明できるのだろうか。いずれにせよ、この軍人さんの反応は、戦前の中国の屈辱的な状況をおぼえている世代にとって、上海がどのような存在か、どのようなイメージかを物語っている。



上海

毛沢東時代には、指導者たちが反帝国主義を旗じるしにしていたので、旧 treaty port を軽蔑し、投資配分をおさえるという形で差別した。しかし、当時でも、多くの中国人にとって、旧開港場のイメージは、軽蔑すべきものではなく、「洗練された、カッコいい」ものであり、とくに、東アジア最大の treaty port であった上海は、豊かで、スマートで、開放的なイメージがつよく、上海人もそれを自慢にしていた。「改革・開放」が定着し、上海が開発ブームを迎えている現在では、このイメージはさらにつよまり、上海は若いひとたちのあこがれの的である。

こうしたイメージには根拠がある。たとえば、北京と天津をくらべてみよう。このふたつの都市は、地理的にはそう遠くないが、その性格は対象的である。北京は、中華帝国の古都であり、現在の首都である。壮麗な紫禁城も、広大な天安門広場も、政府の権力と威信を誇示しているが、都市としての性格は、内陸的・伝統的でかたくるしく、内陸の古都西安と似ている。これに対して天津は、洋風建築がのこる旧租界を中心として、外国の都

市にも共通の、都市らしいコスモポリタンな性格をもち、上海と似ている。

1984年、「改革・開放」政策のもとで、経済開放都市に指定された14都市が発表されたとき、それらがすべて旧 treaty port であったことに気づいて、奇妙な感動を覚えたものだ。中国の共産党政権は、なぜこれらの都市を開放都市に選んだのだろうか。外国との交流関係のなかに発展をめざすなら、やはりこれらの港湾都市にたよるのが、合理的な選択なのか。そうであるにせよ、選択の過程で、これらの都市のコスモポリタンなイメージが大きな役割をはたしたことは否めないだろう。よかれあしかれ、19世紀いらい、外国との関係によって成長してきた都市であることを、共産党の指導者たちは、つよく意識していたにちがいないのだから。

#### 4. アジアの植民地都市

上海も神戸も横浜も、開港場になるまでは、ささやかな港町でしかなかった。大都市に成長したのは、ひとえに treaty port になったためであり、「帝国主義」がやってきたおかげである。この展開を、もっと一般的に、グローバルにみれば、つぎのようになる。18世紀の後半から19世紀にかけて、欧米に産業革命、すなわち、技術革新・高度経済成長がおこった。このため、欧米ではアジアから買いたいもの、アジアに売りたいものが飛躍的にふえたので、欧米の商人・企業家はどっとアジアに進出した。彼らを保護するために、欧米諸国の軍隊も進出した。むろん、この背景には、航海技術の発達があった。

貿易の増大にしたがって、アジア各地に国際ビジネス・センターが出現した。外洋船の発着できる港を中心に、貿易商社、商品のための倉庫、代金決済のための銀行、船と積み荷のための海上保険会社などが集まる都市が形成された。これらの都市に、世界各国から

商人や企業家が集まり、また、彼らとの取引や雇用をもとめて、アジア人が集まったのである。現在もアジアを代表する大都市には、こうした起源をもつものが多い。ボンベイ、マドラス、カルカッタ、コロンボ、ラングーン、シンガポール、マニラ、サイゴン（現ホーチミン）、香港などがそれである。もちろん、上海、神戸、横浜もそれである。

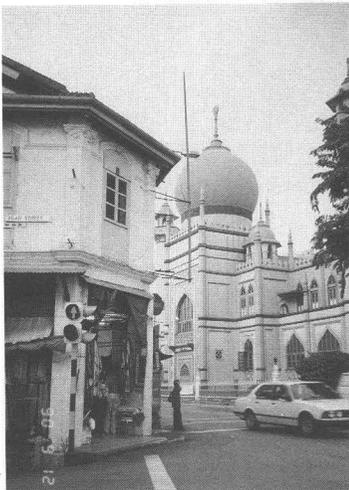
上に列挙した南アジア、東南アジアの諸都市は、植民地支配のもとで、事実上、欧米人が建設した都市だから、treaty portではない。その意味では、上海、天津、横浜、神戸など、中国、日本の港湾都市とはちがう。また、植民地帝国の一部であった時期が長いだけあって、コスモポリタンな色彩の度合いも、中国、日本の旧 treaty port にくらべて、はるかに濃い。しかし、これらの国際貿易都市のイメージには、国境をこえ、旧植民地が独立国かのちがいをこえて、共通性がある。

たとえば、同じ植民地支配下にありながら、インド北西海岸のボンベイと内陸のデリーは、ちょうど上海と北京のように、イメージも実態も対象的である。イギリス人がつくった植民地都市ボンベイは、上海と同様に、西欧的、開放的、コスモポリタンな商業都市である。民族、宗教、言語、文化の多様性では、上海

をはるかにしのぐ。これに対してデリーは、北京と同様に、首都として長い歴史をもつ政治・行政の中心である。オールドデリーには、ムガル帝国時代の壮大な石づくりの城壁や宮殿があり、古い町並みがつづく。隣接するニューデリーは、植民地時代に建設された首都で、西洋風の計画都市である。堂々たる官庁建築、緑の公園、まっすぐにのびる広い道路などが、政府の威信を誇示している。整然としてはいるが、かたくるしく、活気にとほしい。

インド人にきくと、一般的に、海岸にある町には、異端のいかがわしさとともに、海に向かって開き、海からくるものをうけいれる、開放的・進歩的なイメージがあるが、デカン高原（内陸）の古い町には、保守的・閉鎖的なイメージがあるという。ボンベイは、「海岸にある町」の代表格、インドでもっとも西洋的で、豊かで、おしゃれな町という若いひと好みのイメージがある。デリーには、ボンベイと対象的に、歴史と伝統と権力を背景とした、たかい威信と格調のイメージがある反面、しゃくし定規な重苦しさや圧迫感がある。

こうした対象は、スリランカの西海岸にあるコロンボと内陸の古都カンディ、ビルマ（ミャンマー）のラングーン（ヤンゴン）とマンダレーなどにも共通している。日本でいえば、戦前の神戸と京都の対象といったところか。植民地都市にしても、treaty port にしても、アジアに対する欧米の優位を体現していることはまちがいない。また、自国の伝統文化や価値観を無視し、えたいのしれない外国文化をうけいれる、いかがわしい存在でもあった。毛沢東時代の中国だけでなく、戦後独立した南アジア・東南アジア諸国も、これらの都市に対して、愛憎のまじった複雑な思いをいだいたのである。



シンガポール

## 5. シンガポール—国際都市のイメージ

すでに述べたように、「帝国主義」が育てたアジアの都市は、その多くがいまも国際都市のイメージのもとに、繁栄している。この事実は、それらの都市の存在の合理性を示すものであろう。彼らを選んだ場所、建設した施設、蓄積したノウハウは、それまでアジアが知らなかった、近代的な経済活動、とくに、国際的な経済活動に適合するものであった。アジアは彼らのもとで、近代資本主義のしくみと活動を学び、独立後の発展の基礎をつくったのである。シンガポールはその顕著な例である。

シンガポール共和国の初代首相、リー・クアンユーは、イギリスがシンガポールにのこした遺産について、イギリスはシンガポールを東南アジアのイギリス領の首都として建設したので、同じ規模のほかの都市にくらべて、よく整備された社会資本をのこしたと、イギリス植民地主義の遺産を評価している。イギリスが残した社会資本が、独立後の発展の基礎になったことを認めたのである。イギリスがシンガポールに残したのは、インフラだけではない。最大の遺産は、シンガポールそのものであり、その性格である。

1819年、寒村にすぎなかったシンガポールを、イギリス東インド会社が獲得し、中継貿易港の建設を開始した。近代都市としてのシ



シンガポール

ンガポールは、イギリスによって生まれ、140年以上にわたってイギリス植民地として育てられた（1942～45年の日本による占領期は例外）典型的な植民地都市である。イギリスは、ハード、ソフト両面の近代的な都市機能を整備し、また、シンガポールを「自由港（free port）」として、ヒト、モノ、カネの出入りに制限も関税もいっさい課さない政策をとった。これらの魅力によって、欧米やアジア各地から商人・企業家をひきよせ、シンガポールを急成長させて、東南アジア最大の、そして、世界有数の貿易港に育てたのである。

高度成長社会であり、しかも、ヒトの出入りが自由だったので、ビジネスチャンスをもとめ、雇用の機会をもとめて、東南アジア各地、中国、インドなどから、おおぜいの移民が入ってきた。その結果、シンガポールは、多様な人種、言語、宗教、文化が共存する、複合社会になった。複合社会になり、大都市になっても、中継貿易に特化した経済は、変わらなかった。こうした歴史が、シンガポールのイメージをつくっていった。自由な貿易を通じて、西洋と東洋が会う都市、海をこえてくる多様な人と文化を受け入れる開放的な港町、コスモポリタンでありながら、ちょっとエキゾチックな国際都市といったイメージである。

1965年の独立後、シンガポールは、そのイメージもふくめて、イギリスの遺産をうまく活用した。リー首相（当時）は、アジアの民族主義的な指導者たちが、わるいことはすべて過去の植民地主義のせいにする傾向を批判して、「植民地時代がいかにもわるい時代であっても、その時代におこったことを消すことはできず、その歴史の上に未来を築いていくしかないのだ」と、冷徹なプラグマティズムを示している。彼もふくめてシンガポール人は、植民地時代をわるい時代とは考えず、現在もシンガポール港創設を指導したイギリス人ラッフルズを、近代シンガポールの父としてた

たえ、尊敬している。

イギリスが残した重要な遺産のひとつは、中継貿易とその周辺のサービス業に特化した経済で、サービス業が国内総生産（GDP）の90%以上をしめていた。独立後、政府は、雇用創出のために、製造業の誘致に奔走し、あるていど成功する。しかし、製造業がGDPの35%をこえることはなく、主要産業としてのサービス業の地位はゆるがなかった。これは、シンガポールが製造業に向いていないことを示したともいえるが、逆に、シンガポールのサービス業がいかに強いかを示したともいえる。

サービス業のなかで、独立後、急速にのびたのが観光産業である。1970年代以来、GDPの10%以上を、旅行者からかせいでいる。人口270万人のこの国に、年間500万人以上の外国人がおとずれる。このうちビジネス客が15%前後をしめるが、観光客だけでも400万人をこえる。国土が狭く、歴史も新しく、名所旧跡のすくない国なのに、なぜこんなに観光客が集まるのか。それはやはり、イメージの力であろう。観光客の多くは、ASEAN諸国、日本、オーストラリアからくるが、彼らの大きなたのしみは、ショッピングである。国際貿易都市シンガポールのイメージのたまものである。



シンガポール

## 6. おわりに

シンガポール共和国は、植民地時代に形成された産業構造やイメージを、合理的なものとして受け入れ、その特性をさらにのびす方向で努力してきた。たとえば、ショッピング客をひきつけるにしても、単に自由港の伝統を利用して、多様な商品をリーズナブルな価格でそろえるだけでなく、旅行者にとって重要な、安全や清潔にも気をくぼっている。シンガポール繁栄の要因のひとつは、こうした植民地時代の伝統を活用する努力にある。その結果、シンガポールは、植民地時代に形成された、開放的な国際貿易都市としての性格とイメージをますますつよめ、その魅力あるイメージによって、さらに多くの投資や観光客を集めているのである。

神戸や横浜が、それぞれ「ポートピア」、「みなとみらい」でねらい、現在も努力しているのも、まさにこれであろう。すなわち、treaty portとして、シンガポールと似た伝統とイメージをもつこれらの都市は、それを活用し、さらにのびすことによって、人をひきつけ、投資をひきつけて、都市の活性化と発展をはかっているのである。

いっぽう中国は、建国後、民族主義に走って、鎖国にちかい状態を30年つづけた。その間、旧 treaty port の植民地的性格をにくみ、それらの都市への投資を最少限にとどめた。にもかかわらず、30年後に「開国」にふみきったとき、あらたな「開港場」となったのは、これらの旧開港場だった。結局30年の「鎖国」を経ても、彼らの「植民地的」性格とイメージは変わらなかったのである。政府の投資がなくても、彼らには、外国から投資を呼ぶ力があるので、「開放」後は、外資によって、開発をすすめている。

シンガポールのケースと中国のケースは対症的だが、どちらのケースも、旧帝国主義がアジアに開いた貿易港は、それなりの合理性

をもっていることを示している。合理性のかなりの部分は、イメージなのかもしれない。しかし、イメージが実態から遠くはなれることはない。かりに、イメージの部分がかなりあるとすれば、これらのケースは、都市のイメージがいかに重要か、それを変えるのがいかに難しいかを物語っているのである。

# 「観光策」の拡充と都市イメージ向上

京都精華大学助教授 橋爪紳也

## 1. なぜ観光にこだわるのか

### ・福岡の事例から考える

近年、都市イメージの向上に成功した都市として、まず思い浮かぶのが福岡である。1989年の「アジア太平洋博覧会」を契機に「北東アジアの拠点」を目指して、じつにダイナミックな動きを示した。その過程において、アジア諸都市との文化・芸術・経済面での交流を前面に打ちだし、加えてコンベンションを含めた「観光」の要素に大きなウエイトを置いていた点は注目されて良い。

まずなによりも福岡のイメージを変えたのは、93年に完成をみた開閉式の「福岡ドーム」である。野球だけではなく世界的なアーティストの興行にもあいついで成功、年間数百万人の動員を果す日本有数の集客装置となった。さらに隣接地には、四千人のコンベンションに対応可能な実に魅力的な宿泊施設「シーホークホテル&リゾート」がオープンした。

加えてハードでは「アクロス福岡」「マリンメッセ福岡」など日本有数の施設群が開業、大規模なコンベンション誘致の体制が整った。ソフトでは芸術・文化・学術の貢献者を表彰する「福岡アジア文化賞」、芸能のフェスティバル「アジアマンス」等が戦略的に継続されている。交通面でもアジア諸都市と連絡便を増便、また21世紀に向けて新たな海上空港の整備も構想されつつある。

行政も「観光立都」に本腰を入れる。市は1990年6月に「観光基本計画」を制定、以後、「海と歴史の国際旅遊都市づくり」をキャッ

チフレーズに、ウォーターフロント開発・祭りの活性化・近隣諸国との国際観光ルート整備・交通体系の整備などを柱に、「アジア」を射程に入れた積極的な観光客誘致をすすめている。

福岡では「北東アジアの拠点」という目標のもとに産官学が共働、集客施設と集客ソフトを充実させることで、「滞在型観光地」「都市型観光地」に変身した。その結果が、対外的なイメージの更新につながる。東京を意識しないハイセンスな若者文化を創造している街として、ひろく認知されるようになった。情報発信力もたかまり、「屋台」「明太子」「山笠」などに代表される既成のイメージから見事なまでの脱皮をとげつつある。

### ・戦略的観光策で対外的なイメージ向上をはかれ

もちろん、すべての事業が成功しているとは必ずしもいえないが、わが名古屋が参考とすべきところは少なくない。ひとつの目標を据えて徹底的にかつ大胆に文化政策を推進している点、観光・コンベンションに関する施策を戦略的に展開している点などは学ぶべきところだろう。施設整備においても、規模で



橋爪紳也(はしづめ しんや)

1960年 大阪生まれ  
1984年 京都大学工学部建築学科卒業  
1990年 大阪大学大学院工学研究科博士課程修了(工学博士、環境工学専攻)  
1994年 京都精華大学人文学部助教授

他都市を圧倒しているわけではない。東京や大阪と比べると、スケールでは勝ち目はない。そうではなく、地域独特の魅力を創案し、それを文化的な付加価値にまで昇華させている。結果として、対外的な都市イメージの向上を果しているのだ。

名古屋においても、これまで街の個性とされてきた「ものづくりの伝統」「優れた住環境」に加えて、「文化」「芸術」「レジャー」といった領域において新たな「魅力」を創造すべきという声はたかまっている。実際、さまざまな施設が竣工しつつあるのだが、対外的なイメージ向上につながっているかという点、必ずしもそうではない。

交流人口の拡大が想定される脱工業化社会においては、文化政策の充実が不可欠である。潜在的な課題という次元ではなく、いまや時代の要請といってもよいだろう。実際、日本よりも一足先に脱工業化の洗礼を受けた欧米の諸都市のなかには、「文化」「芸術」「レジャー」に関わる領域に重点的に投資、都市の格を高めて再生を果したところが少なくない。水路を再生してコンベンションのメッカとして蘇生した都市、ミュージアム群を拠点に文化活動を充実させてイメージを改めた都市など、さまざまな事例が散見できる。

名古屋においては、ドーム球場の完成を間近に控えている。さらには愛知万博の開催も遠い未来の絵空事ではなくなってきた。懸案であった新空港の整備も、具体化に向けての段階を踏みつつある。またアジア圏からの観光客、さらには国際級のコンベンションをいかに誘致するかといった点において、都市間競争の激化が予測されている。

この時期において、文化政策の充実を対外的に知らしめ、ひいては都市イメージを向上させるために、戦略的な「観光策」の確立が必要不可欠であることはあまりにも自明である。「観光」とはすなわち、「地域のすばらしさを他に示す」ことであるのだから。

## 2. 名古屋の観光動向と都市イメージ

### ・名古屋は一大観光拠点である

あまり意識されていないが、かつて名古屋は日本有数の観光地であった。社寺の門前には、芝居町、歓楽街のにぎわいがあった。城下の名所・景勝地を八景に整理したガイドブックの類は江戸時代からしばしば出版されている。訪れた商人、旅人を泊める旅館・宿舎も多かった。

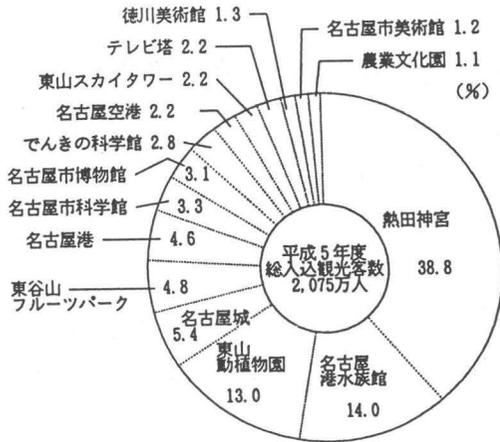
近代においても同様である。メインストリートになった広小路には、デパートメントストアという「消費の殿堂」が誕生、「広ブラ」を楽しむモボ・モガの姿があった。夜になると、派手な広告とネオンサインを特徴とするカフェやダンスホールに人々は集まった。ふるくからの歓楽街である大須にも新しい風が吹く。芝居小屋に代わって、映画館が街の主役となった。大都会の魅力を堪能するために、人々は名古屋を訪れたのである。

イベントも重要な観光資源であった。昭和3年(1928)には鶴舞公園で御大典奉祝名古屋博覧会、昭和12年(1937)には熱田の地で名古屋汎太平洋平和博が開かれている。とりわけ後者は、国内、海外からの50以上ものパビリオンが出展、国際博に準じる規模と内容で集客を果した。複数の広場を街路で放射線状に結び、アールデコ調・表現主義風のパビリオンがならんだ会場風景に、人々は未来の都市を擬似的に体験した。目をひいたのは高さ45mのシンボルタワーである。垂直線が強調された美しい摩天楼は、イベントの主題にちなみ平和塔と名づけられた。ドイツに特別発注してつくらせた透明人間館などのアトラクションも人気を集めた。

現在はどうかだろうか。その動態を名古屋市経済局の『名古屋における観光客の動態調査と統計資料』(平成五年度版)から読み取ると、やはり日本有数の観光地であることがわかる。主要施設への入込客数の合計は、実に

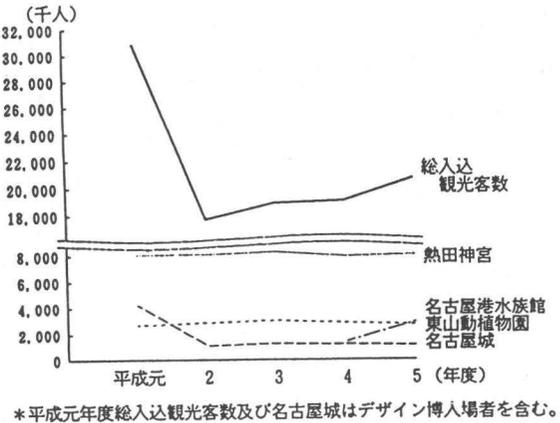


図1 平成5年度入込観光客数(施設別構成比)



\*名鉄名港遊覧船入場者数は合計から除く。

図2 上位4施設の入込観光客の推移



\*平成元年度総入込観光客数及び名古屋城はデザイン博入場者を含む。

出典：「観光客動態調査」

表2 入込観光客の推移

(単位：千人)

施設	年度							対前年 構成比 増減
	62	63	元	2	3	4	5	
名古屋城	1,088	1,570	4,219 (3,723)	1,114	1,235	1,193	1,112	5.4 △ 6.8
東山動植物園	3,162	2,683	2,697	2,856	3,031	2,830	2,701	13.0 △ 4.6
テレビ塔	496	505	542	555	568	518	463	2.2 △10.6
熱田神宮	8,780	8,280	8,081	8,102	8,285	7,966	8,052	38.8 1.1
名古屋港	622	496	4,137 (3,932)	337	384	632	963	4.6 52.4
名古屋空港	541	499	476	541	483	457	451	2.2 △ 1.3
名古屋科学館	572	440	637	739	727	710	676	3.2 △ 4.8
徳川美術館	267	271	268	285	285	290	276	1.3 △ 4.8
名古屋博物館	789	481	695	579	739	568	640	3.1 12.7
東谷山フルーツパーク	634	587	564	738	1,041	918	995	4.8 8.4
でんきの科学館	659	782	540	626	694	502	571	2.8 13.7
名古屋市美術館		985	456	359	496	218	255	1.2 17.0
東山スカイタワー			662	726	663	558	467	2.3 △16.3
農業文化園			171	206	259	274	221	1.1 △19.3
名古屋港水族館						1,426	2,909	14.0 104.0
デザイン博 白鳥会場			7,529 (7,529)					
計	17,612	17,579	31,674 (15,183)	17,695	18,890	19,060	20,752	100.0 8.9

(注) ( )内はデザイン博入場者数で内書き

資料：名古屋経済局「名古屋観光統計月報」

説明：デザイン博のあった平成元年度をのぞき、従来横這い傾向にあったが、平成3年度より増加している。

図3 観光案内図

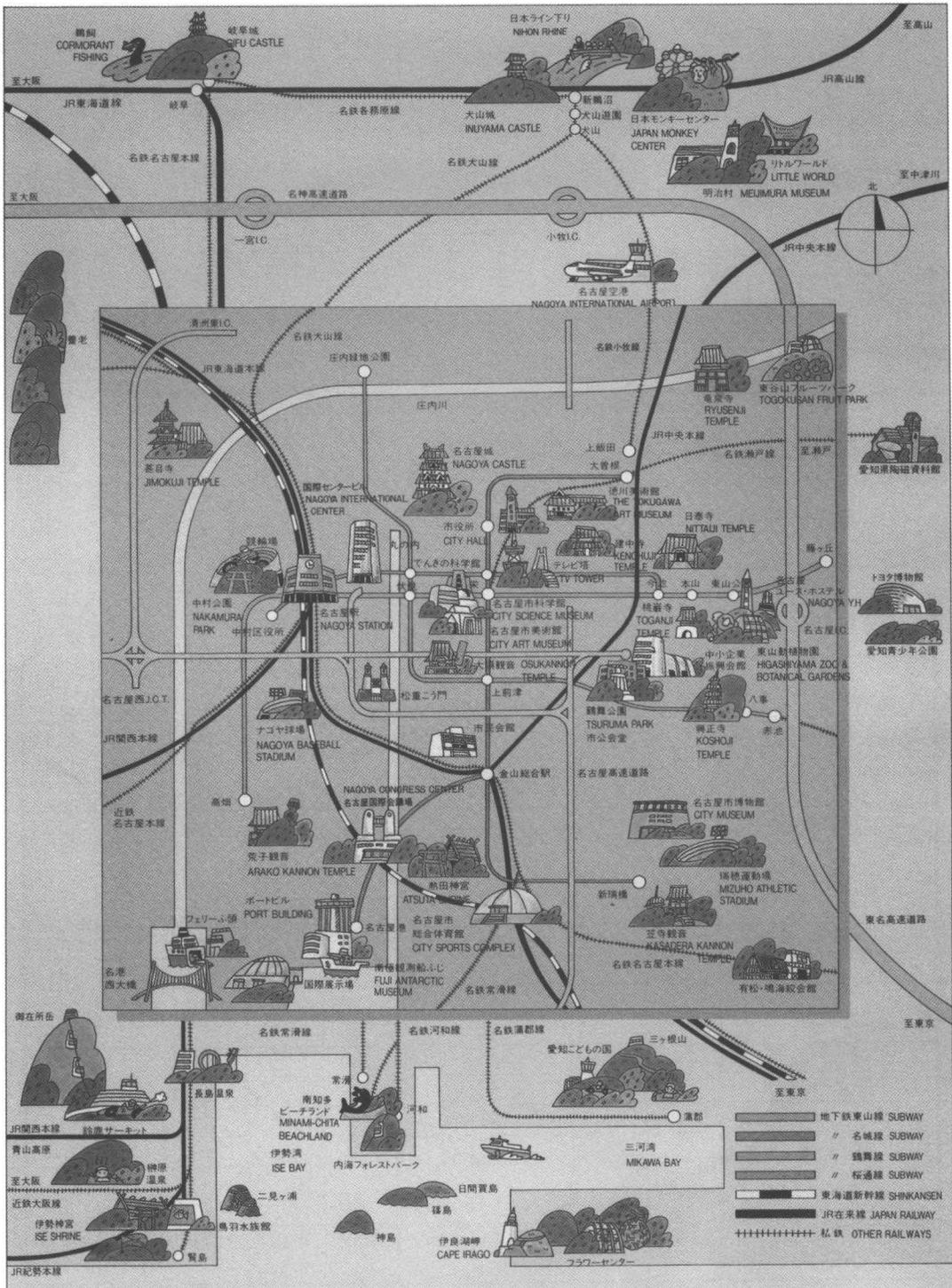


表3 名古屋への観光客数

年度	施設数	入込客数A	市外客率B	遊覧率 (平均施設遊覧箇所) C	観光客数(推計) A × B ÷ C
57	9	15,006 千人	62.1 %	1.48	630 万人
58	9	14,617	63.2	1.514	612
59	9	17,493	64.5	1.465	770
60	9	17,090	69.9	1.624	736
61	10	17,657	67.0	1.416	835
62	11	17,612	62.0	1.450	753
63	11	16,698	63.2	1.619	652
元	13	30,841 (15,183)	54.1	1.307	1,277
2	14	17,695	53.4	1.267	746
3	14	18,905	54.1	1.347	759
4	15	19,060	53.5	1.447	705

注( ) はデザイン博覧会入場者数 内数

- (注1) 入込客数とは、次の主要観光施設の入場者数。  
名古屋城、東山総合公園、テレビ塔、熱田神宮、名古屋港、名古屋空港、市科学館、徳川美術館、市博物館、東谷山フルーツパーク(61～)、でんきの科学館(62～)市美術館(元～)、東山スカイタワー(2～)、農業文化園(2～)、名古屋港水族館(4～)、  
※元年度は、世界デザイン博覧会白鳥会場入場者数を含む。
- (注2) 市外客率、遊覧率は、観光客動態調査による。

表4 日本ホテル協会中部支部加入ホテルへの外国人宿泊数(昭和59年より調査)

年(1～12月)	ホテル数	宿泊実人員	宿泊延人員
59	7	74,489	134,813
60	8	107,417	170,502
61	9	74,313	137,673
62	10	70,113	135,866
63	10	70,342	128,268
元	10	81,916	148,411
2	11	115,112	212,300
3	12	143,072	272,294
4	12	155,455	276,516

#### ・観光客が持ち帰るイメージ

次に観光客が持ち帰る「名古屋像」について見てみよう。市内客・県内客が抱いている名古屋のイメージは、どちらかというとな否定的だ。「娯楽性のない街」「保守・閉鎖的な街」「景観の悪い街」などの解答が多い。一方、県

外からの客は逆に、「文化的な街」「商工業の活発な街」「コンベンション都市」といった好印象を持っている。都市のにぎわい、活気ある大都市として評価しているわけだ。この落差の意味するところは重要だ。

将来的な期待を尋ねる調査でも、市民と県

図4 居住地別イメージ比較

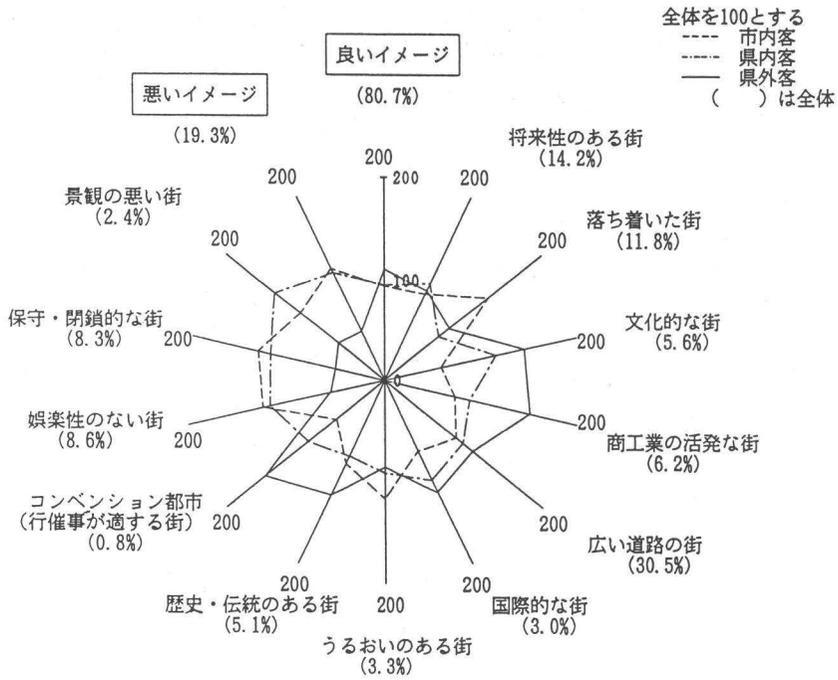
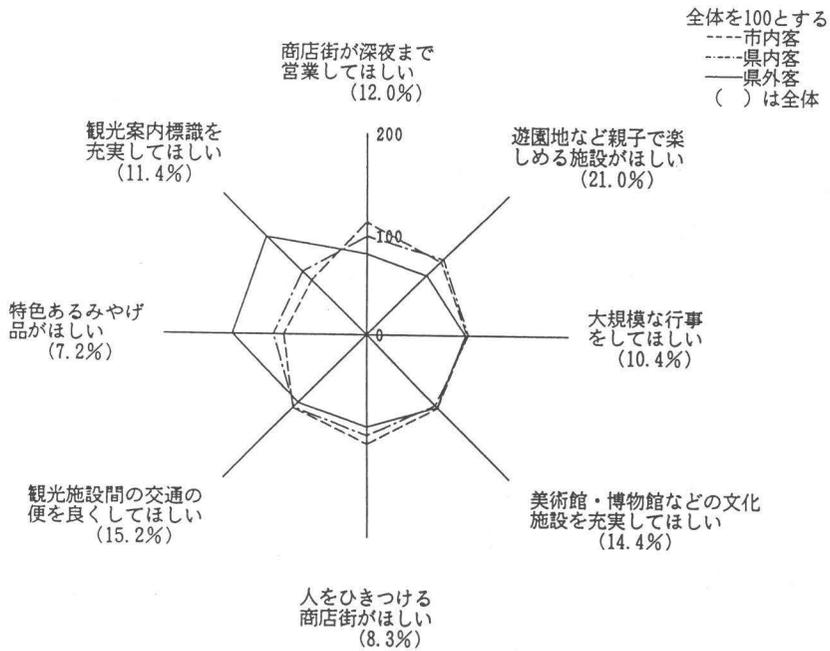


図5 居住地別期待状況



外客との意識の差を指摘することができる。市民は「商店街の深夜営業」「人を引きつける商店街」など、利便性の充足を第一に要求している。いっぽう外部からの来客は、「特色あるみやげ品」「観光案内標識の充実」などをあげている。このギャップに名古屋の「観光策」の弱点を読み取ることができるように思う。2000万人もの入込客がいるにもかかわらず、市民は名古屋を観光都市だとは、ほとんど意識していないのだ。

いっぽうで、市民と来客者に共通している要望もある。「遊園地など親子で楽しめる施設」「美術館・博物館など文化施設」「観光施設間の交通の便」の充足といった指摘がそうだ。なかでも施設同志の連絡を密にするという要望は、真摯に受けとめてゆくべきではないだろうか。

観光資源の空間的な配置とネットワークのありようを再点検、中長期の射程をもってその戦略的な再配置を模索しなければならない。また交通網の整備、情報ネットワークの構築も必要だろう。空間的に離れていても、各観光施設を結ぶ情報の「網」を確立することで相互の連係が可能になる。異質な観光資源をダイナミックにつなぐことで、観光客以外のさまざまな人間行動を誘発することもできるのではないか。

### 3. 「観光策」の拡充によるイメージ向上戦略

#### ・文化観光の振興を

21世紀にあっては都市型観光はいっそうの多様化をみせると推察されている。文化観光・都市におけるエコツーリズム・商業観光・体験型観光など、従来にない観光ニーズが生まれることが予想されている。では名古屋はどのような「観光策」の振興をおこなうべきなのか。以下では、都市イメージ向上という本論のねらいを視野に入れつつ、私見を述べておきたい。

まず第一に名古屋が需要を発掘すべき新たな観光の容態として、「文化観光」の重要性を指摘しておこう。

古くから城下町として発展した歴史都市・名古屋には、旧跡・神社・仏閣など、由緒ある建物をいたるところに見出すことができる。名古屋城・熱田神宮・大須観音、八事山興正寺・栄国寺・真宗大谷派名古屋別院・荒子観音・龍泉寺など、枚挙にいとまがない。さらにいえば、東山給水塔・中川運河など、明治以降の発展を物語る「近代化遺産」も多い。

また伝統的な祭礼、新しく創案されたイベントも少なくない。代表的なものだけでも、中村公園太閤まつり・港まつり・熱田まつり・鶴舞公園花まつり・大須大道町人まつり・出来町祭礼・筒井町天王祭・東海道五十三次名物祭りまつり・下之一色川まつり・矢田川花火大会などが挙げられる。

さらには公共ないしは民間が運営するユニークなミュージアムも多い。名古屋市美術館・名古屋城天守閣・愛知芸術文化センター・下水道科学館・でんきの科学館・名古屋市科学館・徳川美術館・トヨタ産業技術記念館・東海銀行貨幣資料館・熱田神宮宝物館・荒木集成館・南山大学人類学博物館・センチョリー写真資料館など、大小さまざまな博物館・美術館を列記することが可能である。

名古屋は「文化資産」の宝庫であるといっても言い過ぎではない。しかし、それぞれが観光客の誘致に向けて、十分な対外的なPRがなされているとはいいがたい。またネットワーク化がなされ、協力体制が整っているわけではない。事業の共同化、収藏品や情報のネットワーク化などが考えられて良い。

また新しい都市的な魅力、すなわち文化的なビジュアルチャームの創案も必要である。そこでは、「文化都市なごやを考える懇談会」から提示された数多くのアイデアが参考になる。提言のなかで「国際化と文化」に挙げら

表 5

名古屋観光10ルート(昭和五十七年)									
10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
城と四間道ルート	プロムナード栄ルート	大須今昔ルート	東海道・絞りルート	山崎川・四季の道	ヤング山手ルート	中村史跡ルート	覚王山お参りルート	徳川ゆかりのルート	熱田・宮まちルート
名古屋駅	市役所	大須観音	矢場町	笠寺西門	興正寺	中村公園	日泰寺	徳川園	西高蔵
社一円頓寺一円頓寺商店街一多賀宮(地下鉄・名古屋)	橋(地下鉄・伏見)	大須観音一西本願寺別院一置神社一栄国寺一下茶屋公園一東本願寺別院(地下鉄・東別院)	(地下鉄・市役所)一旧高等裁判所一久屋大通公園一蕉風発祥の地一テレビ塔一久屋大通公園一若宮	(市バス笠寺西門)一笠寺観音一笠寺一里塚一干鳥塚一誓願寺一根古屋城跡一鳴海の町並みと絞り一瑞泉寺一有松の町並みと絞り一大高緑地公園(市バス・西有松)	(地下鉄・本山)一桃巖寺一性高院一名古屋大学一南山大学一興正寺(地下鉄・八事)	(地下鉄・中村公園)一豊国神社一中村公園一明神社一香りの園一常泉寺一妙行寺一油江天神社一素	(地下鉄・覚王山)一曰泰寺一錠薬師一奉安塔一大竜寺一相応寺一城山八幡社(地下鉄・本山)	(地下鉄・大曾根)一大曾根商店街一片山八幡社一徳川園一徳川美術館一蓬左文庫一徳源寺一建中寺一布池カトリック教会(地下鉄・新栄町)	場跡一秋葉神社一御浜御殿跡一七里の渡し一康康幽居跡一裁断橋一そろばん博物館一道標一林桐

表 6

千種区		中川区		熱田区		瑞穂区		昭和区		東区		北区		西区		中村区		中区																															
東山動物園	東山一万歩コース	東山公園「万葉の散歩道」	平和公園と「桜の園」	覚王山日泰寺	城山八幡宮と末森城跡	四谷・山手通・八事界わい	桃巖寺と名古屋大仏	大龍寺と四観音道	鉦薬師と四観音道	東山給水塔と水の小径天満緑道	吹上ホール	長母寺	徳川園(葵公園)と蓬左文庫	徳川美術館	徳源寺	出来町祭礼と筒井町天王祭	白壁・主税・種木町の町並み	旧名古屋高等裁判所	建中寺	布池カトリック教会	航空宇宙館と名古屋空港	矢田川花火大会	御用水跡と桜並木	名城公園	蛇池と洗堰緑地の桜並木	庄内緑地とグリーンプラザ	中小田井の町並み	センチメリー写真資料館	四間道の町並み	五条橋と円頓寺	中村公園と豊清二公顕彰館	中村の大鳥居	中村公園太閤まつり	大門一正ロマンの町	名古屋国際センター	名古屋駅地下街	名古屋駅前一帯	ヒマラヤ美術館	堀川の納屋橋と欄干	名古屋城	名古屋城金シヤチと二之丸庭園	名古屋城夏まつり	名古屋市庁舎と時計塔	名古屋まつりと英傑行列	那古野神社・東照宮と桜	名古屋テレビ塔	セントラルブリッジと久屋大通公園	なごや夏まつり	栄地下街
東海銀行貨幣資料館	夜の錦三	でんきの科学館	市立名古屋科学館と白川公園	名古屋市美術館	若宮大通公園	大須観音	大須大道町人まつり	栄国寺	真宗大谷派名古屋別院	鶴舞公園	鶴舞公園花まつり	桑山美術館	昭和美術館	八事山興正寺	山崎川と桜並木	名古屋市東山荘	名古屋市博物館	瑞穂公園と競技場	熱田神宮公園一帯	熱田神宮	熱田まつり	鈴木そらばん博物館	熱田・裁断橋	宮の渡し公園	中川運河・松重開門	ナゴヤ球場	荒子観音	下之一色川まつり	名古屋ポルトビル	港まつり	ガードン埠頭と金城埠頭	名港西大橋	笠寺観音	名古屋市見晴台考古資料館	名古屋市総合体育館	名古屋市東谷山フルーツパーク	森林公園	竜泉寺	小幡緑地と緑ヶ池	大森寺	有松の町並み	東海道五十三次名物・絞りまつり	有松・鳴海校会館	大高緑地	薩ヶ丘駅周辺の町並み	藤高緑地	塩釜神社	名古屋市農業センター	

表 7

千種区		緑区		東区		北区		西区		中村区		中区		昭和区		瑞穂区		熱田区		中川区		港区		南区		守山区																										
東山動物園	東山植物園	日泰寺	城山八幡宮	平和公園	東山スカイタワー	白壁町主税町周辺の家並み	徳川美術館	布池カトリック教会	建中寺	御用水跡	四間道	庄内緑地	中小田井の街並み	名古屋駅新幹線ホーム	名古屋駅	三の丸かいわい	栄町かいわい	納屋橋かいわい	金山総合駅かいわい	白川公園	久屋大通公園とテレビ塔	大須観音	若宮大通公園	四谷通・山手通かいわい	吹上ホール	興正寺	鶴舞公園	昭和美術館	山崎川	瑞穂公園	東山荘庭園	名古屋博物館	デザイン博覧会会場	熱田神宮	宮の渡し	荒子観音	ナゴヤ球場	松重開門	名港西大橋	名古屋港ガーデン埠頭	名古屋市総合体育館	笠寺観音	旧東海道と笠寺一里塚	東谷山フルーツパーク	小幡緑地公園	竜泉寺						
有松町の街並み	高蔵野	酒蔵街	大高緑地公園	富が丘ニセアカシヤ並木	牧野ヶ池緑地	名古屋市農業センター	御幸山・音聞山かいわい	妙興寺	県陶磁資料館	陶土の山	定光寺かいわい	瀬戸の陶器工場	明治村	犬山の鶴岡	犬山城	五条川	尾張旭市	岩倉市	春日井市	高蔵寺ニュータウン	玉野川	密蔵院	愛宕羅寺	愛岐大橋と木曾川	小牧市	津島市	津島神社	桑楽園の大仏	焼物の散歩道	桶狭間古戦場かいわい	衣浦港	醸造蔵	木曾川橋	愛知青少年公園	五色園ハイランド	愛知池	弥富野鳥園	海部郡の水郷	師崎港かいわい	豊浜港魚市場	野間の灯台	杉本美術館	鶴の池	稲沢・祖父江周辺の植木団地	名古屋空港	西枇杷島山車祭	木曾川の堤かいわい	名古屋都市高速道路	名古屋通路名古屋インターチェンジ	名古屋の地下街	名古屋周辺の臨海工業地帯	名古屋の知多の海

表8 「文化都市なごやを考える」提案事項一覧

	1. 名古屋の魅力を世界的に主張できる個性的文化拠点づくり	2. 出会い、参加し、体験し、交流する、都市文化の創造	3. まちを知り、暮らしの歩みを伝える名古屋文化の発信と編集	4. 生活から芸術まで、文化トピックスの様々な発信するまちづくり	5. 文化ネットワークの創出	6. 魅力づくりに向け行政に期待されること
市民生活活性化	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 自然の中で音楽・美術・演劇など様々な文化活動領域において練習・発表し、交流できる滞在型の施設をつくる。(国際芸術村)</li> <li>○ 江戸時代初期を代表する書院造りである名古屋城本丸御殿を復元する。</li> <li>○ 徳川美術館や蓮花文庫の所在する徳川園一帯を武家文化ゾーンとして整備する。また、安土桃山時代から江戸時代の武家文化資産を発掘・収集し、名古屋武家文化コレクションとして充実を図る。</li> <li>○ 伝統芸能を継承し、演劇など他分野との交流をめざす文化拠点として能楽堂を建設する。</li> <li>○ 後世に残す文化資産として舞踊公園楽堂を復元し音楽など様々な催事に活用する。</li> <li>○ 東山公園を中心に東山丘陵一帯にスポーツ・レクリエーションなどの文化施設を配置し、大規模な文化・自然公園とする。また、東山動物園が世界的な動物研究の拠点となることをめざし、研究機関などの創設・誘致を図る。</li> <li>○ 都市内大規模空地である庄内川河川敷を生態系を重視した人と自然のふれあいの場として活用する。</li> <li>○ 科学館や水族館などを自然保護や環境保全、資源の有効利用など地球規模での環境をテーマに施設や事業の充実を図る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 各地域の伝統的な祭や行事、民話や伝承などに光をあてて、これらの復活や継承を図る。</li> <li>○ 区などの地域を単位としたイベント・コンクールを開催し、これを全所的な規模で展開する。</li> <li>○ 文化地区を指定し容積率の優遇など開発メリットのある制度をつくり、文化施設の立地を促進する。</li> <li>○ 地域に親しまれた施設や由緒ある建物などの整備、保存を図るとともに新たに活用する方を検討する。</li> <li>○ 公園などの公共空間をパフォーマンスの場として利用しやすくするために規制の緩和をめざす。</li> <li>○ 曜日や時間によって使用しない公共施設や民間施設の地域への開放を積極的に進める。</li> <li>○ 大学に博物館や資料館をつくり、文化資産や研究成果にふれる場をつくる。</li> <li>○ 都市内農地や溜め池などを農業体験や自然と親しみ溜めとして活用する。</li> <li>○ 道路や橋を芸術活動の素材として提供し、公共空間に芸術をもち込む。</li> <li>○ 道路や歩道などの緑化の際には、地域ごとにきめ細かな推進を図る。</li> <li>○ サウンドスケープガーデンや香りのストリートなど人間の五感に訴える快活空間を演出する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 名古屋の歴史、伝統、行事などの生活文化を盛り起こしデータベースを作成し、これを編集した名古屋事典や四季を彩る催事を紹介した名古屋文化歳時記などを作成する。また、名古屋から発信し、全国各地に波及した名古屋文化の広がりや再確認し、これを記録する。</li> <li>○ 「水どころ」といわれる名古屋の人々と水との関わりを展示する治水歴史資料館をつくる。</li> <li>○ 伝統や由緒ある建物や場所などを、市民や外来者に紹介する案内標示板を設置する。また、このような地域を周遊する文化散策路を設定し、沿道の整備やルート地図の作成を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 市民生活の様々な領域におけるデザイン活動を顕彰し、デザイン都市名古屋の推進を図る。</li> <li>○ 名古屋圏の観光芸術文化資源のデータベース的な機能を果たす文化情報センターを整備する。</li> <li>○ 地元の資源を掘り起こし、全国ネットで放送できるような質の高い番組の制作や、地域に根ざしたテーマを論ずる出版物を発行したり、各区分ごとに地域特性あふれる新聞を発行する。また、新しい情報メディアを活用した情報発信に取り組み。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 行政、市民、団体、企業、学界、芸術・芸能界などが自由に意見を交換し、交流する場をつくる。</li> <li>○ 社会教育センター、図書館、ホール・劇場などの文化施設の利用者や出演者、観覧者などの意見、要望を施設の設定や運営に反映させる。</li> <li>○ 全国的な文化フォーラム、シンポジウムを誘致、開催し多様な人材の交流を一過性のものとしないうまくづくりに努める。</li> <li>○ 名古屋圏に残る伝統芸能や特色ある演劇を、周辺都市とともに共同で企画し、移動巡回方式で上演するような展開を図る。</li> <li>○ 芸術・文化や生命、地球、宇宙といった学術的テーマや自動車、航空といった技術的テーマなどにより、関連施設をネットワーク化し、共同で研究、情報発信、イベントなどが行える体制を確立する。</li> <li>○ 社会教育センター、図書館、ホール・劇場、スポーツ施設など各種公共文化施設相互の連絡、調整を図るとともに、民間施設も含めネットワーク化し、施設利用の利便性を高めるために情報の相互提供や共同企画の催事を展開する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 小規模劇場の全区設置や、音楽・演劇練習場など市民の日常的な文化活動を支援する場の充実を図る。</li> <li>○ 音楽会、演劇祭、文化祭など地域における文化活動の支援のために、一流の芸術家を地域に派遣したり、練習会や成果の発表会を開催する。</li> <li>○ 全国的な文化フォーラム、シンポジウムを誘致、開催し多様な人材の交流を一過性のものとしないうまくづくりに努める。</li> <li>○ 文化基金を増額し市民の文化活動の支援、環境整備の充実を図る。</li> <li>○ 地域ごとの伝統的行事や祭りの開催日を特別な日として定め、特色ある行事を開催しPRを図る。</li> <li>○ 子供たちが地域の祭りや伝統行事に親しみ、これを継承していく担い手となるような取り組みを行う。</li> <li>○ 文化事業に関するキュレーターやプロデューサーなどの専門家を養成する学校や学科の創設に努める。</li> <li>○ 文化事業に携わる職員の育成のため、研修講座の開設や、他自治体や企業、大学などへの派遣研修を行う。</li> <li>○ 職員が自ら公演プロデュースを行ったり、内外の一流プロデューサーと共同で事業を行い、経験を積む。</li> <li>○ 文化事業のテーマに合わせて、関連するセクションが機動的・横断的に事業を推進していく。</li> </ul>
国際文化	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 名古屋港を国際交流ゾーンと位置づけ、ホテル、コンベンション施設、音楽、スポーツなどの多様な文化施設を集積させる。</li> <li>○ 港の周辺の倉庫群を現代美術や現代音楽の練習、発表の場として活用し若者の文化活動の拠点とする。</li> <li>○ 国際協力事業団名古屋国際研修センター、国連地域開発センターなど名古屋既存の国際協力活動拠点の充実、強化を図る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 留学生や研修生の受け入れ拡大に向けて市民、団体のホームステイ活動の活性化や日本語研修センターを創設する。</li> <li>○ 地域ぐるみの国際化推進のため、区・町向土や商店街同士などで交流事業や交換留学などを促進する。</li> <li>○ 名古屋在住の外国人と市民の生活文化交流のため各国の民族音楽や民族料理など生活文化にふれあう交流行事を開催する。</li> <li>○ 名古屋駅、名古屋空港などのシテイゲートや都心における外国人向けの情報案内の整備、充実を図る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 名古屋と世界の交流の歴史を再確認し、これを記録し、展示する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 大規模な建設や開発の際には、国際コンペや海外の著名な建築家を登用するなど、シンボルックで後世に残る文化空間となる建築物を造る。</li> <li>○ 国際的なコンベンション、スポーツイベント、芸術コンクールの主催、誘致を図る。</li> <li>○ 内外の芸術家の注目を集めるためまちぐるみの芸術支援活動として、公共空間や企業製品を素材として提供する試みをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 国際デザインセンターに、国際的なデザイン組織の本部を誘致するなど国際的な機関や組織の本部の名古屋誘致を推進する。</li> <li>○ 名古屋ボストン美術館のような国際的な連携のもとに運営される文化施設の誘致を図るとともに、これを活用して都市間の幅広い交流を推進する。</li> <li>○ 名古屋の文化資産の海外での展示会の開催や、名古屋の市民や芸術家の海外派遣や海外公演の開催など名古屋文化の輸出を通じた文化交流を推進する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 国際化の推進には、外国語教育の充実、強化が不可欠。</li> <li>○ 外国人に対する日本語教育の充実も必要。</li> <li>○ 効果的な教育方法の研究、導入の検討が必要である。</li> </ul>
産業技術と文化	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 伝統的なモノづくりの技術や、近代産業技術を学習、体験できる施設をつくる。(産業技術博物館)</li> <li>○ パーチャル・リアリティ、ホログラムなどの先端技術による芸術作品を展示する施設をつくる。(ハイテクアート・ミュージアムなど)</li> <li>○ 地域の伝統的な技術や素材を活用して、学び、体験し、遊べる施設。(からくりドーム)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 手づくりロボットやアイデア自動車コンテストなど市民のものづくりや産業技術への関心を喚起する催事を企業の協力を得て開催する。</li> <li>○ ハイテクとアートの融合などの先端産業技術をテーマとしたSFX映画祭などのイベントを開催する。</li> <li>○ 企業、官庁、大学の研究機関の研究内容を市民に紹介できる参加・体験型スペースをつくる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 名古屋が培ってきた工業、商業、農業などの生活にかかわる知恵や技術を見たり体験できる町の庶民文化博物館や、産業遺跡の発掘、展示などを事業所や商店の協力を得て推進する。</li> <li>○ 地域に根ざした特有の文化や地域の産業が生み出した芸術的成果などを発掘・収集し、地域文化の殿堂をつくる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 世界的なレベルで優れた産業デザインの成果を顕彰する制度や、デザインコンクールを創設する。</li> <li>○ 名古屋圏の産業文化資源のデータベース的な機能を果たす文化情報センターを整備する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 企業博物館やショールーム、工場などをテーマによりネットワーク化し、産業観光ツアーを設ける。</li> <li>○ 名古屋圏周辺の施設群を生きた博物館として活用する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 地域の伝統産業を継承していくため、伝統技術を受け継いでいる人を支援し、育成する。</li> </ul>

れた項目はあきらかにビジターズチャームの向上につながるものだ。さらにいえば、「市民生活と文化」に列記されたさまざまなアイデアも、単に市民の文化的生活に貢献するだけではないものが多い。とりわけ「名古屋の魅力」を世界的に主張できる個性的文化拠点づくり」「出合い、参加し、体験し、交流する、都市文化の創造」の欄に整理されたさまざまな事業提案には、従来にない来訪者を呼ぶアイデアが盛りこまれている。文化施設の内容、芸術・学術等の分野における情報発信力を引きあげることで、「文化観光」のメッカへと変身をはかることが可能になるのではないか。

#### ・景観整備と「観光策」の整合性を

第二に景観整備事業との関連性を指摘しておきたい。名古屋には歴史的まちなみも多い。白壁・主税・檀木町など武家屋敷の面影を伝える町、屋根神の信仰を伝える四間道、土蔵づくりの町家が遺る有松、岩倉街道沿いの中小田井など、それぞれの歴史を感じさせてくれる景観を見ることが出来る。保存と開発の調和をはかったまちなみ整備の事業化が望まれる。

さらには都心部での景観整備事業の成果、たとえば久屋大通公園・若宮大通公園に代表される「都市的な美観」も、今日的な観光資源としてみなすことができそうだ。ライトアップ事業などからめて、いっそうのPRがあって良い。

また豊かな緑も重要な観光資源である。東の丘陵地帯には東山公園・平和公園、尾張旭にかけての森林公園など、休日には家族連れでにぎわう行楽の地がひろがっている。また庄内川・矢田川・天白川の河川敷には、大規模な緑地のネットワークがある。そのほか猪高緑地、大高緑地、小幡緑地など、市内周辺部に豊かな「緑」が確保されている。さらに天満緑道・万葉の散歩道・山崎川の桜並木・御用水跡の桜並木・蛇池周辺の桜並木などの

散策路の充実も、他都市に誇るべき点であろう。

「緑のランドデザイン施策」では、「まとまりのある緑」「目に映る緑」「つながる緑」「市民と育てる緑」という四本の柱をたて、具体的な施策を体系づけている。ただそのなかに、公園・緑地を外訪者をもてなす場所とみなす視点は明示されていない。果たしてそれで充分だろうか。

以上、述べてきたように、歴史的景観・都心の風景・緑の風景等をかたちづくる事業においても、「観光」との関わりを配慮しつつ推進してゆく必要があるように思う。

#### ・ビジターズインダストリーの振興

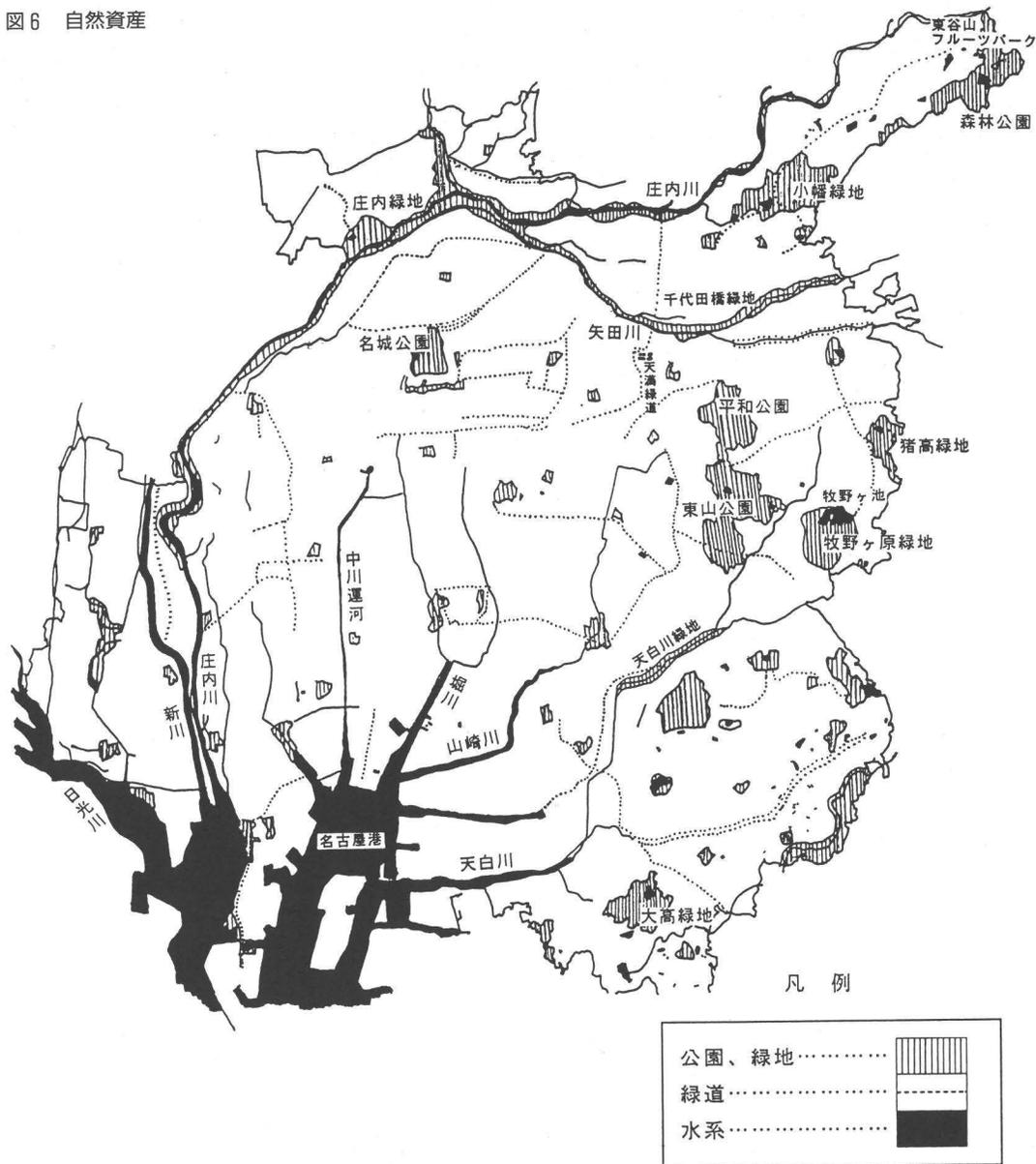
第三に述べておきたいのは、「観光」を強化することによる産業振興という側面である。交流人口の増大をファクターとして考える時、観光関連産業は21世紀における基幹産業の一角を担うという予測がある。

産業振興という側面を考慮するならば、狭義の「観光客」ではなく「ビジター」という概念を導入することが重要である。住民でもなく、また通勤・通学している昼間人口でもない。しばしば名古屋を訪問し、活動をなしている人を「ビジター」と捉えてみるのだ。いわば「第三の人口」である。

もちろん「ビジター」のなかには、観光を主目的とする人と、ビジネスを主目的とする人がいるわけだ。従来の観光行政・観光産業は、もっぱら「観光を主とするビジター」だけを対象としていた。そうではなく「ビジネスを目的とするビジター」が抱えている、潜在的な「観光需要」を掘り起こすという視点が必要だと思うのだ。

そのためには関連する諸産業、すなわちビジターズインダストリーの振興がはかられるべきだ。大都市ならではの文化創造の機会、にぎわいを体感できる「場」の創出がさまざまに考えられる必要がある。また多彩なアミ

図6 自然資産



ューズメント機能の整備、多彩でなおかつ魅力的な観光ルートの設定なども欠かせない。会館やホールの充足、コンベンションビュロー等の誘致機能の充実、さらには通訳などの人的資源の確保も必要である。あわせてアフターコンベンションを射程にいらした宿泊産業の魅力づくりも課題である。その波及効果、雇用促進の効果は決して小さくない。従来型

の観光対象だけではなく、劇場・ホール・スポーツ関連施設・レジャー施設・ショッピングの場・コンベンション施設などを、都市型観光の対象とみなし、その活用をはかるべきではないだろうか。

- ・総合的な「観光策」の確立に向けて  
名古屋の対外的なイメージを向上させるた

めには、さまざまな手法があるだろう。そのひとつの選択肢として、文化・景観・勧業策などに関連づけた戦略的な「観光策」を保有することが、有効かつ最善の道であるという私見を述べてみた。戦略的な観光のデザインングを確立したうえで、文化性の高い都市の新しい魅力、すなわちビジターズチャームをつくり、そのうえで独自のビジターズインダストリーの振興をはかる。それが結果的に、「外」を意識した都市イメージの向上に結実することはまちがいない。

行政においては「観光」を主題とするブランドデザインを描き、そのうえで各部局が関与している「来名者」を想定した諸施策を横断的にかつ総合的に把握するセクションを設置することが望ましい。おそらくはスポーツ文化施設・公園緑地事業・商工業の振興・コンベンション等、縦に分割された行政の仕事の諸領域に「観光」「ビジターズインダストリー振興」の要素が含まれている。すべてを調整する機関が望まれる。

また産業界においては、いわゆるビジターズインダストリーの振興に積極的に取り組むこと、研究機関にあっては名古屋における観光学的研究の充実をはかることなどが考えられて良い。

三者の足並みがそろうことがあってはじめて、新時代の「観光」に関する議論が成立する。さらには産官学が一体となって、都市の魅力を総合的に把握し、効率良い広報をすすめるための機関を創設、連携しながら対外的なシティセールスを強化することも検討がなされるべきだろう。

# QOLから見た政令指定都市の 社会指標比較分析

—名古屋市の相対的位置をめぐって—

金城学院大学助教授 西下彰俊

## 1. はじめに

第二次大戦後の復興期から高度経済成長期にかけては、GNPを重視する価値観が社会全体を覆っていた。しかし、高度経済成長期の後半からGNPを崇拝する価値意識を反省する機運が次第に高まり、1960年代以降、経済的繁栄や物質的充足よりも精神的充実や人間的価値を重視し、生活や福祉に中心的な価値を置くQOL (Quality of Life =クオリティ・オブ・ライフ) 志向が強くなってきた。換言すれば、1960年代を境に、クオンティティ・オブ・ライフ (Quantity of Life)、つまりライフの〈量〉を中心的な価値とする時代からクオリティ・オブ・ライフ (Quality of Life)、つまりライフの〈質〉を中心的な価値とする時代に社会変動を遂げたと考えてよい。このような背景から、1970年代はまさにQOL研究の第一次全盛期であったが、依然として高度経済成長期までの量的発想の影響が残っていたため、QOL研究の全面的な開花までには至らなかった。その意味では、バブル経済が水泡に帰し、低成長が続いている現在こそ、QOL研究を本格的に進める時期である。本レポートがそのきっかけのひとつになれば幸いである。

本稿の目的は2つある。一つは、QOLというパースペクティブから、政令指定都市レベルの「社会指標」を構築することが可能かどうか検討することである。二つ目は、名古屋市の全体的なQOL水準がすべての政令指定都市の中でどのような位置を占めるのか、さ

らには名古屋市の個々の社会指標について相対的に優る部分、劣る部分はどこかを明らかにすることである。以上の目的を持って行う本稿の作業は、〈安心して暮らせるまちづくり〉〈人にやさしいまちづくり〉を目指す上で、そして名古屋市のイメージ向上を図る上で、必要不可欠な手続きであると言えよう。

## 2. QOL 概念の定義

最近、医療・看護・リハビリテーション・福祉などの分野を中心にQOLという概念が用いられるようになってきた。比較的多く使われるのは、末期がん患者のターミナルケアにおけるQOL、慢性疾患患者のQOL、あるいは高齢者のQOLと言った文脈においてである。頻度としてはやや少ないようであるが、最近では、生涯学習とQOLといったように、QOLの適用範囲がさらに広がる傾向にある。

そもそもQOLとは何であろうか。

ここでは、QOLという非常にマクロで魅力的な概念のアウトラインをつかんでおくことにしたい。小島によれば、QOL (生活の質) とは、快適な人生を楽しむ生存の条件を量の問題として見るばかりでなく、質の問題とし



西下彰俊 (にしした あきとし)

1955年 愛知県生まれ  
1982年 財団法人老人総合研究所研究助手  
1984年 東京都立大学大学院博士課程修了  
1987年 神戸山手女子短期大学専任講師  
1990年 金城学院大学文学部社会学科助教授

てとらえるものである。質の高い生活とは、物の一定量の確保の上にもたらされる物の質の良さと、それに伴う心の豊かさや満足度のバランスと見てよい(\*1)。また、日本リサーチ総合研究所によれば、「健康で、家族の支えによって勤労に従事し、適度の収入があり、自然や余暇を楽しみながら安心して生きることのできる生活」がQOLの高い生活である(\*2)。

また、丸尾によれば、QOLは経済的、精神的に偏りのある豊かさではなく、安全(Safety)、快適(Amenity)、地域社会生活(Community)の3要素のバランスである(\*3)。永田らは、QOLとは、「身体的にも、心理的にも、社会的にも、倫理的(実存的)にも満足できる状態のこと」であり、具体的には、「よく食べられ、よく眠れ、排せつに支障が無く、疼痛が無く、たとえあっても苦痛にはならず、心理的に安定し、職場や家庭・学校といった社会環境において十分にその役割を果たすことができ、生きがいをもって充実した日々を送れること」としている(\*4)。

これまでのQOLに関する定義の代表例を示したが、定義の仕方にかかなりの幅があることがわかる。「QOL概念は、生活者の意識や状態から自然的・地理的、そして人間的環境までを包含するものであり、そのすべてを研究の対象として網羅することは困難である。」との指摘にも肯定せざるをえないのが現状である。

このようなQOL研究の現状を踏まえ、QOL(Quality of Life)という用語の、lifeの意味の重層性に注目することにより、「生命の質」「生活の質」「人生(生涯)の質」の3次元からアプローチすることが可能でありかつ必要不可欠であると筆者は考える。例えば、上田敏は、クオリティ・オブ・ライフは、ふつう「生活の質」と訳されているが、「生命の質」「人生の質」などの訳も使われて

いることに言及した上で、上田自身としては「人生の質」の訳を採用しリハビリテーションの研究にQOL概念を導入しようとしている。また上田は、「生命」を基底層としてその上に「生活」が中層をなし、最上層に「人生」があるという3つの階層構造としてQOLを捉え、その3層を「生の質」と包括することもできるとその可能性を指摘している(\*5)。QOLを「生命の質」「生活の質」「人生(生涯)の質」の3次元から捉えようという筆者の発想はこの上田のアイデアを下敷にしている。

### 3. QOLとQOC

QOLは、本来、個人の状態・資質性を表す概念であるが、本稿では、個人の資質性の集積として、都市の“QOC”という概念を提案してみたい。

前述した通り、個人の資質性としてのQOLを3次元で捉えることは可能である。第1の「生命の質」の次元は、個人の生命の安全性や生命の躍動感にかかわる次元である。第2の「生活の質」の次元は、個人の生活の快適性、利便性にかかわる次元である。そして、第3の「人生(生涯)の質」の次元は、第2の生活の質における快適性、利便性を越えた次元であり、個人の余暇や社交や文化状況を示す次元である。さらに、生活の質の水準が個人のライフコースを通じて継続している状態を示す次元も含まれる。

以上が、個人の資質としてのQOLである。ここでは、都市としての資質の集積を表すものとしてQOC(Quality of City=クオリティ・オブ・シティ)概念を用いることにする。そして、QOCを、QOLと平行に3次元、つまり「生命の質」「生活の質」「人生の質」で捉えようというのが、筆者の提案である。

第1の「生命の質」については、個人、つまり市民・住民の「生命の質」の集積として、

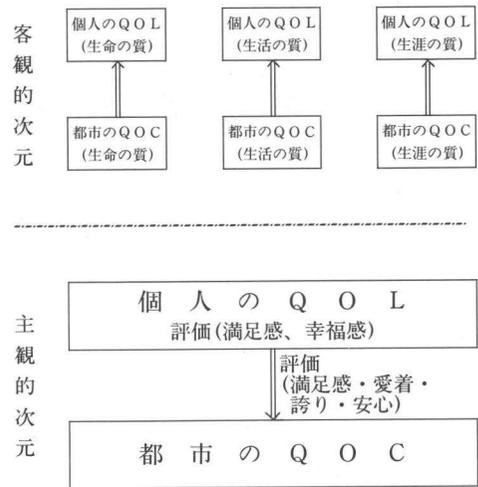
都市の「生命の質」を考えることができる。市民・住民の「生命の質」を確保する資質が都市の側の「生命の質」であるというのが、ここでの理解である。

第2の「生活の質」についても、市民・住民の「生活の質」の集積として、都市の「生活の質」を構想することができる。つまり、市民・住民の「生活の質」を確保する資質が都市の側の「生活の質」であると解釈するわけである。

第3の、都市における「人生の質」の次元には、個人の余暇や社交や文化性を示す次元と生活の質が個人のライフコースを通じて継続している状態を示す次元に加えて、「ノーマライゼーション」の理念のもと、身体的・知的障害者、外国人、高齢者、若者、男性、女性が自由に交流できるという開放性・平等性の次元を都市の性能として付け加えたい。つまり、都市における「人生の質」の次元には、市民・住民や来訪者の属性に関わらず、受容しうる「やさしさ」の次元を組み込むことが不可欠であると判断する。

以上は、市民・住民のQOLに直接反映する都市におけるQOCの客観的指標について述べたものであるが、社会指標はこの次元だけに留まらない。さらに、市民・住民のQOLを規定する都市としてのQOCを市民・住民の側が実際にどう評価しているのかという主観的次元も考慮していくことが必要不可欠である。今回は、参照に値するデータが不十分にしか存在しないこともあって1指標しか組み込むことができなかつたが、今後は、実際に政令指定都市間で比較調査することも含めて主観的次元の研究を進めていかなければならないであろう。次の図1は、これまで述べた考え方の枠組みを分かりやすく示したものである。本稿では、この枠組みから、都市のQOCを捉えるのにふさわしいと考えられる指標を多面的に選択し、各都市のQOCを多次的に比較する。

図一1 QOLとQOCの関係



#### 4. 第一次元「生命の質」の比較分析

本研究において対象とするのは、札幌市、仙台市、千葉市、川崎市、横浜市、名古屋市、京都市、大阪市、神戸市、広島市、北九州市、福岡市の12の政令指定都市および東京都区部である。

ここでの比較分析にはいくつかの特徴があるので、まずその点について述べておく。第1に、各指標のデータは、政令指定都市ベースのものに限定し、当該都府県データで代用することは避けている。従って政令指定都市ベースのデータが存在する指標によってのみこの社会指標は構成されている。第2に、各指標について、政令指定都市の規模や人口構成などの影響を排除するために、指標に直接関連する当該人口あたりの比率で比較している。つまり、例えばショートステイ・ベッド数という指標では、実際にショートステイ・サービスを利用する要件を満たす寝たきり老人を対象にして、寝たきり老人千人当りの比率を計算している。単に、高齢者千人当りでもなく、ましてや人口千人当りでもないということである（ちなみに、厚生省が毎年発表

している福祉マップでは、ショートステイ・サービスの利用日数指標において、単純に高齢者100人当りの数値を用いている)。

第3に、表1から表3が示すように、各指標について、ネットの数値だけでなく、偏差値と偏差値の順位を明記している。これは、それぞれの指標について、各政令指定都市の実績データが平均値からどれくらいプラスまたはマイナスの方向に偏りがあるかを調べるためである。偏差値の大きさの程度から、各指標が平均値のまわりに密集しているのか、散らばっているのかを把握することができる。なお、指標によっては、若干の政令指定都市について、データが採れない場合があるが、その場合には比較の対象から除外している。

さて、「生命の質」次元では、表1が示すように平均寿命(男性、女性)、 $\alpha$ 指標(乳児死亡率÷新生児死亡率)、がん、虚血性心疾患、脳血管疾患の死亡者数、医師数、看護婦数、寝たきり老人数、痴呆性老人数、救急指定病院数の11指標を取り上げている。

表1は、生命の質、つまり心身健康にかかわる各指標について、名古屋市の数値、偏差値、順位を中央の欄に、平均値をその右の欄に示したものである。さらに、右端の欄には、各指標ごとに、最も偏差値が高かった(従って第1位の)都市名と数値、偏差値を示している。この表からわかるように、名古屋市が上位にあるのは、救急指定病院数と $\alpha$ 指標のふたつのみで、残りの9指標はすべて平均以下である。生命の質全体では、偏差値の平均が50.07で第7位となっている。「生命の質」次元から見た名古屋市のQOL水準は、可もなく不可もなく平均そのものということが言えよう。

## 5. 第二次元「生活の質」の比較分析

「生活の質」次元では、「社会福祉」「快適環境」「住宅」「経済」「労働」「教育」の6つのエリアに分け、各エリアについて適切と思われる指標を設けた。

この「生活の質」次元については、社会全体の高齢化、社会福祉に対する社会的な関心が高まっていることを考慮し、まず「社会福祉」のエリアについて各都市の比較分析を行う。そして、次に社会環境の快適性に対する関心の高まりに着目し「快適環境」のエリアについて各都市の比較分析を行う。最後に「住宅」「経済」「労働」「教育」の4カテゴリをまとめた形で比較分析を行う。結局、「生活の質」次元は、社会福祉と快適環境とそれ以外のエリアに分けて、比較することになる。

### (1) 「社会福祉」エリアについて

まず、「社会福祉」に関しては、表2が示すように、保育所数、保育所運営費、生活保護実人員、母子寮定員、精神薄弱者養護施設定員数、身体障害者養護施設定員数、常勤ホームヘルパー数、ショートステイベッド数、デイケアセンター数、特別養護老人ホームベッド数、老人保健施設定員数の11項目を取り上げた。

名古屋市は、デイケアセンター数が第2位、身体障害者養護施設定員数が第3位と健闘しているものの、それ以外の9指標は平均以下であり、11指標全体としての平均偏差値は49.90で第6位である。トップは仙台市(偏差値56.82)で、以下、千葉市(同56.44)、大阪市(同52.22)、広島市(同51.95)と続いている。

高齢者福祉サービスの充実は、1989(平成元)年にゴールドプランが、そして1995(平成7)年に新ゴールドプランがスタートしたことからも分かるように、社会福祉の諸領域の中でも、緊急を要するいわば日本社会全体

の喫緊の課題である。各政令指定都市においても、老人福祉サービスの充実が、最重要課題のはずである。以上の認識から、「社会福祉」のエリアに、5つの高齢者福祉サービスの指標を取り込みつつ比較を試みたわけであるが、残念ながら、名古屋市は第6位で可もなく不可もないといったところである。社会福祉の領域も、「生命の質」次元と同様に、「さえない、ぱっとしない」「これといった特徴がない」といった印象を持たざるを得ない。

### (2)「快適環境」エリアについて

次に「快適環境」については、同じく表2が示すように、DID人口密度、公共空地率（(道路面積+公園面積)÷市域面積）、非木造率、住宅老朽化率、道路面積、土地区画整理率、都市公園延べ面積、地下街率、公営地下鉄エスカレータ設置率、公営地下鉄エレベータ設置率、交通事故死亡率、少年刑法犯検挙率、刑法犯検挙率、出火率、ごみ収集量、下水道普及率の16項目を取り上げた。

名古屋市は、土地区画整理率、地下街率がともに第1位、公共空地率が第2位、非木造率が第3位と上位を占める指標が4つあり、いずれも偏差値がかなり高くなっている。逆に、出火率と刑法犯検挙率は最下位もしくは最下位に近い。

以上の16指標の偏差値の平均値で「快適環境」を比較してみると、トップは名古屋市で53.69、第2位は川崎市の53.24、第3位は横浜市の52.77となっている。以下、札幌市、神戸市と続いている。名古屋市は快適性のクオリティの高い都市、快適環境都市であると言える。とはいえ、名古屋市は、交通事故死や犯罪多発、出火など最も身近な生活面での危険性が決して小さくないので、当面はこれらのできる限り低減させることにより、「超・快適環境都市」を目指すべきであろう。

### (3)「住宅等」のエリアについて

次に、生活の質を構成する「社会福祉」「快適環境」以外のエリア、つまり「住宅」「経済」「労働」「教育」の4エリアについて各都市の現状を見てみよう。

「住宅」は、持ち家率と1住宅あたりの平均延べ面積の2指標を、「経済」は、一人当たり所得、個人預貯金残高、一人あたりの購買額、消費者物価地域差指数の4指標を、「労働」は、女性パートタイマー数と有効求人倍率の2指標を、「教育」は、専門学校数、短期大学・大学数の2指標をそれぞれ取り上げている。

名古屋市は、1住宅あたりの平均延べ面積、女性パートタイマー数、有効求人倍率、専門学校数の4指標が第1位を占め、一人あたりの購買額、短期大学・大学数の2指標が第3位となっている。

以上の10指標の偏差値の平均値で政令指定都市を比較してみると、第1位は名古屋市で、偏差値は57.82、以下、京都市（偏差値52.65）、大阪市（同52.47）と続いている。

最後に、「生活の質」次元全体で、政令指定都市を比較して見よう。「社会福祉」エリアの11指標、「快適環境」エリアの16指標、「住宅」「経済」「労働」「教育」のエリアの10指標を合わせた37指標の偏差値の平均値を比較する（ただし、川崎市と北九州市の2市はいくつかの指標についてデータが公表されていないので、比較の対象から外している）。

「生活の質」次元全体で最も偏差値の平均が高かったのは、名古屋市で偏差値は53.82、第2位は仙台市の51.84であった。以下、札幌市（偏差値50.89）、神戸市（同50.59）と続いている。

## 6. 第三次元「人生の質」の比較分析

「人生の質」次元では、「交流・社交」「文化環境」「人生の意味」の3つのエリアに分け、各エリアについて妥当と思われる指標を設けた。

まず、表3が示すように、「交流・社交」では、昼間人口指数、女性役員比率、女性参加率、登録外国人数、交際費、余暇時間の6つの指標を、「文化環境」は、図書館数、司書数、博物館数、学芸員数、公民館数、映画館数の6指標を、「人生の意味」では、未成年男性自殺率、未成年女性自殺率、成年男性自殺率、成年女性自殺率、高齢者男性自殺率、高齢者女性自殺率の6指標をそれぞれ取り上げた。なお、ライフコースの途上において、病苦からあるいは様々な社会理由から自らの命を絶つという行為は、まさに、人生の質としてのQOLを維持できなかったことを意味するものと筆者は解釈し、「人生の意味」エリアにおいて、各ライフステージ別、性別の自殺率を取り上げた。

名古屋市は、女性役員比率、女性参加率(審議会等)、成年男性自殺率がそれぞれ第2位を占め、昼間人口指数、学芸員数がそれぞれ第3位を占めるものの、トップを占める指標が皆無となっているのが気にかかるところである。

最後に、第三領域の「人生の質」次元を構成する「交流・社交」「文化環境」「人生の意味」の4エリア、合計18指標の偏差値の平均値で各政令指定都市を比較してみたい。第1位は、東京都区部で偏差値は57.10、第2位は京都市で52.06、第3位が名古屋市で偏差値は51.41であった。以下、広島市(50.76)、仙台市(50.69)と続いている。

## 7. QOLの総合順位

4. から6. で述べてきた「生命の質」(11指標)、「生活の質」(36指標)、「人生の質」(18指標)という3次元を総合し、全体としてのQOLを比較してみるとどうなるであろうか。

QOL総合(65指標)の平均偏差値の順位を見ると、トップは、名古屋市で偏差値は52.49である。第2位は仙台市の52.01、第3位は札幌市の51.72で、以下、東京都区部(51.37)、広島市(50.33)、福岡市(50.32)、千葉市(50.07)、神戸市(49.46)、大阪市(49.22)、京都市(49.19)、横浜市(48.73)、川崎市(47.80)と続く。名古屋市の場合、「生命の質」が第7位と低迷しているものの、「生活の質」では堂々第1位を占め、2位以下を大きく引き離しており、さらに「人生の質」では第3位と上位に食い込んでいる。生活の質は、すでに述べたように、社会福祉、快適環境をはじめとしていくつかのエリアから構成されており、個々のエリアでは問題が決してないわけではないが、トータルなQOLレベルとしては、理想的であろう。特に、東京都区部より総合的なQOL水準が高かったことは、特筆に値する。今後は、総合第2位の仙台市や第3位の札幌市のQOL水準にも着目すべきであり、とりわけ、両市の「生命の質」次元の水準の高さを見習うべきである。また、東京都区部の人生の質の高さには見習うべきところがある。

## 8. 主観的次元の重要性

図1に示した通り、個人のQOLにとっても、都市のQOCにとっても、主観的次元を分析の枠組みに組み入れなければ、ものごとの半分しか見ていないことになる。この図が示すように、主観的次元は2つの視点が不可欠である。第一の視点は、都市に生活する市民・住民が自分自身のQOLレベルをどのように主観的に認識しているのかを調べる視点であ

る。具体的には、市民・住民に自身の生命・生活・人生についての満足感、幸福感を問うことになる。第二の視点は、総体としての都市のQOCレベルを当該市民・住民がどのように主観的に認識しているのかを調べる視点である。具体的には、市民・住民に当該都市に対する満足感、愛着、誇り、安心感等を尋ねることになる。

今回の研究では、後者の視点に関わるデータのみ組み入れることができたが、表4が示すように、データの得られない都市がいくつかあり、不十分であるといわざるを得ない。このデータは、1987年に大都市企画主管者会議が実施したものであり(『大都市とアイデンティティ』)、各都市とも有識者200人、一般住民200人をサンプルとしている。ただし有識者の回答が過度に反映されている点に問題がある(一般市民のデータのみを取り出すことが不可能であった)。表4は当該都市に対して誇りを持っているかどうか、愛着を持っているかどうか、喜びがあるかどうかをそれぞれ質問し、「はい」と回答した比率を示している。

都市の主観的評価のトップは札幌市で偏差値は64.27、第2位は神戸市で偏差値は62.97であった。以下、京都市、福岡市、川崎市と続いており、名古屋市は第9位で、偏差値は43.20とさんざんな結果である。客観的次元におけるQOLのハイレベルとは裏腹に、主観的次元におけるつまり市民意識のQOLは惨めな結果に終わっている。先に述べた通り、データそのものに問題があるものの、経験的には、名古屋市民のローカル・アイデンティティはやはり低いのではないかと推測される。今後速やかに、都市評価に関する全政令指定都市のアンケート調査を実施すべきであり、今回参照したデータと同様の結果が示されたならば、直ちにアイデンティティを回復するための戦略を積極的に打ち出していかなければならない。さらに、都市に生活する市民・住民が自分自身のQOLレベルをどのように

主観的に認識しているのかを調べるデータは、皆無であったために今回は社会指標に組み込むことができなかったが、今後都市の比較研究を進めていくためには、共通のフォーマットによるアンケート調査を実施することが喫緊の課題である。

#### 〈注〉

- (1)小島蓉子「障害者が求めるもの」鉄道弘済会編『社会福祉研究』第43号、1988年、35-36頁
- (2)同上書、36頁
- (3)丸尾直美『日本型福祉社会』日本放送協会、1984年
- (4)永田勝田郎ほか「QOLとその臨床評価における意義と実施法」『臨床医薬』5巻2号、1989年
- (5)上田敏「人生の質(Quality of Life, QOL)を求めて」鉄道弘済会編『社会福祉研究』第35号、1984年、15頁

#### 〈付記〉

本稿には12政令指定都市(および東京都区部)の65指標にわたる詳細なデータを掲載することができなかった。以下の文献をご参照いただければ幸いである。

西下彰俊「QOL志向型都市の社会指標」財団法人名古屋都市センター編『名古屋のイメージ向上に関する調査研究』第2分冊、1995年、1頁-21頁

表1 「生命の質」次元の社会指標

指 標	名古屋市 ①	平 均 値 ②	第 1 位 ③
心	平均寿命 男性 (歳) (大)	75.78 47.8 10	75.96 千葉市 77.00 62.3
	平均寿命 女性 (歳) (大)	81.32 37.8 12	82.03 福岡市 82.63 60.3
	アルファ指標	1.64 58.7 3	1.9 千葉市 1.52 62.4
身	がんによる死亡者数 (人) (人口10万人当り) (大)	172.9 49.8 8	172.3 千葉市 98.5 70.7
	虚血性心疾患死亡者数 (人) (人口10万人当り) (大)	35.5 54.2 5	40.0 千葉市 23.2 65.6
	脳血管疾患死亡者数 (人) (人口10万人当り) (大)	80.9 43.8 9	72.0 千葉市 44.8 69.0
健	医師数 (人) (人口10万人当り) (大)	355.2 49.0 6	363.3 東京都区部 514.5 69.6
	看護婦数 (人) (人口10万人当り) (大)	674.3 48.5 8	699.8 北九州市 953.3 64.4
	寝たきり老人数 (人) (老人1万人当り) (老)	183.2 53.9 7	242.9 札幌市 70.8 61.2
康	痴呆性老人数 (人) (老人1万人当り) (老)	397.8 47.2 6	345.1 横浜市 18.3 67.5
	救急指定病院 (所) (人口10万人当り) (大)	4.35 60.2 1	3.34 名古屋市 4.35 60.2
	偏差値 平 均 偏差値 順 位 偏差値 合 計	50.07 7 550.8	

名古屋市① 上段：実数 中段：偏差値 下段：順位  
 平均値② 上段：平均実数  
 第1位③ 上段：都市名 中段：実数 下段：偏差値

(注) 各指標の右下の略号は、データの出所を示している。  
 (大)・・・『大都市比較統計』(1992年版)  
 (老)・・・『老人福祉事業調査表』(1994年4月)  
 (都)・・・『都市データパック』(1994年)  
 (日)・・・『日本アルマナック』(1993年)  
 なお、略号のないものは、本文のなかで明らかにしている。

表4 都市評価

指 標	名古屋市 ①	平 均 値 ②	第 1 位 ③
都市への誇り (「はい」の比率)	67.8 41.4 9	77.6	札幌市 94.2 64.6
都市への愛着 (「はい」の比率)	86.2 46.9 6	88.1	神戸市 95.8 62.8
都市に住む喜び (「はい」の比率)	60.1 41.3 9	70.9	札幌市 90.0 65.4
偏差値 平 均 偏差値 順 位 偏差値 合 計	43.20 9 129.6		

名古屋市① 上段：実数 中段：偏差値 下段：順位  
 平均値② 上段：平均実数  
 第1位③ 上段：都市名 中段：実数 下段：偏差値

(注) 各指標の右下の略号は、データの出所を示している。  
 (大)・・・『大都市比較統計』(1992年版)  
 (老)・・・『老人福祉事業調査表』(1994年4月)  
 (都)・・・『都市データパック』(1994年)  
 (日)・・・『日本アルマナック』(1993年)  
 なお、略号のないものは、本文のなかで明らかにしている。

表2 「生活の質」次元の社会指標

指	標	名古屋 市①	平均 値②	第1位 ③	
社会福祉	保育所数 (人口10万人当り)	(所)	12.5	京都市	
		(大)	53.2	18.0	
	保育所運営費 (児童1人当り月額)	(万円)	8.4	9.1	川崎市
		(大)	45.6	12.7	71.2
	生活保護実人員 (人口10万人当り)	(人)	648.0	1145.5	千葉市
		(大)	58.6	451.4	72.6
	母子寮定員 (母子世帯1万当り)	(世帯)	61.7	74.8	神戸市
		(大)	46.3	165.9	76.0
	精神薄弱者養護施設定員数 (当該人口1万人当り)	(人)	190.9	181.2	仙台市
		(大)	51.8	281.0	68.5
	身体障害者養護施設定員数 (当該人口1万人当り)	(人)	126.0	98.0	仙台市
		(大)	55.0	230.1	73.4
常勤ホームヘルパー数 (高齢者人口10万人当り)	(人)	44.6	76.6	大阪市	
	(老)	44.3	241.3	79.2	
ショートステイベッド数 (寝たきり老人千人当り)	(人)	251.9	655.3	仙台市	
	(老)	42.8	2,275.1	79.0	
デイケアセンター数 (当該人口10万人当り)	(人)	13.9	11.8	広島市	
	(老)	56.9	20.8	79.6	
特別養護老人ホームベット数 (寝たきり老人千人当り)	(人)	412.5	566.8	札幌市	
	(老)	45.3	1,476.7	77.6	
老人保健施設定員数 (寝たきり老人千人当り)	(人)	190.4	207.2	福岡市	
	(老)	49.1	628.7	73.2	
偏差値	平均	49.90			
	順位	6			
	合計	548.9			

名古屋① 上段：実数 中段：偏差値 下段：順位  
 平均② 上段：平均実数  
 第1位③ 上段：都市名 中段：実数 下段：偏差値

(注) 各指標の右下の略号は、データの出所を示している。  
 (大)・・・『大都市比較統計』(1992年版)  
 (老)・・・『老人福祉事業調査表』(1994年4月)  
 (都)・・・『都市データバック』(1994年)  
 (日)・・・『日本アルマナック』(1993年)  
 なお、略号のないものは、本文のなかで明らかにしている。

指	標	名古屋 市①	平均 値②	第1位 ③	
快	D I D人口密度(人/Km <sup>2</sup> )		7,880	北九州市	
		(大)	54.6	8,839.9	5,956
	公共空地率	(%)	19.7	10.9	大阪市
		(大)	65.0	21.2	63.8
	非木造率	(%)	67.4	60.8	大阪市
		(大)	59.7	74.2	67.5
	住宅老朽化率	(%)	57.0	53.8	札幌市
		(大)	45.3	39.1	71.3
	土地区画整理率 (市街化区域面積当り)	(%)	0.40	0.2	名古屋市
		(大)	75.9	0.40	75.9
	都市公園面積 (1人当り m <sup>2</sup> )	(老)	6.13	6.20	神戸市
		(大)	49.8	14.85	76.6
地下街率 (市街化区域面積当り)	(%)	5.68	2.4	名古屋市	
	(大)	67.5	5.68	67.5	
公営地下鉄エスカレーター設置率	(%)	93.2	85.0	京都市	
	(大)	53.3	100.0	56.0	
公営地下鉄エレベーター設置率	(%)	24.3	46.0	仙台、神戸	
	(大)	44.2	100.0	64.5	
交通事故死者数 (人口10万人当り)	(人)	6.8	6.3	東京都港区	
	(大)	45.8	4.0	69.1	
少年犯罪検挙率 (人口10万人当り)	(人)	154.1	155.4	札幌市	
	(大)	50.2	103.9	60.3	
刑犯検挙率 (人口1万人当り)	(人)	93.9	69.2	横浜市	
	(大)	36.3	43.7	64.1	
出火率 (人口1万人当り)	(人)	5.9	4.4	京都市	
	(大)	37.7	2.2	68.5	
ごみ収集量 (人口100人当り)	(t)	43.7	50.6	広島市	
	(大)	56.3	35.9	63.3	
公共下水道普及率	(%)	92.7	89.2	大阪市	
	(大)	53.2	99.9	59.6	
偏差値	平均	52.98			
	順位	2			
	合計	794.6			

指	標	名古屋 市①	平均 値②	第1位 ③
住	持家率	(%)	44.9	横浜市
		(都)	48.2	53.9
宅	1人当り平均延べ床面積	(m <sup>2</sup> )	76.5	名古屋市
		(都)	61.7	76.5
経	1人当り所得	(10万円)	36.8	大阪市
		(大)	52.9	47.3
個人預貯金残高	(10万円)	38.6	35.0	東京都港区
	(日)	53.1	55.7	72.3
1人当り購買額	(10万円)	13.1	11.7	大阪市
	(日)	55.7	17.8	75.3
消費者物価指数 (東京=100)	(大)	91.5	92.7	北九州市
	(大)	53.8	88.4	63.9
女性パートタイマー数 (当該人口千人当り)	(人)	53.9	46.4	名古屋市
	(日)	65.9	53.9	65.9
労働者有効求人倍率	(%)	1.66	0.9	名古屋市
	(大)	76.7	1.66	76.7
専門学校数 (15~24歳人口10万人当り)	(人)	56.7	38.8	名古屋市
	(大)	63.8	56.7	63.8
短期大学・大学数 (15~24歳人口10万人当り)	(人)	5.3	3.9	広島、北九
	(大)	60.6	5.4	61.4
偏差値	平均	59.25		
	順位	1		
	合計	592.5		
「生活の質」次元全体の				
偏差値	平均	53.78		
	順位	1		
	合計	1,936.0		

表3 「人生の質」次元の社会指標

	指 標	名古屋市 ①	平均値 ②	第1位 ③
交 流 ・ 社 交	昼間人口指標 (大)	117.4 54.7 3	109.8	大阪市 146.0 72.4
	女性役員比率	4.32 58.3 2	3.7	東京都区部 5.74 76.1
	女性参加率(審議会等)	20.8 65.0 2	16.4	北九州市 21.2 66.4
交 流 ・ 社 交	登録外国人総数 (人口千人当り) (大)	19.8 51.2 5	18.31	大阪市 47.5 74.6
	交際費 (万円) (家計調査) (大)	2.84 46.2 9	3.0	仙台市 3.99 75.4
	余暇活動時間 (分) (大)	358 53.2 7	351.2	札幌市 378 62.7
文 化 環 境	図書館総数 (人口10万人当り) (大)	0.74 44.3 10	1.0	東京都区部 2.39 78.7
	司書数 (人口10万人当り) (日)	4.0 49.5 5	4.1	東京都区部 8.5 72.1
	博物館数 (人口10万人当り) (大)	1.43 50.9 5	1.37	京都市 3.43 79.2
文 化 環 境	学芸員数 (人口10万人当り) (日)	1.29 53.9 3	1.1	東京都区部 2.15 75.4
	公民館数 (人口10万人当り) (日)	6.4 47.5 6	7.6	広島市 15.6 67.1
	映画館数 (人口10万人当り) (大)	2.2 51.2 8	2.1	大阪市 3.3 67.8
人 生 の 意 味	未成年男性自殺率 (20歳未満男性10万人当り)	2.49 37.9 11	1.4	広島市 0.00 66.6
	未成年女性自殺率 (20歳未満女性10万人当り)	0.38 57.0 4	1.0	広島市 0.00 61.3
	成年男性自殺率 (60歳未満男性10万人当り)	21.45 57.0 2	25.1	広島市 20.08 59.7
	成年女性自殺率 (60歳未満女性10万人当り)	9.65 48.8 9	9.4	横浜市 6.31 63.1
人 生 の 意 味	高齢者男性自殺率 (60歳以上男性10万人当り)	39.38 51.6 8	40.2	仙台市 32.13 65.6
	高齢者女性自殺率 (60歳以上女性10万人当り)	20.87 46.9 8	19.9	仙台市 14.58 67.6
	偏差値 平均 順位	51.41 3		
	偏差値 合計	925.3		

名古屋市① 上段：実数 中段：偏差値 下段：順位  
 平均値② 上段：平均実数  
 第1位③ 上段：都市名 中段：実数 下段：偏差値

(注) 各指標の右下の略号は、データの出所を示している。  
 (大)・・・『大都市比較統計』(1992年版)  
 (老)・・・『老人福祉事業調査表』(1994年4月)  
 (都)・・・『都市データブック』(1994年)  
 (日)・・・『日本アルマナック』(1993年)  
 なお、略号のないものは、本文のなかで明らかにしている。

# 名古屋の都市イメージ形成史

(株)都市研究所スペースア 井沢知旦

## 1. なぜ、外からの都市イメージが重要なのか

国には国のイメージがある。都市には都市のイメージがある。街には街のイメージがある。札幌と言えば「雪のまち」、仙台と言えば「杜の都」、横浜・神戸は「港町」、京都は「千年の古都」、大阪は「食い倒れ」と「お笑い」など、象徴的で魅力のある自然・景観・歴史・文化の冠がついている。しかし、名古屋市は三大都市圏のひとつである名古屋圏の中核都市でありながら、今なお明確な都市イメージを持ち合わせていない。

### (1) 外からの都市イメージの重要性

都市のイメージには内からのイメージと外からのイメージの両面があるが、ここでは外からの都市イメージを取り上げる。それは次の理由による。

第一に、都市の豊かさを計る総合的な指標はその都市の居住人口の多寡であったり、通勤・通学で流入する人口の多寡を取り上げることが多かった。都市の総合計画もそれらの人口を基礎にしている。しかし、明治以降増加の一途をたどってきた日本の人口も2010年前後を境にして減少に転じるとの予測が出され、それに伴い労働力人口もそれより早く減少することになる。そのために、従来の居住人口や通勤・通学人口の増加だけでなく、買い物や観光・レジャーなどで来訪する交流人口の増加によって、これからの都市の活力を維持・発展させていくことが課題となる。し

かし、それは日本のどの都市も同条件であることから、都市間競争の時代になる。都市間競争が激化すればするほど、都市の持つイメージが吸引力を左右することになる。

第二に、その都市の居住者にとっても外からの都市イメージは重要である。確かに居住者にとっては住み、働く、憩うといった日常的生活機能が充実していれば、外からの都市イメージがどうであれ、問題はない。しかし、外からの都市イメージが良いほど、自身の住む都市に関心と矜持を持つようになり、更により都市を作っていこうとする推進力になる。外からのイメージは地域の物差しではなく、いわば日本の物差し、世界の物差しで評価されることを意味する。また、都市のイメージに惹かれて外から来訪する場所は居住者にとっても魅力ある場所になっていくことが都市イメージの間接的効果としてある。来訪者は非日常時間や空間を楽しむために来訪するが、居住者にとっても非日常時間や空間は、自由時間が増加すればするほど重要性を増す。都市の居住者だけの需要を想定した時空間よりも、来訪需要を加味したそのほうが、双方にとって魅力ある時空間となるからである。



井沢知旦(いざわ ともかず)

1952年 大阪府生まれ  
1976年 名古屋工業大学建築学科卒業  
1978年 名古屋工業大学大学院工学研究科修士課程修了  
1978年 社地域問題研究所入所  
1990年 (株)都市研究所スペースア設立

## (2) 都市イメージ形成の戦略の必要性

都市は多面的な顔を持ち、一つの都市イメージに収斂させることは時間がかかる。都市イメージを形成することは、イメージ以外の持っている都市の顔を捨象することにもなる。えてして部分を切り取り、それを拡大強調したイメージが形成されることが多い。すなわち、ある意味ではイメージは都市の抽象の極致であるとともに、ある意味では虚像であるともいえる。そして都市イメージが定着するのに時間がかかるのと同時に、一旦貼られたイメージのレッテルを剥がすのも時間がかかる。イメージ定着以降すべてがステレオタイプ（紋切り型）で見られることになる。

よって、今回、都市イメージの向上をめざすためには、このようなイメージ形成の特性を踏まえた戦略を持つ必要がある。

## 2. 外からの都市イメージを考える いくつかの視点

### (1) 都市イメージ形成の媒介

外からの都市のイメージは何を媒介に形成されるのであろうか。この回答のしっかりとした資料はないが、(財)関西産業活性化センターの調査<sup>\*1</sup>によれば、第1位が「テレビ」の70%であり、第2位は「新聞」の40%強、第3位は「雑誌」の30%弱と続く。このように都市情報はマスメディアによって提供され、都市イメージが形成されていく。とすると、マスメディアはどのような視点でニュースとして、記事として都市を取り上げるのであろうか。いずれにせよ音映像であるだけに、視聴者へのインパクトは大きい。

### (2) 内外のイメージギャップ

内外の都市イメージのギャップが大きい都市と小さい都市とがある。ここに東京・大阪・名古屋の居住者（主婦と夫）の、自身の居住地（マチ）のイメージと他都市のイメージを比較した調査<sup>\*2</sup>がある。これによれば、東京の

マチのイメージは三都市ともおおむね一致している。つまり内外のイメージが一致していることになる。大阪のマチのイメージも一部（大阪人が思うほど他都市の人々は庶民的、人情的とは思っていない）を除いてほぼ一致している。しかし、名古屋のマチのイメージは他の二都市とは逆に内外のイメージは一部（お城、地味、歴史）を除いて一致していない。これは名古屋からの情報が発信されず、あるいはうまく受信されず、断片情報でイメージ形成されていることに他ならない。調査方法は異なるが、政令指定都市10都市の都市イメージアンケートを実施した結果<sup>\*3</sup>を見ると、京都市と横浜市以外の8都市では基本的にイメージは一致していない。名古屋市では特に「暮らしやすい街」「働きやすい街」の評価のギャップが大きい。

### (3) 実体とイメージのギャップ

実体（定量評価）とイメージ評価のギャップの違いもテーマとなる。(財)関西産業活性化センターの調査<sup>\*1</sup>によれば、7大都市圏のなかで、札幌都市圏と東京都市圏は実体よりもイメージの評価が高いのに対し、名古屋都市圏と広島都市圏は実体よりもイメージの方が悪い。北部九州都市圏と仙台都市圏の実体とイメージはバランスがとれており、京阪神都市圏は総合・好感度評価のギャップが大きい。「女性にやさしい都市番付（県庁所在都市）<sup>\*4</sup>」で実力（定量評価）と人気（イメージアンケート調査）のギャップを見ると、名古屋市は実力では16位で上位にあるが人気は49位と最下位である。それに対し、横浜市と福岡市は人気は上位に位置するものの、実力は44、45位であり、名古屋市と逆の意味でギャップが大きい。このようにみると、実体よりもイメージを通してその都市が評価されることがわかる。

### 3. 大都市のイメージ形成比較

そこで外からの都市イメージが都市別によつてどのように形成されていったかについて検討を行った。

大宅壯一文庫に所蔵されている、明治時代から現在までの雑誌（月刊誌・週刊誌等）に掲載された記事タイトルを雑誌記事索引総目録から取り上げ、年代別に整理しながら、タイトル内容分析を試みた。なお、名古屋市についてはタイトルだけでなく、記事そのものも収集した。比較調査した都市は札幌、仙台、川崎、横浜、名古屋、神戸、広島、福岡の8政令指定都市であり、東京と大阪、京都は記事件数が膨大であるため\*5、北九州市・千葉市は作業を簡便にするため、除外した（なお、件数のみは1988年まで比較している）。

時代によって発行される雑誌数は変化するが、ここでは把握していない。どの都市も比較するにおいては、掲載される機会が均等であると判断したためである。

#### (1) 11大都市比較（都市別記事件数比較）

東京・大阪・京都を含めた11都市の記事件数を比較すると、1900年代から1980年代までの合計では圧倒的に東京が多く、5,374件に達する。次いで大阪の876件、京都の580件と続

11大都市別記事件数比較

年代	東京	大阪	京都	札幌	仙台	川崎	横浜	名古屋	神戸	広島	福岡
1900	27	7	12	1	1	0	4	1	3	0	0
1910	68	21	10	0	0	0	5	10	1	0	0
1920	118	30	11	0	0	0	2	0	1	0	0
1930	140	51	12	2	2	3	4	4	3	0	1
1940	44	19	4	2	2	0	6	2	3	1	0
1950	504	142	59	9	5	6	27	13	21	11	10
1960	529	123	73	8	6	2	23	14	20	1	5
1970	1,919	273	314	44	16	25	113	38	100	10	55
1980	2,025	210	85	91	55	35	191	93	126	17	42
合計	5,374	876	580	157	87	71	375	175	278	40	113
1980	288	24	28	13	1	4	15	10	14	6	6
1981	145	20	11	3	4	0	9	9	14	2	3
1982	137	20	14	10	4	2	12	7	8	0	0
1983	139	19	5	4	0	1	13	5	8	0	0
1984	119	13	5	7	0	1	12	7	10	0	2
1985	305	41	11	15	2	0	19	8	15	0	7
1986	298	22	11	14	4	5	26	8	9	4	3
1987	511	48		11	30	5	41	30	29	2	6
1988	83	3		14	10	17	44	9	19	3	15

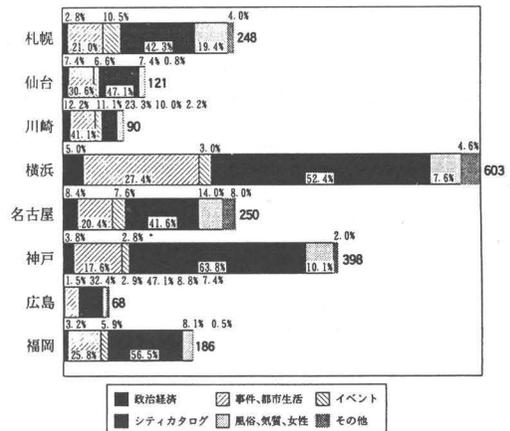
く。今回分析対象とした8都市の中では横浜がもっとも多く375件であり、次いで神戸の278件、名古屋の175件と続く。

東京・大阪・京都は江戸時代から三都と呼ばれ、他都市とは別格扱いされてきた。東京＝首都、大阪＝台所、京都＝朝廷という役割分担の中で、今日においては、東京が世界の大都市に組み込まれ、大阪は日本の二眼レフの一眼として役割を担おうとしており、京都は日本の歳時記に関わる行事が行われて海外からの賓客の来訪も多いため、依然として記事件数が多くなっている。横浜や神戸は大都市東京や大阪のベッドタウン的性格を持ちつつ、「港」という資源を生かしながら、独自の都市戦略を展開している（これについては後述）。唯一、名古屋が独立した都市として上位にでてきている。

#### (2) 華麗なる変身の横浜・神戸

両都市のイメージはいずれも港から出発し、港に終始している。「港」という最大の資源を活かし切っている。戦前から昭和30年代まで「港＝悪の巣窟」という危険なイメージが形成されると同時に、世界への窓口として「港＝異国情緒あふれるスポット」が同居してきた。前者のイメージを消しながら、後者のイメージを膨らませる手法がとられた。

8大都市記事件数と内容の構成比



横浜は馬車道やイセザキモールなどの商店街等の都心を重点的に再生を図り、点・線・面へと拡大していく手法である。その総仕上げはMM21であり、横浜ベイブリッジである。

神戸はいきなり沖合に大規模な人工島を整備し、海上文化都市のシンボルを整備し、内陸では観光スポットを集積させながら、さらに食まで取り込んで、都市をマーケティングし、独自の都市経営手法でイメージアップを図っていった。

両者は同じ港町の都市比較として取り上げられることが多い。情報発信によるイメージ形成はその都市を利用する需要量に比例する。横浜は首都圏の、神戸は関西圏の需要量が背景にある。

### (3) 独自展開する札幌・福岡

札幌も福岡も横浜・神戸のような大きな背後圏を有せず、むしろ独自の圏域を持ちながら、その地理的条件を最大限生かした施策の展開によるイメージ形成がなされている。

札幌は一般日本人の非日常部分がイメージ形成に寄与している。雪まつり、スキー、涼しい夏、広大な平野といった観光の目玉、札幌単身赴任層の札チオン族、独自の食文化がそれらである。そして、北方圏交流といった独自の国際化路線を展開している。

福岡も日本の南にある拠点都市として、地下鉄を持ち、球団を持ち、自己完結的な機能をワンセット有しながら、独自の屋台文化、祭り文化、アジアに視点を置いた国際交流を展開している。大きな地元資本はないため、外からうまく資本を導入している例であろう。

### (4) 外から名古屋イメージは不変

基本的に名古屋の都市イメージは不変である。「偉大なる田舎」「金鯱」「ケチとお値打ち」「実利と合理」「排他主義と自己完結性」といった形容詞は戦前から変わりなく使われてい

た。もちろん伝統的な食文化（味噌、きしめん、にわとり……）も変わらない。

唯一変化したのは、明治から戦後の高度経済成長以前までは「名古屋美人」\*6といわれたが、都市の工業化とともに「三大不美人の産地」へと変身したことである。しかし、今日では「三大不美人の産地」とも言われなくなってきている。今日の若者は「名古屋美人」も知らなければ、「三大不美人の産地」も知らない。

戦災復興事業は理想都市（名古屋）の象徴だった。マスコミがこぞって名古屋を取り上げたのは、そこに理想都市のイメージを描いたからに他ならない\*7。しかし、都市という舞台が完成に近づいても、そこで演ずるテーマが見いだせなかった。昭和35年に当時の小林市長が「東海製鉄+バスターミナル+日本のディズニーランド」を東洋一のプロジェクトとして遂行しようとしたが\*8、大都市の持つ機能—中枢管理機能、生産機能、商業機能、娯楽、交通ターミナル機能のうち、結局、娯楽機能は実現できなかった。昭和50年代は、神戸や横浜がイメージ転換に成功した反面、名古屋はそれを模索したものの、これといったテーマが見つかっていない。むしろタモリの名古屋イビリやオリンピック誘致失敗等が重なり、昭和50年代後半の名古屋バッシングの恰好の材料となった\*9。そして、ようやく「デザイン博」の開催に新たな道を見だし、成功裏にイベントが終わることによって、名古屋の都市イメージに変化をもたらした\*10。

## 4. 都市イメージの向上へ

### (1) なぜ名古屋のイメージが悪いのか

名古屋の街は名古屋城の築城（1610）と清洲越しにより形成され、江戸時代は江戸・大坂・京都の三都に次ぐ都市として、また御三家の筆頭として存在は大きかった。明治に入り、近代工業化はスロースタートであったが、

繊維・木材から車両・自動車・兵器へと着実に工業化を進め、大正から昭和初期にかけて一大工業地帯を形成した。<sup>\*11</sup>

しかし、第二次大戦で市の中心部から南部の工業地帯にかけて被災し、また伊勢湾台風で市南部が罹災するなど、歴史や文化の蓄積がある名古屋も、その姿形は一度消去された。そこで、戦災復興事業によって街は再編成され、“理想郷”づくりが進められていく。名古屋市は高度経済成長の波に乗って三大都市圏の一つの中核的都市として無視し得ない存在感を外にPRすることになる。また、愛知県は工業出荷額で日本のトップを維持し、その中核的都市であることから、名古屋市南部地区の工業集積とも相まって、工業都市的イメージは依然存在する。

### ①二重のイメージギャップ／大都会と大田舎・ハレとケ

名古屋の取り上げられ方は、「東西の大都市の狭間で影が薄く埋没しがちな都市」であり、「偉大なる田舎町」である。この言葉の裏には名古屋は都会と田舎が共存した無視し得ない大都市であることを意味している。「金鯨」と「味噌」、「冠婚」と「吝嗇」<sup>りんしやく</sup>、「モンロー主義」と「非プライバシー」など、地方都市ならどこでもある田舎的テーマが二百万大都市の持つべき都会性とのギャップが大きいゆえに、おもしろおかしく描かれる。五十万都市なら無視されるか、もっと暖かく扱われるに違いない。

しかもこれら田舎的テーマのハレとケのギャップも大きい。市民のシンボルとして名古屋城の金鯨が燦然と輝く派手さと日常の食文化に味噌文化が入り込む地味さの対比、日常では堅実でケチでお値打ちを求める市民も、冠婚葬祭というハレの場では金をかける対比。

都会性と田舎性、田舎性のハレとケの二重の意味でのギャップの大きさが、ダサイ大都市＝偉大なる田舎となるのである。

### ②生産と消費

福岡・札幌は九州・北海道の中核拠点都市であると同時に支店経済都市でもある。神戸・横浜は二大都市圏内都市であり、背後に膨大な消費人口を抱える。これらいずれも消費にスポットを当てたマスメディアの取り上げられ方がなされている。名古屋はどちらかというと今日でも工業的色彩の強い都市のイメージであり、派手な消費がイメージされる都市ではない。生産そのものは技術関係者ならいざしらず、一般の人々にとってニュースバリューが小さい。さらに、消費によって支えられる文化も名古屋では昔は茶華道や小唄・おどり、戦後は様々な稽古事、さらにパチンコなど、どちらかといえば内輪的な「個室文化」である。このように、名古屋は依然として「工業＝生産的都市」のイメージで捉えられ、それを打破する消費＝文化がイメージされない。名古屋の「ものを作って貯め込むばかり」のイメージこそ、世界から見た日本であり、日本バッシングの元凶である。

### ③「つくる」と「なる」

“理想郷”と称えられた戦災復興も、「生産」からの脱皮を図る「デザイン」も、東京の美意識とはかけ離れたものであるとの指摘がある<sup>\*12</sup>。つまり、もともと名古屋はデザイン都市であり、一つは都市をデザインし、もう一つは機械をデザインしてきた。名古屋の美意識は「つくる」ことにある。しかし、江戸東京的な美意識は「なる」におかれ、この視点から見れば、「つくる」は人工的で、野暮なイメージとなるようである。まして「つくりすぎ」になれば、一層イメージは悪くなる。金鯨や仏壇、徹底した戦災復興事業は「つくりすぎ」<過剰装飾>として映るらしい。「つくる」の対極にある東京の美意識「なる」も悪い方向に行けば「なりゆき」にまかせることになるが、「野暮」に対比される「いき」の精神構造によって対処することになる。「『いき』

の精神主義的な遊び心も、生産的で常識的な『つくる』人を“野暮”として排斥した<sup>\*12</sup>とする東京の評価基準で名古屋を見ることになる。

いずれにせよ、「つくる」ことは大消費地東京から見れば野暮であり、また前述したように「つくる」よりも「消費」が注目されるのである。

## (2) いかに名古屋の都市イメージを向上させるのか

百年・二百年という長期のスパンで培われた名古屋人気質、それを反映した都市イメージを一朝一夕で変えていくことは難しい。ダサさ・野暮さ加減も東京の尺度であり、物差しが変われば評価も変わる。東京から見れば異端でも世界から見れば本流かもしれない。が、今のままで良いというわけでもない。

### ①生産都市から消費都市へ

「消費」は強力な情報発信力を持つ。消費こそ文化を育てる。消費こそ美人を育てる。ここでいう「消費」は「金の消費」だけではない。「時間の消費」「知恵の消費」を含めて考えている。いずれも貯め込むだけでは嫌われる。気前良くお金と時間と知恵を吐き出させる使い方を追求すべきであろう。ただ、「結婚」のように個人や身内だけで使い合うのは、「消費」だけに注目はされるが、田舎的であって都会的ではない。金と時間と知恵を消費する「都市のハレの場づくり」と「物語づくり」が求められている。それらの新しい使い方は都市のイメージアップに多大に貢献することになろう。

では具体的に「都市のハレの場づくり」とは何か。名古屋圏で裾野の広がりを持ち、名古屋市でその頂点を演出するテーマが必要であり、かつ他都市の追随を許さないものがふさわしい。さらに海外から注目されるものが望まれる。おそらくそれは、第一に四百年の歴史を演出すること、第二に名古屋文化・消

費を演出することである。

### ②都市のオープン化

内に秘めたるパワーは、今日の高度情報化社会においては、不気味に映る。情報交流はギブ&テイクであり、ギブのないところではテイクもなく、たこ壺化する。今日求められるのは、いかに都市を見せるかである。観光都市はそれを強調している。

例えば、「つくる」だけでは野暮だが、「つくる」に「みせる」を加えると、「ニューファクトリー」あるいは「ファクトリーテーマパーク」となり、流行の先端を行く。

ふつう観光は「非日常」を「みせる」ものである。しかし、今日では「日常」を「みせる」ことによって観光化する事例も出ている（もちろんそれは主ではなく、準なのだが）。

都市をオープン化すると、新しい文化が入り込む。すると既存の文化との摩擦を生じる。しかし、摩擦こそ都市の発展力となり、創造力となる。マスコミにとって、この摩擦こそ情報発信源なのであり、新しい都市イメージを形成する要因となる。そんな摩擦を受け入れられる度量が名古屋に求められる。

### ③ストーリーのある街づくり

知人が来名した折りに、名古屋市内のどこに案内するのかは今も昔も変わらぬ悩みのようである。女子大生にアンケートをとると<sup>\*13</sup>、東部の東山公園、南部の名古屋港、中心の都心、北部の名古屋城の順になる。東山公園は、動植物園あり、遊園地あり、スカイタワーありで、「一粒で三度おいしい」お値打ちの遊び場との評価である。こうみると西部の拠点が無い。市内に限定すれば庄内川の利用が望まれる。

さて、課題はこれらの集客拠点をいかに結んでいくかである。ここにストーリーが求められるのである。ストーリーが何百と描けるだけのストックを蓄積していく街づくりを展

開していかねばならない。何の脈絡もなく都市を見せるよりも、ストーリーとして都市を見せたほうが遙かに印象に残る。印象が良ければ良いほどその都市のイメージは良くなっていくであろう。

## 5. おわりに

以上見てきたように、雑誌等による名古屋のイメージは、根本的には変化していない。それは、情報を取り上げるマスメディアが主として東京にあり、いつも同じ切り口でしか名古屋を扱わない。他方、名古屋もイメージ向上のための積極的手だてを取って講じていない。この組み合わせが今日の名古屋イメージを形成しているのである。

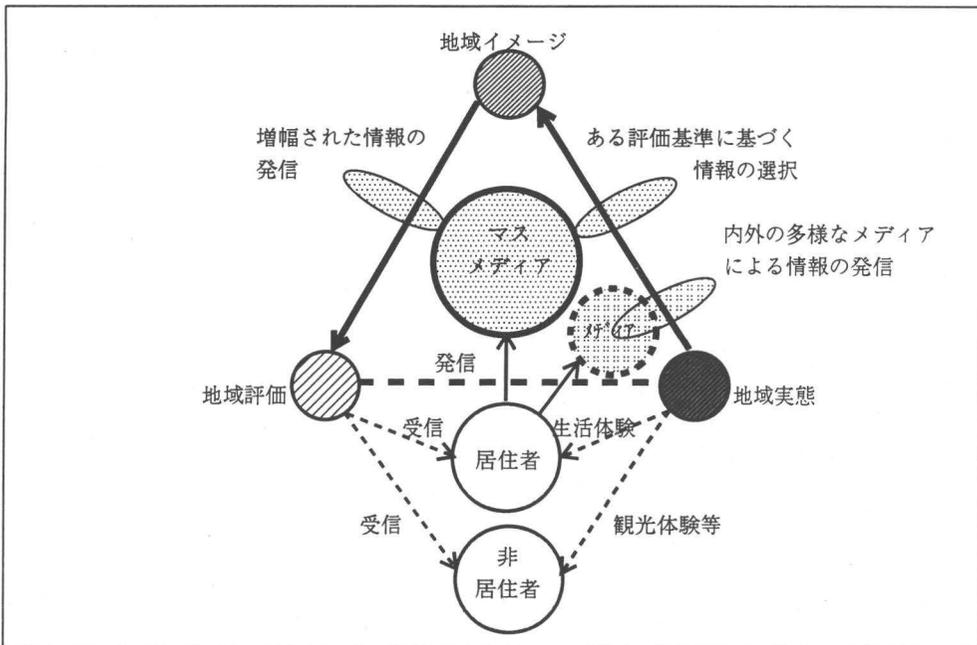
この閉塞状態においてとるべき道は、一つ

に東京（マスメディア）の評価基準に合う情報を発信することである。もう一つは東京（マスメディア）に迎合するのではなく、多様なメディアを使って国内外へ直接に情報発信することである。

前者の道は、よほどのことがない限り、東京の紋切り型評価を替え得ないのではないか。

後者の道は、例えばインターネットの活用（マスメディアではない）、市民レベルの国際交流の促進、観光産業の育成、NPOのネットワークなど、多様なメディアを活用していくことである。その結果、グローバルな評価基準により評価され（つまり単一な評価基準ではなく）、それを東京がキャッチして名古屋の評価を見直す道である。時間はかかるがこの閉塞を打破する効果的な道ではないかと思われる。

イメージ形成の構造と戦略組立



石見利勝・田中美子「地域イメージとまちづくり」P 5 技法堂出版1992.12を骨格に名古屋バージョンを作成

イメージアップ都市比較年表

	札幌	横浜	神戸	福岡	名古屋
戦前	<p>開拓?イメージ薄い</p> <p>31 インテルとアチナルの街</p>	<p>ミナトとハマ</p> <p>02 横浜開港の濠船</p> <p>29 横浜名物フナ屋盛衰記</p> <p>32 ハマの小抽斗</p>	<p>暗部としての港</p> <p>98 兵庫開港顔末の一斑</p> <p>14 市財政の窮状</p> <p>30 神戸の暗黒街ボン引物語</p>		<p>歴史ある名古屋の風格</p> <p>14 疑問の名古屋経済界</p> <p>17 名古屋財界の近情</p> <p>31 美人と城の都素描 詩の町を語る</p> <p>39 名古屋の軍需工場街を行く</p>
戦20年	<p>札幌十八番の出揃い</p> <p>52 雪まつり</p> <p>53 異国情緒のある街</p> <p>54 ラーメンの街</p>	<p>戦後の引きずり</p> <p>48 港湾労働者の生態</p> <p>49 港ヨコハマの断面</p> <p>52 アメリカの町ヨコハマ</p> <p>53 真空の町ー横浜</p> <p>54 横浜開国百年祭</p>	<p>戦後の混沌と萌芽</p> <p>48 分解しゆく村ー神戸市の村から</p> <p>49 麻薬のミナト・神戸</p> <p>53 在日華僑人の生活</p> <p>54 唄のない街</p>		<p>偉大なる田舎への出発</p> <p>48 金の鯨の失くなった名古屋</p> <p>54 名古屋 偉大なる田舎の町</p>
戦30年	<p>支店経済圏の確立</p> <p>59 札幌時計台守</p> <p>60 札幌族</p> <p>64 雪と土と星の街</p>	<p>混沌のヨコハマ</p> <p>55 エタイ知れぬ世界横浜</p> <p>59 復興忘れた「斜陽都市」</p> <p>60 キンチカなムードを売るハマ</p> <p>62 汚い、キタなミナト・ヨコハマ</p> <p>62 国際都市横浜の妖しい素顔</p> <p>63 モーショングラフィックの混血都市</p> <p>64 真夜中の無国籍タウン</p>	<p>妖しさ残す神戸</p> <p>56 混血の街+57棄てられた混血児 神戸</p> <p>56 国際都市ミナトコウベ</p> <p>58 ミナト神戸の売春</p> <p>59 細長く「中心」のない町</p> <p>61 海と山へのびる神戸</p> <p>61 麻薬基地神戸</p> <p>62 国際都市横浜の妖しい素顔</p> <p>62 陽気な六甲ホーイット族の生態</p> <p>63 ロマンズ六甲の山と川と</p>	<p>無名の時代1</p> <p>56 燃える南国情緒+生きている博多情緒</p> <p>57 博多の水上バラック</p> <p>61 福岡大学日本一の体育館</p>	<p>戦災復興で変わる名古屋</p> <p>55 金づくり地方気質</p> <p>55 名古屋のテレビ塔</p> <p>56 キャパ和と中京美人 情熱の街をゆく</p> <p>57 日本一の理想都市 結核の夢の街</p> <p>59 戦災に耐えた名古屋被災地(伊勢湾)</p> <p>60 東洋一の先陣争いにわく名古屋 デイズ・コート、バスターミナル。東海製鉄</p> <p>61 日本一の名古屋地下街</p> <p>63 尾張名古屋は港でもっ?</p>
戦40年	<p>オリンピックと全国区</p> <p>65 札幌7人の体質</p> <p>69 冬季オリンピック</p> <p>72 冬季オリンピックと雪まつり</p> <p>72 札幌文化のモノとカク</p> <p>73 誇り高き札幌メッセ</p>	<p>イメージチェンジ途上</p> <p>66 なぜ、みんな横浜に行きたがる?</p> <p>67 公害追放のモデル産業都市</p> <p>68 窓を開ければ港が見える、200万人都市の栄光と屈辱</p> <p>69 プレート・ヨコハマヒット</p> <p>73 ナイトスポット、旅、ヤングスポット、元町</p>	<p>風見鶏と人工島でイメージアップ</p> <p>67 日本開港と開港百年を迎えた神戸</p> <p>68 新しい日本の旗ミナト神戸で掲げよう</p> <p>ポートアイランド「人工島」</p> <p>69 新しい文化と流れる誇り高き神戸の顔</p> <p>69 万博会場よりも大きい噴水を建てて79歳市長</p> <p>71 開発プロジェクトに取り組む神戸</p> <p>72 実現するか三割緑地</p> <p>73 街角にあふれる異国情緒</p> <p>73 若者も中年もとけこめる町</p> <p>73 革新に乗り上げた神戸市長の出現</p> <p>74 さあ神戸を盛り上げよう 神戸のファッションモデル発表</p> <p>74 異人館の見える町</p>	<p>博多っ子とフォーク</p> <p>73 博多っ子</p> <p>74 博多へ フォーク喫茶への旅</p>	<p>復興の完成・工業都市成長へ</p> <p>65 名古屋はケチというけれど</p> <p>67 都市計画モデル地区の20年</p> <p>67 甲子園がスゴい入る名古屋の地下街</p> <p>68 都市計画と街園地がシンクロした街</p> <p>69 市民の発想で出現した20年後の街づくり 泉</p> <p>72 名古屋いまいちばん燃えている街</p> <p>73 結核を退き市長ぐらいは革新のほうが</p>

<p>昭和50年代</p> <p>76 ススキノと冬枯れ</p> <p>77 食べ歩き10件集中</p> <p>78〜80 雪まつり、サ、ススキ、開帳</p> <p>80 地下街/繁華、名屋、札幌、開帳</p> <p>80 札幌と那覇大比較</p> <p>80 三軒茶屋/札幌・開帳・コミュニケーションを主軸</p> <p>80 消費市場のフロンティア・東京の縮図・テスト市場</p> <p>84 札幌・クリミア・産産・いざやら電話日本一</p>	<p>北の大都市へ飛躍</p>	<p>トレンディーな都市への変身</p> <p>75 ドヤ街寿町+沈みゆく革新都市</p> <p>75 港ヨコハマ、伊勢佐木町見ると、遊ぶ、遊ぶ</p> <p>77 全調査横浜中華街</p> <p>77 騒動にもどるプロトタイプがどきどき 外人墓地</p> <p>78 馬車道浜っ子の食い倒れ</p> <p>ハマのサキ通り 7億円かけて復活</p> <p>81 ヲフロード81 騒動通りから山手・横浜へ</p> <p>81 「なんなくクリスタル」に登場の人氣アティック</p> <p>82 過密ヨコハマ大改造計画</p> <p>84 あの日常アクションの名舞台 山下町がどきどき!</p>	<p>海上都市神戸の浮上</p> <p>77 NHKTV小説風見録で地元神戸北野は太パニック</p> <p>78 神戸にまた一つ人工島六甲アイランド</p> <p>79 酔いもどりの噂たそがれ神戸 愛の詩</p> <p>79 海上都市神戸キートン博覧会準備</p> <p>81 ホートピアでさらに変貌神戸いまむかし</p> <p>81 ファッション神戸の幻影</p> <p>81 神戸市のマネ(マカダ)ゲームの損得</p> <p>83 国際都市の国際商法 英文おみくじ</p> <p>84 神戸南京町</p>	<p>新幹線効果と水飢饉</p> <p>75 山陽新幹線開通を待つ博多 春の旅情</p> <p>75 きんしゃい博多 よかとこ中洲の味</p> <p>75 博多・中洲の黒田藩跡/どきどきサービス</p> <p>77 7千本の公共の傘 行方不明</p> <p>78 売春都市「博多」情報で取り巻くが相手が大衆で</p> <p>78 福岡の水ききんに自衛隊出陣の内幕</p> <p>78 監獄はライオンズ 百万都市福岡の文化が湧きあがった</p> <p>80 賑にも負けず、雪にも負けぬ地下街は若者の通りだ!!</p>	<p>名古屋モロモロ主義再評価と名古屋パニック</p> <p>75 暴走日本と名屋に似せた凶悪名古屋の悪徳パニック</p> <p>75 大型商業ビルに似せた凶悪名古屋の悪徳パニック</p> <p>76 躍進する青年都市名古屋</p> <p>78 10年先を読む名古屋五輪の思惑</p> <p>78 道路と現代の都市生活ロードマップ名古屋</p> <p>79 東京の権威人名古屋ミッドナイトのイトなる内容先行</p> <p>79 ライオン物語 きしめんが煮込みうどんか</p> <p>79 取らぬ「五輪」の皮算用</p> <p>80 88五輪めどぞや大田舎 名古屋の悪徳</p> <p>81 名古屋パニック誘致10の疑問</p> <p>81 特異にけいさつされた大田舎名古屋大研究 それでも88パニックパニック</p> <p>81 パーティンパーティンの決戦 ソウルに大敗</p> <p>82 10.24大暴動 日本シリーズが明らかになり名古屋</p> <p>83 五輪誘致崩壊一帯で震動した名古屋の惨状</p> <p>84 コアラ誘致合戦の予想外の展開</p>
<p>昭和60年代</p> <p>から平成へ</p> <p>87 21世紀めどぞ「芸術の森」</p> <p>88 ススキノ</p> <p>89 サッポロビール工場跡地開発</p> <p>ススキノはサッポロ・見上げ・飲みの聖地</p> <p>90 学会で満杯の夏のサッポロ</p> <p>91 札幌テクノパーク</p> <p>91 膨らむ北方圏の中核管理都市</p> <p>92 とっても安全な繁華街ススキノ</p> <p>ノスタルジック・広大・ロマンチック</p> <p>93 札幌フアクリオアポン・特集多し</p> <p>94 画期的リサイクル団地計画</p>	<p>札幌のイメージチェンジ</p>	<p>レトロと未来都市MM21</p> <p>86 港の歴史 古い建物を訪ねて横浜散歩</p> <p>88 横浜ベイクが次の街+変貌する港町</p> <p>88 MM21プロジェクト走る</p> <p>89 屋台撤去と博覧会</p> <p>89 もうひとつの横浜博マイカル本牧</p> <p>89 女子高生が活躍する横浜ベイブリッジ</p> <p>90 ファッションパニュー元町+島の札幌伊勢佐木町</p> <p>91 童謡の情景 「おれの水兵さん」赤い靴</p> <p>91 ビジネス大魔王横浜ビジネスパーク</p> <p>92 横浜ランドマークタワー</p> <p>93 博物館入りした屋台テーマ</p>	<p>洗練神戸の「外」と瓦解</p> <p>87 海の手六甲21世紀の海上文化都市</p> <p>87 近代日本を凝縮した国際都市</p> <p>88 次代の花開く神戸 神戸ファッションマート</p> <p>89 神戸市元祖「都市経営」</p> <p>89 神戸ファッションタウン完成</p> <p>90 神戸という外国に行く</p> <p>90 神戸シトル・ハンター村</p> <p>90 女性に人気あがるおれの水兵さんにもロマンチックな町</p> <p>92 「善意の帝国」町内会法人化も進む</p> <p>92 ハーランドのお目見え デパート戦争</p> <p>93 アーランドゾウフェア開催</p> <p>93 神戸市立ブルー・タワーパーク</p> <p>95 神戸大震災</p>	<p>球団とパトで変身そしてアジアへ</p> <p>86 ヤマがあるケン博多タイ</p> <p>88 ロッテ球団に送る福岡市のラブコール</p> <p>88 アジア太平洋に目を向く(福岡市)博覧会、観光開発して</p> <p>88 東京博多屋台比べ</p> <p>88 地下からよみがえる国際都市博多</p> <p>88 ガイネックスはよきんしゃい</p> <p>89 「アロエ」[よかトピア][デイズ]で大衆</p> <p>120万都市「福岡」に来てみんしゃい</p> <p>90 「シーサイドももち」が福岡にロマンチック</p> <p>90 ラテンの複合都市</p> <p>91 博多中洲 九州一の繁華は博多の豪快男性天国</p> <p>91 「環アジア経済圏構想」200万都市の夢</p> <p>92 大陸の風が吹くアジアの玄関・福岡</p> <p>93 札幌対福岡</p> <p>93 ペイサイドブレイス博多頭</p> <p>93 福岡ドームが招く外タレラッシュ</p>	<p>デザイン博効果と街の変身</p> <p>85 新風営法番外地を徹底調査 名古屋</p> <p>86 名古屋商法に未来はあるか</p> <p>87 国際都市に似せた凶悪名古屋の悪徳パニック</p> <p>87 名古屋の悪徳パニック 金しめんが煮込みうどんか</p> <p>87 名古屋弁ドラマの功罪</p> <p>87 いまなぜか名古屋が気になる!?</p> <p>87 悪徳・名古屋の本質 金しめんが煮込みうどんか</p> <p>89 名古屋市デザイン博をスタッフに協力する博多へ</p> <p>89 パルコの繁華街で賑わう4M百貨店</p> <p>89 デザイン博をきっかけに進む博多の発展</p> <p>89 名古屋美人がいた時代</p> <p>89 デザイン人工都市・名古屋</p> <p>89 デザイン博で博多 時代は名古屋が先</p> <p>89 名古屋は日本のヘソ!!新トレンド 発信地</p> <p>90 名古屋市の発展を博多に照らして先行</p> <p>90 東京・大阪・名古屋の金の虜、虜はこんなに速う</p> <p>91 名古屋「大けかたわ」から変身中</p> <p>91 名古屋デザイン博の切札となるか</p> <p>91 「スーパーひかり」が止まらない</p> <p>92 名古屋が生んだ食の知恵</p> <p>92 アジア最大級の水産博覧会が完成 尾張名古屋は巨大水産博覧会だきゅー</p> <p>93 博多デザイン博はパブリックアート名古屋に見る可能性</p> <p>94 joke town騒動</p> <p>94 さすが名古屋!空気に住む人への「豪邸」再現</p> <p>94 名古屋の美実 観た人気が話題を引く日本最大の「イナカ都市」</p>

注1) 資料及び出典は\*5より。雑誌タイトルそのものを記載したものもあるが、出典は煩雑になるので省略している

注2) 表中の数字は西暦で表現している。西暦年代の区分よりも、元号年代の区分のほうが都市の変化を捉えやすい

## 資料および注釈

- 週刊朝日 1981.6.12
- \* 1 (財)関西産業活性化センター「都市的  
魅力の強化とイメージアップ方策に関する調査」 H 6. 5  
2ヶ年調査の中間報告版である。
  - \* 2 坪内鋭寿「図説名古屋人白書」  
1991.3 リバティ書房
  - \* 3 THE21「女性にやさしい都市番付」  
NO.118 1994.9 PHP 研究所
  - \* 4 大都市主幹者会議「大都市とアイデン  
ティティ」 1989.10
  - \* 5 雑誌記事索引総目録は1987年まで印刷  
物として市販されているが、それ以降の  
記事は非市販未製本索引または目録カー  
ドで保管されているため、1件1件転写  
せねばならない。また、東京と大阪はイ  
メージ向上の戦略上別格であるので除外  
してもよいと判断した。
  - ・製本 雑誌記事索引総目録(全13巻  
明治~1984年、全4巻 1985年~  
1987年)
  - ・未製本 雑誌記事索引総目録(補遺  
1984年~1988年)
  - ・目録カード(カード 1988年~現在)
  - \* 6 名古屋美人の盛衰については、「井上章  
一『名古屋美人の神話学論』Voice1987.  
6 PHP 研究所」に詳しい。
  - \* 7 例えば、「尾張名古屋の底力」  
週刊朝日 1959.7.26
  - \* 8 「“東洋一”の先陣争いにわく名古屋—  
『大いなる田舎』に訣別する市民の決意」  
週刊現代 1960.10.23
  - \* 9 例えば次のようなものがある。
  - ・「88五輪をめざす偉大なる田舎・ナゴヤ  
の“国際感覚”」  
アサヒ芸能 1980.2.21
  - ・井出又彦「名古屋オリンピック誘致の  
10の疑問」 中央公論 1981.1
  - ・「タモリにこけにされた大いなる“田  
舎”名古屋大研究」
  - ・『『名古屋五輪』招致メンバーの甘い読  
みと市民の風当たり」  
アサヒ芸能 1981.10.15
  - ・「五輪誘致崩壊一年で露呈した名古屋  
の惨状」 週刊新潮 1983.5.19
  - ・「誘致合戦は予想外の展開—一番乗り  
は鹿児島市」 週刊読売 1984.4.15
  - ・「永野一男・中江滋樹の『カネ哲学』を  
育てた名古屋の『気風』研究」  
女性セブン 1985.7.11
  - \* 10 例えば次のようなものがある。
  - ・「いま、燃えている 名古屋がオモシロイ」  
女性セブン1987.10.1
  - ・上坂冬子「名古屋はこれから本番だ」  
潮 1987.12
  - ・「ようこそ名古屋」  
オレンジページ 1989.6.2
  - ・「閉鎖症名古屋研究／デザイン博をき  
っかけに進む街のお化粧直し」  
AERA 1989.7.18
  - ・「きのうの名古屋では、もうありません」  
WINDS 1898.8
  - ・荒川進「中部経済圏はどこへ行く／あ  
の名古屋が変わり始めた」  
WILL 1989.10
  - ・「デザイン博で脚光/時代は名古屋だが  
や」 週刊宝石 1989.10.5など
  - \* 11 矢頭 純「徳川春春」  
海越出版社 1987.3  
亀田忠夫「中部型企業の生成とその風  
土—中部産業のメタモルフォーゼー  
1994」 中部経済論テキスト
  - \* 12 「デザイン人工都市・名古屋論」  
アクロス 1989.8
  - \* 13 東邦女子短大1年生有効回答35名より  
(1994年調査)

# イメージづくりへの挑戦

北九州市観光協会 久保田裕明

都市が発展していくためには、都市イメージというものがあるだけ大切なことか。どの自治体のどんな職員でも、分かっていることだと思う。

しかし、このために最も効果的な方法は何か？ 何が最善の策なのか？

この質問に明確に答えを出せる人は、いないのではないか。そんな気がしてしかたない。北九州市でも、その明確な答えは見つからない。もしかしたら、そんな便利なものは、見つからないのかもしれない。

## マイナスからの出発

### 気がついたら最悪のイメージだった

北九州市にイメージアップ事務局ができたのが、昭和63年のこと。現在の末吉市長が就任した1年後だった。都市を再生するために、少しずつでも北九州市のイメージをあげていこうという決意のもとに発足した。

ちょうど、そのころは、重化学工業に依存していた北九州市の産業がボトムの状態で、おまけに、暴力の街とか、公害の街とか、世間では言われ、街の景気、イメージとも最悪の状態であった。

しかし、その時期に急激にイメージが低下したわけではなく、徐々に徐々に下降線をたどり続けたのだろう。

市民も、イメージの悪さは薄々感じていただろうが、「イメージで飯がくえるか」という考えが通用していた時代は、それに対する危機感もなかったようだ。

しかし、感性の時代がやってきて、おまけに、さらなる不況まで襲ってきたのだから、市民の中にも、イメージアップに取り組みなければならぬという思いが膨らんできた。

## 悪い原因ってなんだろう

重化学工業に代表される工場、煙突、公害などはイメージダウンの要素であることは想像がつくのだが、日本の大都市と言われるところには少なからず、そんなものは存在しているはずだ。だから、そのせいだけではできないのだろう。

やはり、北九州市固有の歴史にも原因があるのではないかと思う。

北九州市は、官営八幡製鉄所に代表される鉄の街・八幡市、商業で栄える城下町・小倉市、石炭の積み出し港・若松市、大陸との貿易港で九州の玄関口・門司市、工業と遠洋漁業の街・戸畑市が、昭和38年に合併してできた都市である。

それぞれの街がそれなりに強烈な個性と歴史を持ち、良く言えば、バラエティーにとんだ多角的都市ができあがった。商店街や駅、市民会館など、すべて旧五市にあり他の市で



久保田裕明(くぼた ひろあき)

昭和60年 北九州市入職  
区役所、広報室などを経て  
平成5年 総務局イメージアップ事務局  
平成7年10月 北九州市観光協会振興1課  
主幹

は想像がつかないほど贅沢な都市機能を持つことができた。

しかし、それがゆえに、北九州市としてまとまってみると、すべてがありすぎて、港町や城下町といった、よく他の都市ではイメージの核となりうるものが、北九州市にとってはイメージ形成のツールにはならなかった。

結局、教科書で紹介されている八幡製鉄所（現在の新日本製鉄）、かつての4大工業地帯がイメージ形成のメインになり、それ以外は何もないように思われてしまったのだ。

そして、重化学工業のイメージと北九州市のイメージは、全くイコールになって、商業集積や港、海と山に囲まれた自然環境などは、想像もできない市となり、ついには最悪のイメージになってしまったようだ。

## 悪いものがすぐに良くなるか

悪い原因が分かったからといって、それをすぐに治すことが可能なのかというと、そう簡単なことではない。

イメージが悪いからといって、北九州市の工場を無くしてしまえるのか。素材型産業の街が、一気にシリコンバレーに変わるのか。こう考えただけでも、無理だということが分かる。

いや、何事もPR次第だという考え方もないではないが、それだけで、イメージ操作ができるほど、情報化社会は甘くはない。きっと、訪れた人の口から、ウソつきの街だとの烙印を押され、今まで以上に悪いイメージの街になってしまうだろう。

結局たどりついた結論は、50年、100年かけても、あせらず、上辺だけの手法にたよらずに、本当に良いまちをつくっていき、本物が与えるイメージで勝負していくことであった。そして、北九州市には、それだけの素材が手つかずのままで残されていた。

## 現在の生の姿を伝えたい

北九州市に観光に来たことがある人が、読者の方々の中でどれくらおられるだろうか。今は、スペースワールド等の観光地があるので少しは、おられるかもしれないが、昭和63年当時で考えると、皆無だと思う。

遠くからきて、街を見て、遊んでいただける人がいないというのは、街のイメージを創るうえで、致命的なことだ。

例えば、「下関のふぐ」というのは有名であるが、対岸である北九州市（門司港）では、ふぐなんか食べられないと思っている人がほとんど。あんなに、狭い海峡なんだから、きっと対岸でもあるはずだと思ってくれる人は、残念なことに、いないようである。

そこで、まず最初に手をつけたことは、現在の姿を知ってもらい、少しずつでも誤解を解いていくことだった。

## 観光都市なんて、冗談でしょう

現在の市長が就任して、最初に力を入れたことが、観光振興であった。産業の街・北九州には、全くフィットしていない施策であるように写ったが、イメージアップの観点からは、最も即効性があり、インパクトを与えられる手法だったと、今振り返れば思う。

北九州市には、市民にもあまり知られていないような名所がたくさんあった。観光という意識が街全体に欠けていたため、市外の人にも市民にも知らせようという気持ちはさらさらなく、ましてや来てもらおうなんて考えてもないもので、案内表示やガイドブック、駐車場やトイレなどほとんど十分なものがなかった。

さらに、市民の中にも観光マインド、ホスピタリティーというものがあまりなく、北九州市に人を招こうとする姿勢が感じられなかった。

最初は、このような、ハード・ソフトの基礎的なものを揃えていくことからスタートしていった。

観光のねらいは、一義的には、人が集まる街にして経済の活性化をというものだろうが、実際に来て見てもらい、北九州市のイメージと現実の姿がこんなにも違うのかと知ってもらうことにも重要な意味があった。

そして、なによりも、観光客に「思ったよりも、いい街ですね」「人情があつくて、とっても親しみやすい街ですね」と言ってもらえることが、どれだけ北九州市民に、再生へむけてがんばる力と勇気を与えたかは、計り知れない。

## 人の集まる街づくり

昭和63年、北九州市の長期総合基本計画・ルネッサンス構想ができあがった。この構想は、沈滞した北九州市の街を再生するためのプランであり、平成17年を目標に、21世紀に向けて必要な都市の基盤を整えていこうというものだ。

基本計画をつくり街づくりを進めていくことは、どこの都市でもやっていることであるが、その構想の名称「ルネッサンス」が、市民の間でも、これからの街の再生をめざしていく旗印になり、「レッツ・ルネッサンス」が合言葉のようになったことは珍しいのではないかと思う。

そして、この構想の中に、人が集まる街づくりという視点が、重要な柱になっている。

「大都市なんだから、人が集まるのは当たり前ではないのか」という疑問を持つ読者の方々も多いだろうが、前述のように、当時の行政・市民にとって、よそから人を集めよう、集めたいという考えは、想像もつかなかったことなのである。

そして、「人の集まる街づくり」へ向けて、観光やイベント・コンベンションの振興、さ

らに国際都市づくりなどが重要な施策になってきた。

## 発想の転換で生まれた観光地

観光のことは、前にもふれたが、サインや駐車場など基盤整備を進めながら観光の目玉となる施設を創りだしていった。

昭和63年当時、市内の観光客数が約350万人だったものが、現在では倍増する勢いである。これも、今から紹介する観光の目玉づくりが進んだ成果であろう。

### ●お城をアミューズメント施設に

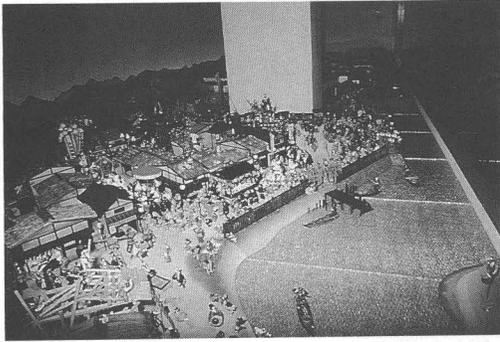
北九州市には小倉城という伝統のある城がある。細川忠興が1607年に小倉にきた時に、本格的に築城したもので、その後、親藩である小笠原氏の居城となり、幕末の高杉晋作で有名な小倉戦争の時に焼失した。

そして、昭和34年に、市民が中心となって再建。鉄筋コンクリート5階建ての城ができあがった。だから、このお城は、国の文化財でもなんでもなく、観光施設であったのだが、中に入るといよりも、小倉の街のランドマークという性格になっていた。

文化財ではないというのは、お城にとっては弱点であることは否定できないが、逆に考



小倉城



城下町を再現したジオラマ

えると、どのようにいじっても、クレームがつくことがないという、他の城にはない長所をもっているということだ。

そこで、小倉城の中を全面的に見直し、よくテーマパークにあるような、アミューズメント施設にリニューアルした。

和紙人形でつくった城下町のジオラマを南蛮船のデッキから遠眼鏡で覗く仕掛けや、コンピューター制御のからくり人形がマルチスクリーンに写る江戸時代の生活を紹介する「からくりシアター」など、内容・見せ方も工夫を凝らし大好評を得ている。

### ●企業遊休地がテーマパークに

前でも紹介したように、北九州市の歴史にとって、八幡製鉄所（現在の新日本製鉄）は大きな存在である。鉄鋼業の最盛期には、4万3千人いた従業員が、相次ぐ合理化で1万人を大きく割り込んでしまった。

もちろん、それに伴い、工場もどんどん不要になり、古い生産設備が多くあった八幡の東田地区は、企業遊休地になっていた。

生産が行われていない工場群は、本当に物悲しい存在で、当時言われていた「鉄冷え」を象徴する風景になっていた。

そこに、突然、宇宙をコンセプトにしたテーマパーク「スペースワールド」が生まれるというビッグニュースが持ち上がった。新日本製鉄が、多角的企業展開の一つとしてレジャー施設の経営に乗り出すというものだった。観光施策を進めていた北九州市にとっては、

天からの授かり物を得た思いであった。年間200万人を越える観光客が訪れる施設をつくってもらえるのだ。

雇用や経済波及効果はもちろんのこと、毎年200万人の方々に、生の北九州の姿を見てもらい、楽しい思い出とともに良いイメージを持って帰ってもらえることは、昔から考えると夢のようなことである。

スペースワールドが、北九州に立地した大きな理由が、企業遊休地であった。もちろん、製鉄創業の地をなんとか再生したいという思いも大きな要因だろうが、単純に集客を考えるなら関東・関西の方が有利である。しかし、NASAとのライセンス契約で2年以内に開業するという条件を満たせるのが、北九州市しかなかったらしいと聞く。



スペースワールド



スペースワールド

スペースワールドの例は、企業遊休地が、イメージづくりの大きな資産となることを教えてくれた。

### ●昔の繁栄をレトロに

観光地がないと言い続けてきたが、関門海峡だけは、少し違っている。景観が楽しめる場所を観光地というならば、まさにここは生まれながらの観光地であるはずだ。しかし、この絶景の地ですら、十分な観光地となり得ていなかったようだ。

下関の対岸である門司港は、大陸貿易の窓口であり、九州鉄道の発祥の地である。往時は、商社や商船会社が並び、大陸と日本を行き交う人々で、九州一にぎわった所だった。

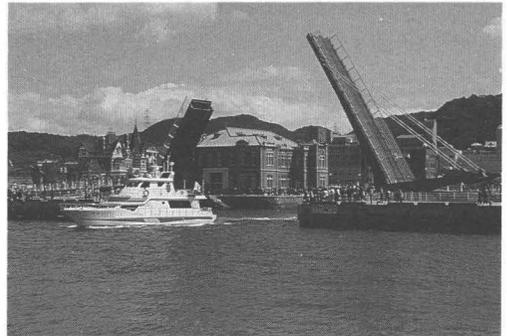
この歴史と素晴らしい景観を持つ地域を、なんとか甦らせようとした開発計画が、「門司港レトロめぐり・海峡めぐり事業」である。

重要文化財の門司港駅、旧門司三井倶楽部や倉庫になっていた旧門司税関、旧大阪商船などのレトロ建築物や海峡の港町風情が味わえるレトロ地区。関門海峡の絶景が見物の西瀬戸内国定公園の和布刈（めかり）が一度に楽しめる観光地が、今年できあがった。

今後は、リゾートホテルや関門海峡ロープウェイなどの計画もあり、民間資本による開発を楽しみにしている。



門司港駅



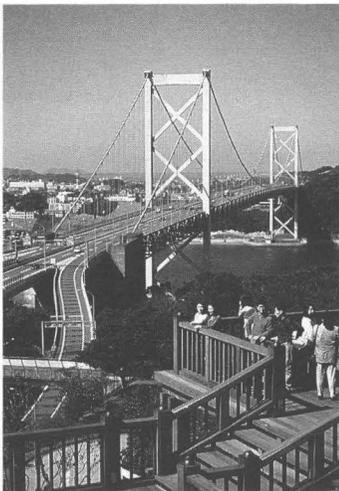
はね橋「ブルーウィング」と旧門司税関

この門司港地区は、人を運ぶ手段としての船の交通が使命を終えたことによって、だんだん寂れてしまったところである。しかし、過去に蓄えた資源と港町の風情が、今は貴重なものとして脚光を浴びることになった。時代と同じペースで開発が進んでいなかったことに感謝しなければならないかもしれない。

## コンベンションの開催が 街の自信回復に

観光地の整備とともに進めていったのが、イベント・コンベンションの開催・誘致である。

アフターコンベンションがおもしろくなければ、コンベンションが誘致できないといわれる。通訳設備やパーティーに使えるホールを備えた北九州国際会議場とそのソフト部隊の性格を持った北九州コンベンションビューローができた当時は、誘致活動に大変な苦勞を要したそうだ。それで、このビューローで



関門橋

は、宿泊の手配や運営への援助などさまざまなサービスを行い、やっとの思いで会議や展示会を誘致していた。

しかし、スペースワールドなど観光できる場所が徐々にできあがるにつれて、誘致活動も少しずつ楽になってきたそう。昭和62年にはコンベンション開催件数が472件だったものが、今では約3倍、国際的な規模のものに限れば5倍の件数になっている。

コンベンションの誘致にあたっては、市民も積極的に活動し、青年会議所（JC）が、アスパックの誘致にも成功した。アスパックは、アジア・太平洋地域の会員が一堂に集まる会議で、参加者は1万8千人にも上る。

これだけの規模のコンベンションは、北九州市の歴史でも初めてのことで、今、考えると実力以上のものを誘致してしまったのかもしれない。

当時の北九州市には、6000人程度の宿泊施設しかなく、あふれた方々には、下関市などの近隣の町に宿泊してもらうことにし、バスをチャーターして送迎することでなんとかしのいだ。

このアスパックの実行委員会の事務局の向かいには、皮肉なことに開催の半年後にオープンする30階建の高層ホテルが建設されていた。このホテルをみながら、「これがもっと早くできていれば…」とつぶやいた、実行委員長の顔が、今も、強く印象に残っている。史上初の国際的なビッグコンベンションの開催は、北九州市のイメージ向上に効果があっただけでなく、人が集まる街づくりを進めている北九州市の行政と市民に、大きな自信と勇気を与えた。

## イベントは、街を好きになってもらうきっかけづくり

イベントの開催については、賛否両論あると思うが。時には、強烈なインパクトを与え、手法としてのイベント・祭りの開催は、効

果がないとはいえないだろう。街の魅力を知らない人でも、イベントの魅力で集めることもできるし、市民も街の賑わいを実感できる機会となる。

イベントがきっかけで来た人々に、いいイメージを持って帰ってもらい、また遊びに来てもらうことが、イベント開催の大きな意義であり、いわゆる街と人との「お見合い」みたいなものだ。

北九州市でも、国際音楽祭や演劇祭といった文化イベントや、市内の伝統ある祭りが一堂に会する「わっしょい百万夏祭り」、世界選手権を開催するまでに成長しているパラグライダーの大会など、様々なイベントを打っている。

この中でも、最も大規模で、未知への挑戦となったのが第8回全国都市緑化フェアだったと思う。

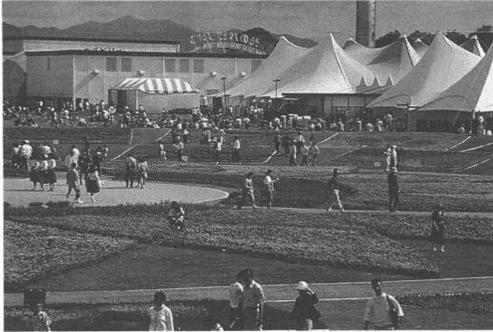
読者の方々も「花博」はご存じだと思うが、この花博が、第7回目の都市緑化フェアなのである。

その次となると、ほとんどの自治体は尻込みしてしまう。北九州市も、最初は、開催しようなんて考えていなかった。しかし、様々ないきさつで、開催することになり、決定したのが開催年である平成3年の2年前であった。

普通なら、用地買収も含めて6年ぐらいの準備期間が必要だという代物を、ほとんどゼロからのスタートで2年でやっってしまうというのだから、無事に終わった今ふりかえって見ると、奇跡としか思えない。

このフェアは、9月14日から59日間の会期中で、目標の100万人を超える135万人が入場し、予想以上の大成功で幕を閉じた。成功した理由は、市民や企業が協力を惜しまなかったことなど様々あると思うが、何よりも大きかったのは、北九州市のイメージアップを願う市民の思いだっただろう。

「あの北九州市で、花と緑の祭典？」とい



第8回全国都市緑化フェア



国際友好記念図書館

う風潮が市外の人だけでなく、市民の中にもあったと思う。しかし、会場を訪れて、イメージと現実の違いに驚かされた。

会場は、海を望む緑地にあり、すぐそばには湖のような貯水池がひろがっている。ゲートをくぐれば、鮮やかな大花壇と一面の芝生広場、ここは本当に北九州市だろうかと目を疑った市民も大勢いただろう。

そして、その評判が口コミで広がり、ついには、市外から知人・友人を招いて何回も会場を訪れてくれるようになった。「自分たちが住む街をいいイメージでみられたい」という北九州市民の潜在的な思いが、このイベントをきっかけに、行動をおこさせたのではないだろうか。本当にいいものがあれば、無理やりでもみせたい。イベントがイメージアップになるかどうかは、本当にいいものを提供できるかどうかにかかっている。

## いいものを、どんどん発信

生の姿をいくら伝えたいと思っても、大量に情報を送ることは簡単ではない。さらに、全国的に発信するとなると、相当な資金が必要である。

そこで、まず実行したことは、パブリシティーに力を入れることであった。記者会見や情報提供を盛んに行うことは当然として、テレビ番組・映画の誘致や、雑誌等の紙面掲載（ペイドパブ）などの新しい形のパブリシティー活動も積極的に進めていった。

一例をあげれば、広報室の担当者はテレビ局はもちろん、テレビ番組製作会社を訪問し、ロケ地に北九州を使ってもらうことをお願いして回った。ロケが決まると、現地エキストラの手配やロケバスのチャーター、ロケ地との様々な交渉、番組タイアップ会社の紹介など、製作会社が現地ですることを市の職員が代行し、なるべく負担を軽くして、北九州に来やすい状況をつくりだした。

さらに、放送日が決まれば、北九州市の出身者やゆかりのある方々に、番組宣伝はがきを出し、市内むけには市の広報紙に掲載し、視聴率アップのお手伝いも欠かさなかった。

この手厚い姿勢が、業界の中に口コミで伝わり、旅行・グルメ番組が流行したことも手伝って、北九州市を舞台にした全国放送の番組が流れるようになった。

自主媒体は、ほとんどが市民対象のものだけで、全国レベルに発信するものは何もない状態だった。そこで、市外（特に北九州市出身・ゆかりの方々、オピニオンリーダー）を対象にし、市関係の新聞記事スクラップ集や、ビジュアル情報誌などを発行した。これは、北九州市に親しみを持っている方々に、生の姿を知っていただき、口コミの情報発信源になっていただくことを狙っている。

企業なら利益の何%とか売上の何%とかPR費に使う額の基準があるとよく聞か、

自治体では予算規模のどれくらいかという目安がない。商品の売上などの効果も、自治体ではなかなか測定できないとなると、PR費に多額の予算をつぎ込むことに勇気がいる。

パブリシティやロコミに片寄ったような、広報活動に疑問がないわけではないが、現状としてはしかたがないかもしれない。

## ゼロからプラスへ

### イメージと実態

昭和63年に、北海道東北開発公庫が行った、全国の百万都市11市の生活環境に関する調査の発表があった。この調査は、住宅、自然環境、教育、事故・犯罪などの8分野42項目にわたる生活環境指標について比較を行ったものだ。その結果、北九州市が総合で第1位、つまり日本の大都市の中で一番住みやすい街であるとの評価を受けたことになるのである。

しかし、この調査と同時に行われた、研究者約2千人を対象にした「生活環境の良い大都市はどこか」というイメージの調査では、最下位であった。研究者が対象ということで、一般的にどうかは分からないが、それにしても、何ともやるせない結果であった。

この事実は、イメージの向上に力をいれる必要性を痛切に感じさせるものとなったが、現在の生の姿を伝えていくというやり方が誤ってないことを証明してくれることにもなった。

## マイナスがプラスになるのか

観光やイベント・コンベンションなどは、ゼロだったところに、どんどん積み重ねて、プラスにしていける分野だと思う。

マイナスだったことを、ゼロにしプラスにしていくことが可能なのかどうか、イメージと実態の差が、こんなにも激しい現実をみると非常に悲観的にならざるをえない。

しかし、北九州市には、マイナスがプラスになりつつある貴重な事例がある。かつて「公害の街」と呼ばれていたが、全国一厳しいといわれた公害防止協定を市内の企業と結び、行政と企業・市民が手を結んで公害の防止に取り組んだ。その地道な成果が身を結んで、「星空の街サミット」を開けるほどの青い空を取り戻し、死の海と呼ばれていた洞海湾を甦らせた。

国連環境計画 (UNEP) の「グローバル500」や地球サミットでの「国連自治体表彰」を受けると、環境回復の取り組みと、そのノウハウを開発途上国に伝えて行く国際環境協力事業は国際的な評価を受けている。

ただ、イメージの面では、まだまだ過去の姿が尾を引いている。確かに、自然がそのまま残された場所に比べれば、そんなに胸を張れる環境ではない。

環境回復を打ち出していくことには、公害の街というイメージを呼び起こすのではないかと心配があった。しかし、急激に成長するアジア諸国に対する環境汚染防止技術の伝授などは、地球的規模にたった地道な活動として世界的に認められ、今では、プラスのイメージづくりに貢献している。

マイナスをプラスにするためには、20年～30年の地道な努力と市民のコンセンサスが重要なのだ。イメージアップに役立てるといような中途半端な決意では、やっていけないものである。

## 真価が問われる21世紀

都市である以上は国際都市であることが当たり前であり、世界の情報が1台のパソコンで座ったまま入手できる時代である。そして、キーボードをたたくだけで、世界中からモノが流れてくるようになった。

北九州市でもこの時代に向けた取り組みが着実に進んでいる。マルチメディアを中心

とした情報化社会へむけてのヒューマメディア  
構想やメディアドームの建設、FAZ（輸入  
促進地域整備事業）による物流の拠点づくり、  
そして、24時間稼働できる新北九州空港の建  
設などである。

このような事業が完成した21世紀の初頭に、  
北九州市のイメージがどうなっているか、最  
初の真価が問われることになるだろう。

北九州市のイメージは、急に悪くなったわ  
けではなく、その街の歴史や時代の流れとと  
もに下降線をたどった。

昭和60年代にはじまったイメージアップへ  
の歩みは、マイナスからスタートし、10年余  
りの時を経て、今やっとゼロに到達したかも  
しれない。

悪くなるのに、30年かかったのなら、少な  
くとも良くなるまで同じ時間、いや、もっと  
長い歳月が必要かもしれない。

北九州市のプラスイメージづくりは、今、  
やっとスタートラインに乗ったところかもし  
れない。

実態にこだわり続ける、地道で誠実なイメ  
ージづくりへの挑戦は、きっといつか実を結  
ぶと信じている。

# 21世紀の世界都市を目指して

## —大阪21世紀計画—

(財)大阪21世紀協会企画調整課長 間谷裕史

### ■ はじめに

21世紀を告げる2001年まで残り5年余となったが、大阪では13年前に、21世紀にふさわしい国際的で文化的な「世界都市・大阪」の創生を目指す“大阪21世紀計画”がスタートしている。

当計画により、御堂筋パレードを始めとして多くの取組が実施されて来ており、現在はさらにその推進を図るべく、21世紀初頭にターゲットを置いた「ヤマ場」の創出が検討されている。

(財)大阪21世紀協会は、この“大阪21世紀計画”の推進母体として、1982年4月に通産大臣の認可を受け設立され、大阪府、大阪市、関西経済連合会、大阪商工会議所を中心とした官民協同体制により、その役目を果たすべく活動の場を広げてきた。

21世紀の「世界都市・大阪」の創生を追い求める当協会の役割、活動経緯等を記述することにより、都市のイメージづくりの姿を紹介する。

### ■ (財)大阪21世紀協会の役割

1981年4月、大阪府、大阪市、関西経済連合会、大阪商工会議所、日本万国博記念協会のトップによる五者会談が開かれ、2年後の大阪築城着工400周年を記念して、“まつり”を行うことが合意された。その後、長期的展開の必要性が叫ばれ、同年10月にこれらを「大阪21世紀計画」と呼ぶことになり、同時に「大

阪400年まつり準備委員会」を改称した「大阪21世紀準備委員会」により翌年2月に、計画の「基本理念」及び「基本構想」が策定された。

計画は、21世紀（2001年）までの長期にわたって、住民、行政、産業界、各種団体などが一体となって、そのエネルギーと英知を結集し、計画的に行事や事業を展開することにより、21世紀にふさわしい国際的で文化的な「世界都市・大阪」の創生をめざし、広く日本と世界の発展に貢献しようとする壮大な、そしてかつてないプログラムである。

### ■ (財)大阪21世紀協会の設立

大阪21世紀計画の個々の事業主体は、行事あるいは事業を主催・実施する行政機関、企業、各種民間団体などであり、住民、行政、産業界、各種団体等が、それぞれの立場で積極的に協力し、推進する必要がある。

そのため、これらの事業が円滑に推進され、十分な効果が発揮されるよう、調整機能を果たすコア推進機関として、「大阪21世紀準備委員会」を解散し、財団法人大阪21世紀協会が発足した。初代会長は松下幸之助氏、理事長



間谷裕史(まだに ひろふみ)

1947年 兵庫県生まれ  
1971年 神戸大学工学部電気工学科修士課程修了  
1971年 電電公社(現NTT)入社  
1995年 NTTより現職へ出向

に古川進氏が就任した。

そして、1982年10月に「大阪築城400年まつり」をオープニングイベントとして、計画がスタートした。

## ■ (財)大阪21世紀協会の役割

協会はその目的、事業を次のように定めている。

### 【目的】

きたるべき21世紀にむけ、関西一円において国際的、多面的、継続的な行催事の展開を誘導することによって、各種産業の育成と文化の発展を図るとともに、経済的・文化的諸活動及び国際交流のための施設建設の気運を促し、もって日本及び世界の発展に貢献することを目的とする。

### 【事業】

- ①21世紀における関西の将来像である大阪21世紀計画の総合的プログラムの策定及びそのために必要な知識、情報の集積
- ②各種行催事の誘致及び実施の勧奨並びにそれらを誘引する行催事の企画及び運営

当協会の取組は、これらの定めに乗っ取り実施されており、具体的には大阪21世紀計画を推進してゆくためのガイドラインである『グランドデザイン』を策定するとともに、大阪21世紀計画が長期にわたり、毎年継続的に展開されるかつてない壮大な計画であることから、都市機能や生活環境の充実など、総合的で効果的なまちづくりを進めるため、面的に行うといった、いわゆる『ヤマ場』を設定し、計画の推進を図っている。

一般的には、21世紀計画の個々の事業主体は、特定の行政機関、企業、団体等であるが、協会は以下のような役割を果たしている。

- ①各種施設建設の気運醸成と調査研究
- ②各種事業主体に協力し、総合的、相乗的な効果を発揮するための調整と推進

- ③行催事の企画、実施をはじめ、各種イベントの協賛、後援およびイベントの実施勧奨
- ④事業について、各層の意見の統一、住民の参加、民間活力の導入を図るための推進組織・協力組織やシステムづくり
- ⑤「大阪21世紀計画ニュース」などの広報誌をはじめ、テレホンサービスなどを使った広報活動

## ■ 大阪21世紀計画のヤマ場と行催事

計画のスタートを飾る1983年の「大阪築城400年まつり」を第一のヤマ場、1989年の「大阪近代化100年記念」および1990年の「国際花と緑の博覧会」を第二のヤマ場としてとらまえ、ともに大規模なイベントを展開、大きな成果を挙げた。

続く第三のヤマ場として1994年9月の「関西国際空港の開港」をとらまえ、1993年度から向こう3年間にわたり、「開港記念キャンペーン」や各種の「開港記念イベント」の広範な展開を実施中である。

ヤマ場事業及び主要な行催事例を表-1に示す。

行催事については、毎年新規の事業が企画・実施されている。これらの中で、継続的に実施され、根づいた当協会主催のイベントの代表例と後援事業数の推移を表-2、表-3に示す。後援形態は種々あるものの、ここ2～3年は、470件前後の多数に及んでいる。

表-1 ヤマ場事業及び主要な行催事例

主要事業名	開催時期	主なイベント (◇主催、共催 ◆協賛、後援)	事業規模 (①参加者数 ②事業費)	定着イベント
《第一のヤマ場》 大阪築城400年まつり	1983年10月～ 大阪城博 10～11月	◇大阪城博覧会 ◇中国秦・兵馬俑展 ◇オープニング・パレード ◇ショーウィンドーコンクール 大阪 ◇OSAKA光のフェスティバル ◆大阪世界帆船まつり	大阪城博覧会 ① 530万人 ②約26億円	○御堂筋 パレード ○ショーウィンドー コンクール 大阪 ○OSAKA光の フェスティバル
天王寺博覧会	1987年 8～11月	◇天王寺博覧会	① 247万人 ②約43億円	—————
オランダフェスティバル'89大阪	1989年3～5月	◆ダッハらんど'89大阪	① 94 万人	—————
《第二のヤマ場》 大阪近代100周年記念  国際花と緑の博覧会	1989～90年  花博 1990年4～9月	◆佐伯祐三とエコール・ド・パリの仲間 間たき展(大阪市制100周年記念) ◆世界巨大古墳国際会議(堺市・) ◆国際花と緑の博覧会 ◇ザ・グレート・ツリー・ フェスティバル ◇水都・大阪ふれあいランド ◇トライウォーク'90国際大会	国際花と緑の博覧会 ① 2,300万人 ②約 900億円	○「私の花見世」 コンクール ○グリーン・ワン ダー・フェステ イバル(休止中) ○水都・大阪ふ れあいラン ド(休止中)
アジア月間	1990年2～3月	◇大阪21世紀計画「アジア月間」	—————	○アジアフェス
《第三のヤマ場》 関西国際空港開港記念事業	1993～95年	◇大阪ウォーターフロント・ トライアスロン国際大会 ◇地球文化フォーラム ◆環太平洋ヨットレース 等	—————	—————

表-2 根づいた協会主催イベント例

トータルファッション・フェア	3月
「私の花見世」コンクール	4～5月
御堂筋旗の掲揚	春秋
大阪ビデオコンテスト	6～12月
ビーチバレージャパンレディース	8月
ベイエリアコンサート21	8月
OSAKA光のフェスティバル	9月
ユースギャザリング イン オオサカ	9月
アジアフェス	9～11月
御堂筋パレード	10月
アジア国際ネットワークセミナー	10月
いんたーびーふる運動会	10月
ショーウィンドーコンクール大阪	10～11月
大阪コレクション	11月
国際現代造形コンクール	11～12月
21世紀を考える講演会	3回/年
すばるフォーラム	4回/年
おおさか文化カレッジ	不定期

表-3 協会が後援する事業数の推移

年度	事業数	年度	事業数
1982	130	1989	418
1983	362	1990	441
1984	347	1991	434
1985	386	1992	466
1986	440	1993	473
1987	434	1994	471
1988	392		

## ■ 大阪21世紀計画・グランドデザイン

グランドデザインについては、まず、基本的考え方を1982年に発表し、翌年、品格と活力に満ちた大大阪づくりの実現のため、関西国際空港の早期実現、国際会議場を中心とするコンベンションゾーンの設立、都市景観の向上、人材育成など5つの基軸を提唱する「大大阪創生への出発—21世紀計画グランドデザインの基軸」を発表した。

そして1986年には、「グランドデザインの基軸（II）」を発表。新たに関西文化学術研究都市のナショナルプロジェクト化の推進等を加えるなど、時流に適合した総合的なデザインとしての構築を図った。

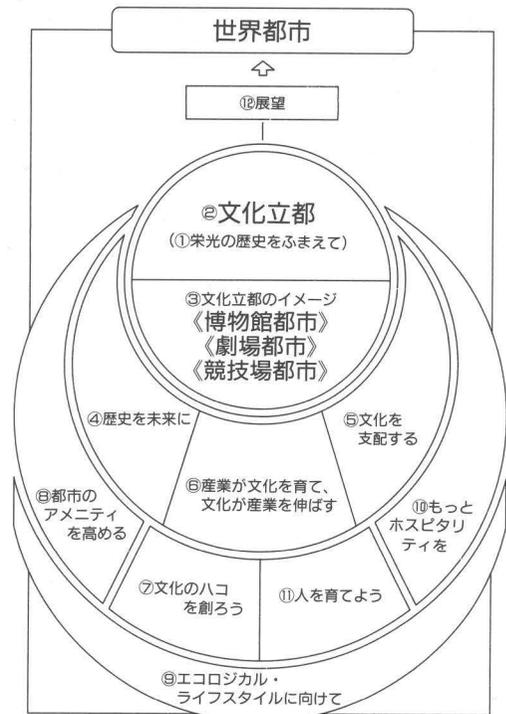
その後、これらのデザインが提唱する諸目的がほぼ達成されたと考えられ、かつ、大阪府、大阪市の新総合計画をはじめ、関係諸団体の新しい構想・計画の発表など、社会情勢に変化・進展がみられたことから、新たな視点による、次代のまちづくりについての提言として、1992年に「大阪21世紀計画・新グランドデザイン」を発表した。



この新グランドデザインは、「提言」、「解説編」、「事業編」の3編によって構成されている。

「提言」では、大阪は『世界都市』たることをめざし、そのためには文化を都市形成の核とする積極姿勢、すなわち『文化立都』を推進すべきとしており、その概念図は図-1の通りである。

図-1 「提言」の概念図



「解説編」は「提言」の内容を補完しつつ詳細に説明するものであり、「事業編」は、関西・大阪において進められているビッグプロジェクトや、また関係諸団体によって構想・計画・推進されている文化施策の進展について言及しつつ、「提言」にそって新たにオリジナルな事業提案をしたものである。

「事業編」における、文化立都実現のための提案事業は、次の4事業となっている。

- ①ホスピタリティの高い、総合的な交流ゾーンの形成をめざす「アジア情報・交流セン

ター」の創設

- ②都市シンボルとしての総合的都市文明博物館「なにわ博物館」の建設
- ③オリンピック、ワールドカップサッカーなどの「国際級のスポーツイベント」の開催
- ④実学の総合的な高度専門教育機関「大阪21世紀塾」の設立

## ■ 大阪21世紀協会の現状の取組

1995年（平成7年）度に当協会で計画している主要な事業は次の通りである。

- ① APEC\*1、JATA\*2'95等の国際会議関連事業及び関西国際空港開港記念事業（第三のヤマ場事業）の実施
- ②オリンピック招致支援事業の実施
- ③'95御堂筋パレードの開催を始めとする協会関係諸事業の実施・展開
- ④新グランドデザインの提案事業である「大阪21世紀塾（仮称）」の構想具現化
- ⑤大阪国際会議場建設推進に関する誘致・支援計画実施への協力・支援
- ⑥広報活動の展開
- ⑦阪神・淡路大震災の復興支援の実施

また、大阪21世紀計画の今後の推進を図るため、新たに当協会の企画委員をメンバーとした企画小委員会により、次の2つのテーマについて検討を開始した。

- (1) 第4のヤマ場事業の検討  
（委員長：端 国立民族学博物館教授）  
第3のヤマ場事業の後のヤマ場事業を、世紀のかわり目に設定、実施する。
- (2) 今後の大阪21世紀協会のあり方の検討  
（委員長：上田 京都精華大学教授）  
21世紀における「当協会」のあり方を検討、提言する。

## ■ おわりに

行政・産業界の協同体というユニークな団体が、21世紀の「世界都市・大阪」の創生を目指して取り組んできた内容を概説的に紹介した。

しかしながら、今年になって発生した「阪神・淡路大震災」は都市のイメージを転覆させるほどのインパクトを与え、東京都の「世界都市博」の中止決定は今までの都市のイメージ作成の戦略変更を余儀なくさせるものであったと言える。

また、その一方で、マルチメディアの進展による高度国際情報社会の招来、円高による産業空洞化現象の進行、アジア経済圏の急速な抬頭など21世紀に向けて都市・関西（大阪）を取り巻く社会が急激に変化してきている。

21世紀の都市の構築は、必ずしもこれまでの延長線上に乗らない公算も考えられ、これらの変化を的確に読み取り、タイムリーにグランドデザインを更改し、事業実施を整備していくことが必要である。

### 〔大阪21世紀協会のデータ〕

- ・会長：佐治敬三（サントリー(株)会長）
- ・副会長：大阪府知事、大阪市長、関西経連会長、大商会頭
- ・理事長：現在空席
- ・理事：25名
- ・企画委員：梅棹忠夫座長以下33名
- ・事務局長：加藤良雄（協会専務理事）
- ・事務局職員数：77名
- ・1995年度事業予算：1,049（百万円）

\* 1・APEC：アジア太平洋経済協力

\* 2・JATA：日本国際観光会議・トラベルトレードショー

# 函館・街並み色彩まちづくり

函館からトラスト事務局 柳田良造

## 函館・街並み色彩まちづくり

津軽海峡に突き出された函館山と巴型の港、それを起点に扇が広がるように延びる市街地、江戸末期の開港場の伝統を今に伝える洋風の街並み群と坂道、函館は今も特徴的な環境がそこで生活するひとの日々の暮らしの舞台となる街である。そういう環境のなかで、かつてのような活気はないが、ハイカラで味わい深い暮らしぶりが生活の中に息づいている。風景を通して、市民が街のありようや変化を感じとり、日々の暮らしから街への思いをめぐらす。そこでは、街の風景の変貌は敏感に市民の日常生活での変化につながる。本来街にくらすとはそういうものであったはずである。生きられた風景を市民が経験していくには、日常生活のなかで街の体温や鼓動を感じることが必要となる。

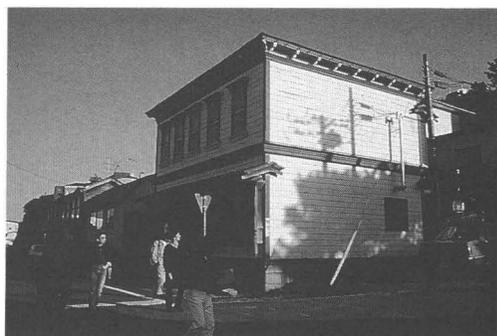
## 街並み色彩発見

函館山の麓、西部地区と呼ばれる界限には、明治から昭和初期にかけての洋風、和洋折衷様式の歴史的建物が数え切れないくらい多く残っていて、私たちはその歴史的な街並みを現在も目にすることができる。それらの建物は下見板の外壁や窓、軒の装飾に、緑、ピンク、ベージュ、白、水色、茶、黄色など様々な色のペンキが塗られ、楽しげで個性的な街並みを港周辺や坂道に沿ってつくりだしている。

この下見板のペンキ色彩にこだわって函館



遺愛幼稚園



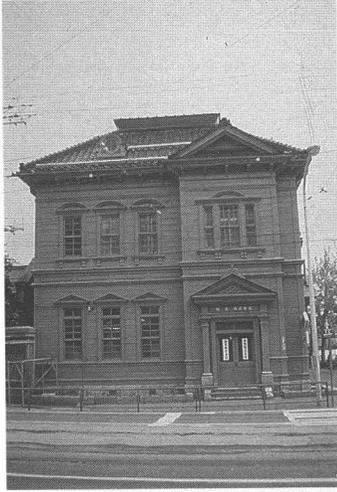
山内邸

の歴史的街並み探索に取り組んだ市民グループに「元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会」がある。グループの活動が始まるきっかけのひとつは1983年に遡る。重要文化財旧函



柳田良造 (やなぎだ りょうぞう)

1950年 徳島県生まれ  
1975年 北海道大学工学科卒業  
1981年 早稲田大学大学院博士課程修了  
1983年 柳田石塚建築計画事務所  
1993年から公益信託函館色彩まちづくり基金「函館からトラスト事務局」を担う。CG活用の都市デザイン、町並みの研究などを行う。



相馬KK



高陽食品



ペンキ塗り作業 小森商店 (明治34年)

館区公会堂が文化庁の綿密な調査のもと、大規模な保存修復工事が行われ、創建当初、明治43年の姿に復元された。建物の修復とともに、外観の色彩も変えられ、それまでの白とピンクの色彩が青灰色と黄色の何とも鮮やかな創建当初の色彩に復元された。これは函館

市民にとっては事件ともいえる出来事であった。明治の洋風文化の建物色彩はなんと大胆で強烈なものなのか。もしかすると戦前の函館には今では及びもつかないようなハイカラな色彩の街並みが形成されていたのではないか。われわれの想像力は大いに膨らんだのである。

またある時、仲間のひとりが歴史的な下見板建築の外壁を観察していて、壁や窓枠に何層にも塗り重ねられていたペンキの層を発見した。過去の時代に塗られた色が外壁のペンキ層に今も残っている。「この古い下見板に残ったペンキの層は時代の色を証言する歴史の生き証人ではないか」。この仮説を実証的に明らかにしようと、西部地区の住民や公務員、建築家などからなる元町倶楽部のメンバーがトヨタ財団主催の「身近環境を見つめよう研究コンクール」に応募したことが函館街並み色彩学研究のスタートとなった。

色彩調査に関しては素人集団である元町倶楽部のグループは文化財保存の技術者として、当時ハリストス聖教会の修復事業で函館に滞在していた麓氏を訪ねた。麓氏を指導教師に、洋風下見板建物の下見板や窓枠に塗られたペンキの層を分析するサンドペーパーをつかった「こすり出し」手法を伝授してもらった。その手法はまず荒い目のサンドペーパーをつかって、ペンキの層を表面から下の木地の部分までこすっていく、すると塗り重ねられたペンキの塗膜が削られて次々と表面に出てくる。次に目の細かいサンドペーパーをつかって削ったかたちを整え、最後にスポンジの水できれいに表面をぬぐう。するとペンキの層が樹木の年輪のようにくっきりと下見板や窓枠の中に浮かび上がる。その何とも不思議な色彩の年輪をペンキ色彩を通して時代、環境、生活の様相を表すものとして「時層色環」と名付けた。「時層色環」はいわば偶然の産物にすぎないが、建物毎に顔をもち、そこには建物とともに生きてきた人たちの思いがまつ

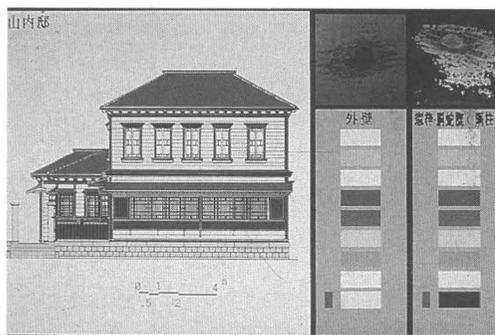
ているように思えたのである。

次に調査はペンキ見本と照らし合わせながら、「時層色環」各層の色を記録し、さらに色彩補正用のカラーチャートと一緒に写真をとり、最後は補修用のペンキで表面を元の色彩に合わせて塗り戻し、一連の作業が完了する。函館で収集した「時層色環」は全部で85棟分である。分析の結果「時層色環」のペンキの層は最も多い建物で21層もの層があらわれ、平均でも8～9層のペンキ層が現れた。その層の数と建設年代から、ペンキの塗り替えは多いもので数年に一度、平均で10年程度に一度の割合でペンキが塗られていることがわかった。ペンキの色彩は一つの建物でも、めまぐるしく変化し白、グレー、黄色、緑、青、ベージュ、茶、と様々な色彩がつつぎと変化していくものがあった。後に「こすり出し」調査はアメリカのボストンやサンフランシスコ、神戸の異人館群にも遠征していくことになり、それらの分析から函館のようにめまぐるしく色彩が変化する「時層色環」はかなり珍しいということがわかってくる。しかし当時は建物のペンキ色彩とは塗りかえ毎にこんな変わるものだというのに、驚ているばかりであった。

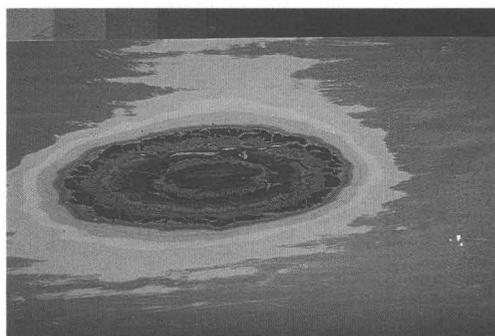
分析作業はさらに、ペンキ材料の化学分析や建物所有者やペンキ業者などへのヒヤリングによるペンキ各層の時代判定とCG（コンピューター・グラフィックス）による色彩シ

ミュレーション等から、85棟の建物の層毎の色彩をベースにした明治から現代に至る時代の街並み色彩の変遷年表をつくる作業に取り組んだ。また色彩の変遷年表をまとめた時代の区切りごとに地図にプロットし、場所と時代から色彩の特徴がつかめるような資料もつくった。それらの一連の分析結果から、函館の下見板に塗られたペンキ色彩からみる街並み色彩は表に示すように、●白の時代の〈明治〉、●多色の時代の〈大正・昭和初期〉、●迷彩色など暗色の時代の〈戦時中〉、●パステルカラーの時代の〈戦後〉、●塗り分けの時代の〈現代〉と、5つの時代区分とその時代色が読みとれることがわかってきたのである。

函館の街並み色彩変遷の要因は戦前までの、建築様式の変化、ペンキの輸入品から国産化、戦争などの歴史的背景に起因するものと、戦後の油性塗料から合成樹脂塗料などのペンキ製造の技術の変化、アルミサッシやトタン屋根、サイディングの普及など建物自体の改造に係わり変化したものと大きく二つの背景をもつ。特に後者の建物自体の改造が函館の「時層色環」が大きく変化する要因の一つといえよう。つまり屋根、窓、壁など、当初に比べ意匠が大きく変わった場合、色彩もオリジナルなものから離れ、時代毎の流行などの要因を受けやすかったといえるのである。ボストンや神戸の例では、外観意匠の変化のない建物は、色彩変化の幅も小さく、そのサイクル



コンピューター・グラフィックスによる色彩シミュレーション  
山内邸（大正11年）



もっとも多くの層（21）の「時層色環」伴田商店所有建物（大正5年頃）

表-1 函館の町並み色彩の変遷とその要因

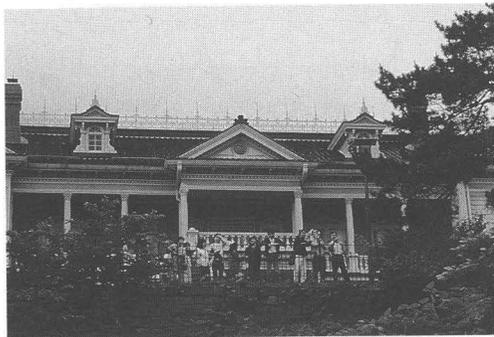
【時代区分】	【町並みの基調をなすペンキ色彩】	【色彩の具体的内容】	【色を決める要因】
●明治 (M30代～T7)	白	外壁に白あるいはグレー、窓枠などに濃い色あるいは逆に白、の組合せ	ペンキの材料限定(白ペンキ、輸入品) 建築様式(classic revival)
●大正、昭和初期 (T7～S9)	多色 (dark & rich)	建物全体に濃い色を使用 色相は黄土色、茶、青、緑、赤など 多様	ペンキの材料供給増大(国産化発展) 色の自由な選択、遊びの気分
●戦中 (S9～25)	戦時色 (暗色)	濃いグレーか濃茶の暗い色 (ペンキが塗られずに放置、クレオ ソート・イカの油、迷彩色)	統制経済によるペンキの材料入手困難 戦時の色彩規制(防空法)
●戦後 (S25～57)	パステル・カラー	薄緑色と淡いピンク色	米国進駐軍の影響—新しい価値観 建物自体の改造—様式の変容 ペンキ材料技術の発展—油性塗料から 合成樹脂(アルキド樹脂)塗料へ
●近年 (S57以降)	塗り分け	地域的な塗り分け—元町大三坂周辺 のピンク色と弁天町周辺の緑色 建物自体のめりはりのきいた塗り分 け—外壁に淡いアイボリー、ピンク、 窓枠・柱型などに濃茶、濃緑	場所の特性の表現—ピンク色：遺愛幼 稚園他スクールカラーの波及、緑色： 港の船舶の色の影響 建築装飾の再評価—おしゃれ心、遊び 心、個性化

も函館のようにめまぐるしいものではないのである。

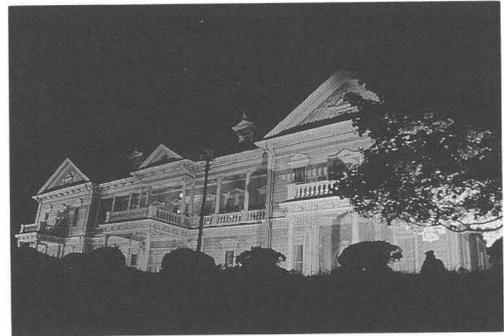
### 自己表現としての街の色彩

一方、そういう様々な時代背景や変化の要因のなかで、実際の色彩選択は住民の手で

のようになされてきたのか、もう一つの興味深いポイントであった。地域の建物所有者の色彩への関心は高く、ほとんどの場合色彩の選択は自ら決めているということがヒヤリング調査からわかった。色彩の選択は、「港をイメージする明るい色として」、「公会堂や学校などの有名な建物にあこがれて」など場所や



公会堂



公会堂の夜景(明治43年)

建物のイメージから選ばれた場合や、「娘がいるのでピンクのかわいらしい色を選んできた」、「建物の輪郭を白くして建物を大きくみせたい」など家のイメージを表現したものとか、「塗り替えは向かいや隣と一緒にし、色も同じもの」、など隣近所との関係で選んだもの等、様々な視点から環境との関わりの中で色彩を考えていることがわかった。一般の住宅地でよくいわれる、汚れが目立たない色、落ちついた色、飽きのこない色等の消去法的な発想で色が選ばれることがほとんどなのである。ピンクや青、緑、黄色など一般の住宅地であまり使われない色彩も函館の歴史的建造物に塗られると実際実に映えるし、楽しい街並みをつくりだす。函館の街の風景の中では、ペンキ色彩はささやかだが、楽しい自己主張の表現となっているのである。かつては塗装業者がペンキ缶を自転車に積んで街中を巡り、外壁の塗装が痛んでいる建物を見つけると塗り替えを進めて回っていたという。手づくりで住民たちが街の色彩を考え、つくりだしていく条件もまた備わっていたのである。それは、ある高齢の女性の「私はこの家に嫁入りした時の建物の色をよく憶えている。・・・20年前、周辺にピンクの建物が多くあり、自分もピンクが良い色だと思ったのでそれを塗ることにした。ピンクの色は気に入っているので今後もピンクを塗ろうと思う。」という言葉に象徴的に表されている。

従来の街並み色彩の考え方は、地域の土、植物、空、海、山などの自然環境そのものの中に見いだされる色や、風土の中から建築の素材、例えば瓦（土の色）、白木（木の色）、漆喰（石灰の色）にみられる色などーこれを「自然色」と呼ぶーをベースとし、それに対して色彩科学の発達の中からうみだされたマンセル、オスワルト、スペンサーらの「科学色」、この「自然色」と「科学色」の2次元的な関係で決定される調和論の世界であったといえよう。それに対し函館の街並み色彩の変

遷のなかから読みとれるものは、歴史的条件や環境などの地域の文脈の中で、個人によって自己表現として選択されている色彩の世界があるということを確認できたものといえよう。

ペンキが単に建物を保持する道具ではなく、人々が意志を表現する道具でもあるということがわかってきたのである。まわりと調和して生きたいとか、公会堂の色にあこがれてとか、動機はそれぞれにあらうが、そこに人々の自己表現が見えてきたのである。ペンキの色彩にこめられた地域にすむ人々の街への思い、色彩に託した楽しい自己表現のあり方は我々の函館の街に対する再発見をもたらしたのである。

## まちづくり公益信託「函館からトラスト」

函館・街並み色彩研究は1991年トヨタ財団から研究コンクールの最優秀賞を受け、研究奨励金2000万円を獲得することになった。この研究の意味は、建物の色彩にこめた地域にすむ人々の街への思いやささやかだが楽しい自己表現のあり方といったものに加え、住民が街を守り、環境向上の努力を進めていくうえで、自分たちの手で街の環境を実体的に発見し、自ら働きかけを行うことが如何に重要であるかを認識したことであった。この認識をさらに発展的にまちづくりを進めていくために、新しい仕組みである「まちづくり公益信託」を活用し、函館独自の市民まちづくり方式をつくれないうことになった。2000万円を公益信託の基金に活用して、街並み色彩に代表される魅力的な函館の歴史的環境を今後も安定した地域の生活基盤としていくべく、市民が市民のまちづくり活動を支援する仕組みをつくりだそうというものであった。

そして2年の準備をへ、1993年7月「公益信託函館色彩まちづくり基金」（愛称を「函館

からトラスト」という)が誕生した。それはまちづくり公益信託制度のなかで、特に市民運動が委託者となって設定されたものとしては全国でもはじめての試みであった。

公益信託とは基金を委託者から受託した信託銀行が財産を運用し、収益を公益事業に提供する制度である。同様の目的で財団法人を設立するよりも、事務機関の必要がないことや基金の規模が小額でも成立できるなど、委託する側の負担が軽いというメリットがある。受託者の信託銀行は主務官庁への申請をはじめ、財産管理、助成金の給付など運営全般に係わる事務をおこなってくれる。

しかし信託銀行はまちづくりの専門知識や地域の情報をもたないし、信託報酬の範囲内では活動内容も限定されるので、活発な活動を行おうとすれば、やはり、しっかりした事務機関の確立ということが課題となる。函館の場合では西部地区のまちづくり運動を担ってきた住民、都市計画や公益信託などの専門家のボランティアによる「函館からトラスト事務局」を信託銀行を補佐するかたちで設立し、助成先の公募事務や、助成団体への情報提供やアドバイスを、基金のニュースレターの発行、報告会の開催、募金活動等、基金を運営、支援する様々な活動を機動的に行う体制をつくりだした。一方、基金の顔として、助成先の検討や基金自体の基本方向の決定では運営委員会も公益信託では大きな役割を担っている。

この信託銀行、運営委員会、からトラスト事務局の3者から構成される「函館からトラスト」は具体的に5つのからにこだわって、市民まちづくりを支援していこうと考えている。

#### ●函館のカラーにこだわる

函館のカラー(色彩や地域の歴史文化)にこだわった街並み、まちづくりを支援する。

#### ●函館からの発信

市民の活動要求を育て、市民まちづくりの

活動の輪をひろげていく。

#### ●からくち(辛口)の情報

口あたりのいい話題ばかりではなく行政、市民にとって辛口の内容や言いにくい事を自由に言い合える場として。

#### ●カタリスト(触媒)としての「から」

基金に関係する人々、活動のカタリスト(触媒)として機能する「函館からトラスト事務局」と情報媒体としての機関誌「から」の発行。

#### ●目に見える成果から

助成活動を通して実際の環境に、目に見える成果を着実に積み上げていく。そのことを通して、市民、行政、企業等の基金への評価を高めていく。

## 市民まちづくりへ

1993年末に最初の助成活動がスタートして、約2年がたつが、その間、計8件の市民まちづくり助成がおこなわれている。それらは例えば、次のような活動であるが、函館での市民まちづくり活動の多彩さを改めて認識させるものである。

#### ●歴史的な下見板建築のペンキ塗り替え活動

基金誕生の発端ともなっただけに、下見板張りの町家のペンキ塗り替えは94年と95年活発な活動として、建築学科の学生グループに地域の住民が協力する体制で行われている。ペンキの塗り替えによって街並みに影響を及ぼすには、1軒だけでなく複数のまとまったリニューアルが効果的である。予算の関係で1軒しかできない場合は、隣が塗り替え予定のある建物を選び3軒連続効果をねらったり(94年)、今年は工業高校の学生のボランティアの参加もあり、次第に街並みのレベルでの建物ペンキ塗り替えに、活動が広がりつつある。ペンキ塗り替えは最初「こすり出し」による色彩分析にもとづき、コンピューター・グラフィックスによるシミュレーションで、

塗り換えの色を建物の持ち主と一緒に考えることから始まる。作業は夏の週末の2日間に一気に行われるが、最後に足場が外された時、風化した外壁と街並みが、見違えるように輝く瞬間が出現する。ペンキ塗り替えの対象となる歴史的な下見板建築は、行政の外観修復への支援策のある指定物件外の建物であり、観光とも縁のない普通の生活の舞台である。地区の過半を占めるこの普通の生活の舞台は急速に高齢化、老朽化が進行している。ささやかな活動ではあるが、ペンキ塗り替えが地区の忘れられようとしている建物へ、お年寄りの所有者が若いボランティアに刺激され、もう一度愛着を取り戻す契機を生み出しつつある。

その他にも、●市民の足となっている市電車両のペンキの塗り替え活動や、●衰退した商店街の再生へのプランづくり、●市民による函館の観光施設と街並みの景観調査、●奥尻地震で大きな被害を受けた歴史的建造物（旧海産商同業組合会館）の修復事業、●元町地区の古い住宅地での住民と一緒に地域の生活環境を考えるワークショップの開催など、様々な活動が展開されている。また「函館からトラスト事務局」も自主事業として、神戸のグループとの共同での神戸の異人館地区のペンキの色彩調査やアメリカからの建物修復とペンキ色彩の研究者の講演会を開催したり、元町倶楽部のメンバーによるローカルFM放送を使つてのまちづくり講座「じろじろ大学」のようなものも開かれている。

いずれも助成額は1件あたり20万円前後と少額であるが、年2回開かれる夏の間報告会と3月におこなわれる最終報告会では、各活動団体とも非常に中身の濃い活動を発表し、出席している運営委員や事務局のメンバーを驚かせることも多い。

従来市民のまちづくりというと、なにか切実な課題や反対運動につきうごかされ、やむにやまれず立ち上がるというタイプの活動が

多かったが、まちづくり公益信託からうまれつつある市民の活動は市民サイドで自主的にまちづくりのテーマを設定して市民が自ら考えて楽しみながら行動する、能動的かつ非義務的な活動が特色のように思われる。能動的なまちづくり活動では、助成額はたとえ少額でもそれが呼び水となって、満足できる成果がでるところまで、自主的に活動を展開していくケースが多いのである。問題はその呼び水と、困った時などに相談に乗ってくれる相手や情報ネットワークが用意されていることが重要なのである。市民の自主的な活動の受け皿として、財政面やノウハウ、情報提供の面からまちづくり公益信託が地域で機能する可能性がそこにあるように思う。

本来「まちづくり」という言葉は、地域に住む市民が中心となって、行政やデベロッパーと対等な関係をもって、市民にとって暮らしやすい街の整備や開発を行つていこうという意志をこめた言葉である。そういう意味では函館は「まちづくり」に独特のスタイルをもった街である。函館山の麓、西部地区と呼ばれる地域で、ここ数十年おこなわれてきた歴史的環境をめぐる「まちづくり」は、お上意識、公共依存の都市開発に対し、市民の知恵とアイデア、臨機応変の動きがいかにか街を面白くできるか、その実験場であったように思う。「函館からトラスト」というまちづくりの仕組みが、この「まちづくり」の伝統をさらにおもしろく発展させていけるかどうか、地域にどれだけ根付いていけるかにかかっているとえよう。

街は生きているのだから、変わつていって当然だ。再開発の波は函館の街にも押し寄せている。今後も街並みの変化がペンキを塗り替えるように、街の主役である人々の手で行われるような「まちづくり」を我々は望みたいのである。

# 飛驒高山の歴史・文化・観光・まちづくり

(社)飛驒高山観光協会会長 蓑谷 穆

## 飛驒の地名の由来

飛驒は東に乗鞍岳を中心とする北アルプス連峰、西に白山、南に御岳、北に立山の峰続きと四方を三千メートル級の山々に囲まれた海のない国である。〈日本美の再発見〉で有名なドイツの建築家、ブルーノ・タウトが「飛驒はスイスカ、さもなければスイスの幻想だ」といみじくも言ったように、飛驒は豊かな自然に恵まれ、山河美しく、また細やかな暖かい人情で知られている。

飛驒の名前は、飛驒（日本書紀・公益俗説解）、斐太（万葉和歌集西大寺資料）斐陀（国造本記・大宝賦役令）、卑田（旧事本記）、比太（和名類聚抄）、飛駄（国名風土記）等々、諸書まちまちである。このように用字は同一ではないが、その呼称はいずれも「ひだ」である。昔、宮廷用の木材を馬に運ばせたら飛ぶように走ったので、飛駄、或いは美しく織りなす山々の巖からとったとも言われている。

史書に出てくる最初は、成務天皇の5年（135年）天火明命の九世の孫、大八椅命が飛驒国造に任ぜられた事である。つづいて仁徳天皇の65年（377年）、頭が一つで両面があり、軀は一つで4本の手足を持ち、力強く、早業で、左右に剣をさし、4本の手で二つの弓を同時に使う両面宿禰という怪物が天皇に背き、難波根子武振熊に平定させたと日本書紀に載っている。

## 古代～室町時代—飛驒の匠

高山市をとりまく飛驒地方には、先住民族が生活したいくつかの遺跡があり、石器時代の火炉のある数多くの住居跡や古墳がある。石器や土器などもたくさん出て、これらの埋蔵文化も多くあり、飛驒は歴史の宝庫とも言われている。

大化の改新（645年）によって新政が施かれ、国司がおかれるようになり、国に大、上、中、下の4等があり、飛驒は下の国であった。これ以来、飛驒は俗に言う下々の下国として位置づけられ現代にいたるのである。最初の国司は上道正道で、天平神護元年（765年）に任ぜられている。また、租、庸、調の税制が制定された。

[今に生きる匠の技—飛驒の匠ここにあり]

飛驒は貧しく、租、調が免ぜられ、その代わりに都の造営に、飛驒の工が労働力を提供した。50戸毎に匠丁（大工）8人、厮丁（食事の世話人）2人ずつ出し、これを出さない家では10人分の食糧



蓑谷 穆(みのたに たかし)

高山市生まれ  
昭和57年 飛驒高山観光協会会長に就任、現在に至る  
昭和58年 飛驒地域地場産業振興センター専務に就任、現在に至る  
昭和62年 岐阜県観光連盟副会長に就任、現在に至る

平成3年 高山商工会議所副会頭に就任、現在に至る

を出している。飛驒全体では、100人、時には300人も男子が奈良の都に狩り出されたわけで、これがいわゆる飛驒の匠である。

この制度は室町末期まで500年も続いた。中には苦役に耐えかねて飛驒に帰らず、妻子も捨てるという逃亡者も出るに至った。こうした匠たちが各地で妙技をふるって飛驒匠の名を挙げる事になったのは皮肉な事であるし国外流出による過疎化の走りであったともいえる。

天平13年(741年)には聖武天皇の詔勅によって、諸国に国分寺が建てられる事になったが、飛驒国分寺は天平18年(746年)に建立されたと伝えられている。もちろん飛驒の匠が建てたものである。しかし昔の広大な寺域や七重の塔は伝説によって知るのみで、今は町の真ん中であって境内も狭く、三重の塔にその昔の面影を偲ぶばかりである。

この頃つくられた万葉集には飛驒の歌が幾つかあるが、代表的な一首に「かにかくもものはおほはすひたひとのうつすみなわのたたひとみちに」がある。

## 金森時代—まち・みち・ものづくり— 城下町の経営

今日の高山の町の形が作られたのは16世紀末の天正13年(1585年)越前大野の城主金森長近が羽柴秀吉の命を受け、飛驒を攻略平定し、翌天正14年(1586年)飛驒侵攻の戦功によって秀吉から飛驒国3郡24郷414ヶ村、3万3千石に封じられ、高山城の築城、町づくりにとりかかった時に始まる。

金森長近は、最初織田信長に属し、続いて豊臣秀吉につき、関ヶ原の合戦では徳川家康の東軍に属し、戦功によって飛驒で5千石を加増せられて3万8千石となり、さらに美濃上有知などで1万8千石を加増された。

戦いに明け暮れた長近も、おそらくこれが

最期の地であろうと城下町の経営に腐心する。高山城の築城には前後16年を要している。山城と平城を兼ねた御殿風の優雅な城であり、その後、天領となったとき、加賀藩によって取り壊され、今ではその面影を残すものは石垣のみとなっている。昭和63年(1989年)加賀藩の詳細な取り壊し記録に基づき30分の1のレプリカが復元され、高山市民文化会館2階ロビーに展示され市民の注目を集めている。

また、当時の戦国武将がそうであったように長近も京都指向の非常に強い武将であった。

### [まちづくり]

高山市内の真ん中を流れる宮川を京の鴨川になぞらえ、東山一帯に民衆教化のため寺院を集めた寺屋敷をつくり、城に続く高台(現在高山市役所のある付近)に侍屋敷をつくり、下町に町人屋敷(現在も古い町並みとして残っている上一之町、上二之町、上三之町、下一之町、下二之町、下三之町など)をつくり、整然とした碁盤の目のまちづくりがなされた。

長近は、城下町の経営と並行して、社寺を建立したり、再興している。血なま臭い戦場の修羅場を駆けめぐってきた長近にとって、神仏は心の拠り所であったのだろう。長近の宗教に対する施策はそつなく巧妙であったが、晩年は自ら仏門に帰依する程に信心深かった。

関ヶ原合戦を最後に高山城は可重に譲り、禅三昧、茶三昧の日々を過ごし、85年の生涯を終えた。

### [産業振興—木材・地下資源の開発]

長近が領国経営のために最初に着目したのは、飛驒の豊富な山林資源であった。山中の住民には木材を伐出させてこれを年貢に替えたのみならず、かなりの手当を施している。長近はまた鉾山の開発に

も意をつくし、飛騨の各地で採掘に成功し、このため金森氏は富裕でこれによって種々の産業を興した。

### [街道一みちづくり・商業の振興]

飛騨の諸口道路を開き整備したのも金森時代である。国境や国内の枢要の地には口留所が設けられ、通行人の出入りを改め、運上口役銀を徴収した。その数は31カ所であった。伝馬制度も考えられ、飛騨の産業発達が図られた。また、城下町の繁栄のために商業政策を重視し、いろいろ施策を打ち出し保護して商業の発展を図ると共に、養蚕にも力を入れこれを奨励した。

この長近時代に総ての基礎づくりがなされ、以後6代107年間にわたり、今日の飛騨・高山がつくられたと言っても過言ではない。

一族からは茶道の宗和流開祖金森宗和やせいすいしゅう〈醒睡笑〉で落語の始祖として知られているあんらくあんさくでん安楽庵策伝など、多仕済々の人を輩出している。

### [いまに受け継がれている伝統的工芸品—春慶塗]

飛騨高山の伝統的工芸品である春慶塗も金森時代につくられている。慶長年間(1596年～1614年)第二代ありしげ可重の時代、城下の造営を行っていた時、大工棟梁の高橋喜左衛門がたまたま割った樫の批目の美しさに目を止め、これで盆を製作、可重に献じたところこれが宗和(茶道宗和流の開祖)の目にとまり、御用塗師成田三右衛門に木目を活かした塗りに仕上げさせたのが飛騨春慶のはじまりといわれている。

## 天領時代

元禄5年(1692年)7月28日、六代金森より頼とき峯は突然幕府より出羽国上ノ山(山形県上山市)へ移封を命ぜられた。その後、飛騨は明治元年(1868年)まで177年間、徳川幕府直轄の天領となった。幕府が飛騨を天領とした理由は、莫大な金・銀・銅・鉛・硝石に代表される地下資源、豊富な森林資源を得るためだったと言われている。下々の下国の民は貧しかったが資源は豊富であった。

### [天領の民—飛騨の連帯感—飛騨は一つ]

この天領政治が飛騨人に与えた影響は大きく、領民は他領に対し常に天領の民であるという優越感を持ち、現在の一市三郡十九ヶ町村当時の四百十四ヶ村には同じ釜の飯を食っているという一国意識が生まれ、現在まで続いている。

頼峯が移封された上ノ山はかみのやまは俵高三万石の無城の地であるからひどい左遷といえよう。金森頼峯は、数百人の家臣とその家族を引き連れ新しい領地に入った。頼峯を始め家臣・家族は住む城も家もない任地であって山林の検地をはじめ城下町づくりに専念、多額の経費を費やした。上ノ山にいたること5年にして元禄10年(1697年)には、またも美濃国八幡藩(飛騨に隣接する郡上八幡)に転封になり、宝暦8年(1758年)頼錦よりかねのとき除封された。転封につぐ転封は幕府が外様大名を取り潰す時の常套手段である。頼錦のあとは交代寄合となったらしい。絶家といってもその祭祀は絶えず、ほとんど諸候同一の家格を保ち得たのであるから、他の改易大名と比べると幸せといえようか。

金森氏が上ノ山に転封したあと、元禄5年ただ(1692年)8月18日、関東郡代伊奈半十郎忠篤あつが飛騨代官の兼務となった。しかし高山城在藩は金沢藩主前田綱紀が命ぜられ、金沢藩

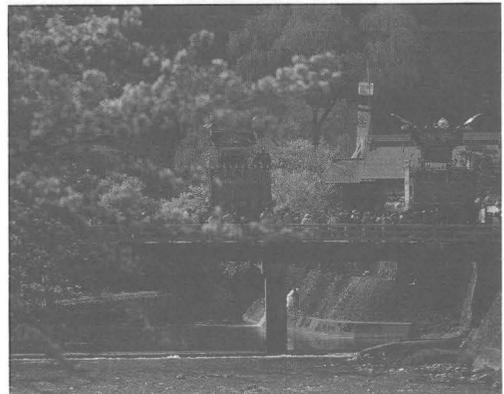
にとって高山在藩は苦勞の種であったようである。御役御免を幾度かにわたって嘆願し、ついには在藩出費に耐え兼ねて高山城の破却を願ひ出ている。「御入用の節は、何時なりとも元どおりに復する」という一札を入れていると言われている。飛驒高山に古くから伝わる盆踊りの一節に、「飛驒の高山お城の御番、勤めかねたよ加賀の衆が」とあることからもうかがい知ることが出来る。

飛驒の初代代官は、先にも述べたように関東代官としても著名な伊奈半十郎忠篤で、飛驒代官を兼務している。以後二十五代まで高山陣屋あるじの主は、江戸から旗本が来ることになる。

[大原騒動—百姓一揆]

第十二代の大原彦四郎つぐまさ紹正の時、検地を強行したために百姓一揆が起きたが、結果は百姓側が磔、獄門以下9千数百名の犠牲者を出すという完全な敗北であった。これに比して代官側は、彦四郎が布衣郡代に昇格、10万石の格式を持つようになるという恩賞にあずかっている。十三代の大原亀五郎正純は彦四郎の子でこのときにも秕政が原因で騒動が起き、百姓側が死罪1人であったのに対し、代官側は亀五郎が解職の上、八丈島に流罪になったほか、打首2人、追放28人など、それぞれ処罪を受けている。この親子24年にわたる百姓一揆を大原騒動と呼んでいるが、山深く耕地も猫の額ほどしかない土地にしがみついていた百姓の執念は、ついに悪郡代に勝つたのである。

こうした暗い歴史もあったけれど、飛驒・高山には豊富な地下資源、山林資源があり、天領であったために、大名支配地からみれば平均的な税制であったことも起因して、町人が栄え、豪商が続出した。金森時代より受け継がれてきた文化も花開き、おまつりも盛ん



春の高山祭屋台と赤い中橋

になってきた。

[春・秋の高山祭の起源]

春の祭ひえの日枝神社は、天正の末、金森長近が高山城を築くとき、その鎮守を願ひ旧片野村の山王社さんのおうを勧誘したものである。高山城の南麓に造営された日枝神社は杉の巨木に囲まれて深厳な神域を今に伝えている。山王祭の起源は定かでないが金森時代には既にあったようである。秋の高山祭の桜山八幡神社や八幡祭の起源もはっきりしない。伝えによるとこの社の創建は仁徳天皇の時代(5世紀初期)という。様々な荒廃を経て元和9年(1622年)金森三代重頼しげよりが城北の守護として再興した。

金森氏移封後は両神社、お祭りとも一時衰えたようであるが、幕府から派遣されてくる代官・郡代が何かと保護し、崇敬し、まつりを奨励したこともあり、加えて町人の財力も豊かとなり、動く陽明門と言われる屋台が出来るのである。

[高山祭の華 屋台のおこり—文化・工芸の粹]

屋台についての記録は、享保3年(1718年)の八幡祭が最も古い。天領になって

からは江戸の文化が急激に流れ込み、屋台の形式も江戸山王まつりのそれを模して発達したものとされているが、飾りものや金具類は京都から入っているの、東西両文化の影響を受けていると言えよう。文化(1804年～1817年)・文政(1818年～1829年)時代と世を挙げての爛熟時代、高山の屋台も頑丈なものから優美なものに変わっていった。しかし、高山の屋台がその当初、江戸のそれを規範としていたことは確かであろう。がそれにとどまらず、安永頃、(1771年)から京都の影響を受けて変化し始めた。つまり、高山の屋台は江戸文化の系譜をふみながら、瑤珞、伊達柱、御簾、御所車、からくり人形に至るまで京風になって行くのである。と言っても江戸振りがなくなったわけではない。高山の文化の特色は東西文化を併存させたところにあるようである。江戸風から京風に移行するにあたっては大原騒動からにわか台頭してきた高山の豪商(旦那衆)達の意向が大きく介在していた。もともと高山の人々は京志向であった。飛騨の匠が京文化を持ち帰って以来の伝統であろう。こういう系譜につながる豪商達が江戸から移入された屋台に触発されて、こぞって屋台をつくり始めた。均整のとれた建築美、精巧な彫刻はこの時代の所産である。その後も間断なく改修が行われ、明治中期には再び黄金時代を現出し、今日の屋台を残すに至っている。代官や郡代は常にまつりを奨励し屋台を保護しているが、それは貧寒瘦土の地にあつて、ともすれば欲求不満が爆発しそうな民心を、春・秋2回の祭によってエネルギーを発散させたのであろう。後年高山が生んだ刑法学者牧野英一東大名誉教授は、ふるさとのまつりを偲んで情緒豊かな詩を詠んでいる。

「おまいりの人等うつくし御旅所の宵

のまつりのはなの灯かげ」  
「竜神のまひの楽いま破になりて春風  
に花の一つ二つ散る」

〔いまに受け継がれている伝統的工芸品—  
一刀彫〕

天領時代に完成されたものに一刀彫がある。飛騨の銘木一位の美しい木目とノミのタッチをたくみに活かし、江戸末期松田亮長が独創的な技術で今日のものに作り上げた。その源は、遠く大化の改新の頃の飛騨の匠の技に遡るが、高山祭の屋台にもその見事な彫りが残るなど、飛騨の匠の伝統と芸術は現代に受け継がれ、伝統的工芸品として今日に生きている。

歴代の郡代の中で二十一代目の小野朝右衛門高福は、弘化2年(1845年)江戸御蔵奉行から飛騨郡代に転任した。山岡鉄舟の実父である。山岡鉄舟の本名は鉄太郎、高福とその後妻磯(鹿島神宮の娘)との間に天保7年(1836年)6月10日江戸で生まれた。第五子で、後に山岡家の養子となったが、10歳の時一家と共に高山陣屋に来て、17歳まで陣屋に在住、文武に励んだという。

書は岩佐一亭(現在その末裔は高山市で開業医)に学んだ。岩佐一亭は、一つの文字を3年間続けて練習、1日に3合の墨汁を決めて使う努力を重ねる事10年に及ぶという書家であった。鉄舟も努力の甲斐あつて、15歳の10月、師一亭から弘法大師木道五十二世を免許され、一楽斎の号を与えられた。書家鉄舟の誕生である。禪は13歳頃の高山時代、大灯国師の遺誠を読んで感動し、高山の宗猷寺住職に教えを受け、その後各地の各僧に参禅した。剣の道を志したのは9歳の頃で、始めは真影流を学び、次に北辰一刀流を修め、45歳になって一刀流の正統を次々と共に、無刀流を開いた。嘉永4年(1851年)9月25日母を

亡くし、翌5年2月28日父の郡代を亡くし、高山東山の宗猷寺に墓所を定め両親を葬り江戸へ帰った。

慶応4年(1868年)3月、鉄舟33歳男盛りの鉄舟は官幕両軍の中に入り、西郷隆盛を静岡に訪ねて隆盛を説得、朝礼4箇条を拝受、江戸救済の道を開く一方、徳川家の安泰にも大きく寄与した。この鉄舟の平和を愛し、民の幸せを願う心は少年期の高山時代に培われたものと言われている。

#### [高山陣屋—歴史的意義]

史跡に指定されている高山陣屋は、金森藩の向屋敷であったもので、初代伊奈氏以来、高山陣屋は天領支配の中心となった。樽葺きの門の大扉には、大原騒動の時、農民に刺された番卒の血痕が染み込んでいる。明治になって高山県・飛驒県庁舎を経て、県飛驒支庁舎、郡役所となり昭和になって飛驒地方事務所、昭和44年(1969年)まで飛驒県事務所となっており、天領時代から数えて277年間、高山陣屋は飛驒の政治の中心であった。その後、元の姿に復元して保全され、全国で唯一の陣屋として飛驒・高山の大事な観光資源であると共に国の重要文化財となっている。



高山陣屋

## 明治維新—飛驒の夜明け

二十五代目の郡代、新見内膳正功になって明治維新を迎えた。慶応4年(1868年)1月、東山道総督府の鎮撫使竹沢寛三郎が飛驒にくると聞いた新見郡代は、すぐさま対策を協議し、その結果、25日に高山陣屋を脱出し、雪の野麦峠を越えて江戸に逃れ、177年間にわたる飛驒の幕府直轄天領時代は終わった。郡代を失った地役人達は、飛驒入りした鎮撫使竹沢寛三郎に再雇用の歎願書をつくり、天朝に奉公することを誓った。

武士であって武士でない中途半端な身分であった地役人にしてみれば自分達を見捨てた郡代=幕府に何の義理もない。そんなことよりも地役人という役職を失う方が大問題である。町人達に誇示した地役人としての体面を捨てて、彼らは竹沢鎮撫使を迎えたのである。新見郡代といい、地役人といい、この変わり身は見事と言うよりほかない。

2月4日竹沢は、高山陣屋に入り、翌日、門前に「天朝御用所」の高札を立てた。御一新政治はここから発足した。竹沢が高山陣屋に入ってから40日目の3月13日、竹沢は解任され京都に戻された。維新と共に飛驒は飛驒県となり、すぐ高山県と改められた。

#### [梅村騒動—変革に戸惑う飛驒の民]

その初代知事に、尊皇攘夷に青春をかけた熱血漢の水戸浪士梅村速水という27歳の若き知事が着任した。その若さと情熱は旧制度を一挙に打破しようと精力的に改革を行った。孝子節婦に賞を与え、開墾・灌漑用水の新設を推進し、能力ある人材は身分の低い者でも要職に登用した。しかし、旧体制の身分制度には抜きがたい壁があった。町人は家持ち、店借り、地借りがあったし、百姓には本百姓、門屋、家抱、水呑みなどがあり、その家の格式を保持することによって地域の秩

序を保っていた。例えば家持ちや本百姓は村役人になれるとか、冠婚葬祭に袴が着れるとか、次男以下が分家して出来た門屋は如何に田畑を増やしても、村内における発言権はなかったとか、村の掟は厳しかったのである。また江戸時代の地図を見ても屋敷割には家持ちの名だけが記入されて、店借りや地借りは誰が住んでいたのか解らない。その古い秩序に対して挑戦した梅村に大きな誤算があった。矢継ぎ早に出される改革案に飛驒人はついでにゆけず騒動が起きたのである。やっていること自体は正しいとしても、保守的な飛驒という風土で、長い間に亘って培われた飛驒気質というもの知らな過ぎたという若さと、政治的未熟さからきた誤算である。着任以来1年、失政の罪に問われて江戸の牢に収監されたが、明治3年(1870年)29歳の若さで獄死した。梅村騒動は大原騒動と共に飛驒の二大騒動と言われ新しい飛驒が生まれるための大きな陣痛であった。

「我もまた同じ浮き世を歎くかな  
君がむかしを思ひくらべて」  
梅村の絶句である。

梅村失脚後、宮原積が高山県知事となり、梅村が進めた諸施策を廃し、漸進主義的な態度で県民に臨み、騒動後の安定に意を注いだ。明治4年(1871年)11月、府県廃合令により、高山県は廃止され、北アルプスを境に隣接する信州松本地区と筑摩県となり、明治9年(1876年)8月、飛驒3郡は岐阜県に編入され管轄となった。明治22年7月(1889年)高山は町制を施行し、更に昭和11年(1936年)11月市制を施行した。平成8年(1996年)は、飛驒が岐阜県に編入されて120年目となる。

## 鉄道の開通と市制施行

### 〔高山本線全通が高山市に及ぼした影響〕

明治25年(1892年)飛驒に鉄道敷設の運動が始まった。高山町と飛驒3郡の有志が集まり、以来息の長い運動が始まった。当然電話も自動車もない時代、その先見性と努力に対して敬服するばかりである。

明治から大正へと時代も移り、27年後の大正8年(1919年)5月岐阜<sup>かがみがはら</sup>～各務原間が着工、順次北へと工事は進んだ。一方、富山方面からは大正13年(1924年)6月、飛越線として、富山～田刈屋間が工事に着工、山また山の合間を縫っての工事は幾度か困難に遭いながらも克服、昭和9年(1934年)7月、高山・飛越線連結軌条納め式によって、岐阜～高山～富山間の工事は完成、その名称も高山線・飛越線を1本化して高山本線となり、試運転を重ねながら同年10月25日、高山駅の開業と同時に一番列車が走り、飛驒がようやく全国各地と結ばれた。明治25年に運動を始めて以来42年の歳月を経ての完成である。高山町民、沿線住民はもとより飛驒人の喜びは筆舌に表しがたく、飛驒始まって以来の夜明けであり、5日間にわたって祝賀行事が行われたという。高山本線の全通により、過去閉鎖的であった飛驒・高山に、経済・産業・教育・文化はもとより総ての面に新風が送り込まれ、その後の飛驒・高山の発展に果たした役割は計り知れないものがある。

1994年(平成6年)は高山本線全通60周年を迎え、祝賀行事として多彩なイベントを展開、とりわけ飛驒人の心を打ったのは、JR東海、JR西日本のご協力により、飛驒高山～飛驒古川間を25年振りに走ったSLであっ

た。たくさんの観光客をお迎えすると共に、多くの人々に郷愁とロマンを与えた。

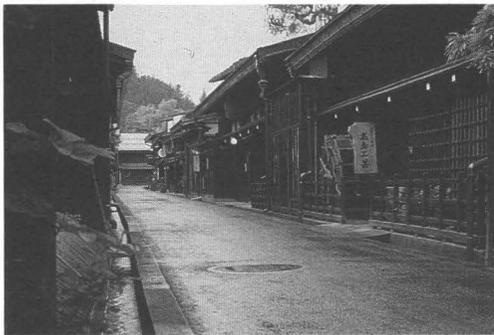
[高山町が高山市に]

昭和11年(1936年)11月、高山は高山町(人口22,488人、戸数4,810戸)と大名田町(人口8,369人、戸数1,930戸)が合併し、全国131番目の市として市制を施行した。こうして高山は新しい時代の道をたどるのである。平成8年(1996年)高山市は市制施行60周年の節目を迎え、懸案の市庁舎も完成し、21世紀に向かって新しく第一歩を踏み出す。

## 観光都市飛騨高山

飛騨高山の観光の歴史は古い。天領時代に多くの文人、画人、僧侶、商人が飛騨を訪れると共に、高山陣屋への代官、郡代、その家族、役人とそれにまつわる人々が多く訪れている。高山本線が全通した昭和9年、高山が市制を施行した昭和11年、当時の新聞を見ても現在と同じ目標の「産業と観光の町づくり」と大きく出ている。

戦時中、陸軍航空研究所が、乗鞍山頂でなら3千メートル上空でのエンジンの試験が可能だということで工事を進めた乗鞍道路に、太平洋戦争が終わって昭和23年7月、一番バスが走った。その後、昭和20年代、30年代は



古い町並

春・秋の高山祭、夏の乗鞍岳、槍、穂高・北アルプス連峰への登山基地として、観光客は年間20万人~30万人であった。

一方、豊かな資源を誇る飛騨の木材集散地として栄えた高山も戦後の乱伐が大きく災いして木材資源は枯渇し、変わって付加価値を高めるべく飛騨の匠の技を活かした木工・家具産業が盛んとなった。昭和40年代(1965年~)に入り、昭和35年(1960年)頃より始まった高度経済成長に、交通体系の未整備もあって取り残された飛騨地域は、「豊かな自然」と物質文明に押し流され、忘れ去られた「人の心」が飛騨人の暖かい心として残り「日本人の心のふるさと」として大きくクローズアップされ、昭和45年(1970年)国鉄のディスカバージャパン・キャンペーンにより観光地として飛躍的に発展した。

それまで年間20万人~30万人だった観光客も昭和45年には60万人、翌46年には100万人を突破し、昭和48年(1973年)第一次石油パニック、昭和54年(1979年)の第二次石油パニックにも影響されることなく伸び続け、昭和55年(1980年)には200万人の大台に乗り、平成2年(1990年)には250万人の観光客の入り込みとなった。

しかしながら、ここ2、3年は急速に進む国際化、円高の中、産業・金融・情報の空洞化に加え、観光の空洞化も進み、政治の混迷、景気の低迷ともども非常に厳しい状況に置かれている。

現在の高山市は人口6万6千人、工業生産高904億円、農業生産高約80億円、観光による直接収入約387億円、波及効果約903億円(高山市の調査では平均2.33倍)と大きく成長・発展した観光は市域経済になくてはならない産業となっている。

## 21世紀へ向かって

以上、わが飛驒高山の歴史的経緯を要点のみ記してきた。飛驒高山が観光地として全国に認知され、全国よりたくさんの観光客をお迎えしている原点が、遠くは、古代から奈良、平安時代を経て、戦国、江戸時代と移り変わる中、歴史・伝統・文化・伝承芸能・祭・屋台・味・古い町並み、加えて人情をかたくなまでに守り、育み、その時代、その時代に合った新しい血を入れ創造してきた結果である事をご理解いただければ幸いである。

空港も、港も、新幹線も、高速道路もない飛驒・高山ではあるが、現在鋭意工事が進められている東海北陸自動車道、そして長年の飛驒人の願いであった首都圏へ向けての出口であり、信州松本地区とを結ぶ安房トンネルも1995年（平成7年）5月貫通し、供用開始は1997年（平成9年）秋の予定と工事が順調に進み、それを受けての、中部縦貫高速自動車道も一部では工事着工となり飛驒地区でも用地買収・工事着工と進み、21世紀初頭には高山を中心として縦横に高速自動車道が走る事となる。

飛驒・高山にとっては、金森侵攻（金森時代）、徳川幕府直轄（天領時代）、高山本線全通（昭和）以上の大きな影響があると思われる。人口の首都圏への一極集中が進む中、地方にあっては高齢化、少子化、過疎化が猛烈なスピードで進行し、飛驒・高山もその例外ではない。

21世紀が「物から心の時代」「心にゆとりの時代」であり、21世紀の初頭に日本の人口がピークを迎え、高齢化社会であるとするならば、社会の仕組みは今のままではあるべきはずはなく、価値観も大きく変化するであろう。

飛驒で生まれ、飛驒で育った飛驒人は「次の世代に残すふるさとづくり・町づくり」に英智を結集し、豊かな自然、歴史、伝統、文化を守り、創造し、育み、「人と人との出逢

い、ふれあい」「もてなしの心」を大切に「生活文化のある心豊かなふるさと」としたい。

### （参考・引用文献）

- 「飛驒歴史散歩」  
加藤 恵 著 創元社
- 「飛驒の系譜」  
桑谷 正道 著 日本放送協会
- 「安吾新日本地理」  
坂口 安吾 著 河出書房新社
- 「飛驒金森史」  
元高山市郷土館長 丸山 茂 著  
高山市（財）金森顕彰会
- 「飛驒天領史」  
元高山市郷土館長 丸山 茂 著  
高山市山岡鉄舟顕彰会

# 地方都市浜松市の戦略

浜松市企画課 鈴木将史

## はじめに

JR浜松駅を降りると、新しい浜松市のランドマーク「アクトタワー」(高さ212m、地上45階建て)が悠々とそびえ、音楽の街を象徴するかのようにカリヨンの音が鳴り響き静かに時を告げている。

浜松市に最近訪れた皆さん方は、まず駅周辺の変貌ぶりに驚かれることであろう。

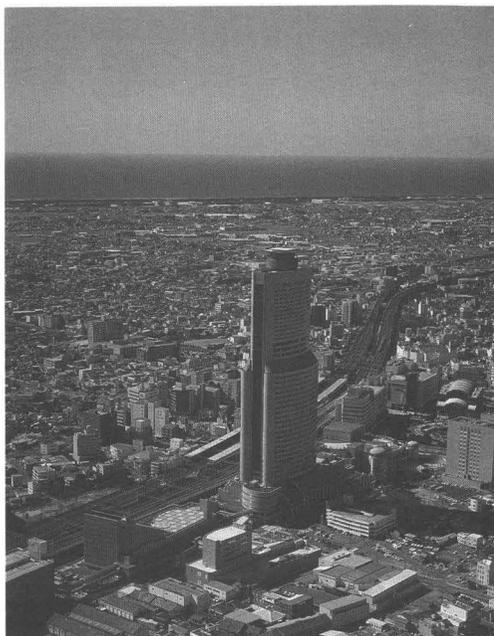
駅前の16バースのバスターミナルを核として、高層ビルと緑が一体化したアクトシティをはじめ、都心地区のオアシス空間となるフォルテ(第三セクターによる都市施設)、さらには、都市型ホテルや商業施設が相次いで整



バスターミナル 夜景

備され、これらの施設がアクアモール、ギャラリーモール、サンクンプラザ・サンクンガーデンなどの快適な歩行者動線で結ばれている。

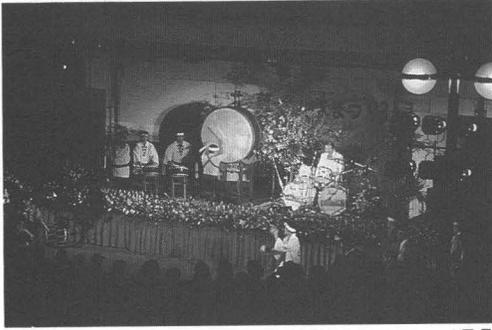
土曜日、日曜日ともなると、思い思いのファッションを楽しむ若者達や家族連れで賑わい、街角ではプロムナードコンサートや街角コンサートが開催され、クラシック、ポピュラー、ジャズなどの様々なジャンルの音楽が流れ、都心ならではの賑わいの空間が演出されている。



アクトシティ全景・空撮(アクトシティと遠州灘)

## 鈴木将史(すずき まさし)

昭和25年7月15日生まれ。  
浜松北高、青山学院大学経営学部に進み、昭和49年浜松市役所に入所。  
農政課を経て、昭和58年企画課に異動し、現在企画課企画係長。  
この間、主に浜松市総合計画の策定に携わる。



花夢音はまつイベント風景

## 街づくりの歴史

浜松市の街づくりは、戦後の戦災復興事業とともに始まったと言っても過言ではない。人々は、持ち前の「やらまいか精神」（まず何でもやってみようという浜松地域の方言）で、焦土と化した戦災の傷跡から立ち上がり、水を引き、道路を造り、家を建て、やがて、街には灯りがともり、街路樹が植えられ、都市の復興への確かな歩みが始まった。

都市再建の槌音が高らかに鳴り響く中、浜松大空襲を受けながらもひん死の状態が残ったたった3本のプラタナスの木に、市民自らの手で水をかけ、肥料を与え、見事にこの木を甦らせたといった逸話がある。

このプラタナスの木を「市民の木」として命名した。後に、こうした市民の緑を守り育てる心の原点が高く評価され、緑の都市賞を受賞している。

また、焼け残った兵舎や公会堂で音楽会が開催され、多くの市民に心の安らぎと明日への希望を与えた。

やがて、中心商業地が形成され、都市としての様相を次第に整えたのとあいまって、昭和25年には「浜松こども博覧会」を開催し、戦禍から立ち上がった浜松市を全国に力強くアピールした。

昭和30年代の後半から40年代にかけて、東西交通の大動脈となる東海道新幹線、東名高

速道路が開通したのをはじめ、国道1号バイパスの建設や都市計画道路の整備が進み、現在の都市の骨格が形成されていった。

こうした都市の成長とともに、高度成長時代を経て、楽器、オートバイ、繊維の3大産業の隆盛期を迎え、産業都市として飛躍的な発展を遂げるとともに、全国的にもその地位を不動のものとしていった。

そして、昭和54年には、市民の長年の悲願であった東海道線高架事業が完成し、また、昭和60年には市街地を南北に走る遠州鉄道西鹿島線の高架事業が完成し、南北交通、東西交通の円滑な流れの確保と市域の均衡ある発展に大きく貢献していった。

この東海道線の高架事業とあわせ、浜松駅周辺土地区画整理事業を並行して実施し、JR浜松駅北口広場の整備をはじめ、商業業務機能の集積を進めるとともに、貴重な公共空間を確保していった。

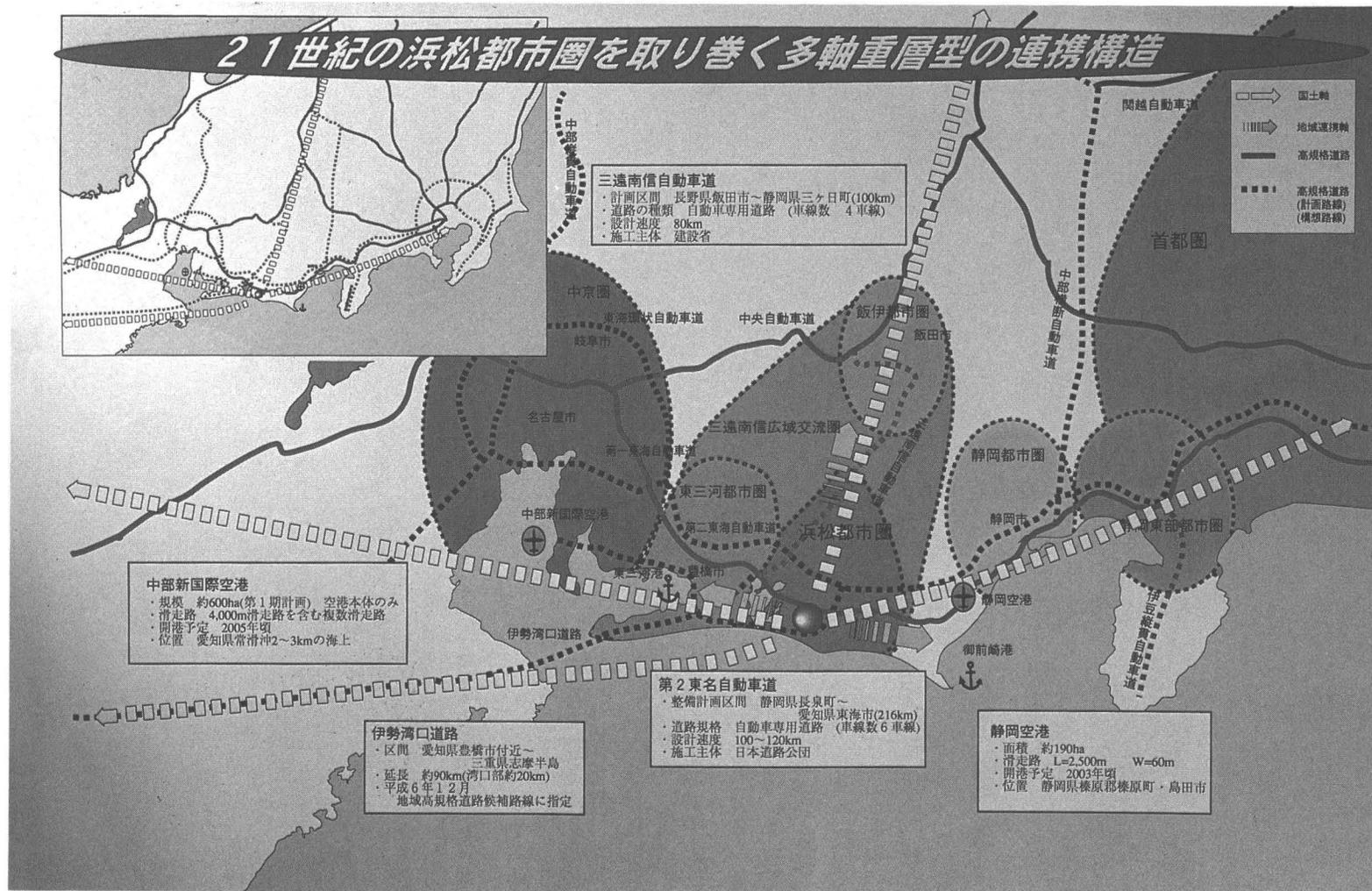
こうして生み出された土地とその高度利用が図られたからこそ、浜松地域テクノポリスの都心部における交流拠点となり、また、音楽文化・産業文化の高次な都市機能の集積拠点となるアクトシティの建設として結実したのである。

この駅周辺の整備を契機として、市民の街づくりへの気運は大いに盛り上がり、音楽の街づくりなど浜松らしい文化が芽生え、新しい産業が育ち、21世紀を展望した都市づくりへと繋がっていった。

## 21世紀への都市づくり

国際化・情報化の著しい進展等を背景として、人々の生活行動領域はますます広域化・多様化し、一人ひとりの地域住民が日常的な諸機能から高次な都市機能に至るまで、必要に応じて自由に選択できる環境が求められており、地方都市とその周辺地域の一体的な振興発展を図っていくためには、既存の行政区

## 21世紀の浜松都市圏を取り巻く多軸重層型の連携構造



交通体系図(21世紀の浜松都市圏を取り巻く多軸重層型の連携構造)

域や広域市町村圏を越えて様々な機能を分担し合う地域連携軸の形成が極めて有効な地域戦略となっている。

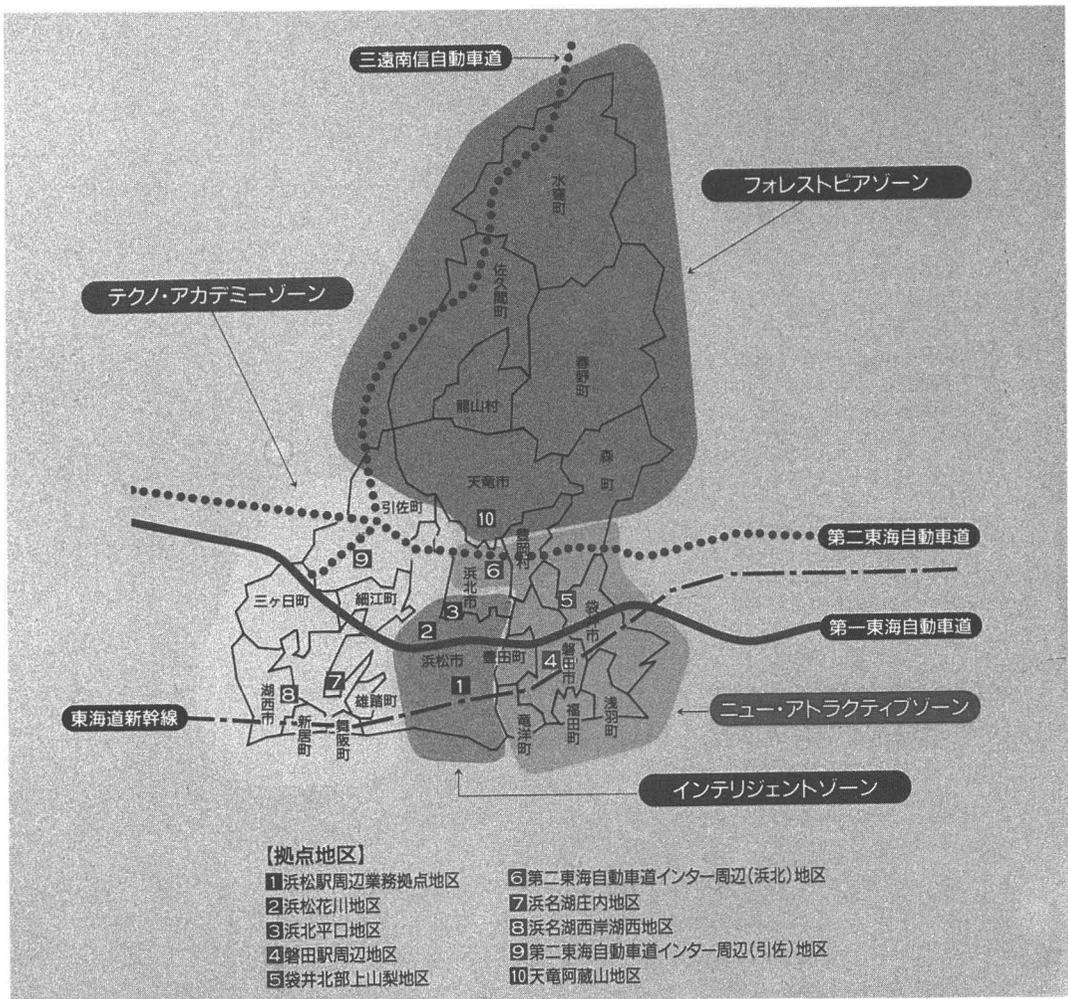
こうした中、今、浜松市に求められている広域的な役割と使命は、政治・経済、教育・文化、商業・業務、情報などの様々な高次都市機能が集積する浜松100万都市圏、さらには三遠南信200万広域交流圏の真の中核都市として飛躍していくことであり、また、これら都市圏・広域交流圏の一体的な振興への主導的な役割を果たしていくことである。

浜松市では、第3次浜松市総合計画新基本計画において、「個性ある浜松経済圏・文化圏

の創造」を都市圏創造のコンセプトとして明確に位置付けた。

そして、「高度な産業技術が集積する都市」「人、物、情報が交流する都市」「世界の音楽文化が薫る都市」を21世紀に向けての都市づくりの戦略として掲げるとともに、浜松地域テクノポリス構想をはじめ、国際コンベンションシティ構想、音楽文化都市構想、さらには、アクトシティを中心とした浜松駅周辺の整備等々、21世紀を展望した様々なプロジェクトを推進し、その全容も次第に明らかになってきている。

これらのプロジェクトは、都市のアイデン



拠点図(4つのゾーン)

ティティの確立やイメージアップといった視点とともに、従来の都市人口を対象とした都市政策というよりも、むしろ都市圏のスケールメリットや交流人口を意識した新しい都市戦略としての位置付けができるであろう。

### 〈アクトシティの建設〉



アクトシティ 全景 空撮(アクトシティと中心市街地)

アクトシティは、本市将来の発展を展望し、東海道線高架事業にはじまる一貫した都市づくりのもとに、官民一体となって総力を上げて取り組んできたプロジェクトであり、4半世紀に及ぶ長い年月をかけて集大成したものである。

JR 浜松駅に近接する交通至便な位置に立地し、浜松地域テクノポリス構想、国際コンベンションシティ構想、音楽文化都市構想の都心部における推進拠点として、また、産業文化の複合的な交流拠点として建設したものである。

いわば、2次産業を中心とする生産都市としてのイメージが強い浜松市を、これまで培われてきた生産力に加え、音楽文化や産業技術の交流から新たなビジネスチャンスや都市文化を創造し、消費都市・文化都市への展開を図ろうとする意図をも有している。

このシンボルとなるのが高さ212メートル、地上45階のアクトタワーであり、ホテルオークラをキーテナントとして、インテリジェントオフィス、専門店・飲食店などの商業施設



アクトシティ 大ホール

が配置されている。

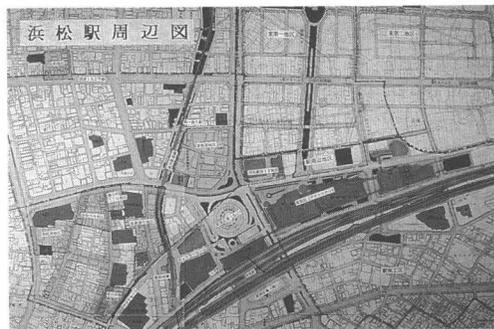
また、アクトタワーを中心に据えて、本格的なオペラや大型コンベンションの開催が可能な2330席の4面舞台を備えた大ホールや音楽専用の中ホールをはじめ、コンgresセンター、展示イベントホール、楽器博物館、研修交流センター、立体公園などが整備され、イベント・コンベンションの開催を通じて国内外からの多くの人々が訪れ、高層ビルと緑が一体化した新しい交流拠点となっている。

このアクトシティの完成を契機として、浜松の女性のファッションが変わり、何となく美しく感じるのは私の気のせいなのだろうか。

### 〈東地区土地区画整理事業の推進〉

アクトシティの北側に連担する約50ヘクタールの都心地区の再生が東地区土地区画整理事業である。

東地区は戦後間もなく形成された既成市街



浜松駅周辺図

地であり、うるおいのある都心型居住空間や災害に強い街づくりとあわせ、官公庁街区などの行政ゾーンをはじめ、マルチメディア時代を展望した地域情報センターの建設、さらには都心型の商業・業務、教育・文化、アミューズメントなどの高次都市機能の集積を目指している。

そして、これらの都市機能の集積が進み、アクトシティから流れる都心の賑わいがシンボル道路に展開し、アクトシティと新市街地、さらには既存の中心商業地が一体となった時、本来の意味の都心の拠点性が生み出せるのであろう。

しかしながら、これらの開発の多くは、民間活力を導入した市街地再開発事業等により成り立つものであり、昨今の経済環境を鑑みれば、長期的な展望のもとでの諸機能の集積はやむを得ないところであるが、本市の産業構造の柔軟化や真の中核都市としての飛躍発展へのシナリオづくりには欠かせないプロジェクトである。

こうした観点からも、静岡県西部地方の22市町村のエリアが地方拠点都市地域に指定され、東地区をオフィス機能の集積を目指す業務拠点地区として位置付けたことは誠に時宜を得ており、今後の事業推進に一層拍車がかかることを期待したい。

#### 〈音楽文化都市構想の推進〉

「世界の音楽文化が薫る都市」は、都市のアイデンティティの確立やイメージアップといった観点からみれば、極めて重要な都市戦略であると言えよう。

もとより、まちづくりの原動力は「プライド・オブ・プレイス（地域の誇り）」を持つことにあり、それはまた、地域固有の資源を見つめ直し、それに文化的付加価値を与えることにほかならない。

音楽文化都市構想は、ヤマハ・カワイに代表される本市の伝統ある楽器産業の土壌と活

力を生かしつつ、市民レベルから世界レベルに至る多様な音楽文化交流やイベントを展開し、音楽を通じた市民の豊かな感性や創造性を培い、都市型のライフスタイルを提供するとともに、個性ある都市文化の創造を目指すものである。



楽器博物館外観

その推進拠点となるのがアクトシティと静岡県音楽公園（計画段階）であり、施設面ではいずれも国内ではトップクラスの機能を備えており、ハイレードのオペラ・ミュージカルなどの公演や音楽創作活動が地方都市で可能となった。

街角に様々なジャンルの音楽が流れ、気軽に音楽が楽しめる街。世界から音楽が集まり、新しい音楽文化や音楽産業が生まれ育つ街。

それが、本市の目指す音楽文化都市構想のイメージであり、都市のアイデンティティの確立や魅力ある都市環境の創出に大きく寄与するものと考えている。



プロムナードコンサート

具体的には、市民レベルの音楽団体の育成や地域音楽教室、プロムナードコンサートの開催、さらには国内外の様々な音楽との出会いの創出や音楽を通じた交流を市民と一体となって進めている。

また、浜松国際ピアノコンクールやブザンソン国際青年指揮者コンクールの開催をはじめ、ポーランドのワルシャワ市・イタリアのサンレモ市と音楽文化友好交流都市協定を締結し、ショパンフェスティバルやミュージックシティ・フェスティバルの開催など、国際的な音楽イベントや文化交流事業の展開を図っている。



ショパンフェスティバル

平成6年11月20日、アクトシティで開催された「第2回浜松国際ピアノコンクール」は成功裡のうちに静かにエピローグを迎えた。

出場申し込み者数は49か国2地域の340人、延べ入場者数も1万人にのぼり、コンクールのレベルの高さはもとより、運営面、待遇面でも高い評価を得た。

ことに、楽器生産都市としてのバックボーンをいかんなく発揮し、練習会場には高級ピアノがセットされるとともに、市民の協力を得ながらホームステイも行われるなど、出場者には満足のいく環境が確保され、大変な好評を得ることが出来た。

平成7年4月に開催されたブザンソン国際青年指揮者コンクール、7月の第7回世界吹奏楽大会においても、浜松国際ピアノコンクールで培われたノウハウを生かし、市民・企

業・行政が一体となって事業展開を図り、成功を収めた。

浜松市の都市づくりの歴史は浅く、世界の音楽文化が薫る都市づくりも未だ緒についたばかりである。

そして、いつの日かアクトシティから巣立った若き音楽家が世界の檜舞台に立った時、音楽文化都市浜松が世界に情報発信されるであろう。

## おわりに

右肩上がりの神話は崩壊し、地方都市においては、都市そのもののあり方を改めて見直さなければならない時代が到来している。

かつて、公共交通機関が主たる人々の移動手段であった時代、市域の中心といった物理的な立地条件と交通の結節点といった優位性によって集積してきた商業機能(特に百貨店)やアミューズメント機能(映画館、パチンコ等の娯楽施設)は、今、大きな時代の転機を迎えている。

モータリゼーションの発達により、郊外型の量販店やコンビニエンスストアで生活における必需品や個人個人の嗜好にあった相当程度の物を容易に手に入れることが出来るようになり、しかも、混雑した都心部へのアクセス道路を回避することができることから、時間距離の短縮にもなっており、贈答品等の一部を除けば、今や消費の主導権は完全に郊外型の店舗へとシフトしている。また、コンビニエンスストアなどの24時間営業もユーザーにとっては大きな魅力となっている。

こうした傾向は、ファミリーレストランやそば屋などの飲食店の郊外立地にみられるように既に昭和40年代の後半から50年代の前半に始まっている。

このように、従来型の百貨店をはじめとする商業施設や娯楽施設は、都心部における賑わいの演出の絶対条件とは言えなくなりつつ

あり、その存在の必然性も次第に薄れてきているのではなかろうか。

都市の魅力は賑わいであり、賑わいが、また、新たな都市型のライフスタイルや都市文化を創造し、経済活動を支えていくものである。

若い女性をはじめ、人々は、何を求め、何に期待し、都心に集まってくるのであろうか。そのための都市の装置はどのようなものが必要なのか。改めて問いただすことから始めなければならない。

平成7年7月、西武デパートが2年を目途に郊外へ移転するというショッキングなニュースが街に流れた。

浜松市は今、都心地区50ヘクタールの土地区画整理事業を実施しており、これを都心再生のための千載一遇の機として捉え、今一度原点に立ち返って21世紀の浜松を創造していくことが必要であろう。

人口56万5千人を擁する地方都市浜松市の挑戦は続く。

# 町づくりの系譜

## —足助町—

足助町観光協会 縄手雅守

### 1. はじめに

足助町は愛知県の北東部に位置し、自動車の街豊田市と境を接する、人口1万人余りの山あいの町である。足助から豊田市までは約20キロ、岡崎市へは約30キロ、名古屋市へは約40キロと、大都市の近郊に立地している。面積は193.27平方キロ、県下88市町村の内7番目の大きさである。

人口は昭和35年頃の1万7千人を最高に減少を続け、微減ながら今なお続いている。高齢化率が23.5%（H7、9現在）と、全国平均の14.01%（H6、10現在）、愛知県平均の11.7%（H7、4現在）のそれを大きく上回り、対策が急務となっている。また、就労人口の60%余りはトヨタ自動車関連を含む豊田市への通勤サラリーマンとなっている。

明治23年に町制を施行し、100年たった今なお町のままであることも珍しい。

足助は、古くは、三河・尾張地方と信州や美濃方面とを結ぶ交通の要衝、物資の交流の中継地として栄え、中でも三河湾で採れた塩を矢作川に沿って九久平あるいは古鼠（ふっそ）というところまで川船で運び、そこからは馬の背に積み換えて足助の宿（しゅく）まで運んだ。足助からは山が険しくなるため、塩俵の詰め替えを行い信州塩尻へと運び出した。そのため、信州方面ではこの塩を、「足助塩」「足助直し」というブランドで取引したそうである。天保時代には塩問屋が14軒あったといわれる。

そうした商家の町並みが今でも約2キロほ

ど残り、町の歴史的遺産として、住民自らの意志で動態保存が図られている。

### 2. 町づくりことはじめ

足助町はもみじの名所として知られる香嵐溪のある町である。この香嵐溪は決して天与のものではない。足助の町づくりは、香嵐溪づくりにあったといっても過言ではない。

香嵐溪のもみじの始まりは、寛永年間（1624～1641年）の頃に香積寺第11世住職参



香嵐溪の紅葉。約4000本のもみじがある。



縄手 雅守(なわて まさもり)

昭和25年 福岡県生まれ  
昭和45年 立教大学入学  
昭和49年 同大学卒  
(社)日本観光協会入協  
昭和60年 同協会退職  
足助町観光協会入協  
現在に至る

栄本秀禪師が、般若心経を唱えながら杉や檜とともに、もみじを植えたのが始まりとされている。

明治期以降この参道のもみじを『香積寺のもみじ』として親しみ、紅葉狩りなどを楽しんでいたといわれる。これがもととなって、大正末期から昭和の初期にかけて一大住民運動が起こった。

大正12年、香積寺の建つ飯盛山一帯を森林公園として開発し、町民の憩いの場を造ろうという考えが、青年有志グループから発案された。これをもとに、行政が施策として取り上げ、飯盛山周辺の整備が始まった。このことに前後して、青年団では風致向上部を組織して、一般町民に桜やもみじの購入資金の募金と協力を訴え、巴川の兩岸に桜の大増植を行った。そして、青年団、在郷軍人会、一般町民等の勤労奉仕によって、飯盛山に登山道が整備された。翌年その登山道に電灯がとりつけられ、山頂には休憩所や飲食店が開設された。

こうして、自らの知恵と力によって切り拓いていく、足助方式のまちづくりの第一歩が踏み出された。

昭和5年、それまで「香積寺のもみじ」として親しまれてきた景勝地に「香嵐渓」と命名された。

『飯盛山からの薫風は、香積寺参道の青楓を透して巴川を渡り、香ぐわしいまでの山気を運んでくる。山気とは、すなわち嵐気也』この言葉は香積寺36世住職・藤本真良和尚が「観光30年のあゆみ」に寄せられた稿の一節であるが、香嵐渓命名のいわれを見事に表現している。

9年には、時の町長の提唱によりもみじの成木移植を保勝会を中心に住民協力の下で行い、翌10年、飯盛山の町有林の杉の一部を伐採し、もみじと桜の植栽が行われた。当時の杉・檜は山の大事な換金木、桜やもみじは単なる雑木で、その植生変更には大変な困難が

あったと当時を知る人は述懐されていた。

戦後にもいち早く足助町観光協会を復活させ、観光産業の振興に取り組んできた。

昭和39年、日本が高度成長に入る頃、足助においてもそれに呼応するがごとく、空き家が一軒、また一軒と出始めた。山村からの人口流出の前触れである。こうした家屋に目をむけ、山里が後世に残し伝えなければならないもの、あるいは山里の心の豊かさとは、はたまた山里の風景とは何かといった、今日直面する問題を、もうこの時既に自問自答し、廃屋民家を移築して通年営業の鮎料理店を始めた5人の集団が現れた。「民芸料亭一の谷」の仲間たちである。職業は清涼飲料製造、薬屋、魚屋、飲食店、酒店という全くの異業種の集まりであった。協業体制による事業、茅葺民家の導入は後の開発方法や三州足助屋敷のあり方にも大きな示唆を与えた。



茅葺屋根が美しい“一の谷”の春

### 3. 町並み保存

昭和45年、過疎地域対策緊急措置法により足助町も過疎地に指定された。かつて在郷町として大いに賑いを見せていた足助町民にとっても大きなショックであった。

この頃南木曾町の妻籠では、かつての中山道の宿場町を復元することによって、新しい観光地として大いに脚光を浴び、賑いを見せ

ていた。当時商工観光係長の小沢庄一さん(現教育長)は早速妻籠へ足を運び、妻籠の中心的リーダーの小林俊彦さんを訪ねた。

小沢さんは、このあとの三州足助屋敷や福祉センター百年草の建設にも関わる中心的な人である。

これ以後というもの、まさに東奔西走、妻籠の再生に関わった太田博太郎東大教授を招いて講演会を開いたり、マスコミへのPRを図ったり、町民への町並み概念の啓蒙を図った。この頃、町並み保存という概念はまだ一般的ではなく、むしろ、古い町並みは発展の妨げになるという考え方が主流であった。

こうした運動の結果、50年10月に約30名の者が集い、『足助の町並みを守る会』を結成した。会長には田口金八さんを選んだ。田口さんは永年町の教育長を務めた人で、江戸時代から続く商家に住まい、温厚な人物として人望が厚かった。住民運動の舵取り役としてうってつけの人物であった。

守る会では早速、町並みの映画会の開催や会の考え方を示したチラシを作成して、各戸へ配布したりして、できるだけ多くの住民の理解と会員の獲得に動いた。

51年5月、朝日新聞記者石川忠臣さんが足助町を訪れた。石川さんは後の『全国町並みゼミ』の生みの親ともいわれ、町並み保存運動に力を尽くした人である。そして同月、商工会の総会后、守る会の懇談会を開催した。当時のメンバーには、城戸久名城大教授、飯田喜四郎名大教授、内藤昌名工大教授、小寺武久名大教授、石川忠臣さんらが名を連ねた。そして『町のまま86年—開発なきを開発とするの発想が、町の蘇生に結びつくか!!』の印刷物を配布し、議論を戦わした。

7月には「足助のあすを築くために一生きるに値し、住むに値する地域とは何か—」をテーマに、宮本常一武蔵野美大教授(民俗学)、河野健二京大教授(経済学)、西山卯三京大名誉教授(建築計画)らを招いてシンポ

ジュウムが行われた。

こうした盛大な講演会の合間にも妻籠宿への視察、あるいは妻籠の小林さんを招いての町並み再生の具体的な研究会、広告看板のデザイン研究会など、様々な勉強会が行われた。圧巻だったのは牛車に乗せて町並みを回る「えっちゃんのもうもう牛車」だった。えっちゃんとは牛飼いの人の愛称であるが、これがマスコミに大うけし、町並みの宣伝効果としては絶大なものだった。

こうして53年4月、有松と足助で第1回目の『全国町並みゼミ』が開催された。万事が金のない過疎の町のこと、住民の心意気と手づくりのもてなしによって、初めての全国規模の町並みゼミが盛会裡のうちに終わった。このゼミの参加者に浦辺鎮太郎さんがおられた。浦辺さんは倉敷の街並み整備やアイビスクエアーの設計者として知られる建築家である。

町並み保存の機運としては最高潮に達していた。そして、伝統的建造物群保存地区選定へと傾いていく。

町サイドでは、この頃から重伝建選定へ向けて、条例等の整備の研究が成されていた。担当部局も産業観光課から教育委員会へと移されていた。「保存計画」「条例施行規則」「補助金交付要項」などの試案がまとめられ、守る会へ検討を依頼した。

55年7月、足助の町並み保存問題打合せ会が教育委員会の主導によって開かれた。保存条例制定のための案等も整い、気運も十分成熟しているのに、今一つ条例制定に至らないもやもやしたものが感じられていた。住民は町並み保存の価値を十分知り尽くしながらもそこにかかる規制への息苦しさを拭い去ることができないでいる。また町においても修復等に係わる財政的負担に耐えることができるかどうか、両者の底にある問題が真摯に語られた。これらの結果、条例制定による規制を見直し、重伝建選定への方向を変更し、自主



足助川に沿う中馬街道



町並みの一郭マンリン小路

的な規制による保存を図ろうということになった。

保存運動が後退したかに見えるが、しかし、守る会が果たした役割は大きい。例えば、取り壊されて駐車場になる予定だった旧銀行社屋を、守る会役員個人が当面、借入金の利子補給をすることで取り壊しにストップをかけた。この建物は、大正元年に建てられた旧稲橋銀行の建物で、地方銀行社屋として貴重な建築物であった。

町ではこうした状況を受けて、55年度に土地建物ともに買収して修復し、57年度に町並み資料館「足助中馬館」をオープンさせた。59年には県の文化財指定を受けた。

また、54年の豊田信用金庫足助支店の改築にあたっては、町並み風情を壊さない建築物



足助中馬館。町並み資料館として保存

をとという要望をした。これを受けて信用金庫では、昔の両替商を思わせる建物へと変わった。この変更によりコストは以前のそれより3割程アップしたといわれるが、地域の中で育つ企業としての英断が、その後の保存運動に与えた影響は大きい。その後、民家の改築等や58年の東海銀行足助代理店あるいは平成元年の足助郵便局改築等においても、町並みの雰囲気壊さない様式のものを取り入れられるようになった。



建て替えられた豊田信用金庫足助支店



建て替えられた足助郵便局

自主規制の道を選んだ足助の町並み保存は、1歩前進半歩後退、2歩前進1歩後退と、紆余曲折を得ながらも、少しずつ前進を図っている。十数年を経過する中で、平成6年度から建設省所管の「街なみ環境整備事業」を導入した。現在小路の整備や郷倉の修復などが進められている。ゆくゆくは町並みの本格的な修復も図られることだろう。

#### 4. 足助の川を守る会

住民運動の会としてもう一つ、『足助の川を守る会』がある。この組織は61年1月に生まれたものだ。会長には高橋秀豪さんが就任した。高橋さんは長い間新聞社の通信員を務めていた方で、持ち前の行動力とバイタリティーで、どこへでもすっ飛んでいき、怖いもの知らずである。

川を守る会では特に町並みを流れる足助川の浄化に力を入れ、会の活動目標として、

- ・川の清掃日を毎月第1日曜日と決める。
- ・台所のゴミや油類を流さない。
- ・浄化槽は定期的に清掃する。
- ・川辺で「もの」を焼かない。
- ・無リン洗剤を使う。

などと呼び掛けた。

4月6日の初めての川掃除の日、約450人の住民が参加し、粗大ゴミや空き缶の回収、河川敷の草刈りなどを始めた。その結果、運んだゴミが軽ダンプに4杯分もあった。最初の

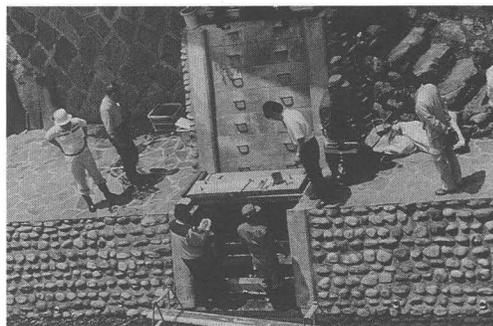


川を守る会の清掃活動

頃こそ古タイヤや壊れた自転車の投棄、その他諸々のものが投げ込まれていたが、1年もするうちに、「どこを掃除してよいか分からない」というほどにきれいになった。

翌年からは川岸にユキヤナギやレンギョウ等が植え込まれ、翌年も、その翌年も計画的に植栽が行われていった。さらには河川沿いだけでなく、小学校や中学校、資料館、お寺等、花木を必要とする地域や施設にも、生活環境の向上という広い見地から配布が行われた。その数は、今日120種、3,815本にも上っている。

その他炭を蛇籠に詰めて川に注ぐ排水溝に沈めたり、天ぷら油処理パックの全戸配布など、水質改善へ向けての運動も行われた。

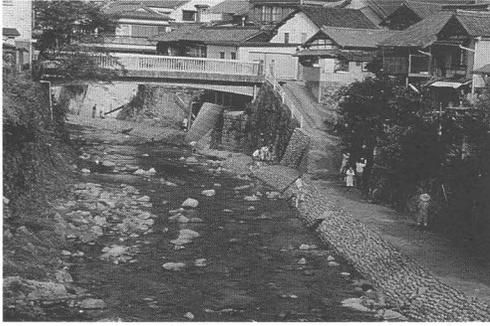


排水溝に蛇籠を沈める作業

62年夏には進士五十八東京農大教授をはじめとする研究室の学生17名がゼミ合宿を行い、翌年、研究報告として足助川修景計画案が示された。これを受けて会では足助川沿いの景観のあり方について研究を重ねた。

また、62年度より県土木事務所等にも働きかけて、足助川の環境整備に着手。護岸の補強を兼ねた親水性も配慮したプロムナードが着々と進められている。本年夏までに全長約2kmのうち8割方まで完成した。

6年3月には本町裏の右岸に「六地藏公園」が整備された。ここは江戸時代には墓地であったところで、手入れもされず雑木や竹・雑草が生い茂り、荒れるにまかされていたこ



整備された河川敷遊歩道

ろである。足助川の浄化と景観整備を願うものにとっては大きな課題となっていた。これも会の意をくんだ町行政の英断によって、公園となったものである。

今年の8月14日、半ば完成したプロムナードと六地藏公園周辺に2,500本の蠟燭が灯された。道行く人はその美しさに見とれ、だれもがこの運動に感謝した。

## 5. 三州足助屋敷の建設

三州足助屋敷について触れる前に、小沢さんの記した論文に触れておこう。53年3月の自治大卒論の『健やかな山の暮しに学ぶ手づくり生業館“三州足助屋敷”の考え方』の中に、「地域のもつ歴史・社会・文化を土台にした土着の個性的な環境や素材を最大限に活用した、村人自身の考え方による開発が大切なことが認識されてきた。」とし、地域の個性を最大限に活用し、自前の開発方式を打ち出している。さらに開発する理念を、「限りない可能性を秘めた村の振興とは何であろうか。ここでは協議の産業振興なканずく間もなくやってくる高齢者社会と観光（従来の物見遊山型、労働再生型でない人間性創造のための文化型観光を20世紀後半の需要とする）を媒体とする社会経済的役割分担論である。」として、きたるべき高齢化社会への対応とそれを活用した観光振興を産業振興の一環として示している。こうした考え方は、三州足助屋敷

の建設のみならずその10年後の福祉センター百年草にも一貫して読み取れる。

老人福祉のあり方では、北欧型の進んだ高福祉型社会に疑問を投げかけ、「社会的弱者や保護を要する年寄りには手厚い愛の手をさしのべたり、それなりの貢献度を認めた後の安定は当然であろうが、画一福祉の弊害や、社会のために尽くそうとする勤労意欲まで奪ったとしたら、期待される老人福祉とはお世辞にもいえない。」と、今日実践中の健康で、生涯現役であることの社会構築の考えがにじみ出ている。

最後には「自前の福祉が確立しようという試みに、経済が結びつかないはずはないと、一層の研究が切望される」と結んで、いかなる場合にも独立採算を目指す小沢イズムが発揮されている。

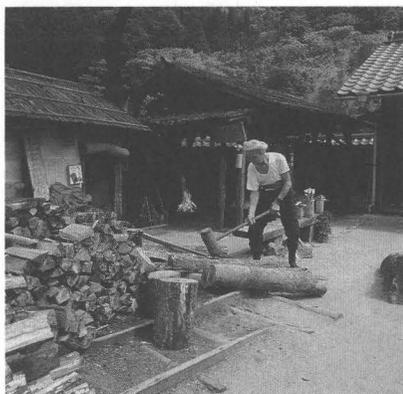
前置きが長くなったが、足助屋敷について、簡単に触れておきたい。

足助屋敷は、55年4月に香嵐溪の一郭にオープンした生きた民俗資料館である。この設計には大阪の浦辺設計があたった。以後、浦部設計との関わりは、足助町公民館、福祉センター百年草と続いていく。

さて、この施設は、約1,000坪の敷地に、かつてはどこの町や村でも行われていた手仕事—例えば、機織りや鍛冶、木地、炭焼き、竹加工、紙漉きなど、11種の仕事をお年寄りの手により復活させ、高度成長以降のもの



昔のくらしを伝える三州足助屋敷



手仕事の一つ。炭焼き用のまき割。

豊かさに慣れ親しんだ現代人へ、真の豊かさを問いかける、手づくりの温もりを伝えるという、これまでにはみられない施設であった。

『観光とは、訪れる人々との交流の中で地域色豊かな文化遺産を公開し、保存・伝承をしつつ地場産業に育て、所得を得ると同時に地元の民度をひきたて、愛郷心を高めるもの』との理想を掲げて出発した。

オープン当初心配された入館者も、年々順調に伸び、今や17万人余りを数えるようになり、当初の目標設定を3倍近くも上回っている。この施設では、新たに40人余りの雇用と、5億円余りの売り上げを行う優良企業となっている。

## 6. 福祉センター百年草

その10年後の平成2年10月、町制施行100周年記念事業として、足助町福祉センター百年草がオープンした。百年草の理念は「ノーマライゼーション（共生）」である。

ノーマライゼーションとは、健常者も弱者もともに生き、自ら積極的に参加していくことである。そこに観光と福祉を融合して、特異な施設経営が行われている。

ちなみに百年草には、「お年寄りに百歳まで長生きしてほしい。雑草のようにたくましく生きる老人になってほしい。また、町民が百



ユキヤナギに囲まれた百年草の外観

歳までも健康で、生涯現役の人生が送られるように」という願いが込められている。

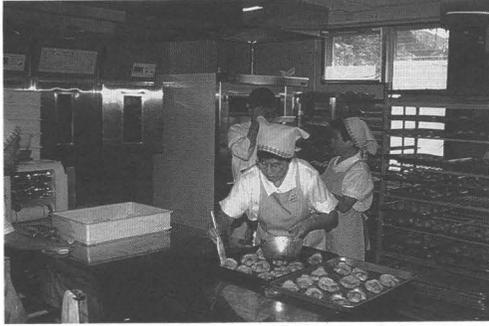
主な施設としては、老人福祉センター、デイサービスセンター、高齢者生きがい活動推進施設、宿泊施設等からなる。

つまり、シルバー人材（高齢者）の活用手段の一つとしてハムの製造所「ZiZi工房（生きがい活動推進施設）」をつくり、そのハムを利用した欧風レストラン「レストラン楓（ホテル&レスト）」で提供、さらには鉱泉を引湯した100円風呂（現在は200円）を造った。そのほか、娯楽室や多目的ルーム（福祉センター）などを配置して、楽しさを演出する。今夏には手づくりパン工房「バーバラはうす」がオープンした。ちなみにZiZiは爺々、バーバラは婆々をしゃれたネーミングである。

かたっ苦しいお役所仕事をひもとくと、こんな楽しいプランに変わってくるのである。町内のみならず、近隣市町村からの利用が増加し、それによってもたらされる活気が高齢



ZiZi工房のハムづくり



今夏オープンしたバーバラはうす

者にもよい刺激となっている。

ちなみに、今日、ZiZi 工房のハムは年商1億円を突破している。自前の福祉の確立に、経済がともなっていく証だろうか。

## 7. 夜間照明の試み

香嵐溪の秋の渋滞はつとに知られるところである。渋滞に巻き込まれ、やっと着いたと思ったら日はとっぷりと暮れ、小用をたしてUターンという観光客も多い。こうした状況に、何とか対策はないかと考え出されたのが、ライトアップであった。

大正時代に、飯盛山と参道に裸電球を灯して夜のみじを楽しんだと町誌にも記されている。おそらく電力事情など今とは比較にならない程劣悪な時代にてである。

今日的に考えれば、日没後に着いても昼間とは違った風情が味わえれば、渋滞へ巻き込まれた人へのサービスにもつながる。また、それによって新しい需要も喚起することができるかもしれない。こんな諸々の思いを交錯させながら、63年10月30日の初めての点灯を迎えた。この日はマスコミの取材があったものの、客足はほとんどなかった。

11月3日、例年この文化の日を境に香嵐溪が活気づく。この日も朝から渋滞が始まり、まさに秋戦争突入の感があった。10キロ余りの渋滞も日が西に傾きだす頃には徐々に短くなってくるのだが、この日は違っていた。い

っこうに渋滞の長さが変わらないのである。日が山の端に入り夜間照明が点灯されてもいっこうに渋滞の距離は変わらない。「これは大変なことになった」と直感した。まさかこんなに反響があるとは想像だにし得なかった。この日を境に平日・日・祝日を問わず夜の紅葉は活況を呈した。マスコミの取材は関東や関西からも相次ぎ、結果的には昼間の入込みも増加した。土産品店も予想外の観光客の来襲にてんてこまい。何しろ地の土産として「もみじの衣揚げ」というお菓子があるが、これが半月ともたなかった。

しかし反動もすぐきた。まさに夜の渋滞はボタンの掛け違いのようなもので、住民にとっては昼間のみならず夜までも渋滞に巻き込まれるのだから、その怒りはすさまじいものであった。また、「これは自然破壊だ」「紅葉の色が悪くなる」「香嵐溪をおもちゃにするな」「観光業者だけが潤っていいのか」など、色々な苦情が入ってきた。

翌年からは観光協会の役員をはじめ町会議員、交通安全協会等の協力を得て、平日渋滞の解消はできたものの、依然としてこれらに明解な回答を得られないまま、今日まで土・日・祝日等の渋滞は続いている。しかし、観光事業の面でこれだけ効果の上昇したプランも少ない。



香嵐溪のライトアップ(11月1日～30日の夜9時迄点灯)

## 8. おわりに

これまで述べてきたことの中から、足助の町づくりの取り組みがうまくいっている幾つかの要因が指摘できる。

- ①町づくりの伝統があること。常に先人たちに思いを馳せて、今流に焼き直しができる。
- ②月並みだが、優れたリーダーがいること。
- ③物真似をしない。発想に独創性と先見性がある。
- ④町づくりについて住民の関心が高い。
- ⑤行政と住民間の連絡調整機能がスムーズ。
- ⑥近接地に大消費地（名古屋市や豊田市、岡崎市、豊橋市など）が控えていること。

これらの条件はよその町や村でもあてはまるものもあるし、そうでないものもある。要は、そこに住む一人一人の町づくりへの関わりあいの度合いといえようか。

ここで取り上げた事項は幾多の事業の中のほんの一部の事例である。この他にも誌面の都合で割愛した「足助人学校」や「足助城の建設」など、まだまだ話題には事欠かない。これらについては他の機会に譲るとして、こうした事例を積み重ねても、まだまだ町づくりの終わりは見えない。むしろ今後とも続いていく終わりのない戦いだと思う。

とはいうものの、こうした積み重ねによって多少なりとも自前の経済が循環し、自前の雇用が増え、過疎への歯止めもかかっているのかなとも思われる。我々自身、過疎になることが決して怖いとは思わない。過疎によって、この町に住み続けていく人々の心が過疎になることが怖い。幸い、町の人一人ひとりが、誰よりも自分の町に誇りをもち、いとおしく思い、楽しく、元気で、生き生きと住み続けていこうと気力に満ち満ちている。

これらをさらにパワーアップして、次の十年、その次の十年にどんな飛躍が見れるか、大いに楽しみであると同時に、この町に住むことに無上の喜びを感じる。

# 矢作川の魅力



豊橋技術科学大学  
人文・社会学系 助教授

ひらまつ としき

平松 登志樹

by Tosiki Hiramatsu

## PROFILE

1958年 岐阜県生まれ  
1981年 東京工業大学工学部社会学科卒業  
1991年 東京工業大学工学部社会学科地域計画  
講座助手  
1993年 豊橋技術科学大学人文・社会学系助  
教授  
専攻 社会学, 環境計画  
著書 「社会と環境の法則」, 近代文藝社

## 1. はじめに

今年の夏休みに私の恩師に近況報告をかねて挨拶に行った時、名古屋都市センターさんから水辺の魅力についてエッセイ風を書く仕事をもらったと報告したら「がんばりなさい。芽が出るかもしれないから」といった。あいかわらず多くのご意見をいってくださいましたが、その中に「愛知県の川を歩いて感じ取ったことを、今までの自分の研究の知見をまぜながら書いたら」という提案があった。

恩師の提案にうなづきつつどの川にしようかと考えていたら恩師らしい発言が続いた。「君も花開いて記念碑がたつかもしれない。平松先生の記念碑がたってそこに平松先生の詩が刻まれるかもしれない」というのだ。神社をつくったらどうかという提案もあった。恩師との感性の違いを改めて痛感した。地方にエリートが流出するのわかるような気がする。

私は跡形もなく流れていく姿が好きだ。記念碑なんて考えたこともないし考えたくもない。最近テレビでこんなコマーシャルを見た。河童が川を流れている。多分河童はこんな歌を歌っていたと思う。



▲コマーシャルから記憶に残った河童のイメージ図

水から生まれていっぽんぽーん。ひゅー。水から生まれていっぽんぽーん。ひゅー♪。こんなすぐ忘れられそうなコマーシャルが好きだ。自分も河童になってふえをふいてみたい。ひゅー。ぼけーと周りの景色や青空、水中をみながらね。晴天時の「川」にはそんな行為がフィットすると思う。

ともかく提案に従うことにして川を決めた。矢作川にした。地球環境と地域水環境の研究小委員会の委員をしていた時、偶然、矢作川沿岸水質保全対策協議会という組織を知った。矢作川の水質を保全する開発手法のノウハウをもつといわれる。矢作川流域のゴルフ場や住宅開発の施工計画まで決めてしまう強い組織である。

## 2. 地球環境と地域水環境の研究小委員会

矢作川の魅力について語る前に、この地球環境と地域水環境の研究小委員会(社団法人:土木学会)について少しふれたい。この委員会は、日本各地の河川や海岸を視察し問題点や将来の整備のありかたについて議論する。スポンサーは建設省である。土木の水理や衛生工学の分野の人が大半で社会工学を専門とする私は違和感を感じた。もっとも社会工学は研究分野の類別の枠をぶちこわす研究分野であるので、違和感を感じる集団とつきあう方が自分のため、そして社会のためになる。豊橋技術科学大学に転任してからも人文・社会工学系という名称の講座に所属する。人文・が付け加わった。「人文・社会工学ですか。何でもありですなあ」という感想をもらす人と話す機会も増えた。「そうです。何でもありでとっても面白いですよ。」と答えている。

さて違和感を感じる点だが、それは彼等がよく口にする環境教育や倫理である。「役人や学者グループが社会や環境というものをわかっていて、住民がわかっていない」という基

本的な構図に固執する人が多いようだ。最初は土木の水理や衛生工学の学者がどんな社会像を語ってくれるのだろうかと大変期待したがはっきりいって失望した。公共、社会、環境、倫理、哲学、真の教養等抽象的で難しい用語を好んで使うのだが、いっこうに中身が見えてこない。最近特に倫理倫理とりんりんという人が多い。私はこれらの現象を「無駄な環境教育」という題でまとめ最終報告書として委員会に提出した。

ただし彼らも飲んだら楽しい。美空ひばりの「川の流れのように」が好きである。ある委員の歌声にみんなが陶醉する。「知らず知らず歩いてきた細く長いこの道。振り返れば遙か遠くふるさとがみえる。でこぼこ道や曲がりくねった道。地図さえないそれもまた人生。あー♪川の流れのようにゆるやかにいくつも時代はすぎて。あー♪川の流れのようにとめどなく空が黄昏に染まるだけ。

生きることは旅すること。終わりのないこの道。愛する人そばに連れて夢さがしながら。雨にふられてぬかるんだ道でもいつかはまた晴れる日がくるから。あー♪川の流れのように穏やかにこの身をまかせていたい。あー♪川の流れのように移りゆく季節雪どけを待ちながら。・・・」

いい歌ですねえ。ほら。難しい顔つきをして環境倫理、環境教育なんていわずに、みんな酒を飲みながら夢をさがしましょう。国



▲道路から見た矢作川

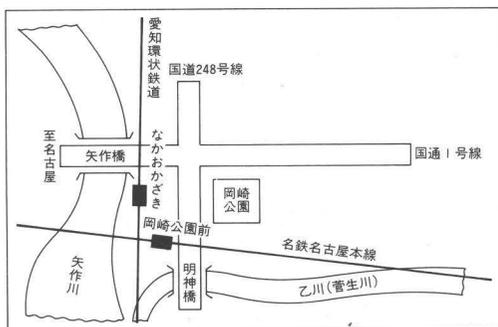
民の要求はますます高度になるのは当然でしょう。彼らが満足できるような夢のある計画を考えましょうよ。いまさら治水の効果や水使用の効果があることを意識させようとしたって面白くもなんともありません。顔を合わせるたびにそういつてきたがみなさんその後どんな活動をされているのかなあ。

### 3. 岡崎の矢作川

矢作川は岡崎市も流れる。平成7年8月中旬、昼ごろ名鉄岡崎公園駅にいった。駅から2、3分くらいの場所に矢作川はあった。

とても暑いのですぐ泳ぎたくなかったが水深は浅く(40cmくらいか)温度も高く一瞬お風呂にあしをつけているようだった。魚もいたし川岸には草が暑苦しそうにのびていた。そういえば今年の夏休み、川に遊びに行ったのは2回目だなあ。私の両親と妻と4人で岐阜県の郡上八幡にいった時の吉田川の水は大変冷たかった。また海は伊良湖岬に3回、弁天島に5回いったがやはり水は冷たく感じた。

さて中州に寝転がると、やはり環境教育なんてどうでもいいという気分になる。持続可能な発展、自然と人間の共生、環境倫理等という環境関連の学習や行政がよく使う言葉が青い空に吸い込まれていく。ぬるくて浅い水の中に溶けていく。言葉の内容がないので大気や水質汚染にはならない。暑いのでますます何も考えたくなくなる。



▲矢作川

クーラーの中のビールを飲んで泳いでちょっとは涼しくなった。ふとこの矢作川を守り続けたという人達を思い出した。内藤連三氏と原嶋亮二氏<sup>1</sup>である。

### 4. 矢作川の水質浄化運動

矢作川沿岸水質保全対策協議会事務局内藤連三氏と、株式会社太陽機構代表取締役の原嶋亮二氏は長年矢作川の水質保全活動をしてきた<sup>1</sup>。環境教育や倫理に関するシンポジウムが無駄なものとなる理由は、現場の環境保全のノウハウがとりいれられていないか、または適切に表現されてないからである<sup>2</sup>。今後とも二人には教えてもらいたい。内藤氏は後継者養成に頭を悩ませているといったが、彼の水をめぐる闘争の歴史は私のような凡人を近寄り難くする。「今どき若い奴はそんなしんどい仕事をやりませんよ」と私は内藤氏に話したことがある。後継者育成は難問である。

### 5. 豊かさを実感できた矢作川

考えるのをやめて泳いだ。ややぬるいが気持ちがいい。水深がせいぜい40cmくらいの浅瀬は水温が高い。深いところもあって、それはどんよりと濁っている溜まりである。溜まりの下の方は温度が低いこともある。ごみがいっぱいたまっていそうで足を取られたらお



▲溜り

ぼれるかもしれない。性悪さ<sup>3</sup>が感じられるから一人では近づかない方がいいだろう。下流のほうに目をやると、川を横切る道路と道路の橋のさらに下流に鉄道の橋がみえた。車に乗っている人の姿がこちらからみえた。私が泳ぐ姿はうらやましいと映ったかださいとうつつたか、それとも無関心だったろうか？

泳いでいたら老人2人と子供（多分孫だろう）がやってきた。どこで子供を泳がせたらいいかというので、ここは浅いけれどやや流れが強いので、下流の橋の下あたりがいいのではと答えた。「何やってるの」と子供に質問された。意外な質問で動揺して「遊んどる。遊んどるんや」と遊ぶという言葉をも2回いった。おじいさんの方は笑っていた。孫と川遊びにきた人を見て、私は豊かなくらしをしているんだなあと感じた。両親とも仕事なのかもしれない。暑い中子供が水遊びをする姿をおじいさんとおばあさんが少々不安げにそして涼しげに見ている。



▲川と家族

私は子供がまだいないが子供ができれば早く両親と一緒に住みたい。両親に子供の子守を川でさせるなんていいなあ。車や列車に乗って仕事場に行くこともある。橋の上から孫と両親が川で遊ぶのをみながら仕事場へ向かう、あるいは黄昏時仕事場から帰る時にきらきら光る川の中に子供と両親の姿を見つけるのはおしゃれかもしれない。間違いなくこの瞬間私は豊かさを実感できる。



こういった瞬間があるのもきれいな矢作川のおかげである。この価値を計算したらどうなるのだろうか。私は長らくこんな動機のもとに河川環境改善効果を計測してきたのだった。海、川、湖沼の水を好き放題汚して稼ぐより水質を保全した方が経済的にもメリットがあるのではという仮説のもとに、河川環境改善の便益を金銭的に評価する研究を続けてきた<sup>4-9</sup>。

## 6. わくわくするプロジェクトを探索する便益計測手法

最近反省する点がある。水質改善といっても実際どんな便益を計測してきたのだろうか。詳細には意識していなかったことである。暑いので泳ぎたいがぬるくてちょっとがっかりする水、不気味な溜まり、暑苦しそうな草、川は人間にとって性悪な面からいごちのいい顔をもつ。台風の大雨の時の濁流のすさまじさ。季節そして人間心理の状態によって評価は変わるが私は主に河川の水環境改善によるのっぺりした平均値を計測してきた。無論平均値であっても便益を計測することは大きな意味がある。コストに目を奪われると貧弱な計画しか生まれえないからである。

しかしもっと高い目標を掲げなければいけないと考え始めている。豊かさが実感できる社会に向けて規制緩和やリストラの方法が強く望まれている。便益計測手法も精度の向上

のみならずわくわくするようなプロジェクト<sup>10</sup>を探索する目標を掲げてほしい。そのためには平均値そしてその確率の概念にとられる手法では心もとない。我々の感動、刺激を薄くのっぺりした空間に引き延ばすような手法では、おもしろいプロジェクトを探せないと思うからである。便益計測手法とは、あるプロジェクトを決めたときにその便益を計測するものだから、プロジェクトを探すものではないと思われそうだが実は違う。いろいろな計測手法があって適用していけば発見できそうな手法とそうでないものがある。

私は水環境改善についてヘドニックアプローチとCVM (Contingent Valuation Method) の2つのアプローチを併用してきた。ヘドニックアプローチは市場の土地資産価値に着目し土地資産価値は地点環境の総合的な評価値ととらえ、各地点環境の金銭的な価値を計測する、精度の高い有力な手法である。一方CVMは質問紙票等を用いて環境の改善に対する個人の支払い意思額を尋ねる手法であって、どんな環境質でも尋ねられるという利点ももつものの、フリーライダー、質問紙票中に提示された支払い意思額の候補値に推定値が影響を受けるという大きな問題もあるといわれている。特定の手法ばかりやっているといつのまにかその手法に籠絡され他と交流のできない研究者が生まれる。さきほど環境教育や環境倫理を口にする人たちを批判したが彼らも同じ道を辿る。自分の信じてやってきた手法に不安を感じたら経済倫理とりんりんいうようになる。りんりんいうだけで中身は勝手に考えろといいだす。ヘドニックアプローチから得られる便益値とCVMから得られる値の比較考察は引き続きおこなっているが「今後はヘドニックを中心としたり、CVMを中心としたりころころ変わるではないか」というおしかりを受けることがある。しかし異質の手法をやはりいつも意識しなければならない。社会工学という学問分野のも

ちあじとつながるもので、対象によってヘドニックをメインに考えた方がいい場合もあればCVMの場合もある。そうでなければいろいろな手法の分野の研究者のノウハウを盗めないではないか。はっきりしないようだがお許し願いたい。

しかしはっきりしないようでも最近ようやくヘドニックアプローチとCVMの社会への役割が自分なりにぼんやりとみえてきたような気がする。CVMはおもしろいプロジェクトの探索型で、ヘドニックアプローチはCVMをチェックする。ヘドニックとは快樂の意味であるので、例えば自然にいじめれるという刺激すなわちマゾも含まれるのだが、実測されていない。実測されているものは、交通などの利便性あるいは人間にとっていごちのよい公園利用や景観のよさの便益だけである。多重共線性という制約から地点環境の変数の制限を受けるのでうまい方法を考えないといけないと思うのだが、私は自分やその他の人が扱ってきた環境質に満足できなくなった。その理由はさきほどののっぺりした平均値の計測であり、かつありきたりの変数ばかりだからである。もっともこのヘドニックアプローチの改善は適切な費用負担を議論する上で活発におこなわれるべきではあるが、私は、おもしろいプロジェクトを探索する手法CVMを重視したい。今まで私はこんな図を書いて水質改善の便益を計測してきた。一対比較法と呼ばれるものだが、片方の土地価格を一定としてもう片方の土地への支払い意思額を尋ねる。CVMの中でこの手法がよいことは私の既存研究で述べているが、これも貧弱な図である。もっとわくわくする図を書きたくなった。また居住地ではなくセカンドハウス、別荘のケースもやりたくなった。楽しい民話<sup>3,11</sup>を右側の図(B地)の中に描ければとても楽しいだろう。

しかし繰り返しいうようだが、最新のヘドニックアプローチも勉強したい。CVMは前

述のように課題が多く、精度の高い確立したヘドニックアプローチのチェックが受けられる場合には受けなければならない。CVMは寄付すなわちお布施であるのでCVMという手法だけをやっていると、CVMの対象となりやすい環境質や概念に翻弄されて私の描いた絵は妄想のまま終わるかもしれない。

おもしろいプロジェクトを探索し、プロジェクトが行われる地点で別荘やセカンドハウスの需要が生じて資産価値に効用が転移し資産価値データが集められればヘドニックアプローチでチェックすべきだろう。

プロジェクトはフィールドワークから考えた方がよいだろう。文献からコンセプトを探し出す時もその現場に出向き、当時の社会をありありと語ってほしい。文献で語られる人と同じように自分が楽しめるか真面目に考えてほしい。

自分の体験から矢作川を舞台として考えれば以下のものを思いつく。

「あしとられ体験」溜まりの危険さを体験する。無論インストラクターはいる。

「鉄道に乗っている人に手を振るツアー」

「川ぞいのセカンドハウス：洪水がおきたら

(条件)

- ・敷地面積 30坪
- ・比較的便利なところ
- ・最寄りの中小河川まで 徒歩1分
- ・よどんでいて目をそむけたくなる
- ・時々中小河川から悪臭がする
- ・川辺の草は伸びほうだい

左に示すような条件の土地の価格は次の値段がつけられています。 6000万円

今あなたはこの土地(A地)に住んでいると想定して下さい。住宅関連費用と所得は現在のままです。A地に対して、河川環境と価格だけが異なっていて、他の条件が全く変わらないB地があるといたします。B地の河川環境のレベルは以下の2つです。

①水質(悪臭)改善②水質改善、川辺の整備  
その時、あなたはA地、B地のどちらを選びますか? B地を選ぶとき、引越には費用がかからないとし、土地価格の6000万円分を越えた追加分の住宅関連費用の負担(ローン等)が増えるものとします。

A地		B地	
よどんでいて、目をそむけたくなる。時々何か腐ったような臭いがする。		魚がすいすい泳いでいるのが見える。心地よい澄んだ空を感じる。	
			
A地	A地を選ぶ	B地を選ぶ	B地
6000万円		○	A地より50万円高い
同上	○		A地より100万円高い
同上			A地より150万円高い
同上			A地より200万円高い
同上			A地より250万円高い

B地の値段がA地よりいくら高くなれば選ぶようになりますか? その金額をなるべく詳しく記入して下さい。( )万円

逃げるプロジェクト」

「川が温泉」

考えれば考えるほど私はわくわくする。自然のいごちのよさと性悪さの折り重なった凶柄の優れた舞台を矢作川は用意してくれる。

## 7. 夢の実現に向けて

ともかくくだらない理念よりも日常の体験からいろいろなアイデアが生まれることが再確認できた。環境教育、環境倫理等実感がともなわない言葉からは何も生まれないと思うし時間の無駄である。私が一番体験したい瞬間は黄昏時の川の中に子供と家族の姿を見つけることである。



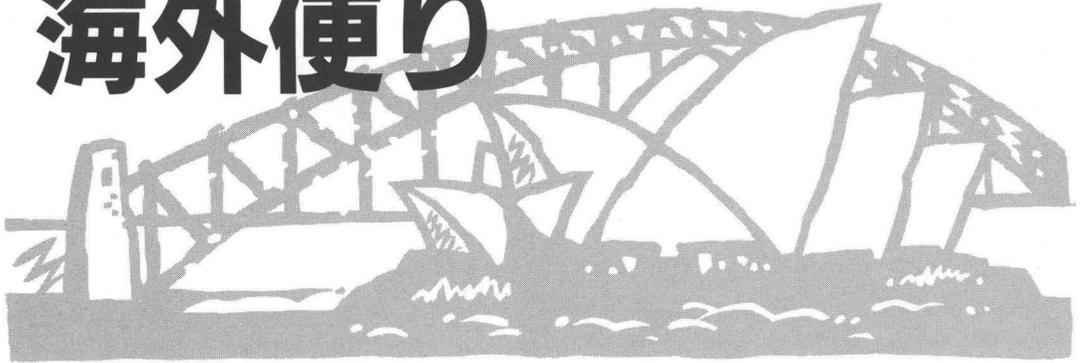
▲川と家族

しかし現実には厳しい。子供はいないし父親は岐阜県各務原市で市議員をしており動けない。私は岐阜から通えるが、妻は豊橋駅のすぐそばの病院に勤務する医師である。専門は難病といわれる膠原病である。将来、医療技術水準の高い病院に移るかもしれない。いろいろ障害はあるのだが夢は実現したい。具体的な夢を適切に評価できる手法の改善を続けながらがんばりたいと思う。

### 参考文献

1. 原嶋亮二、論集、矢作川とともに歩む、株式会社 太陽機構
2. 平松登志樹、マーフィーの法則を用いた、環境の認識手法の改善、土木学会環境システム研究、No.22、pp.78-83、1994
3. 平松登志樹、「性悪女」的水辺の魅力、日本民俗学、Vol. 202、pp.122-128
4. 肥田野 登、平松登志樹、名取浩介、下水道事業における受益と負担の計測、都市計画学術研究論文集、No.22、pp.433-438、1987、11月
5. 平松登志樹、肥田野 登、河川環境改善効果の計測手法の比較分析、土木計画学研究論文集、No.7、pp.107-114、1989、12月
6. 平松登志樹、中村良夫、親水空間のもつ商業的魅力の評価、土木学会環境システム研究、No.2、pp.18-23、1989、8月
7. 平松登志樹、下水処理水に関する住民選好の一考察、用水と排水、No.5、pp.9-12、1992
8. 平松登志樹、肥田野 登、水道水質に対する住民選好の一考察、水道協会雑誌 Vol. 61、No.5、pp.2-16、1992
9. 平松登志樹、肥田野 登、排水処理施設整備の費用便益分析、環境科学会誌、Vol. 6、No.2、pp.97-110、1993
10. 平松登志樹、便益計測手法の適用と社会像の結び付きに関する一考察、土木学会環境システム研究、No.23、pp.303-306
11. 平松登志樹、水神様の役割に関する研究、日本民俗学、Vol.193、pp.192-201

# 海外便り



(財)自治体国際化協会  
シドニー事務所次長

まつおか としお  
**松岡 俊夫**

by toshio Matsuoka

P R O F I L E

1949年生まれ  
1973年 南山大学卒業後、名古屋市採用  
1985年 名古屋市ロンドン事務所駐在  
1988年 世界デザイン会議  
1990年 (財)名古屋観光コンベンション・ビューロー  
1991年 秘書室国際交流課  
1994年 4月から(財)自治体国際化協会出向、同シドニー事務所設立準備のため赴任  
1994年10月 同事務所設立し、現在に至る。



## はじめに

1982年、名古屋で「シスター・シティ・フェア名古屋'82」が開催された。これは、名古屋と姉妹友好都市関係にあるロサンゼルス、メキシコシティ、南京及びシドニーの4都市を紹介する企画で、地方公共団体がこうした催しものをする一つの先駆けとなった事業である。その年の4月から準備を始め、7月、私は、市職員となって初めて海外出張の機会を与えられた。オーストラリア、シドニーへの一週間の出張であった。シドニーの展示担当としては、展示コンセプトに従って事前に調査した海・動物・植物・天然資源をテーマに、コアラ、カモノハシを始め、珍しい鳥の「剥製」や、オパールなどの宝石、鉱物資源の「標本」を調達すること、そして、その展示のためのサイズを確認することが主要な関心事であった。アトラクションとしては、羊の毛がり職人を呼ぶことにした。職人の方は、はさみ一つ（電動はさみ）できてくれたが、

肝心の羊の日本国内での調達には、苦勞した思い出がある。

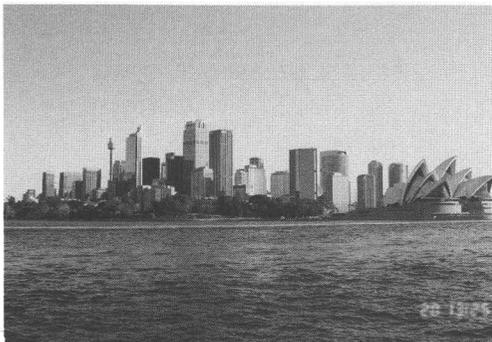
その後、1984年8月末から1カ月余り、フランクフルトへ国際見本市への参加事業の出張、翌、1985年から1988年までは、名古屋市ロンドン事務所の駐在員として勤務した。帰国後は、もう二度と駐在はないと思っていたところ、突然の人事異動で、1994年4月から、シドニーに派遣されることになり、12年ぶりにシドニーを再び訪れることになった。今回は、自治省の外郭団体である、(財)自治体国際化協会シドニー事務所設立が目前の仕事であった。そして、1年半が経過した。



## (財)自治体国際化協会 シドニー事務所開設

今日、全国の自治体には4000人を越える外国青年が、国際交流員 (CIR : COORDINATORS FOR INTERNATIONAL RELATIONS) あるいは、英語指導助手 (AET:

ASSISTANT ENGLISH TEACHERS)として、働いている。このプログラムの施策であるJET (JAPAN EXCHANGE AND TEACHING PROGRAMME)は、自治省、外務省、文部省の3省の共同事業として推進されており、(財)自治体国際化協会は、外国青年の各都市への配属や研修会を実施するなど、この事業の総合調整役を果たしている。この協会は、全国47都道府県と12政令指定都市の出捐により、1988年に設立され、外国青年招致事業であるJET事業の他、全国の地方自治体を対象に、その国際化事業施策への支援、地方自治制度の調査等を行っている。そのため現在、ロンドン、パリ、ニューヨーク、シンガポール、ソウルそしてシドニーに海外事務所を設置している。海外事務所の主な仕事としては、全国の地方自治体を対象に国際化事業施策の支援、例えば、地方自治体関係職員の海外派遣研修に対する支援、姉妹都市提携への支援、当該国の地方自治制度の調査・研究、日本の地方自治関係情報の発信、当該国の調査研究に訪問する日本の自治体職員への支援がある。昨年4月に着任後、10月に正式開設を行ったが、現在、シドニー事務所では、自治省出身の所長ほか6名の地方自治体職員と現地採用職員3名の10名体制で事務所を運営している。地方自治体の仕事に関する事項は、当事務所の管轄する範囲となっている。

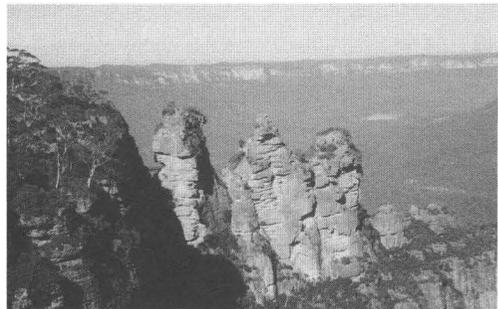


## 生活して知った 新たな発見



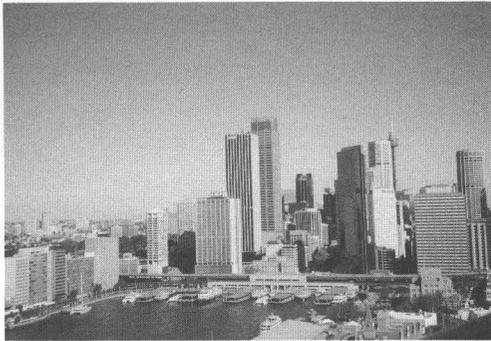
### 1) 自然環境の中での生活

12年前のシドニーの印象は、やはり外国の大都市としてのものだった。学生時代にヨーロッパを歩いた経験があったが、初めての海外出張で来た時は、都心部での滞在であったこともあり、会議、現場視察に追われるあわただしい毎日であったことが、その印象を形成するのに影響している。しかし今、この地に生活しての印象は、シドニーの町は少ない例外として、大部分は、自然の中での生活といった方が当たっている。通勤に利用している鉄道の車窓からみる住宅街は、森の中をくりぬいて家を見て、一軒一軒の家の周辺は、森のままであることがよくわかる。突然、白い大きな鳥や、色鮮やかな綺麗な鳥が飛んで来たりする。そして、私が住んでいる家にも、とてもカラフルな「レインボー・ロリキート」と呼ばれる鳥が飛んでくる。餌を与えようとすると、どこからみているのか知らないが、



2羽、3羽と集まり、ヒッチコックの「鳥」を想起させるような鳥の群になる。鳥の羽の色鮮やかさが、映画のような恐怖心を払拭させてしまう。高さ30センチもあるオームの一種である「クカトウ」、人を馬鹿にしたような笑い声の「クッカバラ(笑いかわせみ)」もわが家を訪れる。「クカトウ」は、強靱なくちばしをもち、かなりの「悪」である。餌を与えて、食べるのを見ているのは、楽しいが、餌

つけを忘れた時は、家のベランダなり、家の木枠の部分をガリガリかじっていく。「クッカバラ」も最初のうちは、あれが例の鳴き声か、と感動するまではよいが、しらじらと明け始める朝の5時半頃から「カッカカッカカ」とあの調子で鳴かれては、閉口してしまう。近くに寄ってよく見ると、かなり恐い顔をした鳥で、肉食であることは、来てから知ったことである。日本では、動物園でしか見れない鳥たちを日常に見ることができる。



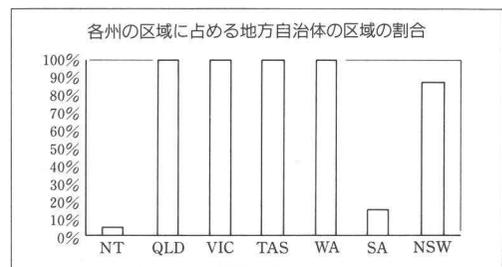
シドニー周辺の地図をみれば、ゴルフ場の「緑」とともに、「ナショナル・パーク」の文字をみることが容易にできる。そうした地区は、全くの未開発地といってよい。もっとも「ブッシュ・ウォーキング」用の道程度はできていても、その他は、自然のまま、それをとても大切にしている。人類最後の自然の楽園としてのオーストラリア大陸といわれている。「環境にやさしい」という言葉は、今日の流行であるが、オーストラリアは、その言葉にふさわしい。「エコ・ツーリズム」もそうした、環境に配慮した地域の活性化施策の一つとしてよく使われる言葉となっている。

一方、昨年1月の山火事（ブッシュ・ファイア）などは、逆に自然の力の凄さを物語るものである。また、オーストラリア大陸の中央に位置する「エアーズ・ロック」は、まさに、一つの巨大な岩で、それを見るものに自然に対する畏敬の念を覚えさせる。事実、神聖な場所として、誰も立ち入ることができ

ない場所が、いくつか指定されている。

自然の中の生活といっても、多分「アボリジニ」たちの生活は別としても、電気、ガス、水道などは完備されている。日本では、電線の地下埋設化で、都市のデザインはすっきりしてきたというのは、よく聞かれる話である。シドニーに到着して約1カ月間、住宅探しのため、シドニー近郊を見て回ったが、電柱、電線など、日本の状況と全く同じといってよい。広大な土地の中で、電気供給、ガス、水道、道路敷設等、いわゆる公共事業を考えた時、その区域の中の人口規模との関連で、適正な土地の規模があるように思えてくる。疎らに人口が分布している広大な区域に、こうした事業をいかに行うかは、その区域における地方自治体の存在、役割そして、その効率を考えてしまう。

オーストラリア大陸は、ヨーロッパ全体をすっぽり覆い尽くすほどの面積をもっている。日本の20倍の国土をもち、6つの州と2つの準州に分かれている。各州毎、地方自治体に分割されているが、なかには、どの自治体にも属さない地域、つまり、地方自治体が存在しない地域が存在していることも事実である。かつて、アメリカ合衆国を訪問した折、地方自治体が存在しない地域があることにある種の驚きを感じたが、アリゾナの広大な地域をみて、納得した記憶がある。オーストラリアの地域も、それと同様な状況であろう。



(出典)「Discussion Paper on Local Government in the 1990s」  
Department of Lands, Housing and Local Government, 1993.3

## 2) 地方自治の原型

黒澤 明監督の「七人の侍」という映画があ

る。これを洋画化したものが、ユル・ブリッナー主演の「荒野の七人」である。物語としては、全く同じである。そして、この物語に、私は地方自治の原型をみる。農村での収穫期になると、盗賊が村を襲う。長老（議員を表すオールダマン・ALDERMANとは、OLD MANの意であるという）が、村の代表を町へ派遣し、腕に自信のある者を連れてくるよう指示する。選ばれた者たちが、「七人の侍」である。彼らは、村を守る警察官として雇用される。村人は、金を払うこともできないが、そのかわりに、住居、食糧などを現物支給するなど、彼らの村での生活を保障することにより、契約は成立する。自分の村（町）は、自分たちで守るという地方自治の原型を私はみる。その原型に近い姿の自治体を、かつて訪問したアメリカのシカゴ郊外の村でみたことがあるが、さほど違わない程度の自治体がオーストラリアでみられる。

ロンドンに駐在となった1985年、当時のサッチャー首相の主導で、「グレート・ロンドン・カウンシル（GREATER LONDON COUNCIL）」が消滅した。日本でいえば、東京都という行政主体を消滅させてしまった。その区域内には32の特別区「(BOROUGH 又は CITY)」があるが、日本の地方自治体と比較して、予算も権限も限定され、本当に住民の生活に直結したゴミ処理、道路清掃などを行う小さな行政主体とみてよい。基本的にオーストラリアの地方自治体は、それと同じである。それは、法律上、各州によって創造されたもので、国の憲法に保障された日本の地方自治体とは、存在根拠が異なること、さらに、自治体予算の歳入面の乏しさ（自主財政権の乏しさ）から執行事務が限定されてくる。多くの人の理解するシドニーは、人口300万をこえる南半球第一の都市である。しかし、地方自治体という視点からは、実際のところ、42の地方自治体からなる大シドニー圏をさしている。そして、シドニー市自体は、人口9000

人余をかかえる6平方キロを区域とする自治体である。

### 3) タスマニア州の地方行政改革

オーストラリア大陸の南に位置する総面積6万8千平方キロ、総人口47万人のタスマニア州は、1906年の地方自治法（州の制定法）により、全州を55の自治体に分割された。州政府と自治体が、協力して地方自治体改革に着手する状況に至ったのは、1980年代に入ってからのことである。1987年、州政府は、地方自治体諮問委員会を設置し、広範にわたる地域住民への行政サービスを機能的、効率的に執行するために必要な包括的権限を自治体に与えるための地方行政改革案を求めた。同委員会は、1990年、次の3段階の改革案を提示した。

- ・第一段階 合併による地方自治体数の削減
- ・第二段階 新しい地方自治法の制定
- ・第三段階 地方自治体の役割と事務の見直し

第一段階については、1992年8月、州政府は、州内46の地方自治体を29に削減する合併計画を発表、1993年4月2日、合併は実施された。第二段階の新地方自治法は、1993年、州議会で成立、1994年1月17日、施行された。第三段階は、1994年3月、役割・検討委員会が設置され、2年後に答申を行うことになっている。このように、つい最近の出来事である。合併することになった地方自治体に目を向けた場合、先の自治体の原型に近い姿を伺い知ることができる。実際のところ、合併前の1990年3月の時点で46あった地方自治体の平均人口は、9900人であり、豪州全体の平均である2万人を大きく下回っていた。新しい地方自治体の境界設定基準をみると、

- ・人口1万人以上であること
- ・歳入600万ドル以上、連邦及び州からの補助金収入が、自主財源のレイト（資産税）収入の35%以下であること



〈オーストラリア統計局「年鑑1992年版」〉

・一定基準を満たす専門職員を確保すること  
 となっており、その結果、3～4の地方自治  
 体が一つに合併されたりしている。広大な区  
 域の中に住民として300人程度の人口の地方  
 自治体を想起してみればよい。日本での実感  
 は、町内会に相当するものであろう。そこに  
 住む住民からすれば、例えば、ゴミ処理は、  
 自然の浄化作用、水は雨水の蒸留、電気は供  
 給会社からの購入となれば、合併によって、  
 新たに地方自治体となることによって高い税  
 金を払うくらいなら、現状で満足という考え  
 が事実あったようだ。なお、一定基準を満た  
 す専門職員とあるが、自治体の幹部職員は、  
 仕事の内容、給与額を明示した新聞広告で広

く募集する。3年といった期間も最初から提  
 示され、その間の実績が問われる。州を越え  
 て、公務員生活を渡り歩く人もいる。

#### 4) カウラでの事件

着任した昨年、カウラという町を訪問する  
 機会を得た。カウラ事件50周年にあたる年で、  
 キャンベラから日本国大使、シドニーから日  
 本総領事も出席された。カウラは、シドニー  
 から北西に、車で4時間のところにある。戦  
 時中、捕虜収容所があったところで、現在も  
 見渡す限り広大な敷地の中に収容所の跡地が  
 残されている。今は、日本人墓地、日本庭園  
 がある桜の名所として有名になっているとこ  
 ろである。先日、秋篠宮ご夫妻も訪問された



# 概要



	豪 州		日 本
		N S W州	
面 積	768万km <sup>2</sup>	80万km <sup>2</sup>	38万km <sup>2</sup>
	日本の約20倍、旧ソ連、カナダ、中国、米国、ブラジルについて世界第6位		
位 置	東経113～154度 南緯 28～ 37度	東経141～154度 南緯 28～ 37度	
	豪州全体の60%が南回帰線の南側		
気 候	北部の熱帯性気候から南部 の温帯性気候まで多様 国土の40%弱が熱帯性	シドニー 夏：22度 冬：13度 年間降雨量：1,119mm	東京 夏：27.1度 冬：5.2度 年間降雨量：1,405mm
人 口	1,728万人 (91年推計)  人口密度 2.2人/km <sup>2</sup> 人口増加率 1.5%	590万人 (91年推計) (豪州の34%) シドニー地域367万人 (シドニー市のみ的人口 では9,000人)	12,445万人 (92年推計)  人口密度 327人/km <sup>2</sup>
	海外出身者人口比率 23% (うち英語圏出身者は46%)  全人口の約70%が10大都市 に居住  先住民 265,459人 (総人口の1.6%)	V I C州 442万人 (豪州の26%) Q L D州 296万人 (豪州の17%) ※N S W、V I C、Q L Dの3州で77% W A 州 164万人 (豪州の10%) S A 州 145万人 (豪州の 8%) T A S州 47万人 (豪州の 3%) A C T 29万人 (豪州の 2%) N T 17万人 (豪州の 1%)	
その他	在留邦人 19,993人 (うちN S W州 8,048人) 93年在留届受理 (シドニー総領事館資料)		

地でもある。

終戦一年前の1944年8月5日に日本人青年将校を中心に日本人捕虜が脱走を図り、231名が殺された事件があった。そうした人々や、収容所で亡くなった人々の霊を慰めるため、日本人墓地が造られ、その土地は、日本の土地であるとされている。

捕虜となった日本人将校たちは、当時全く情報もなく、日本が勝っていれば、捕虜としての辱めを受け、生きて祖国の地は踏めない。負けていれば、殺される。いずれにしても、いきる道はないと思ったのであろうか。しかし、当時の写真に、野球を楽しむ日本人捕虜の姿をみることができる。また、その収容所には、西オーストラリア州ブルームに移住した真珠養殖の日本人家族も含まれており、子どもたちには、教育の機会も与えられていた。捕虜となることは、例えば、米国人にしてみれば、そのことにより、命が救われることを意味する。本人は、喜んで捕虜として生きていることを伝える手紙を故国へ書くという。人権が保障されることを知っている。しかし、人権が保障されることを知っていたのか、あるいは、人権という概念が、当時の日本人の意識の中にあっただかどうか。何の不自由もない生活を保障されていて、戦争終結を待つことは、捕虜となった日本人将校にはできなかった。このカウラに来て、悲しい日本人の姿を目のあたりにした思いがした一日だった。

##### 5) 終戦50周年

今年は、終戦50周年の年にあたる。これまで8月15日は、V J デイ (VICTORY OVER JAPAN DAY) と報道されていたが、今年から V P デイ (VICTORY IN THE PACIFIC DAY) という表現が変わった。外交的配慮からである。戦後の日豪関係は、よくいわれるように、経済面での良好な相手国として象徴されている。アジア志向の外交政策を国策とすることから、日豪関係はさらに広範囲にわたることが期待されている。しか

し、この50周年に合わせたかのように、戦時中の日本人の蛮行を訴える新聞記事や、テレビでの報道も多くみられた。

戦時中、日本の特殊潜航艇がシドニー湾を攻撃したこと、北部準州のダーウィンの町を空襲したことなど、今まで知らなかったことが、ここへきて知らされてくる。高齢化社会に向け、いろいろ施策を考える上で、高齢者のための施設訪問を希望する訪問団も多い。しかし、そうした施設には、戦時中肉親を亡くした方々がひっそりと生活している。日本から訪問する人々が、こうした人々に対して何をすることができるか。良好な日豪関係の背景に、必ずしも良好といえない対日感情があることも忘れてはならない。1990年6月に『多機能都市』という日本語訳になっている都市づくりマルチ・ファンクション・ポリス (MFP) 計画が発表された\*。

このような都市づくりにおけるオーストラリア側の日本企業の投資に期待するところは大きい。しかし、ここにいたるまでに、紆余曲折があった(詳細は、杉本良夫『オーストラリア6000日』岩波新書、pp112-132参照)。第一の候補地は、ゴールド・コーストであったが、地元の反対、特に日本の経済進出に対する反感により、政治問題化し、結果的に第二候補地のアデレードに決まったという。こうした計画の背後にある対日感情については、一考の余地がある。

今年はまた、シドニーと名古屋の姉妹都市提携15周年にあたっている。シドニーで毎年8月に開催されている『ジャパン・フェスティバル』の時期に合わせて、この15周年を祝うため、名古屋から250名に及ぶ代表団がシドニーを訪問した。そして、この10月、シドニー市が中心となって、オーストラリアのライフスタイルを紹介する『シドニー・フェア』が初めて名古屋で開催された。私がシドニーを訪問した1982年から13年たった今日、再びシドニーを紹介する催事に関与することにな

ったのは、何かの縁かも知れない。

以上、いくつかの事柄を紹介させて頂いたが、当地へ来るまで知らなかったことである。シドニーを象徴するシドニー湾の美しい青、クルーズ、オペラ・ハウス、愛嬌たっぷりのコアラ、愛らしいウォンバット等、シドニーを訪問する新婚カップルを始めとする多くの日本人観光客は、それぞれ自らの目でそれを確かめ、日本にない良さを満喫している。それだけで、旅の楽しみは味わえる。しかし、すぐには、目には見えないここに書いた事柄は、私だけの無知によるものではないと思う。

\*マルチ・ファンクション・ポリス(Multi Function Polis)

1987年、日本の通産省の発案で、日豪協力によりオーストラリアの自然環境の中に先端技術を駆使した都市を作る計画が始まった。1990年6月、南オーストラリア州のアデレードに未来都市を建設することとなった。オーストラリアで最も成功しているといわれるテクノロジー・パークを含む南オーストラリア大学に隣接する2,340ヘクタールの敷地がその候補地となっている。MFPは、20年から30年をかけて、21世紀の生活に適合する都市の開発を目的としているが、その基本コンセプトは、次の4点が挙げられている。

- 1) ビジネスの国際化と『国内経済』の国際化
- 2) 技術革新の高度化
- 3) 経済活動の各分野における情報の流れの重要性の認識と情報技術への重視
- 4) 産業国家における高齢化社会への認識

# 医療現場から見た阪神大震災 —大震災時の都市の危機管理について—

防衛庁陸上幕僚監部 千先康二

阪神大震災においては、地震発生直後から2ヵ月間にわたり現地で救援活動に携わりました。その経験の一端をお話することにより将来の災害医療対策の一助になれば幸いです。

第10師団（司令部：名古屋市守山区）は、午前6時半に非常勤務態勢が発令され、まず午後5時給水支援隊が被災地へ向け出発しました。途中、警察や道路公団等の誘導はありましたが救急車さえも動けない大渋滞にあり、到着は大幅に遅れました。翌日、師団主力が神戸へ向け出発しました。19日早朝からは順次被災地域に入り、人命救助活動を開始しました。医療班は当初、人命救助活動に従事し瓦礫の下から救出された方の治療を行い、続いて巡回診療を開始、さらに野外手術システムを用い救護所治療を行いました。

## 1. 被災状況

5,500名の死者が出ましたが、大部分は家屋倒壊による圧死などいわゆる天災による即死でした。私ども医療関係者、行政者が考えなくてはならないのは、500とも1,000名ともいわれる病院・避難所に収容され後日亡くなった方のことです。これが人災ではないかといわれるゆえんです。

32万人にのぼる方が1000カ所の避難所生活を強いられました。日中は自宅周辺で片付けをして、夜は余震が心配なので避難所へ来る例も多いようでした。避難所内の場所は早い者勝ちのためか、若い人が体育館の真ん中を

占め、老人が寒風吹き込む出入口付近という所もありました。そのようなことに配慮する行政の力が望まれるところです。トイレ環境も最悪でした。高齢者はトイレに行かなくて済むように水を控え、それゆえ脱水状態になり病気を併発する例もみられました。寒さも問題でしたが、同じことが夏に起ったとすれば、疫学的に身の毛がよだつ事態であったと思います。食中毒が無かったことは幸いです。

避難所内は極めて静かでした。最初は、さすが日本人は大災害においても動ぜず冷静に行動すると感心しました。米国では災害が発生すると、暴動等が起らないよう各所に軍隊が出動するといえます。全く正反対に静かな状態だったわけですが、それは別の意味で心配すべき要素を含んでいました。心にかなりの傷を持っており、対外的に自分の悲しみを表現したくないという状態だったのです。PTSD(心的外傷後ストレス障害)といわれていますが、ボランティアも患うことが問題になっています。彼らは被災者から、家族を失った、将来どうしたらいいかわからない等の



千先康二(せんさき こうじ)

1956年 富山県生まれ  
1982年 防衛医科大学校卒業  
1985年 米国 Brooke 陸軍病院胸部外科研  
修(テキサス)  
1988年 防衛医大病院  
1991年 米国スタンフォード大学医学部留  
学

1993年 陸上自衛隊第十師団司令部医務官(二等陸佐)  
1995年 防衛庁陸上幕僚監部(二等陸佐、医学博士)  
専門 肺癌手術等の呼吸器外科、レーザー医学等

切々たる話を聞き、それを全部自分のことのように追体験してしまいます。それがストレスになります。だからデブリーフィングといって人に話すことにより心の中に納めないようにして、ストレス解消が必要となります。私自身もこういう場を与えて頂きデブリーフィングをしているわけです。

避難所内にはテレビもあるのですが、誰も見ていませんでした。地震発生後1～2週間経っても、死亡者数や倒壊家屋の状況ばかりだったからです。避難所の人達が欲しかった情報とは、どこの病院が何時から何時まで開いているか、どこで薬がもらえるか、どこへ行けば風呂に入れるか、ということだったのです。情報源として掲示板は効果的でした。口コミも侮れません。私どもが現地入りして2時間後、結構遠方から「診て下さい」と車で乗り付けられた人がいました。到着したばかりで医療器材を開きつつあるところでした。友達から聞いたとのことで、口コミですぐ広がったようです。パニックが起る危険性もあるわけで、正確な情報をいかに効率よく流すかが重要となります。

## 2. 医療救援活動の実際

医療に関して過去の災害と決定的に異なっていたのは、地域の医療システム自体が被災したという点です。地元医療機関の被災状況は、東灘区を例にとると病院5施設のうち全壊1、一部損壊4という具合で、一般診療所の多くも被災しました。また、損壊を免れても、電気・ガス・水道が使えない状態でしたから本来の十分な医療は行えませんでした。

出動時、私どもは人命救助に行くつもりだったので、1～2週間で目処がつくだろうと思っていました。事実、瓦礫の下から生存者が救出されたのはせいぜい災害発生後5日目まででした。ではその時点で任務が終了したかということそうではありません。生活救援活

動の始まりでした。長期的な支援が必要と判断し、次々と全国から支援隊を呼び寄せました。完璧な計画はなく、住民から要望を聞いて、現地で今何が必要か考えて行動しました。例えば被災者が入浴していないようなら自衛隊の入浴セットを設置するなど、現地の様子を肌で感じとりながら地域に密着して支援を行いました。救護所、給水所、炊飯所、浴場、家族用テント等の設置が急務でした。とにかくここへ来れば何かしらの情報なり支援なりが受けられるという拠点を作ることです。ストーブ完備の小テントはプライバシーが保て余震にも安全と好評でした。拠点としては、学校のグラウンド、公園等が役立ちました。錯綜した状況では、救護所などの施設がどこにあるか判り難いのですが、小学校グラウンドならば支援している事が明らかに分かります。

救護所は延べ177カ所ありましたが、連携に問題がありました。市・区が掌握する救護所と県の救護センターの連絡はなく、縦割り行政の弊害がみられました。同じ支援をするのですから医療関係で横のつながりを持つべきです。災害対策本部には医療関係者が不在であったと聞きます。そこで種々の事案について優先度をつけるべきです。今回、自衛隊医官が救急車に伴って支援に来ましたといっても、どこへ救援に行ってくださいという指示はありませんでした。ヘリコプターで67名の患者を護送しましたが、初日から依頼されたわけではありませんでした。診療以外でも、給水先を決める際、ただ住民が水を必要としているという認識ではなく、病院への給水も配慮する必要があります。これらのような何が重要かという評定を専門家の立場から決めるべきで、縦割り行政ではできないことです。

### 3. 災害医療の特性

災害医療は救急医療とは全く異なります。災害には自然災害や人為的災害など種々あります。例えばサリン事件、航空機墜落、大震災、いかに相対的に少ない医療スタッフで多数の患者を有効に助けるかが重要です。日本では災害医療に関する専門家がおらず、ノウハウがありません。ただ、自衛隊では大量傷者救護訓練というのがあります。

まず、「トリアージ」が大切です。これは傷者を軽症、中等症、重症に分類することです。被災地の病院では、幾つもの入口から患者がなだれ込みパニック状態になりました。患者集合所を設け入口を一つにして患者の流れを統制して、診るべき患者を迅速・的確に選別する必要があります。トリアージでは時間を費やさず、振り分けのみに徹しなければなりません。例えば、大声で痛いと叫んでいる人をのけてでも、紫色のチアノーゼでじっとこらえている人、虫の息の人を真っ先に診なくてはいけないのです。これが鉄則です。99%助からない状態であれば、次の患者を診る決断も要求されます。しかし今回の場合、より少ない医療スタッフで最大多数を助けるというイメージが医者にも国民にもありませんでした。

被災直後はサイレントフェーズといい、すぐには患者は病院に来ません。6～7時間したところでわーっと病院に集まります。その間隙を利用して、まず入院患者を必要によりヘリコプター等で後方へ送り、被災患者受け入れ態勢を整えることが必要なのです。

災害医療は単一の状況ではなく、常に変動してゆきます。指令塔となる者はその段階を感じとるセンスが必要です。例えば、最初の大混乱時に救護所を設けるなど悠長なことはいっておれませんし、腰を落ち着いた治療が必要な時にフラフラ回っているのは効率が悪いわけです。疾患でいえば、当初は救急外傷が

主です。ある程度落ち着いた段階で生命に直接関わらない外傷が中心になり、総合臨床医が巡回診療をします。1週間程すると、風邪や消化性潰瘍など急性疾患が増えて、救護所で治療します。看護婦のソフトな対応が役立ちます。そして慢性疾患が増えてくる1ヵ月後には、円滑に地元の医療機関に引き継ぐことが肝要です。2ヵ月経つとリハビリの時期で、保健婦が見回り健康管理を行います。その際には心の病気を診ることも重要で、ボランティアの活用も考慮します。

段階に応じて通常とは異なる対応を的確に実施する必要性に迫られます。そのいい例が診療録の扱いです。当初の救命救急の段階では診療録を書く余裕はありません。その際はEmergency Medical Tag (EMT：負傷者識別票) を使い治療が一目でわかるようにしますが、これを持っていない施設がほとんどです。その後、巡回診療の段階では診療録を書く余裕ができますが、巡回の場合は毎日医者が変わります。それで診療録を患者に渡しました。医者が入れ替わっても、病名・処方薬がすぐわかります。平時の概念とは全く異なる処置を含め、その場に応じた的確な診療を行うためにも、時期を読むセンスが必要です。

### 4. 救護所展開の要件

救護所展開の行政サイドの要件は、**第1**に情報の確立。最初は、いつどこへ救援に行けばよいか、どこに避難所があるかさえも把握できていなかったのが事実で、いかに早く情報網を確立させるかが急務です。**第2**に誰が指令塔なのかを明確にする。自衛隊、赤十字、ボランティア団体、保健所、医師会など様々な組織があります。その中で誰がリーダーシップをとるか。やはり一人のリーダーのもとに活動した方がよく、できればその指令塔は災害対策本部に直結した人であることが望ましいのです。**第3**に問い合わせの窓口を一本

化すること。ボランティアはどこへ問い合わせても、結局待ちぼうけになった例も多々ありました。

派遣サイドが考えねばならない要件は、第1に自己完結性。寝る場所や食料を自分達で確保すべきです。今回、諸外国から医師団派遣の照会をかなり断わったそうです。寝る所や食事、通訳を準備しなければならず、混乱した状況でそのようなことは保障できず、断わったとのこと。現地に負担をかけず、自分の面倒は自分でみる立場を保持すべきでしょう。第2に継続性、ローテーション態勢の確立です。あるグループは医者3名で現地入りし、24時間診療しても患者が減らず、結局3人ともダウンしてしまいました。ローテーションを組めば息の長い支援ができたはず。第3に責任ということです。ボランティア医師がある日突然通告なしに帰ってしまいました。疲れたのか、所属病院から呼び戻されたのか解りませんが、以後行政側は県代表団、自衛隊、赤十字、あるいは名古屋の名城病院からというように責任団体から来る者以外の単独ボランティアは丁重に断わることにしたそうです。例えば自衛隊など自己完結能力のある団体が、ボランティアの受け皿になればいいのではと思います。

さて、私自身が一番気を遣ったのは、どこに救護所を設けるかということより、如何に撤収するかということでした。救護所では治療・薬は無料で、地元の医療機関で保険診療が始まると、みな救護所に行きたがり。実際は保険診療が始まっても患者支払い分猶予により被災者の負担は無かったのですが、医師会の病院は支援医師団に帰って欲しいような目で見ます。行政側は被災住民を説得して、地元の医療機関に委ねるよう手配すべきです。

## 5. 医療に関わる者への教訓

現地で医者はずっと白衣を着ておられるような悠長な状況ではありませんでした。例えばスキーウェアを着ていたりしますから、すぐ医者だとわかるような何かマークを付けるとよいと思われました。

総合臨床能力も重視すべきです。内科・外科等の専門領域に拘らず幅広い治療が望まれます。クラッシュ・シンドローム（挫減症候群）は知識が無いと致命的となります。足や腕を損傷するぐらいではすぐには亡くなりませんから、しばらく様子を見ることとなります。ところがその後容体が悪化して亡くなります。早めに可能性に留意し透析可能病院へ送る着意が必要です。精神的バックアップも必要でした。外傷治療に際し、こういう外傷にはこういう治療を施すという標準マニュアル化を考えてゆく必要もあります。

医師として患者治療に係わる他に、厚生省現地対策本部、保健所など各団体・施設との調整が大変でした。

## 6. 病院の教訓

病院の立場からの教訓として装備面では、自家発電設備を持っていながら発電機が水冷式であったので断水時には機能しなかった。水備蓄設備がないか、あってもタンク損壊により役立たなかった等が目立ちました。管理面では、医薬品の不足がみられました。各病院が備蓄するのか、行政が備蓄するのか考えておく必要があります。

今回、大阪や岡山の医療施設は閑古鳥が鳴いていたといいます。ただ待っているだけでは患者は来なかったわけです。被災地の病院の医師はどこへ運んでいいのか分かりませんでした。救急車は瓦礫の下から救出した被災者を運んではくれても、病院から後方の病院へ送る際にはなかなか来てくれない場合があ

ります。だから、周辺地域の病院が積極的に迎へに行く必要がありました。現地の病院も、患者治療能力を十分に把握し、患者をたくさん抱え過ぎてはいけません。

## 7. 行政の問題

神戸市の災害対策本部では縦割りがそのままでした。地図さえありませんでした。自衛隊流に言うと、地図や被害状況などあらゆるデータが全てわかるような作戦室・コマンドポストを迅速に作る事が重要です。また、自衛隊、消防、警察はそれぞれ無線システムを持っていますが、一切話はできません。米国ではFEMA（連邦緊急管理庁）が統合しています。例えば米国ロサンゼルス北のノースリッジ地震の場合、地震発生15分後にはクリントン大統領に電話連絡が入りました。FEMAがうまく機能した好例です。日本にもこのような組織が必要か否かは別として、やはりリーダーシップを取るところを確立すべきです。加えて連絡調整のネットワーク化が必要なのです。

## 8. 今後の課題

今後は自衛隊も自主派遣の問題を考えていくべきです。従来、行政からの派遣依頼によって支援していました。しかし今回の経験からすれば、情報収集のためヘリコプターを飛ばしましょうかというような積極的な申し出が必要だと思います。ただ主導的に突っ走るわけにもいかないでしょうから、現地対策本部に自衛隊も参画させて頂く議論をした方がいいのではと思います。また活動を円滑にするために必要な処置を考慮すべきです。情報伝達の迅速化、映像情報伝達システム、人命救助システムの確保、ヘリの飛行高度制限など法の見直しも必要です。さしあたって自治体に連絡調整所スペースを確保することも重

要です。そこが吹きさらしの駐車場ではうまく連絡態勢がとれないのは明らかです。

皆様に留意して頂きたいのは、自衛隊の大部隊が現地に集結するためには、ある程度の時間がかかるということです。医官一人が行ってもだめで、60人の支援隊員が必要です。航空機1機を動かすためにも、多数のバックアップが要ります。兵たん機能が整って初めて自己完結的な自衛隊の力が発揮できるのです。自衛隊はスーパーマンではありませんし、役割分担を理解して頂く必要があります。警察、消防、自衛隊が同じことをしては意味がなく、やはり自衛隊のみができることをやる事が重要です。

逆に各組織が協同してやる柔軟性も必要です。消防チームの人手が足りないため、自衛隊が協力を求められ一緒に活動していました。ところが一緒にやってはだめだというクレームがあり自衛隊が退きました。おそらく何か問題が起った場合、責任の所在が明瞭でないからでしょう。また道路啓開に際し自衛官が民間会社のトラックに乗って誘導したところ、国税による自衛官が民間の建設業者のトラックを運転したと新聞にスッパ抜かれました。以後、別々に行動したとのこと。クレームで撤退せず、「今はこうすることが効率的なのです」と主張して欲しい気がします。事実、淡路島ではかなり官・民が共同して活動したため、瓦礫の処理が神戸地区より15倍早かったというデータが出ています。

以上、医療現場からみた阪神大震災の状況をお話し致しました。先頃の地下鉄サリン事件についても調査しました。むろん大震災とは規模が違いますが、災害医療あるいは医療における危機管理という点で全く同じ問題があると思いました。本部の設置、マスコミ対応、後方支援、EMT、通信、連携など検討すべきことは同じです。そういう事を真剣に考えなければならぬ時代になってきたのです。

# 名古屋の都市計画の成り立ち

## ～名古屋のまちの骨格形成に尽力した3人の技術者～

長岡造形大学助教授 越沢 明

名古屋は、戦前から先進的に取り組んだ都市計画事業がかなり多い。そういった意味で、以前から関心をもって名古屋の都市計画を見てきました。今回は、名古屋の都市計画の骨格を形成した3人の技術者の仕事に触れながら、名古屋の都市計画の成り立ちをお話すると分かりやすいのではないかと思います、こういうテーマにしました。戦前の区画整理に取り組んだ石川栄耀（いしかわ・ひであき）、戦災復興に力を注いだ田淵壽郎（たぶち・じゅうろう）名古屋の初代公園課長の狩野力（かのう・つとむ）の3人です。

日本の区画整理は、都市基盤整備の一番重要な手法であります。戦前から都市計画というと、土木・建築・造園の三分野から都市計画に携わるとか結果的に従事する人が多い。現在、区画整理は土木系の仕事ということになっています。しかし、発端は建築系の仕事でした。区画整理は名前の通り、区画を整理することから始まりました。そして現在のよう手法に発展してきています。その主な契機となったのが名古屋における郊外地の開発手法でした。また、郊外地の開発の中で都市計画公園を区画整理に伴って整備したのです。東山公園の整備では、今でいう受益者負担に近いやり方を工夫したり、いろいろな試みをしております。都市計画の中でいかに苦勞して緑を作ってきたかがわかります。

名古屋の初代公園課長・狩野力はそういう意味では先駆者の一人だったのですが、若くして亡くなっており、業績は知られていません。もう少しその業績が評価されてもいいと

思い、第3番目の人物として狩野力を取り上げました。

### 1. 明治の都市基盤整備

都市計画法ができたのは大正8年で、この時に現在に至る都市計画の基ができます。ただ広い意味での都市計画とか都市の建設事業というのは明治時代に始まっています。しかし、今でいうような都市計画、つまり都市全体を計画的に基盤整備する発想は明治にはありませんでした。鉄道を通す、駅を造るといのように単発事業で整備されました。名古屋でも広小路に路面電車を通したり、東海道線の駅が造られたりしました。また、日本人はお祭りが好きなのかもしれませんが、明治時代は博覧会が多い。これは産業振興の意味もあり、要は博覧会に合わせて公園や緑地を造り、それへのアクセスのために交通機関を整備するという手法でした。代表的なのは京都の岡崎の一带で、平安神宮とか博物館の一带がグリッドになっていますが、あれは明治時代の博覧会の時整備した市街地です。それに合わせて日本で最初の路面電車を敷きました。



越沢 明（こしざわ あきら）

昭和27年 東京都出身  
昭和51年 東京大学工学部都市工学科卒業  
昭和57年 東京大学大学院博士課程修了  
平成2年 土木学会賞  
平成4年 日本都市計画学会石川賞  
専門は、都市計画、社会資本整備論。  
特に計画思想、マスタープランなど。

もう一つは、交通機関、特に鉄道とのアクセス整備、あるいは官庁街の周辺などで道路の拡幅が、全国共通で明治時代にある程度実施されました。

初期の路面電車は民間経営が多い。日本の政府は基本的には都市の基盤整備のためにはお金を出さず、道路の拡張費用などは路面電車側から受益者負担金としてとるわけです。名古屋の場合も、大正8～11年、その時の市会の街路整備の予算830万円の内15%が電気鉄道経営者負担金で、これが有力財源でした。都市計画事業に対する国庫補助の規定ができたのは昭和43年の都市計画法です。ところがこれは現在死んでいる条文で、都市計画法に基づく補助金というのはいまだかつて制度化されておりません。それに伴う施行令がないからです。実際には道路法などの個別の法律を適用して補助金を出しています。例えばガソリン税は目的税として、道路主体の基盤整備にしかお金を使えず、包括的なまちづくりの補助金になっていません。現在では、各種社会資本整備の事業規模が大きくなっているにもかかわらず、まちづくりの肝心な部分で骨が入っていないという印象です。

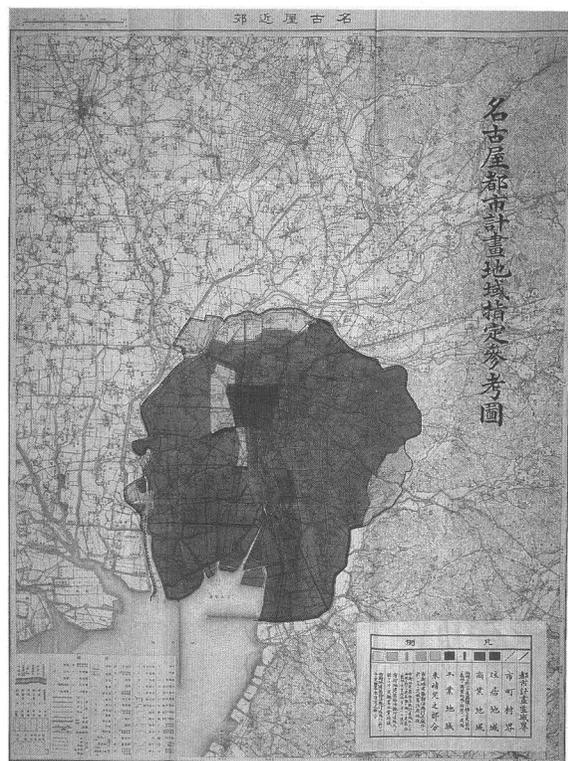
## 2. 草創期の都市計画

大正8年の都市計画法については、今から見るとプラスとマイナスの両面があります。大正期の日本の主要都市では、多くの工場ができ産業公害が発生し、労働者が増えて住宅事情が悪くなり、古典的な都市問題が発生しました。その中で、都市計画法ができる直前の市区改正条例時代は、名古屋も含めて神戸、横浜、東京などの都市は、市が主体で都市計画に取り組む動きがありました。ところが大正8年にできた都市計画法は中央集権的で、策定権が市側にはなくなってしまいました。計画策定権は全て国とその出先機関である内務省の都市計画地方委員会が持つことになり

ました。都市計画制度自体がまだよちよち歩きの時代で、制度を普及するためには、おそらくこの方法しかなかったのだと思います。そのため内務省側に帝大出身の人材が集中していました。

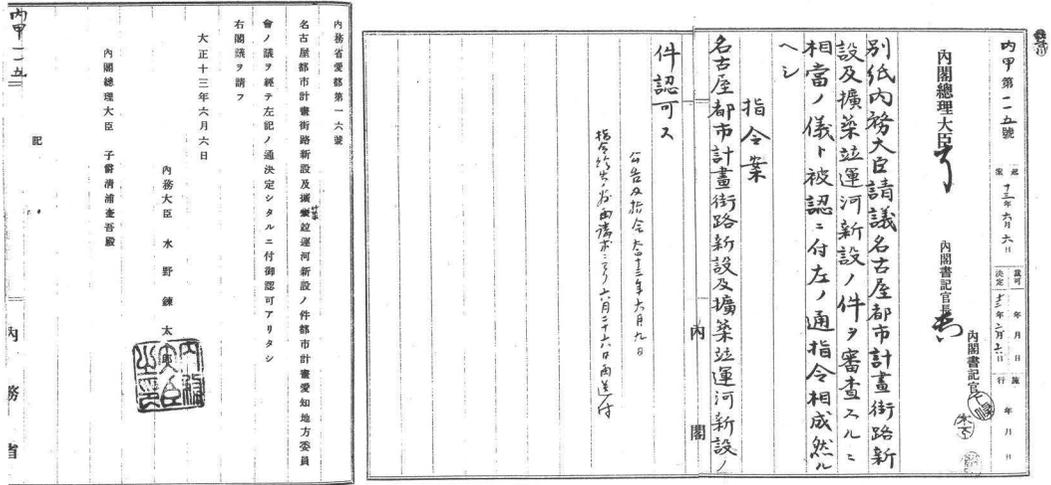
都市計画法ができ、役所内の都市計画に携わる者は高い地位でした。給料が高く、計画実現の手腕を問われる立場ですから、皆たいへん勉強していました。一方、市側は策定権を全部とられてはいますが、地方都市では策定権云々以前の問題で、都市計画に対する気運とか必要性を感じていないという時代でした。当時の6大都市クラスについては、もう少し自主策定権があった方がまちづくりに刺激になったかもしれません。

戦前はそういった行政システムで都市計画に取り組まれてきましたが、戦後は戦災復興事業の事業主体が県または市になり、計画策



大正13年 市街地建築物法第一条による初の用途地域指定

国立公文館所蔵「公文雑纂附図」



大正13年 都市計画街路、運河の決定

国立公文館所蔵「公文雑纂」

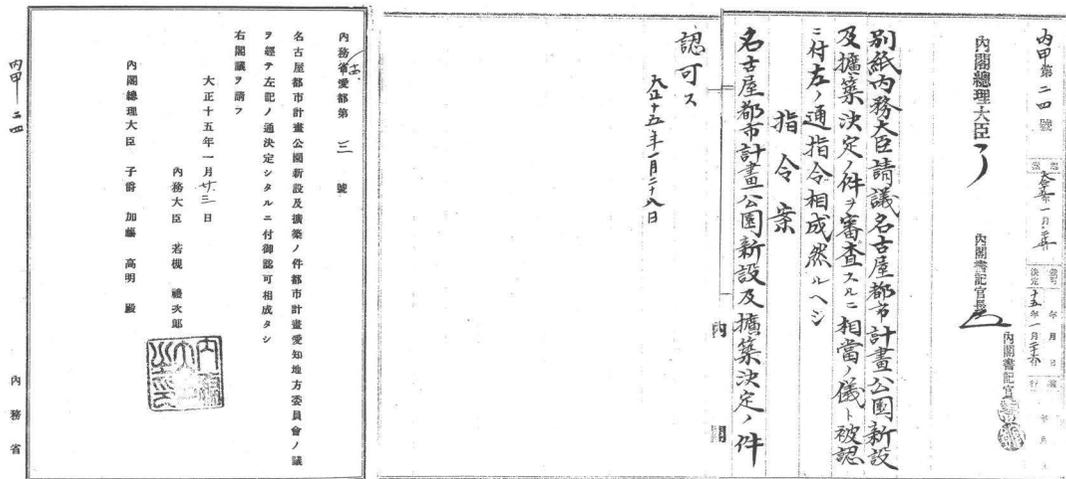
定権も実質的に持つようになりました。

名古屋の場合は、内務省の出先機関である都市計画愛知地方委員会（事務局は県庁内）の人材が豊富でした。石川栄耀がその最たるものだったのですが、市と非常に関係が良く、両者がうまく連携をとりました。方法としては、郊外地の区画整理についての地主に対する働きかけを石川栄耀とか内務省から来ていた人が全部引き受け、お膳立てをして、その後市側が速やかに実施するという非常にうまくやり方でした。

こういったことから、必ずしも戦前の中央集権体制が今日の感覚で悪いと考えるのは適切ではありません。また、内務省から派遣されてきた人が全てうまく仕事をやっていたわけでもありません。あくまでも客観的条件に見合うプランを立案し、なおかつ地元の地主も含めてうまく一緒にやれたかどうか、恐らくそこがポイントだったと思います。また、もしすべて市に計画策定権が置かれていたら、都市計画のように将来ビジョンに基づき、規制や私権制限を行う仕事は役所内や市議会ですたたかれ、うまくいかなかったのではないかと思います。

さて、大正10年頃の名古屋は日本で三番目の都市でした。2、3度市街地の拡張をしています。都心から1時間の距離圏で半径2里の圏域を組み、また現在の線引きとか、市街地面積に対する人口という密度論に相当するものについても、ラフながら考えていました。都市計画法が施行され、数年以内に主な用途地域や街路が決定され、川崎や名古屋のように工業が盛んな都市の場合は、運河が決定されました。それから、公園の決定、と一連の決定をしています。スタッフは、皆愛知地方委員会の中にいますので、基本的にはその中で相談しながら、しっかりとした一つのポリシーを持って取り組んでいたという印象があります。

その一番良い例としては、郊外地の街路全体を計画し、そこに都市計画公園を張りつけたことです。しかもその後の実現化の過程でうまくそれを区画整理にとり入れ、都市計画道路になっていない細かい区画道路も組み込んで設計しました。だから区画整理といっても、街路網の全体が互いにつながっています。大阪も共通のやり方です。大阪は都市計画法が施行された直後にスプロールが進行し、そ



大正15年 都市計画公園の決定

国立公文館所蔵「公文雑纂」

の反省に立って熱心に区画整理を実施しました。だから、都島の一带からベルト状に幹線街路がつながっています。一方、東京は市街地膨張の速度が速かったので、市街地全体を覆うように区画整理をすることはできなかった。横浜もそうです。あと比較的区画整理の実施が早かった福岡と神戸も、ベルト状に市街地を覆い尽くすところまでは至っていません。ですから、戦前の都市化の時代に郊外地のスプロールを防止して、住宅地を整備したという点では、大阪と名古屋は大変な優等生と言えます。さらに名古屋は、東山公園という大規模公園を併せて造りますから、市街地の拡張については一番優等生だったと言えるでしょう。都市全体を見ながらどこに公園を置くかを考えていた。当時東山公園の一带は、まだ未開発の森林地帯でした。そこに、まず公園を造るという発想で頑張った時代だったのです。

そういう新しい仕事をする中で、組織も人材も育ってくるわけです。戦前の愛知、名古屋は多くの仕事を手がけており、主に内務省系統の人材を多数輩出しています。黒谷了太郎という内務官僚は、台湾にも行き、後の鶴

岡市長になった人です。この人は、レイモンド・アンウィン（イギリスの田園都市の設計者）に傾倒し、都市計画の本を何冊か書いています。その人の影響で石川栄耀はアンウィンに興味を持ち、やはり傾倒することになります。永田実、この人も土木系です。そして狩野力。彼は、東大の造園を出た都市計画地方委員会の技師ですが、後に名古屋市初代公園課長として迎えられました。

一方、名古屋市側は、戦前から区画整理とか事業の実績があり、かなり多くの人材が養成されていました。そのヘッドに戦後、田淵さんが招かれた構造になります。

### 3. 都市計画の実現化手法と区画整理

戦前は、どの都市も既成市街地の都市計画にはほとんど着手しておりませんが、大きなインフラ整備の流れで取り組むことはありました。例えば名古屋は、名古屋駅が現在の位置に移転した時、その関連で駅周辺の区画整理に着手しました。そのように個別に細々と実施していました。既成市街地については、財源措置がとられていなかったからです。例

外的なのは大阪です。御堂筋あたりはかなり整備されました。そういう人材と、経済力があつたからです。御堂筋にかかった費用の約3分の1は受益者負担金を財源としています。

名古屋の場合は、当時の大岩勇夫市長が郊外地開発に非常に熱心でした。財源上どうしても都市計画事業に着手できない時、唯一の打開策は区画整理の方法を用いることでした。当時の愛知県の都市計画課、これは愛知地方委員会との二重組織ですが、そこと市がタイアップして区画整理の指導調整を行いました。区画整理の調査や設計など、今でいうコンサルティングを実施し、用地を確保するとそれを市に渡し、市は街路整備をする。記録によると、区画整理事業の第1号は八事(やごと)で行われましたが、その規模が非常に広大で、228haあります。大規模な区画整理を続けて具体化し、それをつないでいくわけです。

もう一つ、名古屋独特のものがありました。通常の区画整理事業の財源については、保留地の売却が戦後の共通の手法ですが、これを最初に大々的にやったのが名古屋です。当時、保留地という言葉はなく、元来そういうことをやるのは区画整理の趣旨に反していました。当時区画整理は、耕地整理法の準用で実施されていたからです。耕地整理とは、農地を持っている地主たちが協同で水利とか農道関係を整備する手法です。その時、中途半端に土地が余ることがあつて、それを交換したり売ったりすることが実例としてあつたようです。これを剰余地の処分といい、それを意図的にやったのが名古屋の特徴でした。事業費が出ないので、剰余地を処分してできたお金を財源として整備したのです。自然発生的にこういう手法が生まれたのだと思いますが、名古屋では堂々と区画整理組合が分譲案内を出していました。今でいう不動産の分譲広告です。

その後、昭和10年代には替費地という、費用に替える土地という法律上は無い言葉が、かなり使われました。その年代には、全国的

に軍需産業を背景としての区画整理が実施されています。この時に替費地という名前で保留地をかなり確保しました。また、関東大震災の時に始まったのですが、区画整理の中で先行的に公共が土地を買収しました(ゴボウ抜きといいます)。そして戦前に実施されていた手法や、耕地整理法ではうまくいかないことを一気に見直したのが、現在の土地区画整理法です。保留地も制度化されました。そういう意味で、名古屋の区画整理は先見性があつたということです。

同時に、名古屋の区画整理組合はデベロッパーにもなりました。まず、市自体が区画整理に関する展覧会や、公園計画の宣伝を目的とした公園祭を開催しました。「名古屋は博覧会太りする」といわれるように、明治43年の「第10回関西府県連合共進会」、昭和3年の「御大典奉祝名古屋博覧会」、昭和12年の「名古屋汎太平洋平和博覧会」、平成元年の「世界デザイン博覧会」、実際にはソウルにとられたオリンピックと、博覧会に併せて基盤整備を実施してきましたが、その初めは公園祭でした。石川栄耀と狩野力が中心となって企画したようです。国の役人がはたらきかけるので自由に発想できるわけで、おそらく市の職員だけでは新しい試み、アイデアはできなかった。市長をかつぎあげて公園協会をつくり、イベントを開催する。そして、公園の宣伝と区画整理に伴う公園用地の確保をする。今でいう広告代理店がやるような仕事まで、都市計画地方委員会がやっていたわけです。

また、地域振興や剰余地処分を円滑にするための手段として、具体的に次のような事業に取り組みました。中村公園の一带は、公園を整備し日本一の大鳥居をつくり、地域のイメージアップを図りました。太閤祭はこの時始まったようです。一方、志賀公園は初めて組合自身の負担で造られました。戦前には、組合は土地を保留するだけで、公園整備は別途市が実施していました。組合、つまり開発

者が公園を造った上で市に引き渡したのは、これが日本で最初です。それから、新屋敷の例があります。ここでは宅地造成のグレードを上げるということで、今でいう電線の地下埋設に近いことが行われています。また、工業地帯については工場を誘致し、組合がバスを運行しました。また豊田については、駅や盛り場を造ったり、商業施設を造るとか様々なことをやっています。

名古屋大学の土地を確保したのは重要なことです。名大の土地は3つの区画整理区域にまたがっていましたが、無償で用地を区画整理組合から寄付させました。当時の愛知県都市計画課長の真坂忠蔵は、「まさか」ということをする、そういうことを仕掛けるのが得意だったようです。東山公園についても、地域振興の観点から必要と、石川栄耀や狩野力らと交渉し、その結果、地主は寄付と非常に安い金額で土地を提供しました。



昭和14年 風致地区の指定

国立公文館所蔵「公文雑纂附図」

#### 4. 都市計画の流れと公園計画の位置付け

その後の都市計画は、昭和10年代の防空時代にはいります。市街地の災害復興型の区画整理は、大正10年に新宿の大火跡から始まりました。ここで日本最初の区画整理が行われました。また、それに名古屋や大阪で始まった郊外地型の手法が合体されたのが、戦災復興区画整理です。それが日本における区画整理の流れです。

一方で、戦前から戦災復興時にかけては、都市の基盤整備や道路などの新設が重視されていました。その結果、本来的な区画整理の考え方である、区画の割り方や建物の建て方という、市街地の中でのまさに区画ということが、昭和20年頃は若干おろそかになった気がいたします。昭和初期から10年代の名古屋の地図を見ると、最初に幹線街路の位置を決めて、それに合わせて区画整理を徐々に行なう手法をとっていることが読み取れます。

さて、名古屋や大阪の公園計画がきちんと軌道にのる発端は、大正12年の関東大震災でした。それ以前は、公園整備が都市基盤整備の中で欠くことのできないものという視点が、まだ日本ではなかった。関東大震災の時に公園や緑地のおかげで命が助かったということが実証され、ようやく公園計画を作ることが軌道に乗り始めました。内務省の本省と県と市と一緒に取り組んでいる姿が見てとれます。本省の主任技師である北村徳太郎と狩野力が一緒に弁当持参で東山公園予定地を歩き回っている。昭和10年代に北村は、これが10数年後に、区画整理の中で日の目を見るとは夢にも思わなかった、と当時を回想しています。全て民有地で実現の予算もないという、全く見通しのない中で公園を計画していたわけですが、やはり都市計画は先を見越して計画することが重要だと思います。一つ残念だったのは、公園計画が一方所削除されたことです。

それが実はパークウェイ、公園道路でした。当時はまだ単体の公園が主で、公園と道路の中間形態としての公園道路や河川緑地は、通常の都市計画では造りにくかった。本来こういうものがきちんと整備されると良い都市になりますが、この時は消えてしまうのです。

関東大震災や昭和9年の函館大火の復興計画を通して、大規模な災害に対する既成市街地の都市改造の事例が生まれました。大火とか震災後の復興という流れが一つ確立したわけです。また、郊外地の区画整理を中心とする開発手法も一つの流れとして確立しました。この二つの流れに新しく加わったのが、昭和10年代のリージョナル・プランニングです。戦前は地方計画と訳していますが、むしろ今でいう広域都市計画といった方がいいと思います。大都市の膨張をコントロールするために、まず郊外に衛星都市や田園都市を造ってグリーンベルトを造る。最初は昭和10年の東京、神奈川、名古屋、大阪の緑地計画です。名古屋の場合は庄内緑地とか大高緑地、牧野ヶ池緑地がこのとき計画されました。それらは今でも郊外市街地の大規模公園の大きな種地になっています。これは残念ながら用地買収をした後、戦後の農地開放によりかなり減りました。本来はグリーンベルトのように環状におきたかったのができなかった。名古屋の場合は市域が狭かったのが理由だと思います。戦前のグリーンベルト計画でも名古屋は拠点だけで、春日井などの名古屋市域外までは計画に入れなかった。名古屋は区画整理を大規模にやっていますが、意外に戦前のグリーンベルト計画はこじんまりとしています。そして、その基礎の上に戦災復興が始まります。

## 5. 戦災復興計画

郊外地は区画整理され、その周りには公園がある。そして内側の城下町を中心とした地

域が戦災復興としての再整備された地域です。名古屋では、戦災復興のために、そのリーダーとして招かれたのが田淵壽郎です。市街地に100m道路を十文字に貼りつけるという計画がつけられました。田淵さんと呼んだ最後の名古屋の官選市長・佐藤正俊にとっては、田淵さんをスカウトしたことが最後の実績になりました。佐藤さんは都市計画自体には経験のない人ですが、以前、満州国のハルピンの副市長に相当するポストにあり、その時に大規模なハルピンの都市計画を横で見ていた経験がある。ですから佐藤さんには戦災復興計画は非常に大事であるという認識があり、本人の意志で田淵さんを招き、なおかつ仕事がしやすいように技監というポストをつくり、全権をふるわせました。田淵さん自身も戦前は、中国華北地区で都市計画を担当していました。名古屋市には戦前からの都市計画の蓄積があり、そのトップに田淵さんが乗ったわけです。

市長や助役クラスと議会がうまくいっている都市は都市計画が進みます。議会というのは市民というか、有力者や地元優良企業の利害の代表者みたいなものですから、そこが支援してくれるならば大抵うまくいきます。広島も20年間勤めた市長が一度落選し、革新系の市長が勝った時、100m道路の廃止と道路用地への公営住宅建設を公約としていました。しかし、助役以下が100m道路の計画を潰しては絶対にダメだと必死に市長を説得しました。それで今の平和大通りができた。実は、こういうことが絶えずどの市でもあるのです。

名古屋は、戦前からの蓄積に加えてリーダーシップを発揮できる人を招き、その人に仕事をさせた。それをしたか否かが復興計画が成功したかどうかの別れ目になった。そういう意味では確かに田淵さんは有能で、そういう人に仕事をする場を与えたこと自体が、名古屋市、つまり市民全体が復興に取り組んだということだと思います。

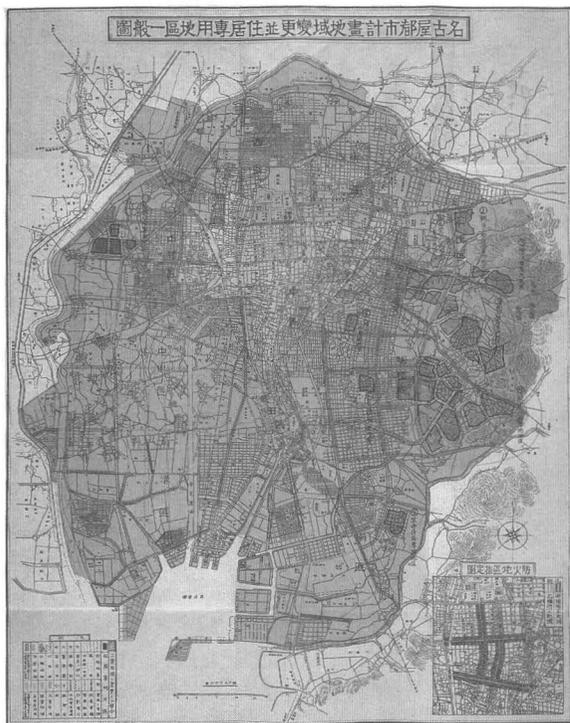
田淵さんの自叙伝には復興に対してのポリシーが書いてあります。もともと尾張徳川家の城下町を拡幅する形で復興に取り組みましたから、区画は基盤の目のように、単調です。確かにそこにパリやワシントンのように、放射状で広場を造るのは無理ですが、それなりの工夫をしながら造っていきました。また、当時、愛知県と名古屋市が協力して、焼け跡のままで家が立ち始める前の早い時期に、建物をセットバックさせた。道路から一律1.5m下げるといふ規制だったと思います。そして下げた所を自然に区画整理するという、非常に合理的な方法で実施しました。このように、単純明快なルールを作ることが大事です。もたもたしていると復興はうまくいかない。今後、神戸の震災復興計画はどうなるかわかりませんが、復興の原則は単純明快な方がいいと思います。そして、事業化の具体的なコンサルティングは丁寧にする。そういうやり方

でないと復興のような大規模な都市改造は、たぶんうまくいかないと思います。

## 6. 都市計画家、プランナーの心構え

名古屋の都市計画が、日本の都市計画の発展の中でいかなる位置付けになるのかということですが、実は一般には広幅員街路の意味、計画理念もあまり知られていません。名古屋でも突如ではなく、一連の流れの中で街路が計画され、その中で田淵さんは確かに重要な役割を果たしました。ただ彼は実行者として大変重要ということで、計画の着想そのものは名古屋固有のものではなく、むしろ当時の都市計画家は皆これをやろうとしていた。ただ、それを実現できた例が非常に少なかったというところに、名古屋の現在の100m道路の意味があるわけです。

どのような発想で先輩たちが苦勞して設計したのか、それなりの意味があったわけですから、そのところを見ながら各々の時代におけるインフラ整備の在り方を考えたり、再整備をするべきでしょう。ただ都市計画の事業手法とか発想というのは、戦前期にほとんど出尽くしている感じがします。ある程度真剣に取り組めば大体同じような発想をして、都市はその積み重ねで突きあがっていきます。確かにそうやって巨大都市が成立したり、高架で高速道路が通ったり、地下に河川が通ったりと立体利用されているのが現代ですが、基本的な発想、都市計画の思想の部分については戦前とそれ程変わらない。現在ではこういう制度や仕様が法律になっているからです。ただ、今やっていることが50年後には実を結ぶとか、そのつもりでやることは重要です。一貫性(コンティニュイティ)をもって理念を追求することが大切です。震災復興に成功している都市は、考え方や発想が組織全体で維持されていた。その条件は、リーダーになる人が長期間いることが一つの要素になってい



昭和15年 住居専用地区の指定

国立公文館所蔵「公文雑纂」

ます。仙台でも広島でも名古屋でも、やはり在任期間の長い人がいた。しかし、一人の担当者が何十年も担当であることはあり得ないので、やはり基本的には組織全体で一貫性が機能するかどうかです。戦前の草創期に相当頑張った個人というのは、たまたまそういうすごい人がいたということではなくて、そういう場におかれると恐らく誰でも同じことをやっていたと思います。無名で亡くなっている人も、同じような発想を持ち、与えられた条件の中で頑張って仕事をしていたという気がいたします。

## 編集後記

その都市が人に与える一般的なイメージによって都市が評価されることが多くあります。そのイメージは、実態を反映している場合もあれば、過大評価あるいは過小評価され形成されている場合もあります。都市の情報が十分伝わっていないために一面だけが評価され、イメージが形成されている場合も多くあります。また、イメージは主に人の主観により形成されるものですから、その都市で生活しているか、訪れたことがあるか、都市についてどの程度知っているか、その人が何に興味があるかなどそれぞれの人の持つ属性や経験、知識などによって形成されるイメージは必ずしも同じではありません。

名古屋市はどうかというと、マスコミでの評価を中心に必ずしも良いイメージが形成されているとは言えません。名古屋市民でさえ、住み易いという評価はするもののイメージとしてはあまり良い評価をしていない人もあります。

本格的な交流の時代が到来しようとしている今日では、都市へ人を引きつける重要な動機付けとなる都市のイメージ形成は、重要な都市政策課題といえます。北九州市や大阪市などは早くからこの課題に対応してきました。当センターでもこのような課題意識に基づいて昨年度より「名古屋のイメージ向上に関する調査研究」を学識者を中心とした研究会を設け実施しています。

本誌では、様々な専門的な視点から「都市のイメージ」を学識者の方に論じていただくとともに、先の研究成果の一部として、研究会の委員である橋爪委員、西下委員、井沢委員の論文を掲載しました。また、都市のイメージを明確に認識しながらその向上策を推進している北九州市を始め、様々な都市のイメージ形成にいたる試みや実態について都市開発や観光、歴史、文化、市民活動など様々な角度から捉えた事例を紹介させていただきました。

当センターの研究もまだ中途段階ではありますが、都市のイメージ形成に至る仕組や実態、イメージが与える現実的な効果など研究の素材としては非常に興味深いものだと思います。今回の特集が都市のイメージ向上に資する様々な取り組みや研究のきっかけとなるとともに、ますます活発に議論がなされ、各都市が各々の個有のイメージを高め、交流時代にふさわしい環境づくりがなされていくことを期待します。

アーバン・アドバンス No.6

1995年12月発行

編集・発行

財団法人名古屋都市センター

〒460 名古屋市中区金山二丁目15番16号

Te l : 052-321-1441

Fax : 052-321-1491

印刷

長苗印刷株式会社



# アーバン・アドバンス

**Urban Advance**

NO.6 1995.12